
君を忘れない ～ I Remember Clifford ～ vol.2

北川 圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君を忘れない I Remember Clifford
～ vol. 2

【Nコード】

N5917N

【作者名】

北川 圭

【あらすじ】

「君を忘れない I Remember Clifford
～ vol. 1」の続編。

23歳になった一樹は、プロのミュージシャンとして長く活動していたがために留学を決意する。

姉や父のように、音楽だけで闘えるようにと。この手が腕が動くうちに自分の実力をつける為に。

しかし、ボストンでジャズを学び始めた一樹の前に多くの壁が立ち

はだかる。

異国での不自由な生活、一樹のプレイは受け入れられても常に姉の真理子と比べられる日々。

もがくように自分の居場所を探そうとする一樹が、そこで出会ったものとは……。

生半可な知識のみで勝負するキタガワの、思いこみだけの音楽趣味が詰まった青春音楽小説を、どうぞお楽しみ下さい^^;

夢見るころを過ぎても When I Grow Too Old To

#1

初めて降り立った異国の地は、空までもが高く蒼く澄んでいた。

思ったよりも気温が低く、機内に合わせてTシャツにブーツカット・ジーンズの軽装だった一樹は、肩を抱えて身体を震わせた。

それは、これから始まる新生活への不安をも内包していたのだろうか。

逃げてきたんじゃない。

一樹はそう自分に何度も問いただした。そこそこ売れ始めたスタジオやライブサポートの仕事も、桃子とうこの店の手伝いも、彼女と篠原の生活を目の当たりにする現実も。

3

投げ出してきた訳じゃない。

姉であり、世界的に活躍するヴァイオリニストでもある真理子に、無理やり引き合わされ、いつしか恋人と呼べるまでになった聡子との時間を置いてまでも。

おれは…なぜ今ここにいるんだろう。

一樹はもう一度深呼吸すると、ボストンの空港ロビーを歩き出した。

「留学するですって!？」

姉ちゃん、声でかいよ。弱々しい一樹の反論など全く受け付けてもらえず、高橋の屋敷に真理子の美しくも甲高い叫びが響き渡った。持病を抱える彼の身が心配だと、無理やり姉は家族全員でこの横浜の家に住むことを提案した。ようやく四人が一緒に住めるのよ!とはしゃぐ姉をしり目に、残りの三人はお互い気付かぬように小さくため息をついていた。

父親の孝一郎は、指揮者そして現代作曲家として活動の場を日本に本格的に戻すことを決め、所属事務所の社長である母は同じようにここへと移り住んだ。

未だに世界各国のオーケストラから引き合いが殺到している姉は、それでも能天気な「ここから通うからいいの」とばかりに、横浜と成田を往復する日々だ。

一樹とて、桃子の家を出て一人暮らしを経験できたのも長いことではない。化学療法の治療入院の期間が過ぎたら、ほぼ強引に姉に呼び戻された形で、何年ぶりかで実家に暮らすことになったのだ。

この家に全員が集まるなど、一樹がほんの幼い頃の数年でしかない。本物の家族であるはずなのにギクシャクとした疑似ファミリー。長く居るお手伝いのトミさんだけが笑顔を絶やさない。

「せっかくみんながここに集まったのに、どうしてあなたが留学しなきゃならないのよ!！」

おしとやかでお嬢さま然としている外見とは裏腹に、かなり天然系の真理子はもう既にご立腹だ。

新聞を広げてソファへと悠然と座っていた孝一郎は、自分の息子に

どう声を掛けたものかまだ決めかねるようだった。それでもばさりと紙の音を立てると冷たく言い放った。

「相変わらず、大事なことは事後承諾……か。おまえごときが留学なぞして何になるのだ？」

母はいつものように黙っている。ふわふわのマシュマロか何かでできたかのような姉が皆を結びつけない限り、この家族たちは繋がれはしない。

一樹にとっては、この上なく居心地の悪い空間。それでも姉の喜ぶ顔が見たくて必死に自分を律していたのに。

「試験には受かっています。お父様へご迷惑をお掛けすることはないと思いますが」

同じように冷ややかに言い返す。母は無表情に書類に目を落としている。

「どうやって暮らしていくつもりだ。だいたいどこへ行き、何を学ぶのかさえも言わずに」

「とてもお父様やお姉様になうはずありませんが、僕も演奏家の一人です。数年暮らしていけるほどの蓄えがあります。お姉様のボストンの部屋を一つお借りしようと考えていましたが、いけませんか？」

ボストンという言葉を聞くやいなや、ふっと苦笑をもらす父親に、一樹は頬がカッと熱くなった。

この人がおれを認めてくれることなど、一生ないだろうな。悔しさに唇を噛む。

「音楽大学、バークリーか。名ばかりと言えどもおまえも一応はプロの演奏家としてステージに立っておるのだろうが。今さら何をしに行くつもりだ。言葉もろくに話せるわけでもなしに」

「僕なりに準備はしたと申し上げたはずです！英語もTOEFLで500以上は出しましたし、日常会話も困ることはありません！」

これは多分に怪しかった。それは確かに試験では点を取ることはできた。と言うかこれだけなければ入学資格がもらえない。語学と言わず勉強すべてが苦手と来ている一樹にとって、かなりギリギリのところまで拾ってもらえたという方が正しい。日常会話など、普段のライブでは音楽用語にしか縁がない。

なぜ今さら音大に……。父親でなくともそう思うに違いないだろう。音高を中退し、通信高校を四年掛けて卒業した。孝一郎が黙認状態であるのを良いことに、その後はそのままジャズやスタジオミュージシャンのトランペッターとして仕事をしてきた。今では、譜面にも強く、ハイノートを出せる若手として重宝がられている。大きなツアーも何度もサポートに入った。

どうしてもステージのセンターに立ちたい訳じゃない。じゃあなぜ？

その答えは本当のところ、一樹自身にもはっきりとわかってはいなかったのだ。

ただ、じりじりとした焦りが彼をいつも襲っていた。このままではいけないと。

黙々と食事をし、その後は部屋にこもるだけの会話のない疑似家族を何度くり返したところで、真理子を欠いたときの家は何の機能も

果たしてはいなかった。

おれはここで何をしたいんだ。父親が姉が世界を相手に仕事をするのを、流れ作業的にラッパを吹くだけのおれは指をくわえて見ていろというのか。

「きちんとジャズの基礎を身につけて、息の長い演奏家として通用するようになりたいと思っています。お父様には……！」

「関係のないこと、か。勝手にしろ」

話は途絶えた。

取りなすように必死に真理子が声を上げる。

「音大なら日本にもあるでしょう？ ジャズを学べる学校もあると聞いたわ。それに、基礎なら何もジャズにこだわらなくなつて！」

「姉ちゃん、僕は……ピアノが弾けないんだよ？ どうやって日本の音大に入れて言うのさ」

一樹の静かな言葉に、ハツとしたように真理子は視線を彼の左手に移す。

痛々しい傷跡と動かない指。病魔は彼の左手の機能をほとんど奪っていた。

夢であったクラシックをあきらめ、特注のプロテクターで楽器を固定し、それでもジャズを吹き続ける一樹。

真理子は、何も言えずに弟を切なそうに見つめた。

「研究科なら試験など要らないのではなくて？ あなたさえその気が

あるのならば、お父様にしっかりとお願いなさい」

それまで口を閉ざしていた母が、顔を上げることなく一樹に告げる。以前の冷たさはないかも知れない。けれど、冷たくないと温かいはいコールでは結べない。

みな、家族それぞれを思う気持ちはあるのだろう。なのに届かぬ歯がゆい思い。これが長く離れて暮らした罰だというのか。

「僕も世界を見たい。そう思っではいけないのでしょうか」

精一杯気持ちを奮い立たせて、一樹はそう言い張った。かなうはずもない相手。わかってはいるのだ。それでもなお、おれはおれでいたい。ここにいては息もできない。

やっと戻った家庭から、ただ逃げ出したい訳じゃないのに！

「おまえに…その実力はない」

冷ややかな孝一郎の言葉に、一樹は息を止めた。

踵を返すと自室へと戻ってゆく。その背中に、何をどう言おうがおまえは行くのだろうが、と父のつぶやきが追い打ちを掛ける。

ああそうさ、おれの居場所はどこじゃない。そんなことなど、わかっていたはずなのに。

二階に上がりドアノブに手を掛けたところで、ようやく姉が追いついた。

「待ちなさいよ、一樹！あなた何を考えてるの！？」

「姉ちゃんがお節介なんだよ！誰も僕と暮らしたいだなんて望んでなかっただろ？」

「私は一緒に住みたいわ！！」

姉ちゃんなんか一年のほとんどを海外で過ごすくせに。ここにいて家族の冷たさを再確認させられるだけのおれの気持ちを考えてみろよ、このド天然！

繰り言を何とか飲み込むと、姉ちゃんの部屋貸せよな、とわざと乱暴な言い方をした。

「そりゃかまわないけれど、聡子のことだってどうするつもりなの？私の大切な親友を悲しませるのなら許さないわ」

勝手にお膳立てして、勝手にひつつけておいてよく言うよ。

姉とは同じ年で、彼女がパリに住んでいた頃に知り合ったという。コンセルヴァトワールに留学していながらも趣味でたしなむ程度だったからと、控えめにヴァイオリン教室を手伝っている聡子は、真理子とは正反対の落ち着いた穏やかな女性だった。

心に空いたすき間が埋まればいい。

たまに会って、静かにときを一緒に過ごす。一樹にとって安らぐ時間には違いなかった。けれど、彼の胸に巣くう焦燥感を潤してくれるほど、二人はまだお互いを知らなすぎた。

「メールも電話もマメにするさ。日本とアメリカを往来するなんて、姉ちゃんだっていつもしていることだろ？ 今だって毎日会ってるわけでもないし」

少しばかりの罪悪感からか、さすがの一樹も歯切れが悪い。気付いたのかどうなのか、真理子は寂しそうにつぶやいた。

「あなたはいつもそう。みんな自分一人で決めてしまうのね。私たちにできることはないの？ 今からでも何か取り戻せるものはないというの？」

ねえ、お姉ちゃん。そのセリフをどうしておれが一番欲しかったあの頃に言ってくれなかったんだ？

一番誰かにいて欲しかった、おれがたった一人で痛みに耐え孤独感と闘っていた頃に、家族の誰一人として掛けてくれなかった言葉を、なぜ今さら口にするのか。

「時なんか戻せない。戻す必要もないんだよ。そうだろ？ もうお互い、いい大人なんだから…さ」

一度壊れた家族は、どうあがいても戻せない。一樹にはそう思えてならなかった。

彼にとっての家族とは…。ふとジャムズのむせ返るタバコの煙とジャズの音色、にぎやかな食卓とマスターの笑顔、そして桃子のクールな表情を思い浮かべ、一樹は胸がちくりと痛んだ。

そうさ、あの場所にだってもう戻れない。おれはおれで居場所を作っていかなきゃならないんだから。

その隣りに誰がいるのか、今は想像もできなかった。聡子だと言いき切るには彼はまだ若すぎたのかも知れない。

後ろ手でそっとドアを閉めると、一樹は動かぬ左手を右のそれで包み込むようにして引き寄せた。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2010 keiki
tagawa All Rights Reserved

のるかそるか (All or nothing at all

#2

ボストンへ発つ準備を進めている頃、それまで続けていた仕事の引き継ぎやら事務所との手続きやらに追われていた一樹は、真夜中にようやく横浜へと帰ってきた。

もう誰もが眠っているか、それとも演奏旅行にでも行っているのだろう。幼い頃は人のいないこの家が怖くて、すべての明かりをともし、夜を過ごした。今は、誰もいないことを願って足音も立てずに玄関の鍵を開ける。

いつまで経っても馴染むことのできぬ、一樹にとっての正真正銘の生家。本物の家族。

なぜ、こんなに心が離れてしまったのだろう。

一緒に暮らしさえすれば何かが変わるかもしれない。姉ほどではないとしても、彼にだってほんの少しばかりの期待はあった。

期待と言うよりも、切ないほどの淡い…希望。

広い吹き抜けのリビングに入った一樹は、微かに流れるドビュッシーのメロディーにうろたえた。

父は黙ってスコアを広げ、CDに聴き入っていた。片手にはやわらかい芯の鉛筆。書き込む時の彼の癖。一樹の入ってきた気配を感じ、孝一郎は顔を上げた。無言で目を合わせる。耐えきれずに先に逸らしたのは、やはり一樹の方だった。

父がスイッチを押すと、それまで満たしていた幻想的な印象派のハーモニ―が途絶え、圧倒的な静けさは一樹を押しつぶそうとした。

「お仕事の、お邪魔をして申し訳ありません」

掠れ声でそれだけを言う。未だに堅苦しい敬語でしか話せぬ親子。それがおれたちの距離感なのだろう。

「仕事ではない。友人の新譜が届いたのでな」

会話はすぐに終わる。もとより孝一郎に続ける気などはなからない。挨拶をして下がろうとする一樹を、しかしその夜は珍しく父から呼び止めた。

「どうしても…行くのか」

才能はないと言い切られた言葉が、あれ以来頭の中を反芻している。もう頼むから蒸し返さないでくれ。実力不足なのは自分が一番知ってるさ！

「お父様から見たら、僕のしようとしていることなど愚かなあがきでしかないでしょう。それでも、僕は演奏活動が続けたいんです」

ゆっくりと言葉を選びながら、何とか言い返す。わかってもらわなくていい。あんたたちにわかるはずもない。

孝一郎はスコアも閉じると、初めて一樹の方に身体を向けた。いつもより幾分、やわらかい口調で教え諭すかのように。それは真夜中の時間がもたらした、あり得ない穏やかさなのか。

「勉強してどうなるものではない。おまえには演奏家として大切なものが欠けている。ただ人より少しばかり早く楽器を始め、人より高い音が出る、初見が利く。確かに小器用かも知れん。だが…それだけだ」

きつい言葉。それでも痛ましげに一樹を気遣うように言ってくれていると思えるのは、彼がそう思いたいだけだからなのか。

「クラシックなら…そうかもしれません。僕のような音程も危うく、正しい奏法ができない奏者など要らないでしょう。だからこそ別のフィールドを選び、僕の個性を生かせる場を見つけないかと思ったのです」

真夜中の魔法。静かな闘い。それは父と息子と言うよりも、音楽に取り憑かれた表現者としての負けられぬ真剣勝負。

「おまえは、自分がどれほどのものだと思っておるのだ。おまえのトランペットには華がない。豊かな表現力も際だった個性もない。インプロビゼーションの構成も凡庸すぎる。歌謡曲の世界ならごまかしも利くかも知れん。しかしおまえにジャズをやれるほどの力はない」

世界を舞台に活躍する作曲家、そして指揮者。父の言葉には本物を見るものの重みがあった。彼がそう言うのならそうなのだろう。何も言い返せはしない。一樹は思わず自由な右手を握りしめると、歯を食いしばった。

それでもおれは、世界の片隅で音を吹き続けたいだけなのに。

「私の評価では不服か。では友人のハバードやマーサリスにでもおまえの演奏を聴いてもらうか。彼らの言葉ならいくら頑固なおまえでも納得するだろう」

「…世界に通用しなければ、演奏活動はしてはいけないのですか…」
やつのことでつぶやくささやき。高橋の名に傷を付けるからか。
だからもうこのうちとは縁を切りたいと言ったんだ！
孝一郎は、ゆっくりとした仕草でタバコをくわえると火を付けた。
そつと煙を吐き出すと、赤く鈍く光る火をただ見つめる。視線を戻すことなく、彼は続けた。

「おまえは、真理子とは違う」

静寂が訪れた。絶対の真理^{しんり}の前に、言葉はどんな意味を持つというのか。芸術の持つ残酷さ。

おれは、有名になりたいわけでも賞賛を浴びたいわけでもない。後世に残る作品を創り出したい気持ちなどかけらもない。ただ無邪気な子どものように、音と戯れて楽しむ術を覚えて。陽気な音楽とざわめきと、酒とタバコと喧噪と。暗がりでささやき合う恋人たちへの、甘い添えもので十分なのに。

とうてい乗り越えられぬ高い高い壁。おれがもし、彼の息子でも彼女の弟でもなかったとしたら。

「…職業…として、ただ…吹き続ける…ことは…」

ストレートに返された球を、ただ気力だけで打ち返す。好きだから続けたい。生きている限り。

「そうして、一生おまえは高橋真理子と比べ続けられるのか。それでも耐えられるというのか」

ここまで言いたくはない。孝一郎の気持ちに珍しく痛いほど伝わってくる。父なりの愛情。それはあまりにも不器用すぎて。

「僕は、辞めない！」

悲痛に叫ぶ一樹に、父はたまらず声を荒げた。持っていたスコアをテーブルに叩きつける。

「その身体で、いつまで続けられるというのだ！！病気で苦しむたびに、また同じ思いをおまえに味わわせるのか！！なぜそうやって、何もかも一人で背負おうとする！？音楽など今すぐ辞めてしまえ！！生活の面倒なら一生見てやると言っておるだろうが！！」

お父様…。絶句する一樹に、孝一郎は頭を抱えてソファに深く座り直した。自らを鎮めるかのように。

「おまえを、一人残すのではなかった。いや…音楽などやらせなければ良かった」

聞き取れぬほどの…痛々しいつぶやき。

もう、無理だよお父様。おれは楽器を手にしてしまった。ここから逃れることなんてできるはずがない。そうだろう？ どれだけ飢餓感を味わおうとも。絶望をくり返そうとも。

父は持っていたタバコを静かに消すと、大きく息を吐いた。そこにはもう先程までの、ただ息子を心配する親の姿はなかった。いつでも冷静で決断力と統率力を持った、自信あふれる指揮者としての：虚像。

「バークリーの今の学長には面識がある。そのうち挨拶に行っておくでしょう。どうせならディプロマではなくディグリーを取りなさい。そうすれば少なくとも大卒の学歴が手に入る。その代わり、卒業したら今ののようにフラフラせずに伸子のメソッド教室を手伝うんだな。それが嫌なら、就職でも何でもするがいい。バークリー卒なら音楽講師の口くらい見つかるだろう。よほどえり好みしなければな」

あとはただ無言だった。一樹に何かを言い返すだけの強さは、もうひとかけらも残ってはいなかった。

父の思い。わからないよ。どうして今ごろみんなそんなことを言い出すんだ？ もう何もかも遅いのに。おれはこうやって生きてきてしまった。何をどう取り返せと言うのだろう。

逃げるように自室に戻り、ベッドに倒れ込む。目をつぶったところ

で、眠れるあてがあらうはずがなかった。

気が遠くなるほどの浅い夢をくり返し見た。何も内容は覚えていない。ただ胸苦しさと焦燥感にかられるだけの夜。いつものことさ。

ふと気付くと、奥の音楽室からヴァイオリンの音色が響いてくる。迫力ある低音は、じかに振動となって床を伝わってきていた。

…姉ちゃんが、いるのか…

家族の誰にも、真理子にも付き合っているはずの聡子にも会わずに行きたい。ここから逃げたい。おれはいつだって何か大きなものから逃げたいだけなんだろうか。自分に嫌気がさして、一樹は無理やり頭を振った。パジャマ代わりのスエット姿でタバコを吸おうと起き上がると、ドアが遠慮がちにノックされた。楽器の音はいつの間にか止んでいた。真理子か？

「…どうぞ」

かなりぶっきくらぼうに吐き捨てる。機嫌が良いはずもない。あのあと眠れないからと、強い酒をあおったせいで。タバコより、冷たい水が先だな。立ち上がるのさえおっくうだ。ああ、その前に。まだしっかり覚醒しきってない一樹の前におずおずと顔を出したのは、やはり姉の真理子だった。

「まだ眠っていたの？ ずいぶん朝寝坊じゃなくて？」

朝食も終え、基礎練習すら一段落している姉に比べ、確かにこれじゃ格好がつかない。時計はとうに十時を過ぎていた。

「昨夜遅かったんだ。早寝早起きの健康優良児と一緒にすんなよ」

ふふっ、と笑顔をふんわりとまとうと、真理子はベッドに腰掛けた。

「聡子にはちゃんと会って話したの？とても心配していたわ」

学生の頃からの姉の親友。おれなんかより皆、姉の人柄に惹かれて集まるのだろう。自虐的な考えが支配する。

「見送りには来ないでいい、って言ったんだ。会えば、よけい寂しいからって」

これは半分は本当で、半分は嘘でもあった。そこまで思えるほどの相手かどうか、心から愛するということが何かわからぬままの一樹には、理解できずにいたのだから。

おれが本当に好きなのは…。引きずり込まれる思考に、あわてて一樹はストップを掛けた。

「やっぱり行ってしまうのね。せつかく家族が一つになれたと思ったのに」

悲しげな真理子の声。一緒にいればいいってもんじゃない。いつも愛に包まれていた姉に伝わるかどうか。でも今は、精一杯家族の橋渡しをしてくれた彼女に感謝していた。

「おれのわがままで、またみんなバラバラになる。悪いと思ってる

よ」

素直に頭を下げる。それにそつと首を横をに振る。真理子の瞳にはもう涙がにじんでいた。

「先にあなたを一人ぼっちにしたのは、私だわ。私があなたからお父様もお母様も奪って。どんなに寂しかったでしょうと思うと、いてもたってもいられないの。音楽の勉強をしたいのは、あなただつて同じなのね。一番わがままなのは、私だわ」

大きく輝く瞳から、きらめく雫が伝わり落ちた。真理子は何度も、ごめんなさいとくり返した。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2010 keiki
tagawa All Rights Reserved

残されし恋には I Wish You Love

#3

「おれは姉ちゃんと違う。まともに演奏できる実力も才能もない。わかってるんだ、そんなこと」

言うともなしにつぶやく。卑下するわけでもなく、自暴自棄になっ
ているわけでもなく。

それは単に純然たる事実として、一樹の前に立ちはだかっていた。
比べることじゃない。確かにそうだろう。けれど父親の言うとおり、
彼は一生言われ続けなければならないのだ。

「孝一郎の息子、そして高橋真理子の弟」と。

音楽という隔離された空間にいる限り、おれはこの呪縛からは逃れ
られない。日本などイヤだ。誰もおれを知らぬところに行きたい。
いやそうじゃない、おれと彼らとの関係を知らぬところに。

黙ったままうつむく一樹に、真理子は優しげに言葉を紡いだ。ほん
の少しいたずらめいて笑う。

「私ね、ジュリアード（アメリカにある音楽院）にいたとき、ずい
ぶんアンサンブルの先生に嘆かれたわ。マリコは絶対にオーケスト
ラのヴァイオリン・パートには受からないわねえって」

ふんわりとした笑顔はそのままだ。一樹はなかば呆れて彼女を見返

した。：姉ちゃんをオケに入れようなんて無謀なこと、誰がするかのよ。

「あら、憧れだったのよ？ボストンシティフィルハーモニー管弦楽団で、モーツァルトのセカンド・パートを気持ちよく弾くのが」

姉の個性の強い、とても外見からは想像もつかないほどの情熱的なヴァイオリン。その音色が他の凡庸な奏者と合わせられるはずもない。

「姉ちゃんはソリストしかできないよ。あんなすごい音：」

すごいって何よ！真理子は少しふくれて見せた。

小柄で童顔の綿菓子のような永遠の少女は、ひとたびグアルネリ・デル・ジェスを手にした途端、その圧倒的な存在感ですべての者を魅了する。彼女が変わるのではない。名器と呼ばれるグアルネリのせいだけではない。その場の空間も満たされている空気すらも、彼女の奏でる音によって別の物質へと変換されてしまうかのように。

それはまあ、変わった音だとはよく言われるけど…、不服そうな姉の表情。ほら、本人だけは全く気付いてもいない。そこがまた彼女の魅力の一つでもあるのだろうか。

「でもそうね、私にはソリストしかできないのよね。だからオーケストラには入らないし入れない。それが私には一番似合っているからよ。ねえ一樹？」

そう言うと、彼女は最愛の弟の顔をのぞき込んだ。温かい眼差し。

彼女に見つめられて、微笑まずにいられる人間などいるのだろうか。一樹は素のままの自分を引き出されてゆくような、不思議な感覚にとらわれていた。

「あなたはどんな奏者になりたいの？」

まっすぐに訊かれる。どんな…。おれは何者になりたいんだろう。おれはただ何も考えずに、吹いていられたらいいのにと願うばかり。姉にも父にも通じないたわいのない夢。

「一樹のトランペットの音、私は好きよ。とても素直でのびやかでクセがないから。きつといいアンサンブルの一員になれるわ。それは私にできないことだから、本当にうらやましいの。ソリストをもち立ててくれる大事なパートナーね」

ニッコリと微笑む。この人は全く…。

「ただの引き立て役って訳？姉ちゃんあのさあ、それってちつともフォローになってねえよ」

思わず一樹は苦笑いした。そうさ、どうあがいてもおれはセンターには立てない。立とうとも思わない。個性のない音、凡庸と切り捨てられた…音。

だが真理子はベッドに座り直すと、真剣な表情で彼にもう一度向きあった。

「大切なことよ！人にはそれぞれちゃんと役割があるのだわ。誰もがソリストになる必要なんてない。そうでしょう？協奏曲一曲にソ

口を弾くのは一人で十分。でもアンサンブルのメンバーはそうではないわ。大勢との調和が取れる素晴らしい人たちが必要とされているの。それとも、あなたはどうしてもソリストを目指したいの？」

力なく一樹はかぶりを振った。サポートメンバーだってスタジオワークだって一向に構わない。アルバムのクレジットに載ることさえ、どうだっていい。

おれはただ、あの狭っ苦しいジャムズのステージが…忘れられないだけなんだ。

スポットを浴びてハーモニーとリズムの洪水の中に身を置く。相手の出方を伺いながら、自分の信じる音だけで勝負を挑む。あの瞬間を味わってしまったら、もうそこからは抜け出せない。

「あなたはあなたなりの演奏家になればいいの。才能なんて曖昧な言葉、私は嫌いよ」

姉ちゃんに言われても、説得力ねえよ。口ではそう反発しながらも温かい姉の言葉は、少しずつ一樹の心を満たしていった。

「お父様はあまりお話しされない方だからあんなふうに黙ってしまわれたけれど、あれでも一樹が音楽の勉強をすることに賛成してくださったのでしょうか？楽しんでらっしゃいよ。将来どうするかなんて、向こうでゆっくり考えればいいわ」

将来。おれにこの先の未来があるのだろうか。あと何年、いやあと何回…おれは楽器を吹けるのだろう。ステージを踏めるのだろう。姉にも誰にも言えぬ想い。

自分の左手に残る傷を見つめる。半日も楽器を持っていれば、今でさえ腕が痺れてくる。大学に行くと言ってはみたものの、この手でこの身体で授業についてゆけるかさえわからない。神経が通っていないはずの細く長い指がひりひりとした痛みを伝え、傷口は未だに疼く。革製のプロテクターは手に馴染んでいるとはいえ、軽いとは言えない楽器の重量を長時間支えきれだけの耐性はない。何度も何度も、ステージの上で腕を抱える。痛みをのがす。メンバーへは知られぬようにと無理にでも笑いながら。

そして：この先とだえることのない再発への不安。一つため息をついて、一樹はそれらの思いを飲み込んだ。

「おれだって、もう23なんだよ。姉ちゃんはその頃には、がんがん世界を飛び回ってて：」

「まだ23歳よ。これから何にでもなれるわ」

今のときが永劫に続くと思える者の強さ。十年後の未来を、二十年後の自分を思い描ける幸せ。どれほどの人間がそれを理解しているというのだろう。

明日倒れるかも知れない。この腕が動かなくなるのは、本当はもっとずっと先のことも知らない。

それは誰にもわからない。皆同じだと人は言う。でも確実におれとは違う。

確約された呪縛。約束された負の契約。おまえの手は腕は動かなくなり、音楽も日常も生命さえもすべて奪ってゆくだろう。

呪いの言葉からおれを解放してくれ！誰でもいい！頼むから明日も明後日も、一年後もその先の未来も、おれにはあるのだと証明してくれ！！

姉には病気のことなど、詳しく話してもいなかった。言うつもりもない。それなのに現代の見目麗しき巫女は、一樹の左手にそっと触れ、両手で包み込むようにかき抱いた。そして自分の頬に押し当てると愛おしむように優しくなでた。

「あなたは頑張り屋さんで素敵な、私の自慢の弟よ。世界中を連れて歩いてみんなに紹介したいくらい。そしてたくさんの人びとにあなたのトランペットを聴かせてあげるの。みんながあなたの音に振り向くわ。温かい音色に心を癒されるのよ。あなたは私とは違う。当たり前よ。一人ひとり音楽は違うものだもの。あなたが私になれないのと同じように、私も決して一樹のように演奏できない。あなたはあなたでいいのよ。あなただけの音楽を奏でればいいの」

あたたかな雫がまた一粒、彼の手に落ちた。一樹もまた、固く目を閉じ、気付かぬうちにあふれた涙で頬を濡らしていた。

(つづく)

t
a
g
a
w
a

A
l
l

R
i
g
h
t
s

R
e
s
e
r
v
e
d

友達になれないかい I Can't Be Friends

#4

「プリーズ：アー、モアスローリー、ええとだから！」

さっきから何度もくり返される押し問答。いや問答にすらなっていないかった。とにかく受付の黒人女性はや早口で何かを言うばかりで、一樹には全く聞き取れなかったのだ。

必死にゆっくり言ってくれと頼んでいるのに、その言葉すら伝わったふうでもなく、さらに付け焼き刃で教わったどの発音とも、彼女のそれは違って聞こえた。

…のっけからこれかよ。

一樹はため息をつく、ふくよかで人の良さそうな、それでいて一向にわかりやすく話そうとはしない彼女にもう一度果敢に挑んでいた。

彼の手には一枚のカード。これをどうしろと言うのか。おれの訊きたいのはそれだけなのに。

とうとう向こうが根負けして、どこかに応援を求めるのか内線に手を掛けた。日本語のわかるスタッフがいるんだったら、最初から出してくれ！

ポストンに来てまだ三日。それなのにもうすっかり一樹は生活に疲れてしまっていた。

もともと全くの一人暮らしなど、慣れているわけでもない。まして

や今まで普段は仕事で忙しい。大勢のスタッフに囲まれ、移動も何も事務所の連中が手配してくれたとおり動けば良かった。

ここでは一樹は、ただの学生。当たり前のことだ。日用品も食料も自分で買わなければいけない。たったそれだけで、彼にかかるストレスの多いことと言ったら。

日本で、自分はいかに周りに救われていたかを改めて一樹は実感していた。

大見得切った生活資金だとて、そんなにあてがあるはずもなかった。世界を飛び回る姉が、ボストンにある有名オーケストラと縁が深いこともあり、彼女はここにも部屋を所有していた。おかげで家賃は浮くけれど。

ヨーロッパには彼女の家がいくつあることかなど、数えたこともない。

スケールの違う、国際コンクールを制した才媛。どんな気難しいマエストロでさえも彼女の無邪気さに微笑みを返し、反するかのような迫力ある演奏に魅せられる。

一樹としても借りなど作りたくはない。しかし、彼女がいなければ高橋の家はあっけなくバラバラになる。どうしてもかなわない相手、それが姉の真理子だった。

「姉ちゃん、出世払いでちゃんと返すから！入学金と前期の授業料貸してよ」

悔しかったが頭を下げた。あら？蓄えはあるのではなかったの？全く嫌みではなく驚いたように真理子は訊き返した。完璧すぎるように見える姉の、唯一の欠点は…空気などはなっから読む気もない天

然さだった。

「あのさあ、あんたたちとおれのレベルが違いすぎるの！！！どこを出て留学するのには、お父様にはああ言うしかないだろう？おれだっていくら仕事してたって、自分のグループを持ってるわけでも何でもないんだ。その日暮らしとおんなじだよ」

だから留学なんてしなければいいのに。上目遣いでにらむ瞳までが、美しいというより可愛らしい。

「独学じゃ限度がある。今になって実力不足を実感してるよ。だから少しでも勉強したいんじゃないか」

サポートでも何でも良い。腕が良くて人脈を作ってあれば、おれだってこの世界の片隅で生きてゆける。裏を返せば、実力のないものには容赦なく仕事など来ない。

一度はあきらめた演奏家という夢。今は少なくともその一端にいる。この場所を手放したくはない。

必死に考えた末に一樹が思い描いたのが、アメリカできちんとジャズの基礎から学ぶ、ということだった。もちろんその中には、本場の一流ミュージシャンと演奏したいという思いもあった。日本でこれだけやって来れたんだ。それも自分の力で。この手がこの腕が動く限り、おれが生き続けていられる間は、トランペットを手放さない。

思いにふけり黙りこくってしまった一樹を見て、真理子はいつものふわりとした笑顔を浮かべた。

「わかったわ。いつかあなたのアルバムが出たら、その印税全部貰ってあげる!」

「ぜ、全部!?!姉ちゃんあのねえ!!」

真理子の場合、冗談ではなく本気だったりするからタチが悪い。青くなる一樹を見て彼女はころろと涼やかな笑い声まで上げた。

「あなたなら大丈夫。きっといつかは同じステージに立てる日が来るのね」

おれはあの、ジャンルもフィールドも違うんですけど…。言い返す元気もなく、一樹は上機嫌な姉のあとをくつついて行くしかなかった。

しかし、ここまで英語が通じないとわかっていたのなら、もっと真面目に勉強しておくんだった。一樹は遅すぎるとは思ったが初めて激しく後悔した。

ジャムズにだって外国人アーティストはたくさん出演した。彼らは一樹を可愛がり、ステージがはねても一緒に酒を飲み語り合った。しかし今思えばヤツらの教えた英語が、こんな普通の生活シーンに全く役に立たないことが、身にしみてわかったのだ。

：ろくでもないスラングばっか教えやがって：

ここで使えば、すぐさまケンカになりそうな言葉ばかり。半端に英語を聞きかじっているだけたちが悪い。仕方なく、知っている単語

を並べてボディランゲージで必死に思いを伝える。今からこれでは、授業が始まったらどうなるのか。先が思いやられる。

もう一度小さくため息をつき、ここであきらめるわけにはいかない。一樹が口を開こうとしたそのとき、後ろから低めの声が飛んできた。

「あのさあ、そのカードは学生証としてだけでなく諸手続の場合にとっても重要だから、絶対なくすなって言ってんの。ホントにあんた、その程度の英語も聞き取れないわけ？」

日本語だ！嬉しさに急いで振り返った一樹の目に入ったのは、彼より年若の女の子だった。

髪をてっぺんに結わえ、胸の辺りまでたらしめている。ゆったりとした重ね着の服はどことなくアジアンテイストで、足元は素足にサンダルだ。紫のペティキュアがその白い肌に映える。背中にはトロンボーンの軽量ケースを背負っている。金管楽器に女性が進出するようになってだいぶ経つが、一樹自身は未だ一緒に演奏したことはなかった。

こんな華奢というかやせぎすな女の子が、ボントロなんぞ吹けるんだろうか。

しかし、そんな思いは一瞬でふっ飛んだ。大きくややつり上がったような意志の強そうな瞳が、一樹の足元から頭のとっぺんまでじろじろっと見回したのだ。まるで値踏みするかのように。

「へ…え。カズがバークリーに来るって噂、ホントだったんだあ」

「う、噂？」

まあね、ネットで出回ってたのよ。あのカズが今さら何でか知らないけどバークリー来るらしいって。全く興味もなさそうに彼女がひょうひょうと続ける。

「待ってよ。あの、って…どうして君らがおれの名前とか知ってるんだよ？」

「ねえ、あんたってもしかしてホントのバカ？ ユニットKのカズでしよう？ 永井貴之グループでサポートしてたの、あんたじゃないの？ アルバムにだってクレジットされてんじゃない。ラッパ吹きなら誰だって知ってるよ」

そ…そうなの？ 一樹はなぜかこの態度のでかい偉そうな女の子に完全に飲まれ、下手に出るしかなかった。

「だいたい、あんたボストンじゃ超有名人だよ？ 気をつけた方がいいって」

コツコツとスタジオの仕事をこなしてただけなのに、名が知られるとは思ってもみなかった。嬉しさと現実感の無さでとまどいの方が大きかった。でも超有名人って…。

「はあ、あっきた。だってあんた、高橋真理子の弟じゃん。ボストンシティファイルの本拠地でマリコを知らない市民なんていないんだよ？」

在原尚子と名乗る彼女は、近くのベンチに一樹を引っ張っていくと

滔々と説教を始めた。

「だいたいねえ、その語学力で授業についていけると思ってたの？ あんたよっぽど世間知らずなんじゃない？ お姉さんもお父さんも、あんなに海外で華々しく活躍してんのに！」

関係ないね、活躍してるのはおれじゃない。大人げないとはわかってはいたが、口元を歪めて一樹はふてくされた。どこへ行っても比べられる。外国ならばと出てきたというのに。

「それがもの知らずだって言うの！！海外の方が高橋親子の実力は知られてるって。何で家族のあんたがわかってないわけ？」

その親子の中に、おれが含まれてないだけだ。彼の表情はさらに無然としたものになっていった。

「とにかく、あたしにはあんたを世話する理由も何もないんだから。とりあえず今日は声は掛けたけど、もともと日本人同士で群れるの一番キライなの。もう構内で見かけても話しかけないでよ！！」

「そんな、ナオコちゃん……」

ええい馴れ馴れしい！！尚子はぎろつとにらんで見せたが、一樹だとしてここで見放されてしまえば明日からの生活もおぼつかない。

「ここでやっと日本語が話せたんだ。三日ぶりにまともに会話できた。この嬉しさがわかるか？」

必死に訴える彼に、尚子はなおも冷ややかに突き放した。

「あんたホント、バカ。あのね…この学校はアジア人ばかりかよ？歩いてりゃそのうち、もっと親切な日本人に会えるから。そこでマリコの弟だって言ってみれば？」

そう言い捨てると、尚子はさっさと歩き出した。背中の楽器ケースが揺れ動く様をぼんやりと見送りながら、一樹はがっくりと肩を落とした。

ようやく手続きを終え、真理子の部屋に帰る。誰もいない。息がつける。父のするどい視線も母の無関心も、何もない。その代わり姉の柔らかな声も。

…マリコの弟だって言ってみれば？…

会ったばかりの尚子の言葉が耳を離れない。どうしてもどこに行ってもついて回る彼らの名前。

父が止めるのも聞かずに家を無理やり出た。対等には言わない。自分でどこまでできるか試したかった。それでもおれは、どうあがいても高橋の名前に潰されるのか。パステル調のベッドに寝ころび、一樹は父の言葉を一人反芻していた。

「おまえに、その実力はない」…か。

苦い思いを飲み込んで、彼はタバコに手を伸ばした。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2010 keiki
tagawa All Rights Reserved

魅惑のリズム (Fascinating Rhythm)

#5

そう広いとも言えないキャンパスのあちらこちらから楽器の音がするの、国内外を問わないのだろう。ポピュラー音楽を目指すものが一度は憧れの思いをこめて口にする：バークリー・カレッジ・オブ・ミュージック。

日本ではバークリーメソッドと呼ばれる独特で明快な理論。大量生産だのライン製造だの、言いたいヤツもいるだろう。

でもおれは、やっここに立てたんだ。

一度はあきらめた音大への進学を、どんな形ではあれ自分で叶えた。一樹はさまざまな思いを抱えながら、構内を見渡した。

しかし当面はそんなことより、…これだな。

彼が手にした膨大な書類には、当然のようにびっしりと英文が書かれている。この束と格闘してとにかくにも授業を受けられるようにしなきゃ。英会話も苦手だがビジネス文書はもつとわからない。おそらく多いであろう非英語圏の留学生にもわかりやすく書かれているはずなのだけれど。

実質中卒と言っているほど、その中学でさえろくに通っていない彼にとって、勉強は唯一にして最大の敵。

いっそのこと、譜面で書いておいてくれればなあ。

現実逃避のバカげた考えまで浮かんでくる。一樹は情けなくもため息をついて、まるで公園のような美しい中庭と、対照的に雑多な学生たちの群れを眺めた。

不意に聴こえてくる、なじみの音。あれはトランペット…ボントロとサックスもいる。決してコンボじゃない。ビッグバンドか？ビッグバンドとは、通常サックスパートが五人、トランペットとトロンボーンも同じくらい揃っていて、なおかつリズム隊と呼ばれるピアノ、ベース、ドラムス、そしてフルバンド特有の箱ギターを備えているものを指す。まあ、管楽器が複数いればビッグバンドと言ってしまうでもいいけれど。

だが一樹の耳に飛び込んできたのは、まぎれもなく正統派のフルバンドの音。

練習室のこもった音じゃない。外か？ああそう言えば、ここではよくランチタイムライブが行われると、日本語のサイトには書かれていたっけ。

思わず一樹はふらっと立ち上がり、音の鳴る方へと歩いていった。楽器をやるものならつい習性になっているこの動作。鳴り物にはとことん弱い。

ジャムズはステージが狭いから、さすがにプロのフルバンドを呼ぶだけのライブはほとんど無かった。その代わり、篠原は大学のサークルバンド出身なので、人手が足りないと言ってはしょっちゅうト

ラ：エキストラ出演を頼まれて、ハイソのライブに出させられることがあった。

少人数の自由度の高いコンボと違い、きっちり書かれた譜面に決めたことの多い流れ。そのわりには暗黙の了解というものがありすぎて、最初はとまどうばかりだった。

コンボならメモ程度に書き付けたメンプ。あとはアイコンタクトで曲を流してゆく。

しかしビッグバンドには印刷された譜面はあるものの、書き表されていないニューアンスがあまりに多すぎた。

ここはベント（音程を上げ下げする）をかけ、このフレーズには決まってヴィブラートかシェイクをかける。スフォルツアンドクレッシェンドってのは、アタックを強く打ってからがくと音量を落とし、があつとクレッシェンドをかける。文字にすると難しそうだけれど特に金管のフレーズならポップスの現場ではしゅっちゅう出てくる。あまりに当たり前すぎて記譜されていないのだ。

そんな約束事を、学バンの連中は難なくこなす。ベニー・グッドマン、グレン・ミラー、そしてカウント・ベイシー。管楽器のジャズ初心者にはとっつきやすい名曲ぞろい。

特に有名どころの曲は先輩からみっちり叩き込まれ、聴かされまくるからだ。

けれどどのっけからコンボで鍛えられてきた一樹にとっては、篠原にくっついて一つ一つ覚えていかなければならなかった。

カラオケとシンセブラスの浸透で、箱バンの仕事自体の需要がめったにないことも影響している。

それでも、古き佳きジャズの黄金期を支えたビッグバンドの音色は、今もなお人びとを惹きつける。

どこでやっているんだろう。構内と言うことは学内オーケストラか。それだけで一樹はわくわくした。

ここへ来て自分のラッパさえ吹いていない。きちんとした音楽が聴けるのなら、こんなに楽しいことはない。

すっかり一学生と化した彼は、気楽に中庭を抜けて広場の方へと行ってみた。

案の定、少しばかり高くなっている野外ステージには多くの楽器が光を受けてまばゆく輝いているのが見える。

一樹の頬が緩む。

知らず知らず、肩にかけていたトランペットケースの革ベルトをそっと握る。こんなふうにな力を抜いて、客として音楽が楽しめたら……。心の中にここへ来て初めて安堵感が広がる。ただの音出しの騒音でさえ、彼にとっては心地良いメロディーに聴こえてならなかった。

半円に広がるベンチには、すでにけっこうな人数、おそらく彼らも学生だろう、が座ってライブの開始を待ちわびていた。一樹もその端に座り込み、始まるまで彼らの音を聴いていようと腰を下ろしかけた。

しかし、ステージをよくよく見ると何かが変だ。

あわただしい動きと、立ったり座ったり落ち着かない団員たち。特にラッパの連中は舞台の上だというのに、あちこちで携帯を耳に当

ている。

譜面が人から人へと渡され、必死に揃えさせようと大声を出すのはバンマスらしき若者。曲の差し替えでもしているんだろうか。それとも何かのトラブルか。

ライブ直前にトラブルることなど日常茶飯事で、一樹にとってもイヤと言うほど味わってきた。曲の尺が足りないから延ばしてくれたの切ってくれたの。別の曲を初見で吹かされるわ、アレンジは直前で変えられるわ。とにかく反射神経だけがものを言う。

その緊迫感が伝わってくるのだ。何があったというのだろう。

サードアルバートの若い男が、とうとう楽器を置いてステージを降りた。東洋人？イヤあれば日本人だ。彼は辺りをキョロキョロしたかと思うと、なぜか一樹の姿を認めると心底ホッとしたようにこちらに駆けよってきた。

おい、なんだよ。おれはあいつのことなんか知らないぜ？

黒髪を真ん中から分けて短くカットしてある髪を揺らし、くりくりとした瞳を輝かせている。素直でおとなしそうな仔犬のような小柄な学生。首に下げたストラップが揺れている。

彼は一樹のそばまで走り寄ると、息を切らせながら嬉しそうに口早にまくし立てた。

「やっぱり尚子ちゃんの言ってたことは本当だったんですね！カズがバークリーに来てるって。ああ良かった、ここにいてくれて。楽

器持ってますね？こっち来てもらえます？」

そう言いながらカズの手を引いていこうとする。ナオコちゃん？あ、こないだのボントロの女の子…こいつはあの子の知り合いか？

「ちよっ、ちよっと待ってよ。おれ君のこと知らないし、何しろっての？」

「ボクのこと知らないのは当たり前です！初めて会ったんだから。でもボクはあなたのことはよく知ってますから！！急で悪いんですけど、トラに入ってもらえませんか！？」

「はあっ！？トラ？」

あまりの大声に、周りも振り向く。サックスの男の子は声を小さくすると、一樹の顔をじっと見つめた。思わずたじろぐ。

「初見利きますよね！？もちろん楽勝ですよ？ビッグバンドも初めてじゃないでしょ？今日のセトリリストは定番曲ばかりです。リアレンジはしてあってテンポもちょい早めですが、大丈夫ですよね！？カズさん、プ・ロ・で・す・か・ら！！」

おとなしそうな外見と裏腹に、彼は妙に強引だった。一樹は顔をひきつけて、それでも最低限これだけはと、必死に抵抗した。

「話が見えねえよ！！おれに何しろって言ってんのか、それを先に言え！！」

彼は少しばかり我に返ったのか、息を飲み込むとそうですよねえ、と独りごちた。

「じゃあ簡単に言います。トランペットのトップが電車遅れてステージに間に合いそうにないんです。事故だか故障だか知りませんが、途中駅で全く動かないそうです」

おれには関係ないんだけど…、つい繰り言が出そうになり、彼のあまりの真剣さに一樹は自分を抑えた。

「で？」

「だ・か・ら！！トップの代わりにカズさんが吹いてください！！！
そうお願いしてるんです」

あ、ボクはサックスの本多洋輔と言います、日本人です。とってつけたような彼の言葉に、どこの国だかなんざ見ればわかるよ！と吐き捨てた。

…ラッパ吹きなら誰でも知ってるよ、カズのこと…

こんなふうに知られているとは思ってもしなかった。自分は名もないサポートメンバーで、音さえ聴いてもらえばいいとしか考えてなかった。ここではただの一学生、そうでありたかったのに。

洋輔に引っ張られ強引にステージに上げられる。メンバーたちが一斉にこちらを向く。

これがイヤだったのに。

全く見知らぬ連中の中に一人つっこまれる。音を出すまでは全く無名の新人。こいつに何ができるのか。じろりと全身を睨め付けられる。何度味わっても慣れるもんじゃない。

「オイちよっと待て！おれはやるだなんて一言も！」

「ちよっとヨースケ、この人誰？」

金色に輝くトランプットを持って長身のカズを見上げたのは、サラサラの金髪を横に流している美しい女性だった。彼女がセカンド？フルバンドにおいて、アドリブソロを担当するのは主にセカンドトランプットと相場が決まっている。こんな細身の美女にがんがんのビッグバンドソロが取れるのか？一樹の胸の内が伝わったのかどうか、強気の瞳でにらみ返された。

「シェリル、彼はねマリコの…」

そう言いかけた洋輔の口を、一樹は急いで右手で塞いだ。ふごふご苦しげな彼に向かって精一杯ドスを利かせる。

「てめえ、その名前をここで一言でも言ったら、おれはすぐさま帰るからな」

「わ、わかりました。絶対言いませんって。吹くと約束してくれるなら誰にも言わないです」

上目遣いでにこっと笑った洋輔に、はめられたかも…と一樹は失言を悔いた。

「今回の曲は、アレンジが結構難しいのよ？初見で素人がとてもできるとは思えない。それも私でさえ彼の姿なんて見たことないわ。まだここに来て日が浅いんじゃないの？本当に吹けるの！？」

細かい意味はわからずともニュアンスは伝わる。一樹は内心、かなりむかついていた。これでもとんでもない負けず嫌いときているのだから。

しかし、彼が口を開く前に洋輔は大声でシェリルに言い返した。

「おまえヨウスケって言ったよな。他の連中に何て言ったんだよ！」

洋輔はちらっと一樹の方を向くと、今度はゆっくりと日本風の発音で周りに宣言するかのように叫んだ。

「ア…、ヒー イズ ザ モスト フェイマス ハイノートプレー
ヤー イン ジャパン！！アンド プロフェッショナル トランペ
ッター！！ ユー ノウ！？」

シェリルたちの目が驚きで円くなる。さすがに意味のわかった一樹は、大きなため息とともに頭を抱えた。

(つづく)

北川 圭
Copyright
All Rights
Reserved
2009-2010
keiki

スウィングしなけりや意味ないね (I t D o n ' t M e a n A T h i

#6

リハの暇はない。すでに時間は押している。一樹はとりあえず楽器ケースからバックを取り出すとともに、革のプロテクターを手にとった。それは汗のじみでよれてはいたが、その分、手にはよく馴染んだ。右手でぎゅっと引っ張り、楽器を膝で押さえて口と手でピストン部分に巻き付ける。

見慣れぬ動作に、シェリルらが彼をじっと見つめているのを感じる。どう思われてもいい。おれの今の仕事は、目の前の譜面を吹ききること。楽器を固定してからマウスピースを口に当てる。冷たい金属の感触が懐かしい。そう言えばこのところ留学準備で、ろくに練習もしていない。

そつと息を吹き込み、軽くバズィング。本体にマッピを押し込んでから低音域のロングトーン。指馴らしにピストンを何度も動かす。特注のスプレー式オイルを右手のみで器用に吹き付ける。

一樹は真剣な面持ちできちんとアンブツシユアを作ると、高らかにハイノートを駆け上った。ハイFの吹き延ばし。虚勢を張っている訳じゃない。自分のコンディションを確かめるためだ。そこでヴィブラートをかける。大丈夫、まだいける。

隣りに構えるシェリルの顔色が変わる。こんなに楽々ハイFを出せるなんて。それも楽器を出したのはつい数分前のこと。

「音ちようだい？」

つい、日本語で彼女に話しかけてしまってから、あわてて一樹は「アー、プリーズ」と言ってみた。チューニングの実音う。アーでいいのか、エーと言うべきか。それでもシェリルは案外素直にうの音を吹いた。

それぞれのバンドには固有の調音がある。クラシックのオーケストラほどではないにしても。シェリルの出す音にぴったりと同期させる。一つの音に聴こえるほど細かく丁寧な。

「サンクス」

ふっと小さく笑顔を見せてから、一樹はかけていたメガネの支柱を押し上げた。視力が酷く悪いわけではない。ほんの少し自分を守るためにと、クセでかけ始めた細いフレーム。

一曲目は「ドナ・リー」。長年チャーリー・パーカーの名作と言われていたが、一節にはマイルス・デビス作曲ではともささやかれている。しかし誰が作るうとも、この曲にまわりつくイメージはバード（パーカーの愛称）の音色と、その超絶技巧。

一樹はスタジオで必ず行う作業、まずはざっと構成を流して見渡した。楽譜は地図。近道できるカーナビはない。そこに細かく書き込まれたくり返し記号と、ダル・セーニョなどの進行を示す記号を見失えば、あつという間に一人取り残される。始まってしまえば本番は一発勝負。あとでどんなに悔やもうと、失敗は取り返せない。ましてやこのメンプは、おそらくこの学生の手によるリアレンジ。この時代だからコンピュータ・ソフトで書かれた綺麗な楽譜なので、読めないことはないけれど。

いきなり派手なイントロと、Aメロはトランペットパートのソリ。そこからアドリブソロが延々と続く。テナーサククスにトロンボーン、ギターで落ち着けて、ここはバードに敬意を表してアルトサククス。Bメロのトゥッツィをガンガンに鳴らしてから、隣のシェリルがラップソロを取る。楽しみに聴かせてもらおうとするかな。もちろんそのあとは、全楽器による怒濤のキメが続く。

一樹の吹くリードトランペットは常にバンドの最高音域。一番高いのは、コーダのラストで押し上げるハイA：か。テンポは：指定の速さなどあてにしない方がいい。ドラムがどこまで持ちこたえられるか。すべてはそこにかかっている。管がこれだけつつこんで吹いてくるんだ。まず走るとみておかないと。全曲初見か、まあいいけどね。はん、やれるとこまでやってみましょ。赤っ恥をかくか、プロの端くれの意地を見せるか。

一樹は知らぬうちに高揚感を味わっていた。

ドラムがスティックを打ち鳴らしてカウントを長めに取る。それは初見の一樹のためでもあるし、全体を落ち着かせる意味も持つ。これだけの大所帯。気持ちを一つにしてテンポを刻む。

ワンツ、トゥツ…。

こればかりは世界共通だな。ほんのちょっと心の中で苦笑い。さあ、行くぜ。一樹は楽器をまっすぐに構えると、最初の音を頭の中に鳴らした。

パーンと吹き鳴らしたあとの細かいパッセージ。

…やばっ！はええ…

案の定、指定テンポどころの速さじゃない。ドナ・リー特有のスピード感を出したかったのか、どんどんドラムが煽り立てる。だが内心の彼の焦りは一瞬だった。

一樹は譜面から全く目を離さず、その音符の高さを瞬時に読み取って無意識にピストンを押していた。この速さでは脳にまでおそろく信号が伝わっていないだろう。脊髄反射に近い形で、ひたすら指と口元を制御してゆく。

一度目のトランペットソリは様子見。このバンドのノリを確かめる。同じパッセージの二回目は、一樹が文字通りリードを取る。彼は何十回も練習したかのように、ぴたりと合わせていく。パート全体の気持ちい何も言わずとも伝わってくる。

これはいけると。

ことの成り行きを最初から見ている観客の一部は、ソリのシンクロ度の高さに大歓声を上げた。そう、何も知らなければリードの一樹が飛び入りだと気づく者はいないだろう。

ようやくメロを終え、アドリブソロの部分に入る。二度目の細かいオブリガードまではしほしの休み。見失わぬように、ざっと小節数を数える。64のくり返し。変則でないのなら大丈夫だろう。

ふっと視線を感じ、一樹は横にいる自分のパートの連中を見た。

親指を立ててニヤツと笑う男らにまじって、柔らかな笑顔を見せるシェリル。さっきの敵意丸出しの視線とは全く違う。

言葉も通じず、もとより何も話す暇さえなく、曲ですら一分も吹いているかどうか。それでもこいつらはもうおれを、何の抵抗もなく受け入れてくれてる。それが伝わる。

一樹は音の持つパワーと、雄弁さを改めて感じた。

さあ、また次のパッセージだ。皆が楽器をかまえ直す。

そして、シェリルのソロ。

その迫力に、一樹は舌を巻いた。これだけ吹けたら確かにバークリーのハウスバンドでセカンドを任せられるだろう。きらびやかな音と、確かなコードトーンとテンションノートのセンス。リズム感も独特で、年代物のビバップが、彼女の個性としか言いようのない洒落たフリーズに変わってゆく。

おれだったら彼女をセンターに置き、バックにしっかりとしたりズム隊を揃えて売り出したいと思うけれどね。

ひそかにそんなことを思いながら、一樹はシェリルの横顔を見つめていた。

ソロが終わる。大きな拍手はコーダに向かうキメの連続にかき消されてゆく。トランペットパートは、全員立ち。最前列の客はさぞう

るさいことだろう。

メロディをフェイクしたキメが終わり、ベルトーンで音を重ねる。一番最後はもちろん、リードトランペットのハイノート。AからハイAにがつんと上げる。

タタカトンとお決まりのシメのタイコを鳴らしても、その余韻は残り続けた。

さすがの一樹も、楽器をむしり取るとスタンドに立て、肩で息をしている。それにメンバーたちが次々とハイタッチ。荒い呼吸で苦笑い。

…おいおい、まだ一曲目だぜ…

しかし、拍手は鳴りやむことはなかった。

「あんたまあ、派手にやらかしたんだって？」

呆れ顔でマンガージュースをすするのは、いつものようにトロンボーンを背中に担いだ尚子だった。

「あれはおれがやりたくてやったんじゃないか？ おまえだろ？ こいつに変なこと吹き込んだのは。ヨウスケのせいでおれは、せっかく地味ーな学生生活を静かに送ろうとしてたのに！！」

何にも感じないかのようなにこやかさで、洋輔はアイスコーヒーを前に話し出した。

「だってすごかったんですよ。ねえカズさん！？もう、最後にはお客さんスタンディングオベーションで。言ったら何ですけど、ごく普通のランチライブですよ？なのにあんなに燃える演奏されちゃ、ねえ？」

ねえ、じゃねえよ。だいたいてめえがおれをトラになんぞ引っぱりこむから。

一樹はぶつくさ文句を言った。自分だってほどほど楽しめればいいと思っていたのだ。いくらバークリーと言えども学生バンド、本気でやるほどのことはない。

だが、いったんステージに立ってしまったえばそんなことは全く関係がなかった。彼らも本気だった。もちろん一樹自身も。そしてその音の重なりが、今まで味わったこともないような重厚なサウンドで、思わず引き込まれざるを得なかったのだ。

「だってさ、マリコの弟だって知られたくないって自分が言ったんじゃない？あんだだけ騒がれてばれたら、自業自得だよ？」

そりゃそうだけど…。一樹はそれを思うと気がずしりと重くなった。姉のことを思えば、一番来てはいけないのが、ここ、ボストンだったのかも知れない。

「で、どうすんの？ビッグバンド入るの？恨まれるより、リードの男、白人でさラップ科首席を自慢してるんだから。だいたい卒業もしてないのに、首席かどうかなんてどうわかるかってのよね」

「フルバンに入るつもりはないよ。日本でそんな仕事はほとんど無

いし、それがやりたくてここに來たわけでもない」

「じゃあ何であんた、今さらこんなところ入ったの？それだけ吹けるのに」

日本人同士でつるむのはキライだと、あれほど豪語していた彼女だったくせに。一樹は一番訊かれたくない質問に、思わず口を閉ざした。彼の前に置かれたシェイクが溶けてゆく。それでも一樹は何も言えずにいた。

おれは何を求めてここまで來たんだろう。

それでもあのときの高揚感は嘘じゃない。それだけは信じたい。あの拍手も迎え入れられた自分の音も、すべて実在するもので。高橋の名前とは無関係のところで、おれはやっていけるはずだ。そう思いたい。どうか、そう信じさせてくれ。

黙り込んでしまった一樹の前に、尚子はさらに呆れたという顔をした。

「ま、その前に授業取れなきゃ意味ないね。でさ、手続きは済んだの？」

あのあと、この借りは返してもらおうと言いつつ、本当は洋輔に泣きついて学生課の窓口へとついてきてもらったのだ。とてもこの煩雑で訳のわからないカリキュラムを読み取るだけの英語力が、自分に

あるとは到底思えない。

とりあえず、クラス分けのテストを受けられるところまではたどり着いた。担当教官もようやく判明した。明日にでも訪ねて挨拶に行つてこなければならないだろう。

「これからどうする気？英語わかんないなら、語学学校に行きやあいいじゃん」

至極真つ当なアドバイスというか嫌みを、さらりと尚子は口にした。だから日本人同士でつるんでると、英語話せなくなるよって言ってるの！ダメ押しの一言。

「これ以上学校になんか行けるか。ただでさえ課題多いのに。学費だつてかかるのに」

はあ。わざとらしく大きなため息をつくのは、もちろん尚子と洋輔だった。

「あんたバカ？じゃあ何でわざわざ単位数の多いディグリーなんか取るのよ！見栄張るんじゃないっての。学費って何よ、あんたち金持ちじゃん」

金持ちなのは、父ちゃんと姉ちゃんです。口の中だけでもごもごと言う。おれは安いギャラでこき使われて、なけなしの金はたいてここに來てんだから。

一樹はある意味正直に話したのに、尚子は思いつきり白い視線を送っただけだった。

「だったらせめて、英語ぐらい完璧にしてこい！！だいたい、高校

出てるんでしょ？」

問い詰めるような尚子の口調に、思わずカフェの窓の外に視線を向ける。

「何でそこで目を逸らすかなあ！？あんた、底抜けのバカじゃないの！！」

尚子ちゃん、言い過ぎだつてば…ハラハラしながら洋輔がフォローに入る。

「ああそうだよ！！どうせおれはバカですよ！！」

「開き直るな！！」

はあ、どうしてこう金管の女って気が強ええんだよ。いや、金管とは限らない。あんなだけお嬢さまに見える姉ちゃんだって、負けん気だけは誰よりも強い。じゃなきゃ音楽なんてやってらんねえのか。

一樹は、幻想がどんどん崩れてゆくような気がして、もう一度深ーいため息をついた。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

愚かなり我が心　My Foolish Heart

#7

J・ロバーノと書かれたプライヴェートルームの前で、一樹と洋輔は大きく息を吸った。一樹の手には一枚のプリントアウトされた紙。当然すべて英文のそれは、彼の成績が載せられていた。ようやく受けられたつい先日のテストで振り分けられたクラス。尚子に見せたら爆笑されたもの。

「ねえ、ナオコちゃん。これってもしかして…」

「ひゃあああ、やめてえ。く、くるしー」

尚子ちゃん、笑いすぎだってば。いつも必死に洋輔がフォローに回るが、彼女は容赦ない。

「だってさ、日本であれだけプロですって威張ってたカズがだよ？　オールレヴェル1、つまり初心者クラスだって。笑えるー！」

一樹はむすっとして黙り込んだ。負けず嫌いの彼にしたらこれ以上ないほどの屈辱だった。そりゃ、基礎からきっちり習いたいと願ったのは自分だった。クラシックだとて中途半端に終わっている。ジャズに至っては全くの独学だ。しかしあれだけのハイノートと譜読みの力と、どんなスタイルにも合わせられる小器用さと。スタジオで困ったこともないし、ステージだって日本にいれば次々と声がかかる。現に、ここバークリーでさえ、ハウスバンド相手にあれだけの演奏をして見せたのだ。

…おまえに才能はない…

父の言葉が反芻される。これが実態、これが現実。おれの実力は結局こんなものだったのか。きちんとしたジャズの専門家から見たら、冷静に判断されたら。

ならば荷物をまとめて日本へ帰るか。尻尾を巻き、身を隠すようにスタジオと小さなステージに立ち、目立たぬように吹き続けるのか。そしていつか、もうおまえは明日から来なくともよいという宣告を受けるまで悪あがきを続け。

一樹は一人唇をかんだ。

そんな彼の腕を引っ張り上げたのは、洋輔だった。とまどう一樹に珍しく強い口調で言い立てる。

「こんなのおかしいです！ナオコちゃんはそう言うけれど、あの演奏を同じステージで聴いた者としてはこんな結果はどうてい納得できません！」

「洋輔…」

どうするつもりだ？という一樹のつぶやきは無視するようにどんどん歩いてゆく。

「待てよ、どこ連れて行くんだよ？」

「担当教官の先生はわかっているんでしょう？今から行きましょう。誰かの成績と間違えているかも知れません。先生の勘違いかも知れないでしょう？抗議に行くんです！」

普段おっとりしている洋輔が、大声でまくし立てる。逆にあわてたのは一樹の方だった。

「よしてくれよ、これが冷静な判断だろ？おれの実力はこんなもんだったんだ。それがわかっただけでもよかったよ」

「カズ！！ここはアメリカです！！」

真剣に一樹を見据えて洋輔は語調を強めた。一樹は思わず黙って見返す。

「自分の実力を信じなくて、どうしてここでやっていけるんですか？納得がいかないのなら自分の主張を通さなくてはダメです！黙っている人間に、誰も手なんか差し伸べてくれないんですよ？カズは今さら五線譜の読み方から勉強したいんですか？そんな余裕があなたにあるんですか？手っ取り早く技術を盗むように吸収して、自分のスタイルを確立して、ミュージシャンとして独り立ちしたいと思ったんじゃないんですか！？」

おれは……。一樹は言葉が続かなかった。穏やかで控えめにしか見えぬ洋輔にも、これだけの想いがあるのだろうか。おれはどうだ。そこまで覚悟を持ってここに来たのだろうか。

「カズがどう思おうと、僕には、あの演奏を間近で聴いた僕にはと

うてい納得できません。これは正当な抗議です。さっさと先生のところに行きましょう！」

ここは、アメリカ。日本ではない。いい演奏をしさえすれば次の仕事の声がかかる、そんな甘いことは言ってられないのだろう。一樹は右手をぎゅっと握りしめた。

ドアの向こうから微かにメロディーが聞こえる。生音ではない。CDか生徒の音源か。意識が音に向いていた一樹を洋輔がつつく。

覚悟を決めて彼はノックをした。

ドアの向こうには、落ち着いた表情で譜面を見つめるジョー・ロバーノが座っていた。書類に埋もれたデスクの片隅で、音を聴きながらスコアを埋めてゆく作業。トランペッターとして今も現役で活躍する一方、こうして後進の指導に当たっている良き講師。彼の評判は上々だった。実際彼の元でテストを受けた際も、一樹にわかりやすい発音で温かい声を掛けてくれたのも事実なのだ。

「僕が言いましょうか？」

小声で囁く洋輔を手で制して、一樹は一步前に踏み出した。父の前で何か言うときは違うはずだ。それでも実力がないと宣告を下した張本人の前で、彼は胸の鼓動が抑えきれなかった。

「ハイ、君は確か…」

「カズ・高橋一樹です。先日レヴェル分けのテストを受けさせていただきました」

につこり笑ってロバーノは手を差し出した。ためらう一樹の右手を取り、握手をする。そして、マリコは元気かい？と彼に問うた。

一樹の表情が苦しげに歪む。ああ、やはりここへは来るのではなかった。ロバーノのところではなく、ボストンなどには。

じゃあどこだったらいいんだ？世界のどこへ行ったら、姉の、父の名前はついて回る。弟がいるなど知らなかった。ミュージシャンだったのか。へえ、この程度か。幻聴までが聞こえるようで吐き気がする。この場から走って逃げ出してしまいたい。

「姉には：最近会っていませんから」

社交辞令で返せばいいものを。自分の意固地さが厭になる。それでもロバーノは微笑んだ。

彼女とは何度かステージでね。ここの音楽祭のときに、私のアレンジで書き譜のソロを弾いてもらったんだが、いいセンスをしている。ボストン市民としては当然、私もマリコの大ファンでね。

世辞を言っているわけでないことは伝わってくる。ここに住んでまだわずかだというのに、彼らがどれだけ姉をアーティストとして愛しているか、様々な場面で思い知らされるからだ。

「：ありがとうございます。姉に会ったら伝えます。今日伺ったのは、どうしてもお訊きしたいことが」

ロバーノは黙って一樹の次の言葉を待ち続けている。洋輔もハラハ

ラと部屋の隅で見守るばかり。一樹は思いきって口を開いた。

「なぜ僕が、レヴェル1クラスなのか。納得がいきません」

もつとたくさんの言葉を用意していった。辞書を引き、あらかじめ単語も覚えた。しかし彼にはそれだけ言うのが精一杯だったのだ。ロバーノは優しい瞳を向けると、私はそのクラスこそが君にふさわしいと思ったのだがね、とゆっくり言った。

一樹の頬がかあつと熱くなる。どれだけ高い音が出せようと、指が回ろうと、音楽の才能はないとここでも言い切られるのだろうか。

「でも僕は！」

カズ。あくまでも穏やかなロバーノの声。何と続くのか聞くのが怖かった。あきらめろと言われてしまう気がしてならなかったから。目を堅くつぶる。

「君はどんな音楽がやりたいんだい？」

ハッとして一樹は顔を上げた。どんな、どんな音楽？おれはただ、この先もずっと吹いていられたらと思っていないというのに。譜面を渡されたら、曲調を指定されたら、どんな注文にも応えてみせる。いくらでも吹ける。それだけではダメだというのか。頭の中に渦巻く小さな嵐。

今まで考えたこともなかった。新しいおもちゃで夢中になって遊ぶ子ども。一樹にとっての音楽は、いつだって一人遊びのための道具。高い音を出して褒められる。細かいパッセージを軽々と吹いては重宝がられる。彼がこの世の中で認められるには、それしかないと思

っていたから。

ぞくりとした。自分の中が空っぽのような気がした。才能がないと
いうのなら早いとことどもを刺してくれ！

黙ってしまった一樹に、ロバーノがそつと告げる。

「急ぐことはないよ、カズ。それを見つげるためのレヴェル1だ。
納得がいかないのならテストアウトを受けなさい。いつでもレヴェ
ルアップする権利は君にあるのだから」

それだけ言うと、もう話は終わったとばかりにベテランの講師は自
分の楽譜に目を落とした。

そつと頭を下げて部屋を出る。こみ上げてくる何かがこぼれ落ちな
いように。

「カズ！待ってくださいいったら、ねえカズ！！」

あれでいいんですか！？それでも食い下がる洋輔に何も言い返さず、
一樹は音のあふれる構内を歩き続けた。

どんな…音楽。新しい音を創造できうる者だけが真のアーティスト。
姉にはあるだろう、もちろん父には当然。おれにないものは、それ
だということか。

地面が揺れるように目が回る。その場にうずくまりたいほど気持ち
が悪い。技術を身につけて少しでも長くプレイヤーとしてやってい

くことしか考えないようにしていたのに。

痛覚さえないはずの左指から未だ動く腕にかけて、ツキンとした痛みが走る。思わず右の手のひらで肘を押さえる。

痛い、いた…い。どこが痛いんだろう。膝から崩れるようにその場にうずくまり、彼は歯を食いしばって痛みをこらえ続けた。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2010 keiki
tagawa All Rights Reserved

私のお気に入り My Favorite Things

#8

「はい。鎮痛剤と、水。これでいいのかなあ」

洋輔はかいがいしく一樹の世話を焼きつつも、物珍しそうに部屋の中を見回していた。

ボストンの閑静な住宅街にある洒落た高級アパートの一室。そこにはアール・デコ調の備え付けの家具と、淡いパステル調の小物とが混在していた。どちらも一樹の趣味とは合いそうもない。

「姉ちゃんの部屋なんだ。もろ、夢見る天然乙女系だろ？家賃タダで住んでやるからって借りたはいいけど、部屋入ったとたん目が回った」

痛みをこらえて一樹が苦笑いする。拝み倒して住居費を安くあげただなんて、悔しくて言えっこない。彼にだってプライドもあるのだ。

「仲がいいんですね、マリコとは。ボストン住民にしたら羨ましいですよ」

あくまでも人の良さげな洋輔は、何の屈託もなく笑顔を向けた。

「仲がいいってほど、一緒に暮らしたこともないよ」

一樹は思わず、正直に口をすべらせた。高橋の家のごたごたなど、下手に話がもれたら大変なことになる。

それでも、洋輔には人を安心させる何かがあった。ふんわりと他人の心を開かせる何か。姉にはあるはずの、おれには：ないもの。

愛情を惜しみなく受けて育てば、誰でもこんな風に笑えるんだろうか。うらやむ気持ちか、やっかみか。複雑な思いで洋輔を見上げる。

「どうしてマリコがボストン市民に受け入れられているか、知ってますよね？」

もらっちゃっていいですかあ？勝手に冷蔵庫の中からミルクを取り出すと、その辺のコップに注いで隣に座る。洋輔の行動はあまりに自然で、警戒心を抱かせない。

実の弟が知らないはずもないだろう。こんなニュアンスで他のやつに言われたら殴りかかっていたかもしれない。それくらい、一樹には嬉しくない話題だった。

でも今は、素直に首を横に振った。

「さあね。お互い仕事の話は滅多にしないし、そもそも姉ちゃんはジュリアード出身だし。こんなにボストンと縁があるなんて本気で知らなかった。バークリーに来ようと思って調べたら、たまたま姉ちゃんも部屋を持ってたから何も考えずに借りただけだよ」

世界中を演奏のためだけに飛び回る。ホテル住まいは落ち着かない。それだけの理由でいくつも部屋を持っている姉。それは父親も同じだ。同じ家に生まれ、同じ血筋を持ち、高橋を名乗る二人だけの姉弟。けれど、おれはどうあがいたってあの人たちの仲間には入れない。口に広がる苦い味。きつとさっき飲んだ薬のせいだ。一樹は無

理やり思いこもうとした。

そう、薬のおかげで痛みは和らいだ。もともと…痛むはずのない腕なのだから。動かないのは左手の三本の指だけ。全く神経だって切れているのに、傷口も何もあつたもんじゃない。それでも時おり襲う左腕全体の痛み、誰にも言えない不安を抱えているのは本当だった。

だから、だからこそできるだけ自分の付加価値を高めて、この業界で生き残りたい。どんな場末のステージでもいい。片隅でもいい。いつまでも吹き続けられるなら。

そんな一樹に高橋の名は重すぎた。高すぎる壁が行く手を阻む。押し潰そうとしてくる。もがいてももがいても、離れやしない。この名前はこれっぽっちも、あの頃のおれを助けてなんぞくれなかったくせに！

黙ってしまった一樹に、洋輔は優しい視線を向けた。

「ボストンシティファイルに彼女が客演で初めて参加したのは、確か十一歳の頃だと聞きました。白熱した演奏に、一番細いE線を切つてしまった彼女は…」

似たようなエピソードなら聞いたことがある。やはり幼少時から有名な天才ヴァイオリニストは、動揺することなくコンマスから楽器を借りて最後まで弾ききったという。

都市伝説だな、ここまで来ると。祭り上げなきゃ気が済まないのは、どこでも誰でも同じってわけか。

「ガキのくせして冷静に楽器を取り替えたって話だろ？それは別人じゃなかったっけ」

一樹の揶揄するような口調に、穏やかに洋輔が言葉を返す。

「いいえ。五嶋さんのエピソードではありませんよ。マリコは三本の弦のまま、すべて指遣いを瞬時に変えてオーケストラと堂々と渡り合ったんです」

本来、細く繊細な音色を奏でるはずのE線。それを別の太い弦で弾いたというのか。一樹が目を見開く。

「カズのお姉さんの自慢をボクがするのも変な話ですけどね。通常とは違うけれどもかえって豊かなその音は、彼女の熱情的な表現と相まってすばらしい演奏だったと。今でも当時を思い返して熱く語る市民は大勢います。別にアクロバティックな演奏だったからではありません。何があるかとステージが始まったらそこは別世界なのだと、幼い彼女がそれを体現してみせたからでしょう。弾き終わってから見せたあどけない笑顔が、さらに聴衆の心を掴んでしまった」

洋輔の静かな声は、普段なら心にささくれの傷しか作らないはずの姉の話を、そのまま一樹へと伝えてくれた。

そんなやつだ、姉ちゃん。ステージに上がればたった一人で音楽と真正面から対峙する。何かに取り憑かれる。うまく弾こうとか感動させてやろうとか、作為的なものなんかない。生きて呼吸するのと同じように、あの人はヴァイオリンを弾くんだけだ。

「カズも同じです。やっぱり姉弟なんだなって、ビッグバンドのラ

イブでそう思いました」

タダの世間話。洋輔が気軽に口にしてくれるおかげで、一樹はそれを黙って受け入れ続けた。同じはずであるわけがない。かたや世界を相手だ。おれは：たかだか素人相手にジャズの真似事をしているに過ぎない。

わかっていても、彼の心遣いが嬉しかった。

「カズはわかってないんですよ。自分の凄さが」

「オール・レヴェル1のおれが？」

皮肉ではなく、苦笑いで答える。テスト・アウト（進級テスト）を受けていいと言ってたじゃないですか！なぜか洋輔の方がムキになる。

「ボクにはだから、どうしても納得できないんです。J・ロバーノはとてもいい先生ですし、あの様子では何らかの意図があってカズを1に入れたのでしょうか。でも、その意図もカズが黙って受け入れてしまうことも、何もかも不思議で」

「おれは、大人しそうなおまえが突っかかってきた方が不思議だよ。ここはアメリカです！ってさ」

温和そうな彼にも、音楽への真摯な思いはあるのだろう。当然だ。わざわざ日本の音大を卒業してから、ここに入り直すくらいなのだから。昔と違って、今のご時世にバークリー出身という名前だけで仕事もらえるほど、日本だって甘くはない。

「プロ：になりたいんだ。おまえも」

「いいえ、違いますよカズ」

洋輔はミルクの入ったコップを持ったまま、一樹に向き直った。柔
和な瞳の奥でかいま見える芯の強さ。

「プロになりたいんじゃないです。なるんです。そのためにここに
いるんですから」

一樹の顔から笑みが消えた。

「それは誰と比べて、ではないです。ただ、ボクなりにボクのでき
るスタイルで。そこだけは譲れませんね」

凍り付く一樹と対照的に、洋輔はにっこりと微笑んだ。

アナリィゼ（楽曲分析）の講義には、さまざまな国の男女がすでに
集まっていた。どのクラスも少人数。一度限りのクラスもあれば半
期を通してのものもある。授業の形式もよく変わるから、情報収集
は怠れない。

トランペットケースを肩に掛け、おずおずとドアを開けた一樹に視
線が集まる。あからさまな好奇心。負けん気を出して彼もにらみ返

す。確かにアジア人の占める割合は多い。

—これがレヴェル1。

見下すつもりは全然ない。もともと基礎からしっかり勉強したいと願ったのは一樹自身だ。周りはほとんどが英語を母国語としないやつばかり。それぞれの訛りがきつくて何を言っているのか、よくわからない。それでも臆することなく彼らは音楽談義に花を咲かせていた。持っている希少価値のあるレコードから、親交のあるミュージシャン自慢。見に行ったライブの回数を競うやつらがいるかと思えば、どれが一番貴重ですばらしかったかを力説するやつ。

そんな中で気後れして黙り込んでいた一樹を、連中が放っておくわけがなかった。

「c h i n e s e ?」

屈託なく早口で話しかけてくる。一樹がようやく聞き取れたのはこの単語だけ。

「n o , n o , f r o m j a p a n . j a p a n e s e !」

怒鳴るように言わなければ伝わらない。話ができるんじゃないか。そんなニュアンスで質問攻めにあう。待ってくれ！頼むから五人いっぺんにしゃべるんじゃない！

訳もわからぬ英語の洪水から一樹を救ってくれたのは、にこりもしない美人講師だった。講義室へとヒールの音も高く入ってきた彼女は、挨拶もせずいきなりプリントを配り始めた。

…いきなりペーパーテストじゃねえよな…

通信高校での冷や汗だらけの記憶がよみがえる。そして付け焼き刃の英語の試験。勉強してもものにろくな思い出なんかない。一樹は渋々、配られた紙を裏返した。

ほう。ようやく一安心だ。これはおれがよく知る言語だ。そこに書かれていたのは、コード進行とメロディー・ライン。西洋音楽の楽譜だけは世界共通なんだから。ざっと見渡すとごく簡単な「? m7 ↓?7 ↓? (ツーファイブ)」進行だった。ジャズの初心者が必ず習う初歩の初歩。もっとも一樹にとってはまずは音ありきではあったけれど。

きつめのアイラインが目立つ白人の講師は、ためらうことなく次々と生徒を指名していく。なぜその音を使う必然性があるのか説明せよ。いくぶんテンポを落とした丁寧な英語。留学生が多いのに配慮してくれているのか。一樹は胸をなで下ろした。

彼とは逆に、先ほどのまでの勢いはどこへ行ったのか、あわてふためいておろおろし出したのは他の連中だった。

一樹だって理論立ててジャズを勉強したことなんかない。だからこそ、ここに来たのだから。それでも彼らのしどろもどろさに、かえって一樹は焦り始めた。

…こいつら、もしかしてツーファイブの意味もろくに知らず、ここににいるのか?…

あまり知られていないが、バークリー音楽大学がきちんとした入学試験を実施するようになったのはつい最近のことだ。「学びたい者へ広く門戸を開く」が理念だったのだから。

彼らのとんでもない解釈を聞きながら、自分の番が来たらどう答え
たらいいのか、一樹はこっそりとため息をついた。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2010 keik
i t a g a w a A l l R i g h t s R e s e r v e d

#9

女性講師が冷ややかな眼で一樹を見据える。思わず反発してむっとした表情を浮かべても、彼女はこれっぽっちも堪えてなんかないようだった。

「ハイ、ミスター…」

「カズで結構です。みんなからそう呼ばれるので」

一樹は立ち上がり、好奇の視線を跳ね返すように虚勢を張った。

「OK、カズ。この進行の特徴は？」

「典型的なツーフাইブですね」

「そう考えた根拠は？」

講師の質問に答えるより、英語のヒヤリングにばかり気を取られた。訊かれている内容はあまりに彼にとってなじみ深いものばかりだったから。

「キーはFですね。Gm7からC7へと動いていますから。って、ホントにこんな答えでいいんですか？」

さすがの一樹も不安になってきた。ここまで初歩の初歩を訊かれる

とは思っても見なかったからだ。

「よくってよ。じゃあ、もう少し実践的なことを訊くわね。あなたならこのコード進行に何のスケールを持ってくるつもり？」

講師の表情は変わらない。一樹は素直に、じゃあGを元にと言ってみた。他には？淡々と彼女が質問する。

「トーナリティ（調性）がわかりやすいようにFを使いましょうか。でもスタジオの仕事なら……」

「スタジオワークなら？」

ここで一樹は言葉を切り、美しい講師ににやりと笑ってみせた。

「もちろん、C7の一発で楽をしようかと」

とうとう彼女が小さく笑みをこぼす。細く長い指先を口元に当てて。

他の連中がキツネにつままれたようにきよとんとする中、二人はしばらくこのシンプルでいて汎用性の高いコード進行に、いかに過激な音を乗せるか語り合った。

ふと、彼女があわてて言葉を止めた。

「あー、ごめんなさいね。こんな話をしていたらいくら講義の時間があっても足りないわ。カズ？」

はい？音楽談義の余韻を残したまま笑顔で聞き返した一樹に、一転

して冷たい声色を取り戻した講師はこう言い放った。

「あなた、何のためにこの講義を取ったの？」

何でって。一樹は面食らった。だってそれはロマーノ先生がそうしろと言ったから。けれどそんな言葉を返すことすらためらわれた。確かにおれは、高い旅費と学費を払ってまで、ここでツアーファイブを習いに来たんじゃない。

口ごもる彼に、彼女は追い打ちを掛ける。

「講師の後任を狙っているのなら、来るべきところは大学本部であってここじゃないわ。私はこの地位を譲るつもりもないし、挑戦するというのは受けて立つわよ」

「そんな…、僕は本当にただの学生としてジャズを基礎から学ぼうと思っただけで！」

「だったら」

彼女は厳しい表情でドアを指さした。

「他の受講生の邪魔よ。早く出て行って頂戴」

一樹はその台詞に、ただ立ちつくすしかなかった。

どの講義に出ても、結果は同じだった。

穏やかで優しい講師に当たれば、親切に取るべきコマを教えてくれ

ることもあった。しかし、酷いときは門前払いだ。「この間、ハウズバンドで吹いていた君だろう？ここに来たって意味はないよ」と。初級のセッションを取ったときも、一樹が一小節吹くか吹かないうちに皆が演奏を止めてしまった。

「これだから日本人は。謙遜も度が過ぎれば厭味だと言うことがわからんのかね」

苦々しい口調で追い出されることも一度や二度ではなかった。

音のあふれる外のベンチで、一樹は力なく座り込んだ。

「何がしたかったんだよ、ロマーノ先生は。行くところ行くところ、おまえに教えることなどない。全部が勝手にテストアウトしてくれ！じゃねえか。ただの日本人いじめか？おれがマリコの弟だからって気にくわねえのかよ！」

さらさらの栗色に右手をつっこみ、髪をかきむしる。こんなことをしている場合でもなければ、おれには時間的な余裕すらない。いつまで吹けるかなんてわからない。ここでつまずいてるわけにはいかないんだ。

三年前に受けた化学療法で、一樹の腕は症状が抑えられ、今は寛解状態と言っているはずだった。確かに、ポストンでの治療も受けるようにと紹介状は書いてもらってある。けれどアメリカのバカ高い医療費を考えると、たかが検査に出かけていく気にもなれなかった。

おれの手が、腕が動くうちに。おれがおれでいられるうちに……。じりじりとした焦燥感が一樹を襲う。

：おまえは真理子とは違う：

違わない！同じ高橋の家に生まれ、ずっと音楽に携わってきた。どれほど規模が小さいとしても、ステージはステージだ。おれはれっきとしたプロのミュージシャンだ。ただただ、吹いていられればそれでいい。姉ちゃんだってそれは同じはずだ！

何が違う……ん……だ？あの人とおれは、何が違うというんだろう。音を出すことに違いなんてない。技術の差か？表現力の問題か？おれだって吹けば周りを熱狂させ、スタンディング・オベーションの嵐だ。

その大舞台を、姉にはちゃんと用意してやったじゃないか。どうしておれには、何一つ分けてくれなかったんだ？

「おまえの演奏には華がない。小器用なだけだ」冷たく響く父の宣告。

「才能なんて曖昧な言葉、私は嫌いよ」言い切る姉の揺るぎない自信。

越えられない。

そうじゃない！越えたいからこそ、ここに來たんじゃないか！吹き

たい。何でもいいから音を出したい。おれを受け入れてくれる場所を見つけない。

一樹がトランペットのソフトケースに手を掛けたとき、はなやいだ声が耳に飛び込んできた。

「ハイ、…ええと、カズ？ お久しぶりね」

同じように肩からケースを掛けているのは、ハウスバンドの二番トランペッター、シェリルだった。伸びやかな高音と、多彩なフレーズのアドリブソロ。あのときの音が脳裏に思い出される。

「ああ、こいつが例のマリコの弟ってヤツだろ？ ファーザーズ・コートテイル（親の七光りの意）じゃなくて、シスターズ・ヘムラインか？」

隣にいた長身の男が、あからさまに嫌みったらしく嘲りの声を出す。何だこいつ！？ ケンカ売ってるつもりか？

シェリルにこっそり、彼氏？ と訊く。冗談じゃないわよ！ いくらあたしでもこんなに趣味悪くないから！ 小声で彼女が言い返す。

チェックのコットンパンツに真っ赤な靴、シャツの上からは革製のベストを合わせ、帽子はカラフルなパッチワーク。シェリルよりは濃い金髪を束ね、やせぎすの身体に…やはりラッパのソフトケース。

ちぐはぐな男。それがブライアンを見た第一印象だった。これが首席を勝手に名乗ってるリードトランペットか。

「挨拶が遅れてごめん。ほかあ、伝統あるここバークリー音楽院のハウスバンドでリードを取っている…」

「ブライアン・コールマン。知ってますよ。有・名・だ・か・ら」

思い切り日本風の発音で強調してやったら、隣でシェリルが肩を震わせていた。自信過剰のナルシスト。それに加えてこの奇抜なセンスだ。構内を歩いていればイヤでも噂は耳に入る。それでも、確かにリードを任されるほどのだからうまいんだろうな。

「君は入学したてなんだって？で、レベルはどの辺なのさ」

一度くらいは、この男のトランペットを聴いてみたいとは思った。自信とはどうやって身につくものなのかということとを、一樹自身も知りたかった。敢えてレベル1だと正直に言ってみた。二人が目を丸くする。シェリルは息を飲み、口元を押さえた。

ブライアンは…これ以上ないと言うほどの大声で笑い出した。

「あはあはあはは。こりゃあいい！あの才媛タカハシマリコの弟君は初心者コースからスタートですか！？トランペットはいつから始めたんだい？先週？」

そう言って、辺りをよろよろ歩き回りながらずっと笑い続けている。シェリルが、ほっときなさいよあんな男、と冷たい視線を送ってから、一樹に詰め寄った。

「ねえ、それ何かの間違いでしょう？」

「おれもそう思うよ。実際、どの講義に出てもすぐに追い出される。ここはおまえなんかの来るところじゃないってね」

「当たり前よ！あれだけの初見能力とハイノート。耳も良ければノリもいい。あなたがレベル1であるはずないでしょう！？いったい誰がテストしたって言うの？」

憤懣やるかたないといったシェリルに、一樹はロバーノ先生がと告げた。途端に彼女は黙り込んだ。そう…ジョーが…。その先が続かない。

「もちろん、片っ端からテストアウトは受けてるよ。でもとても追いつかない。ねえシェリル？どうして先生はそんなまどろっこしいことをさせたんだろう」

しばらく考え込んでいた彼女は、突然にっこりと笑顔を向けた。

「必要なのよ、きっと。うんと自分で探してみたら？どうしたらいいかなんて」

そんな、シェリルまでおれを見捨てるなよ。一樹の声があまりに情けなかったのかも知れない。彼女は口元をきゅっと引つ張り上げると、いたずらめいてさらに笑った。

「あ・の・ね。親切だから教えてあ・げ・る」

うんうん、一樹は必死に頷く。

「ジョーはきつと、それをあなたが自分で考えられるように、という願いを込めてレベル1にしたんだわ。まあ、一人でがんばってみ

て」

そう言うとな彼女はまだ笑い続けていたブライアンを引っ張って、去っていかうとした。待つて、と声を掛けるも手を振るばかり。

ふと、引きずられていたブライアンがぐるりと一樹の方を向くと、まっすぐに指を一樹に突きつけた。

「な、何だよ!？」

「おまえにリード・トランペットの座は渡さない!!」

勝ち誇ったように高らかに言い放つ。やっぱバカだ、こいつ。

「あのねえ、おれは別にビッグ・バンドになんか興味ないし。だいたい、日本じゃそんな仕事はもう需要もないし」

「このオレ様より評判が良かったってだけで、おまえは許さない。覚悟しておくんだな!」

覚悟って何だよ…。これ以上のやっかいを抱え込みたくはなかった。バカは放って置くに限る。ため息をつく一樹に、ブライアンは声をひそめた。

「ビッグ・バンドに興味がないのなら、コンボには自信があるって言うんだな?」

「はいっ!?! おれ、あんたとからむ気はさらさらないんですけど」

「ウォーリーズのセッションナイトで待っている。闘う前に逃げ出すなよ!？」

はあ!？ウォーリーズって言ったら、ボストンで一番有名なライブハウスじゃねえか。

呆れて二の句が継げなくなった一樹と、気恥ずかしさに顔を赤らめたシェリルを尻目に、ブライアンは高笑いを続けた。

セッションナイトで実力を試せ、か。確かにそれも悪くはない。ただし、相手がこいつじゃなければな。
一樹は、ここボストンに来てから何度目かわからないほどのため息をつき、自由な右手で頭を抱え込んだ。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

夜も昼も 〈Night And Day〉

#10

プライヴェート・レッスルームでロマーノと向き合う。一樹は丁寧に息を吹き込み、低音からゆっくりとトランペットを鳴らしていた。

目をつぶり、その響きを一つ一つ確かめるように倍音を聴き取ってゆく。

こんなふうに基礎練習を行うことすら、仕事に追われているときにはとてもやれなかった。慌ただしくリハに駆け込み、アンプからさまざまな楽器の音がなり立てる中で、最低限のウォーミングアップができればラッキー。大抵はケースからペットを取り出してマウスピースをはめたら、即、音合わせだ。

遠い昔、佐々木教授の元でラッパを習い始めた頃を思い出す。子ども用のラッパなんてあるはずもなく、まだ重たいそれは重心を取り損ねて何度も傾いた。

そう：まるで今の自分のように。

片手のプロテクターでくくりつけ、右の指でピストンを押しながらも楽器全体を引き上げる。癖のある吹き方だが、孝一郎が軽薄と切り捨てた音楽シーンでは何も問題なく過ぎた。おれはここで生きてゆける。

そのための武器が欲しい。残された時間は、あとどれくらいか。早く早く…。ここで学べるだけ学んで人脈を作り、業界の片隅で良いから居場所を確保する。もっと早く、おれに力をくれよ。

焦りは、音に現れた。ロマーノがそつと肩を叩く。弾かれたように楽器を唇から離れた一樹は、どこか怯えて彼を見た。

「少し、休もう」

レッスン時間は五十分。ほんのちよつとでも惜しいのに。何とか単語を頭から引っ張り出して一樹が話そうとする前に、ロマーノはさっさと椅子に腰掛けた。

ため息をついて、一樹は腕を降ろした。実際、ずっと支えていた左側はしびれ、感覚の残っている部分にまで厭な痛みが広がる。思わず右手でかばうように肘を押さえた。管楽器の中では比較的小さいトランペットも、彼にとってはその重みが負担になる。

ロマーノはただ黙って、微笑みながらプリントアウトされた楽譜を手をしている。

「この次は、どの辺りをやろうか。カズ」

簡単なコード進行のスタンダード。初級者向けだ。一樹は息を吸い込むと、思い切ってトランペット科の主任講師であるジョン・ロマーノに問うた。

「先生、なぜ僕をレベル1に入れたんですか？」

穏やかにロマーノが顔を上げる。なぜだと思う？ 逆に訊かれる。

「僕に実力がないからでしょう？でも、行く先々でここはおまえの来るところではないと言われ続けました。うぬぼれたい訳じゃない。ただ僕は本当の力がどれくらいか知りたいんです。客観的に」

「それは、他人が決めることかい？」

あくまでも静かに講師は言った。一樹は一瞬ひるみ、それから必死に言葉を並べた。

「どんなに自分でうまいと思っていたところで、他人が評価してくれなければ仕事へはつながらない。ステージでは常に評価がつきまとう。こいつは使えるか使えないか。音を出せばすぐにでもわかってしまう。だからちゃんと評価されるだけの实力をつけて!!」

やりきれなさに声が思わず大きくなる。急がなければ。おれが吹けるうちに。この手が支えていられるうちに。

「君が…」

あくまでも優しげにロマーノは応える。小さなフレームのめがねの奥で、瞳が柔らかく細められる。

参加したレベル1の学生たちは、どうだったかね、と。

「えっ？」

不意に問いかけられて、一樹はとまどった。記憶を探り、つかの間ときを過ごした連中の顔を思い浮かべる。あっけらかんと自分語りをして、いくらでも音楽の話とうんちくを語って聞かせ、いざ実技

になると青い顔をしながら：それでも自信ありげなその態度。

正直に答えて良いものかどうか迷う。それほど根拠なき自信過剰。けれど、誰一人イヤなやつなどいなかった。ああ、あれは何の授業だったか。

『できないから、ここに来てるんじゃない。だから何？』

黙ってしまった一樹に、ロバーノは語りかける。

「君はライブのチケットを取るとき、もしくは新しいCDを買うときに、一番上手な人を選ぶのかい？」

一樹が目を見開く。上手？テクニックがあるってことか？突然訊かれても答えようがない。じゃあ、別のことも訊いてみようか。あくまでも静かな声。

「君の表現したい音楽は、どうしてもトランペットでなければ表せられないものかい？」

さっきよりもっと、答えに詰まった。けれど今度はどうして抑えきれない思い。

「それは！いえあの：僕にはトランペットが向いていないとおっしゃりたいんですか！？」

震えていたかも知れない。孝一郎に否定されたあのときの感情が、不意によみがえる。

しばらく沈黙が続く。ふっと小さく笑うと、ロバーノは一樹をじつと見つめた。

「君にはどうしても、そう聞こえてしまうのかな。誰の評価をそんなに怖がっているんだい？君がこれまでに出会った生徒たちに、そんな怖がりはいたかい？」

誰の評価…を…？先生は何を言いたいんだ。

ペンタトニックしか使わずに、一曲まるまるアドリブを取る生徒もいた。音程が外れていても、全く頓着しない奏者もいた。ピアノストに文句をつけられると、俺のチューニングに合わせると開き直って笑う。

上手いとは何だ…。チケットを取ってでも、CDを買ってでも聴きたい音楽とは。

「すぐに出さなきゃならない答えでもないだろう。ここでのレッスンを楽しんだらいい。テストアウトは順調だと聞いているよ。欲しい技術を存分に身に付けてゆきなさい」

でもおれには時間が！！叫びたかった。あと何年、いや何ヶ月…あと何時間残されているんだ？

病気のことは、ロバーノには話してはあった。それでも敢えて、彼をレベル1に入れた。今の一樹には出せない答え。レッスン終了を告げるタイマーの音が、チリチリと小さな音を立てた。

「ほらカズー！！こっちこっち！！」

暗がりのライブハウスで洋輔が手を振る。国が違っても同じだな、この雰囲気は。

ウォーリーズは、ツアーを組むジャズアーティストたちが必ず組み込むと言われているほどの店だ。キャパも広いが、客層も幅広い。年配のジャズファンのみならず、もつとずっと若いヤツらも当たり前のように酒を飲んで騒いでいる。

今夜は特に…。

金土と、売れ筋のバンドが出演したあと、日曜の夜はアマプロ交えでのセッションナイトだ。ルールは簡単。参加したいと思ったら楽器を持ってここに来ればいい。運が良ければステージに上られる。ハウスバンドがバックを演奏し続ける中、思い思いのパートの連中が台に乗っていく。客とバックが楽しめれば、もうワンコーラス。どうしようもないと判断されたら、冷たく引きずり下ろされる。

「実際のところは、冷ややかな視線と空気に耐えかねて、奏者自ら降りるらしいんですよ。シビアというか何というか、怖いですよねえアメリカって」

洋輔もアルトを持ってくりやよかったのに。一樹の問いに、彼はそう言いながら首をぶんぶんと振った。

「根性なしだから、こいつは。いいの、今夜はあたしたち二人で、カズの応援団ってことになってるんだから」

すでにカクテルをあおって、ほてった顔の尚子が軽口を利く。何だよ、応援団って…。ぼやく一樹に「でっかい旗でも振ってあげようか？」と笑った。

「緊張してる？」

「全然」

だって、ただのスタンダードのセッションだろ？一樹は平然と、自分もカクテルに口をつける。そう、こんな夜は何度も過ごしてきた。あのジャムズで暮らし始めてから、こっちの空気の方がおれの日常だった。

戻ってきた。

彼にとっては、ずっと居心地の良い空間。慣れ親しんだざわめきと紫煙と酔った客の笑い声と、そしてそこにはいつも…。

一樹は、記憶をそこで無理やり断ち切ると残りの酒を一気にあおった。

「そんなに飲んできると、ラッパの圧力を掛けただけですぐに酔うな。ああそうか、緊張を解くためか。いや、うまくいかなかったときのことを考えて、酒のせいにするための保険か。さすがは日本人だね、やることがセコい！！」

この、無駄にでかい声は。振り返らずともわかる。トランペット科の自称首席奏者、ブライアン・コールマンだった。隣でシェリルがばつの悪そうな顔で立っている。

「やっぱ、付き合ってたの？オタクら」

最近の飲む機会もほとんどなかったせいかな、少しの酒が入った一樹

は饒舌になった。その台詞にシェリルがいやあな顔をする。

「あんた、覚えてなさいよ！こんなことになっちゃった手前、悪い
と思っについてきてやったのに」

彼女はさらさらの金髪をかき上げると、あーあ、あたしも何か飲もう！と声を張り上げた。

そんな彼女の耳元に顔を寄せ、ありがとうとわざと日本語でささやく。頬を赤らめたことが自分でも許せないかのように、シェリルは余計ぶんむくれた。

「何、余裕ぶってんのよ！ここがどこだかわかってるの？あなたが
上手いのは十分知ってはいるけれど、ウォーリーズの客は辛辣よ？」

「ふん、マリコの弟って言いふらすのはナシだからな！！」

ブライアンが皮肉げに笑う。バカは相手にしない相手にしない…一
樹の呟き。

ロマーノに突き付けられた重い課題。ここでその答えが見つかるだ
ろうか。レベル1で出会った彼らの楽しい表情を思い浮かべる。
おもしろえ、やってやろうじゃねえか。

一樹は、ゆっくりと皮のソフトケースからトランプペットを取り出し
た。

(つづく)

i
t
a
g
a
w
a

A
l
l

R
i
g
h
t
s

R
e
s
e
r
v
e
d

歌こそは君　　Song Is You, The

#11

ウォーリーズのセッションナイトは既に始まっていた。三人のいかにも老練なリズム隊が、気のなさそうなリフを繰り返している。センターマイクに立つのは、本当に若い青年。いや、まだ十代かも知れない。

テナー・サクスが自信なさげに何度も同じフレーズを繰り返す。音はだんだんか細くなり、それでも気力だけで彼は立ち続けていた。観客のざわめきは決して演奏ではなく、自分たちの気ままな雑談に向けられている。

とうとう青年の音が止まる。

おざなりな拍手がぱらぱらと起こる。隣の洋輔は、と見ると他人事ではないという表情で顔を引きつらせていた。

「だから言ったでしょ。ここの客は容赦がないのよ。耳が肥えているし、たとえばちょっとくらい名前が売れていたからってその日のプレイが良くなきゃ、すぐにでも引きずり下ろされるわ」

シェリルは、あーあ知らない、と呟くと、カンパリをぐいと空けた。

「いいの？ 最前列で応援に行かなくてさ」

一樹の笑いを含んだ声に、皆がステージを見やる。そこにいたのは真っ赤なシャツに黄色いパンツを履いた、ド派手なブライアンだった。冗談じゃないわよ！シェリルの尖った声。

どうやら彼は、このセッションの常連なのだろう。客席のあちこち

からブライアンの名を呼ぶ声がする。それに余裕を見せて手を振りながら、彼はトランペットを構えた。

…そう言えば、ヤツの演奏をまともに聴くのは初めてだ…

一樹は自分の番のことさえも忘れて、興味津々といった顔でステージ上を見つめた。

ぱーんとハイノートを一発。さすがハウスバンドのリードを取るだけある。よっく出るなあ。そのあとの細かなパッセージもきらびやかだ。

こいつは聴かせ方を知っている。観客にどうアピールすればいいか、どう吹けば受けるか。聴きなじみのある巧みなフレーズに、複雑に吹いているように見せる音の配列。乗りやすいリズム。

正統派のビッグバンドなんかよりも、ちょっと軽めのリズムを入れて今時の音を鳴らせば、日本でも十分食えるな。

まるで自分がプロデューサーにでもなったかのように、一樹はにやにやしながら彼の音を聞いていた。

「ちょっとはアがりなさいよ！それとも、あいつよりうまく吹く自信があるってこと？」

隣のシェリルの方がやきもきしている。一樹は微笑みかけた。

「うまくだなんて思っちゃいないよ。ただ、最近こんなふうに音を聴いてないなって。楽しくてさ」

強がりでも何でもなく、これは一樹の本心だった。彼にとってトランペットは文字通りの遊び道具。いつも一人きりでいた幼い頃の彼のそばには、必ずラッパがあった。音が鳴ればそれで満足。たとえ

どんな音楽でも。

ステージのブライアンは、ツーコーラス目にかかっていた。へえ、やるじゃん。リズム隊もワンセットでは見放さなかったらしい。

一樹がゆっくりと立ち上がる。周りは高音域で攻めまくるブライアンに歓声を上げていた。でもまあ、このセットが潮時だろうね。

一樹はこれ見よがしに袖に近づくと、自分の左手に楽器をセットした。吹きながらもブライアンが横目で彼を視界に入れる。どうだ、見たか。目がそう物語っていた。

その姿を見ながら、一樹は自分がどんどん冷静になっていくのを感じていた。

なぜおれは、この場に立つとこんなに落ち着くんだろう。ステージ上は何が起きるかわからない。緊迫感が溢れているというのに。

それよりも、吹けるというワクワクした気持ちの方が数倍まさっていた。早くどけろよ、ブライアン。そこはおれが立つ場所だ。

コーラスの終わり、リズム隊があからさまなリフを繰り出す。代われと催促しているのだ。

ブライアンは片手を高く上げ、歓声に応えた。拍手は鳴りやまない。その中を同じトランペッターの日本人が登場する。

皆の表情が困惑に変わる。こいつは…誰だ？いつもそうだ。おれを見る目はどこへ行っても変わらない。

一樹は軽くリズムの三人にアイコンタクトを送る。どこの若造だ？

冷やかな視線。彼は真正面に向き直ると楽器を構えた。軽く振って合図を出すと四人で一斉にテーマへと入った。

決して高くはない音域。柔らかく素直に響かせる。新参者を物珍しげに見つめる観客は、まだ何も反応を見せない。腕を組み、難しい顔つきのヤツもいる。それでいいさ、初めはな。

トランペットのアドリブソロに入る。敢えてロートーンから攻めていった。レベル1で出会った学生たちの顔が浮かぶ。そして彼らの音が。

奇をてらわず、ペインタニックのわかりやすい音。明らかに観客がとまどっている。こいつはこんなレベルで何をするつもりだ、と。

一樹は丁寧にゆっくりと音を連ね、そこにわずかにブルーがかった響きを混ぜていった。ピアノがすかさず反応した。おもしれえ、一樹は心の中でやっとした。

このピアニストはわかっているのだ。一樹がそろそろ仕掛け始めたことを。

鳴らされるコードの複雑な構成音に一瞬加えられた、別のキー。一樹は聴き逃さなかった。それを手がかりに転調する。そのままモードに突っ込む。ベースが食いついてきた。

奏者同士だけにわかる微妙な駆け引き。客に気づかれない程度にほんの少しずつコードをずらしてゆく。

一樹の意図を読んだドラムが、それまでの十六のもたったシャッフ

ルをわざとイーブンに修整する。リズムはだんだんとタイトなものへと変わりゆき、そして…。

何の合図もなしに、それまでの平凡なスタンダードから一気に曲は超ハイスピードの「ラウンド・ミッドナイト」へと変わった。裏でそっと一樹が、そしてピアノが、この曲のコード進行を指し示していたのだ。

一瞬何が起こったのかとまどいを見せた観客は、事態を飲み込んでわあっと総立ちになった。

一樹のラップソロが攻めに攻める。それをあおるようなドラム。ふっとブレスのために間が開くのを逃さず、ピアノがソロを横取りする。センターで苦笑いの一樹に、ベテランのピアニストはウイנקを投げ涼しい顔だ。

三十二小節きっちりソロを取ると、あごをしゃくって返してくる。当然のように受け取って軽々とアドリブを決めた一樹は、今度はわざと大きめにブレスをする。

ベースが鮮やかにメロディアスな音を奏で始める。もう一度歓声が上がる。

音のやりとりが繰り返され、一樹は自分のフレーズに少しずつ元曲の要素を戻していく。

もちろん、それを聴き逃すようなリズム隊ではない。

軽くラップを振って合図を出す一樹に合わせ、四人はきれいに元のスタンダードのテーマに入った。

もはや歓声は止まらない。

呆然と眺めていたブライアンは、ウソだろう…と呟いた。これはセッションじゃない。完成されたステージだ。

シェリルと二人の日本人は…天井を仰いだ。思いは同じだったのだろう。

……カズ、やりすぎだってば……

もう一度繰り返されるテーマを、一樹はオクターブ上できれいに響かせた。ドラムがお約束のシメのリズムを叩く。本来なら延々と続くはずのセッションは、ぴったりと合わさった形でエンディングを迎えた。

観客のスタンディング・オベーションとともに、センターの一樹にリズム隊のベテランたちが集まる。もみくちゃにされた彼ははにかむように笑っている。

口々に名前を訊かれる。called kazu ! 彼は何度も叫んだ。

アンコールの声がかかるのを軽く手を振って断り、一樹は洋輔たち

の席へと戻っていった。手前に置いてあったジンライムをぐいとあおる。

「カズ：ちよつとあんたねえ…」

呆れ顔の三人に、いやあ飲んで吹くと自制が利かなくなつてさあと一樹はうそぶいた。シェリルが吹き出したのを合図にしたかのように、四人はこらえきれずに笑い出した。

見ず知らずの客たちが、ヘイ！カズ！と気軽に声を掛ける。やっぱりこの空間は：おれの居場所。ラッパさえあればおれは生きてゆける。

心から大きく息を吸い込んで、一樹はざわめきを味わった。自分だけの力で勝ち得たという感覚が、ここに来てからの違和感を払拭させてくれるかのように。

しかしそのとき、一人青い顔で震えていたブライアンが急に立ち上がった。シェリルがいち早く気づき、声を掛ける。

「お互い、いいプレイをしたんだから。一緒に飲みましょうよ」

そう言って差し出したカクテルを手で払い、ブライアンは大声を出した。

「何がカズだ！こいつがこれだけ吹けるのも当たり前だ！みんな聞いてくれ！！こいつはな、こんな素人みたいな顔をして、あのマリコの弟だぜ！？シティフィルの常連、ヴァイオリンの天才少女、タカハシマリコの弟だ！！みんな騙されるな！！」

広いフロアが一瞬にして静まりかえった。

マリコの名は、ボストンではあまりに知れ渡っている。一樹の顔が凍り付く。違う。さっきの演奏と姉と何の関係があるんだ？皆が受け入れてくれたのは、おれの吹くラッパの力。そうだろう！？

叫びたかった。でも、一言だって言葉にはならなかった。

ああ、やっぱり。そう思われるのか…ここでも。おれの居場所は、またなくなるのか。

身動きすらできなくなった一樹とブライアンの後ろから、低く柔らかい声が響いた。

「さあて、タカハシマリコというジャズミュージシャンなどいたかな、ブライアン」

声を掛けられたブライアンは振り返って絶句した。そこには、小柄だが肉付きの良い中年の男が、穏やかに微笑んでいた。誰もが声を失い、その男を見つめている。一樹は初めて見る顔にとまどった。

…誰だ？このオヤジは…

「初めましてだな、カズ。いいプレイをありがとう。ここのオーナー

ーのフィリスだ。ちょっと話がしたいんだが、いいかな？」

あくまでも物静かなオーナーの言葉に、一樹は息を飲んだ。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

ふたりでお茶を Te a F o r T w o

#12

「カズ？カズったら！！ちょっとあんた！聞こえてんの！？」

えっ？尚子の尖った声にようやく一樹は返事をした。物思いにふけるというより実感がわかなかったのだ。

昼下がりの大学構内は、ランチを手軽にファストフードで済ます者友人とのおしゃべりに興じる者、そして昼飯もそこそこに即席のセッションを始める者らの音であふれかえっていた。

「そんなに仕事が決まったのが嬉しいんだ」

尚子にはやにやと一樹の顔をのぞき込んだ。言い当てられたとも違う不快感でむっとする。

「当たり前ですよ、尚子ちゃん！あの老舗のウォーリーズでいくら平日とは言えレギュラーが決まったんですよ！？カズが喜ぶのも当然です。なんか全然関係ないボクらだってこんなに嬉しいのに」

洋輔はかじりかけのチキンバーガーをそっと脇に置くと、本人に代わって力説し始めた。

「いいですか？あそこの客筋はみんな年季の入ったジャズファンばかりだし、オーナーのフィリスだって、ぽっと出の新人をレギュラ

「１になんて普通言わないタイプでしょう？それだけカズの実力が認められたんですよ」

洋輔と尚子が言い合うのを、一樹はやっぱり現実感のないままにぼうつと見ていた。

確かにレギュラーは決まった。火・水の客入りが一番見込めない、さらに早い時間帯だ。おまけにリズム隊は同じように、若くてギャラが少なくても済みそうな連中ばかりらしい。初顔合わせの時間も取れないだろう。来週、ほぼぶっつけ本番のステージが待っている。

それでも：自分の力で仕事を取ったことには違いない。あれだけの客をあれだけ沸かせたのだ。すべておれ自身の力のはずだ。ブライアンが叫んだことなんか、ひとかけだって関係ない。

自分に必死に言い聞かす。この街で知らないヤツなんかいないと言われるマリコタカハシ。愛くるしさと反するような激しい演奏と卓越した技術と。

マリコの弟だからじゃない。あのオーナーがそんなことで客を呼ぼうとするはずがない。何度も何度も、自分を説得する。

それでも一樹には、店の全員が沈黙したあの一瞬が忘れられないのだ。

：ああ、やっぱり。だからね。

ここでの敵は、父親であり指揮者の孝一郎ではなく、愛してやまないヴァイオリニストの姉なのか。ぬぐいきれない不快感の正体はおそらくこれ。どうしても認めたくなくて一樹は押し黙った。

「ねえねえ、彼女にはもうメルった？」

あっけらかんと尚子が訊く。思いにとらわれていた一樹はつい、彼女って？と答えてしまった。

「あんたバカ？彼女つつたら彼女でしょう！日本に残してきた例の彼女！あんまりほったらかしておくとマズいよ？何で一番最初に教えてくれなかったのよキーンってさ」

女の子って、順番とか最初にとかにこだわるもんなんだから。尚子は指を立てて一樹に詰め寄った。

「か、彼女は…聡子さんはそんな人じゃないよ」

しどろもどろの彼に、尚子の追求は止まらない。

「何？まださん付け？敬語？あり得くない？付き合ってどれくらい経つのよ！？」

年上なんだから、しょうがないだろうっ！一樹はどうとうブンむくれた。今回の仕事が決まったことどころじゃない。忙しさにかまけてろくにメールの返信さえもしていないからだ。

それでも聡子は責めることなく、淡々と日常の様子を送って寄越した。

そもそも彼女との出会いは、姉の真理子が強引に仕組んだこと。いつまでもふらふらしている弟を見かねて、逢ってみたら？とけしかけたのだ。

イヤだと強硬に突っぱねた。何度も断った。それなのに場も空気も読めない姉は平気だ。

「パリでね、一番のお友達だったのよ。同じヴァイオリン奏者の友達なんてなかなかできないじゃない？すごく嬉しくてね」

相手の身にもなってやれよ。高橋真理子クラスの天才奏者と比べられて、どれだけしんどかったことか。逢う前から一樹は彼女に深く同情していた。おまけにこのド天然から親友認定かよ、かわいそうに。

日本で姉と聡子が再会したとき、彼女を気に入ってしまったのが叔母の伸子だった。控えめでいて芯のある聡明な娘さんだと。そしてヴァイオリンの腕だって姉と比べることが無謀なだけで、彼女だってそこそこの弾き手だ。

叔母はさっさと自分のメソッド本部を手伝ってもらうことにして、後継者ができたと浮かれている。

そんな聡子とおれが付き合えるわけがない。いくら言っても、自分の思いつきが一番だと信じている宇宙人に通用するはずもなかった。

「あのね、一樹みたいな甘えんぼさんには、聡子のようなしつかりとした人が一番いいの！！わかる？別に今すぐ婚約しろとか言ってるんじゃないのよ？」

当たり前だ！逢ったこともないのに。

楽しそうに聡子の長所を並べ立てる姉に、一樹は本心を言ってしまう。衝動に何度も駆られた。

口に出してはいけない。言えるはずもない。おれには未来を語れるだけの時間があるかどうかもわからないのに：とは。悲しませる人をこれ以上増やしたくない。

けれどそれを姉に告げて、今の僅かながらもささやかな家族の幸せを壊すだけの勇気も、そのときの一樹にはなかった。

小洒落たビストロで初めて聡子に逢ったとき、一番はしゃいでいたのはもちろん姉だった。真理子のマシンガントークをひたすら聞かされた。

ため息しか出ない一樹は、そっと目の前の彼女を見た。

真理子よりはいくぶん背が高く、そのせいか大人びて見えた。いや、落ち着いているというんだろね。こっちの方が普通だ。姉ちゃんが異常なんだから。

細面の顔は穏やかに微笑み、ストレートの長い髪が清楚さを伝えていた。姉の話を楽しそうに聞いていたかと思うと、不意に一樹の方へと視線を向けた。

くすっ。目だけが気持ちを伝えている。真理子ったら本当にね。できるものならため息もつきたかったんだろう。

まるで共犯にでもなったかのような気持ちで、一樹はどきっとした。惹かれてはダメだ。彼女をおれの運命に巻き込むな。今までの行きずりの女たちとは訳が違う。そう言い聞かせた。

懇意のシェフに呼ばれて姉が席を立った隙に、聡子は耳打ちをするように顔を寄せてきた。

「ねえ、家でもあんな感じなんですか？ 真理子って」

何を言われるのか緊張していた一樹は、その一言にはん、と小さく笑い声を立てた。

「全然変わんないっすよ。あのまんま。たぶんどこ行ってもああじゃないんですかね。よく言われるようにマエストロに気に入られるんじゃないかって、みんな呆れてるのかも」

苦笑混じりにそう言うと、思わず二人で顔を見合わせて笑う。戻ってきた真理子が、ねえねえ何話してたの？ 楽しいことなら教えて？ と食い下がるのに、内緒だよバーカと言いつ返す。

結局ずっと三人で過ごした最初の出会いは、はた迷惑な姉のおかげで和やかな雰囲気にも包まれた。

聡子は…違う。あの人とは。面影も話し方も身にまとうニュアンスも。何もかも違う。

ならば忘れられるかも知れないと、一樹の心のどこかが思ってしまった

った。過去の小さな棘のような想いと、将来への底知れぬ不安とを。刹那的に今だけと割り切って付き合うのも、ありかも知れないと。

それ以来、二人で逢うことも増えた。もっともその頃だつて一樹は、孝一郎の顔色を伺いながらもスタジオの仕事もトラの仕事もがんがん入れていた。彼女は彼女で、本部を手伝いながら生徒も持つて教えていた。

その合間を縫つての逢瀬。

幾度めかの店で、思い切つて一樹は聡子に告げた。自分自身が抱えている病氣のことを。さすがに余命がどれくらいなのかもわからないとまでは言えなかったけれど。

聡子は黙って聞いていたが、一樹が話し終えるとまっすぐに彼を見つめた。

「な、何？あの…だからさ、なかったことにするなら早いほうがいいかなと思って」

微笑んだままの聡子は、そっと呟いた。

「大丈夫。一樹くんはきっと大丈夫よ。そんな気がするの」

あのさ、おれの説明ちゃんと聞いてた？ド天然の友達はやっぱド天然か？思わず大きな声を出しかけて、あわてて息を飲み込んだ。

「…何が大丈夫なの？何も知らないくせに」

一樹は怒りたかったのかも知れない。無責任に励ますなど。知りもしないくせに、この救いようのない不安感と恐怖なんて、と。何で平然と笑ってられるんだよ。しょせん他人ごとだからだろ？毒づきたくなった。早くこの店を出て、道路でもどこでもわめき散らしてやる。

「私はね、本当に何も知らない。一樹くんの辛さも怖さもわかってあげられない。でも知らないから、一人くらいは大丈夫って心から思っている人間がいてもいいのになって。傲慢なのかな」

笑顔は絶えることがなかった。この人は確かにたおやかではかなげかも知れない。でも叔母が見抜いたとおり、本当は強いのかも知れない。

一樹は…その優しさに甘えた。

姉の示す愛情とも、両親の不器用な心遣いとも違う、人からの慈愛にすがりついた。これでいいはずがないと思いつつも。

渡米することを決めても、聡子には何も相談しなかった。待っていてくれとも、ついてきてくれとも言わなかった。二年になるか三年になるか。もったかかかるかも知れないし。うそぶく一樹を、聡子はそのまま受け入れた。反発したいだけのガキは、振り上げた拳の持つて行き場をなくして…とまどった。

こんなふうに愛を伝えてくれる人はいなかった。もっと別の、もっと違う形の、もっと…。

黙り込んだ一樹に、尚子はとうとう笑い出した。

「ねえ、今からでも遅くないからさ。君のおかげで仕事が決まったよ、くらい書いて送ってやりなよ。ほんと、カズってもっとスマー
トだと思ってたけど、けっこう不器用だよねえ」

隣で洋輔が尚子の服を引っ張り続ける。言い過ぎですってば！ちよ
っと尚子ちゃん！

「…る」

へっ？一樹のあまりに力のない返答に、つるむのが嫌いなはずの日
本人二人はまじまじと彼を見た。

「何？何て言ったんだか、お姉さんに言ってみな？」

「そのうち日本へ一度帰る、つつったんだよ。とんぼ返りでもいい。
機内泊でもいい。ちゃんと面と向かって話したいなってさ」

忙しさにかまけて、というのは言い訳だったんだろうな。自問自答。
本当は聡子に気持ちを伝えたら、声を聞いたら、すべてを投げ出し
て甘えてしまいそうだから。マリコの弟という重圧と、思うように
いけない大学でのレッスンから逃げ出してしまうだろうとわかって
いたから。

自分の力で勝ち得た仕事……。今なら聡子にちゃんと向き合える。そんな気がした。一樹は、いったん出しかけた携帯をポケットにしま
うと、高い異国の空を見上げた。

(つづく)

北川 圭 Copyright 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

命ある限り 〈As long as I live〉

#13

昼間はプライヴェートレッスンに学科的な授業。おまけの語学から音楽史まで。学士を取れと父から言われてしまった以上、勉強も止めるわけには行かなかった。

それに、ブライアンに睨まれながらの学内バンドのトラ。どうしても現代曲をやるとなればパワーも必要だ。一樹のハイノートは重宝された。

夜は週二でライブハウスの生演奏。平日で殆どが日本人の観光客で占められる。いやそこには他のアジアも多く含まれているかも知れない。

マリコの名を出さなくたって、一目で日本人とわかる一樹が出て行けば歓声上がる。救いは、日本での活躍を知る者などがパックスアーのオプションについたライブハウス巡りなんかに参加してないことだけ。

リズム隊は若く、最初はもちろん好戦的だった。しかし一樹は音でねじ伏せた。ここではいいプレイをするものが勝ちだ。なんてシンブルでなんて生きやすい。余計な名前も要らないカズとして、彼はボストンの夜に二ステージをこなし続けた。

身体はへとへとで家に帰れば倒れこむ。けれど頭の中を音楽が鳴り続けている状態。全く神経は高ぶったままで休まらない。これはきつと、ライブというものを体感した者だけが知る独特の感覚だろう。

スタンダードな曲がエンドレスで流れ続ける。それも一樹にしか聴こえない音で。ちゃんとした構成があるわけではないから、ドラムがピアノが…ベースが引っかけを入れてくれなきゃ終われない。

深くため息をついた一樹の視界が、携帯の点滅した明かりを捉える。メール…か。

『聡子です。今日から真理子は演奏会の為に渡米しました。私も…』

続きを読もうとしたまま、彼はつかの間の睡魔に引きずり込まれていた。

「いてっ」

反射的に左腕を押さえる。昨夜着替えもせずに眠ってしまったせいだろう。身体の節々が痛む。日本から処方された薬はストックも切れ、調子がいいからと放置状態。帰国したら大河原に散々叱られることだろう。

…いいかい？向こうに着いたらすぐさま、この紹介状を持って病院に…

その病院が、めちゃくちゃ敷居が高いんじゃない。掛かり方もわからなければシステムも知らない。医療費がえらくかかるということだ

けは、こちらの留学生はみな口にする。第一、その暇さえ作れない。再発なんかしない。したらしたで、覚悟を決めてやるさ。

頭ではそんな風に思えても、いつしか澱のようにたまってゆく不安。それが無意識に一樹を現地の病院から遠ざけていたのかも知れない。やれるうちにいくらでも吹きたい。偽らない彼の想い。けれどウォーリーズに着く頃には、彼の腕もかなり限界に近いほど疲労していた。

「何？ 腱鞘炎？」

すっかり仲良くなったピアノのシンシアが、気さくに声を掛ける。本当だったら深刻な話だ、バーカ。すかさずドラムのザックが突っ込む。サイモンは無言。だいたいベーシストは寡黙か呆れるほど饒舌かと相場は決まっている。

「肘も腱鞘炎になるの？」

この頃は日常会話にもさほど困らなくなった一樹は、苦笑いしながら腕を抱えていた。

「あつたりまえじゃない！ まあ、アタシは肘打ちしないけど」

ここのピアノでフリー・ジャズは止めてくれ。後ろの方からオーナのフィリスの声が響く。

「顔色が悪いな。ちゃんと食っているのか？」

父親ほども歳の離れたオーナーは、心配そうに一樹へと声を掛ける。

「酒かタバコか女か。どれか止めれば元気になるんじゃない？」

メンバーの戯れ言に、そんなんじゃないやねえよ、と言い返す。全くの禁欲生活だったの？あれだけ飲むくせに？シンシアの追求は止まらない。まあどれも程ほどにね。一樹も笑って答える。

「今日はシンシアのオリジナルを聴かせてくれるんだっただろう？」

その言葉に彼女は慌てて自作曲のパート譜を配り出す。書いてあるのはもちろんテーマのみ。しかしこのテーマがまた、凝りに凝っている。

「げー。なんだこの真っ黒な譜面はよ。だからキーボーティストの書く曲は嫌いなんだよ」

ザックは、わざわざサイモンの分をのぞき込みながら文句を並べた。あんたは叩くだけでしょ！？シンシアが騒ぐ。

「へ：え。かっこいいな、このメロ」

一樹は音を追いつながら思わず呟いた。でしよう？彼女の満面の笑み。

「曲の題名は？」

……live for the moment……

「…今を、生きる？」

シンシアが指さした先には、そこだけ手書きの曲名が書かれていた。刹那的なのか、それとも今この瞬間を大事に生きろなのか。

「意味深でしょ？ どう取ってもらってもいいわ」

不協和な#13が含まれたコードで始まったその曲は、確かに音を追うだけでも大変な数の音符と変則的なリズムに手こずらされた。しかし、一樹の正確なトランペットがそれをリードする。誰もが全くの初見。そんなのいつものことだ。

六十小節を超える長いテーマのあと、ラッパがソロを取ろうとした瞬間、一樹は愛用のバックを口元から離してしまった。左手にはプロテクターがくりつけられてある。手を離しても楽器は落ちないが、彼はそのまま左の肘を押さえて苦痛に顔をしかめた。

音が止まる。

誰もが声を掛けるのさえためられた。が、しばらく荒い息を繰り返していた一樹は、顔を上げると「ごめん、もう一回！」と苦笑いした。

「ふざけんなー！！このめんどくさいテーマを二度もやれつつうんかよ！？」

声を上げたのはまたもやザック。シンシアは懲りずに、あんたは関係ないでしょう！？と怒鳴った。

『live for the moment』

その言葉の響きが気に入って、一樹は大学構内でも思わず呟いていた。

今が生きられればいい。その先を考えれば考えるほど、足元に深い闇が広がる。それよりも今、この音が出せればいい。

刹那的に…それでもいい。

ふと、読みかけてそのままにしてあった聡子のメールを思い出す。このシチュエーションで思い出すか、普通？自分でも感じる苦い味。

一度開いてしまったので、他の友人らの英文メールに押されて埋もれてしまっている。律儀にフォルダ分けなどしていないから、全部メインに突っ込んだまま。

ようやく日本語の文字を探し出して先を急ぐ。姉ちゃんが渡米、最初はニューヨークでの演奏会、か。ヨーロッパを回り…ボストンへ！？

「日程が合えば、私も休暇を取って真理子と合流したいと思っています。一樹くんの予定を教えてくださいね」

大げさでなく血の気が引いた。こんな大事なメールを放置……。おれ
ってどこまで。あちゃあ。

それでも催促一つ寄越さない聡子に、申し訳なさと後悔と、少しばかりの距離を感じた。身勝手な言い分なんだとは十分わかってはい
たけれど。

時差がどうだろうと直電をくれたっていいのに。一樹の着信音はメ
イナード・ファーガソン。特段ファンというわけじゃなく、他の奴
にノリで入れられた。授業中に鳴りでもしたらつまみ出されるから、
いつだってバイブにしてあるのに。

こちらから掛けようとして、それこそ日本が深夜だということに思
い至った。せっかく日本へと出向いて、自分の口から仕事が決まっ
たことを伝えようと思ったのに。いや、かえってステージを見て貰
えるかも。

本来なら高揚するはずの気持ちだが、少しずつ萎えてくる。逢いた
いのか逢いたくないのか。もちろん逢いたい。彼女の顔を見てほっ
として癒されたい。寄りかかりたい。人にはとても言えないけれど、
そっと甘えたい。嘘ではないのに気が重かった。

午後のロマーノ先生のレッスンに備えて、少しは何か食っておかな
くちゃ。食い過ぎたら音など出ない。その辺の見極めもラッパ吹き
なら自然に備わっている。

けれど、一樹はもう何も口にしたくなかった。せめて水だけでも。
それすらもうつとらしい。

いくら若くても、連日のレッスンとステージが疲れをためていたの
か。だったらなおさら体力をつける為にも、しっかりと栄養を取ら

なくちゃな。

聡子に逢う前に、もっと自分の足で立っている自信をつけたかった。もっと…もっと。半ば癖になったかのように一樹は左腕の肘を抱え込むと、構内のベンチに座り込んだ。

ロマーノ先生の課題はいつもシンプルだ。そりゃそうだ。このクラスだけはテストアウトを認めてくれない。一樹は最近ではめったに吹かないスタンダードを前に、指慣らしを始めた。

「モリタート」あるいは「マック・ザ・ナイフ」の名の方が有名かも知れない。元々はドイツのミュージカル曲であったというその曲は、エラ・フィッツジェラルドの明るい歌声がよく似合う。

メロディは単純。進行も易しい。それをどれだけ丁寧に吹けるか。講師であるロマーノはいつも何も言わずに、穏やかに一樹の演奏を見つめている。時間に追われずゆっくりと一音ずつを確かめながら吹くことの、贅沢さ。

それは一樹にも十分わかっていた。この時の大切さをも。でもだからこそ、live for the momentに惹かれるのかも知れない。

めったに時間に遅れないロマーノは、まだ姿を見せなかった。一度マウスピースから唇を離し、一樹はたっぷりと息を吸い込もうとした。

「!？」

最初、何が起きたのか。本人でさえわからなかった。息ができない。時が凍り付き、身動きが取れない。

次の瞬間、彼の銀色のトランペットは床に落ち、酷く音を立てた。思わず一樹がプロテクターをむしり取ったからだ。

そのまま肘を押さえて…うずくまる程度では済まなかった。呼吸さえコントロールできないほどの痛みに襲われて、彼は床に崩れ落ちた。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

お馬鹿さん　How Insensitive

#14

遠くで聞こえるのは、ロマーノの低く柔らかな声。普段感情をあらげたりは決してしない彼が、大声で一樹の名を呼ぶ。

：わからないよ、何て言ってるのかなんて。誰か助けて、痛い。痛い！：

小さな子どもが転んだ怪我をかばうように、一樹は身体を丸めてうずくまるばかり。声さえも出ない。自分の身に何が起こったのかさえも全く理解できないままで。

病院へ連れて行こう、という言葉をややく捉えた彼は、「……ケース……」という単語をややく口にした。

「どうしたんだ、カズ！ケース？ケースが何だ！！」

足音が増える。これ以上ことを大きくしたくなんかない。たいしたことじゃないのに、いつものことなのに、すぐ治まるから放って置いてくれ！

しかし、一樹のボキャブラリーでは到底そこまで言うことはできず、必死の思いで彼は目をうつすらと開けた。額に冷や汗をかいていることに、それまで自分でも気づいてなかった。

それほどの痛み。今までの鈍い重たさとは全く違う、刺すような。

「in my trumpet case : 『Medical History of me』！」

知っている英単語を並べる。ああそうだ、主治医の大河原はこう言
ってたんだ。『これが君の治療歴になるから、新しい病院に持って
行くんだよ』と。

新しい病院。あまりぱっとしないはずの大河原でさえ留学していた
ことがあるという、バークリーから一番近い専門科を擁する病院の
＜ボストン総合病院・BGH＞。

もしこの痛みがおれから音楽を取り上げてしまうものならば……。そ
れに怯え、どうしても踏み出すことのできなかつた治療の継続。走
りきれものなら、逃げ切れるのなら、頼むから見逃してくれ！

長身の彼を抱き上げる力強い誰かの腕。わずかな振動でも響く刺激
に、一樹は唇を噛みしめた。とにかく救急へ運ぼうという途切れ途
切れの会話が耳に入る。

ここから救急車を呼ぶより、誰かの車で運んだ方がよっぽど早い。

イヤだ、イヤだ！病院なんか嫌いだ！！

それでも同じ見も知らぬ場所に連れて行かれるのなら、少しでも大
河原の用意してくれたこの書類が通じるところの方がいい。

これまで繰り返された負担の大きな検査を、こんなところに来てま
で受けたくなんかない。

乗り降りのたびに激痛が走るくらいならと、ふらつく足で立ち上が
る。否応なしに病院の救急室へと連れて行かれると、驚くほどの患
者たちがそこにはいた。

咳の音とひっきりなしのしゃべり声。どこが救急？一樹の朦朧とした意識でさえも疑問に思うほどの軽症者たち。

近づいてきた受付の女性は、ともかく列の一番後ろに並ぶよう指示してきた。

「冗談じゃない！彼のこの様子が見えないのか！？」

さすがの温厚なロマーノも声を荒げる。

「みな同じ条件で来ているんだから。とにかく順番を待って、それからドクターの診療の指示に従って」

「酷く痛がっているんだ！！すぐに診てくれないか！？」

付き添ってくれた事務員も食ってかかるように彼女に迫る。

「だから、言ったようにドクターに訊いてみないと。それとも、専門科の予約を今から取る？空気があればその方が早いかな…」

そんな呑気な！！誰もが悔しさに唇を噛む。彼らはアメリカ人であり、病院のシステムはわかりすぎるほどわかっているというのに。

簡単に言えば、かかりつけ医に予約を入れるか今日のように救急に飛び込むか。救急は予約がなくても診察を断ることができない為、本当に急病の人以外にもかかりつけ医を持ってない階層の人たちも利用することが多い。

重症でないと受付で判断されれば、何時間待たされることか。痛みだけを訴えている一樹のような場合、そして…アジアの青年で

あるという見た目で後回しにされるのであれば。

彼は思いきって拙い英語で訴えた。痛みが酷いこと、手元には「病歴証明書」があるから医師に診せて欲しいことを。

「わかったわ。あとでドクターに渡しておくから」

受付のくだんの女性が、書類をひよいと取り上げてさらりとかわそうとした。

待ってくれ！そこには大事なことがたくさん書かれているんだ！もし…もしこの痛みが再発によるものだったら。治療の遅れが、二度と吹けなくなることにつながりでもしたら！

今まで怖さのあまり、病院に足を向けることもできなかった自分を責めつつ、一樹は精いっぱい声を張り上げた。

「今開けてくれ！内容を確認して、今すぐに医師に伝えてくれ！！あなた自身がこの場で！！」

ふらりと傾ぐ身体を、ロマーノが支える。

ああそうさ、ここはアメリカ。希望を通したければ自らが強く主張しなければならないんだ。

患者本人の剣幕にたじろいだ女性は、それほど言うのならとしぶしぶ封を開ける。医療スタッフとはいえ、専門医でも何でもない彼女でさえ、tumor（腫瘍）operations（手術）recurrence（再発）と並ぶ単語に顔色を変えた。

現金なもので、すぐにストレッチャーが用意され、処置室へと運ばれる。並び疲れた大勢の患者たちの脇を通り抜けるようにして。一樹はもう何も考えることなくできず、左肘を押さえて堅く目をつぶった。頼む、頼むからもう一度吹かせてくれ！これでバッド・エンドだなんてかんべんしてくれ！

付き添ってくれたロマーノらと離され、一樹はひとり、救急処置室へと運び込まれた。大嫌いな病院。消毒液のにおいと慌ただしい足音。何一つわからない難しい単語が飛び交う会話。こんなところはイヤだ！！

聴覚だけが鋭敏に周りの音を拾いまくる。これほど痛いのならいっそのこと意識さえも失えてしまえばいいのに。

荒い息を繰り返す一樹の腕を、不意にスタッフはぐいと広げようとした。我慢しきれず日本語で叫んでしまう。

「痛い！！触るな！！おれに触るな！！」

早口でまくし立てる治療者らに、一樹は「don't touch me!」と怒鳴り直す。

医者が何をしたいのかわからない！何を言ってるか聞き取れない！助けて！！助けて！！誰か！！

「いい加減にして！！あんた男でしようが。そのくらい我慢しなさいよ！？」

日本語？驚いて口をつぐんだ一樹の腕が、再びぐっと引っ張られる。

「あうっ！」

「CTでも撮って診なきや、どんな状態かわからないでしょう？遠慮なく撮らせてもらうわよ！！そこで痛いでも何でも叫んでなさい。大の男が泣いたって誰にも言いやしないから！！」

やっとの事で目を開けた一樹が見たのは、一人の小柄な日本人女性だった。髪をベリーショートに刈り上げ、金髪に近い色で染めている。しかし、そのはつきりとした日本語の発音と意志の強い焦げ茶色の瞳が、彼女の国籍を物語っていた。

半袖の白衣姿。医師なんだろうか。まだとても若いように見えるけれど…。

その先を深く考える余裕もなく、一樹の服の袖はまくり上げられた。引っかかりのある部分ははさみで遠慮なく切り取られ、片腕が晒される。治療と検査の跡と、無数の注射痕。国内で仕事をしていたときには、薬物に手を染めたのかと間違えられたこともあるほど。

それは彼が闘い続け、生き抜いてきたあかしであると同時に、苦しんできた年月の長さを物語っていた。

だが、救急救命の現場で働く医師らには、ある意味見慣れたものであるのかも知れない。

無意識に暴れる一樹を押さえ、機械をセッティングする。容赦などない。

にじんでくる涙など、意地でもこの若い女に見せたくはなかった。歯を噛みしめる一樹に、撮影が終わったからと点滴の針が刺される。

痛みは治まるどころか酷さを増すばかり。

「ごめんねえ。きちんとした診断が下るまでは鎮痛剤も打てなくてさばさばとした口調で、さっきの女医師が話しかける。このまま整形に運ぶから。そんな声も聞こえる。

皮肉にも検査を終えた安堵感からか、一樹の意識は遠のいていった。

「骨折！？んな訳ないだろ？」

老練な医師の英語を隣で訳しながら一樹に伝えていた女性は、その言葉に彼をギロツと睨んだ。

「何よ？あたしの通訳があてにならないとでも言うわけ！？ケンカ売る気じゃないでしょうね！」

痛み止めが効いてきたのか、ようやく声が出せるようになった一樹は、負けん気を發揮して彼女を睨み返した。

「言っておきますけどね、付き添いのお偉いさん方には帰っていただいたから。ここであたしの言うことを聞いておかないと、BGH特有の早口英語でまくし立てられて終わりですからね！！」

「帰ったって、何でだよ！？」

入院だからに決まってるでしょう！？でかい声の応酬に、物静かな

初老の医師は苦笑いを見せた。

「日本人はしとやかと聞いていたが。リカだけが特別というわけでもなさそうだね」

それくらいの英語は聞き取れる。一樹はむっとした顔をかえし、リカと呼ばれた女はバツが悪そうに黙った。

「君の担当は、このレジエントが行うから。同じ日本人の方が何かと安心だろう、君も」

「レジエント？」

聞き慣れない言葉に、思わず同じように繰り返す。研修医ってことよ、女はささやく。それからおもむろに居住まいを正すと、彼女は少々威厳ありげな声で名乗った。

「BGH（ボストン総合病院）整形外科研修医の新堂梨香です。よろしくね、高橋さん」

「こっちの人？」

現地で女だてらにこれだけ大きな病院に勤めているというのか。驚いた顔の一樹に「貧乏留学生よ、あんたと同じで」と小声でさらに睨まれた。

「ただしこっちは日本の病院から派遣されてる身で、呑気な学生とは訳が違うけど。東京に旦那と最愛の可愛い息子を残してきてるんだから。日本に帰ったら本気で働かなきゃ」

「子どもを残して？」

ほんの一瞬、一樹に苦い思いが通り過ぎる。ああ、でも彼女みたいな医師にはきっと必要なだろう。無言でさらに睨み返され、言葉を失う。

そんなことより……。

「ねえ、さっき確か骨折って言ったよね？おれ、どこにもぶつけたりしてないし転んでもないし」

再発なのか、とても訊くことなんかできない。一気に不安げな表情に戻った一樹に、梨香はCTのデータを指し示した。

「まあ、早い話が疲労骨折ってヤツよ」

よほど彼がげんそうな顔をしたのだろう。梨香は少しだけ苦笑すると、骨がスカスカだったってこと、と付け加えた。

「多発性の小さな腫瘍が見られたわ。そのせいでもろくなった骨が折れたんでしょう。何でもっと早く受診しなかったの？」

責める口調ではなかった。彼女の視線が、大河原の作った病歴証明書に向けられている。

それって……。言いかけて唇を噛みしめる一樹の心情を察したのか、検査してみなきゃたちのいいものかどうか何てわかんないわよ、とわざと乱暴に彼女は言い返した。

少しばかり和らいだ瞳で。

「いつ退院できるの？いつ治るの？ねえ、ラッパは吹いていいんでしょう？」

「ラッパ？」

トランペット専攻なんだ、バークリーの。一樹が呟く。

「骨折れてるのに、吹けるとでも思ってるの？」

「右手は何ともない！！」

あんだねえ！！再び声を大きくし始めた二人に、おそらく指導医と思われる先輩医師は笑いながら仲裁に入った。

「まあ、今夜は取り敢えず宿泊していつてはくれませんか。お客様。こちらのサーヴィスはボストンでもなかなかのものと評判でしてねえ」

彼の発言に、周りの看護師たちはくすくす笑い出し、二人の日本人は…決まり悪げに顔を赤らめた。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

煙が目にしみる Smoke Gets in Your Eyes

#15

病院の白い天井はどこも同じ。リネンの感触も堅いベッドも。

二度と来たくなどないといくら願っても、罰ゲームのようにスタート地点に戻される。耐えがたい痛みに眠りを遮られた一樹は、顔をしかめて無意識にナースコールを押そうとした。

…ああ、ここは日本じゃないんだ。どこに何があるかなんてわからない…

本当に一人だという孤独感に潰されてしまいそう、そんなことを言える歳じゃない。精いっぱい強がろうとしてもこみ上げる思い。

もし、もう二度と吹けないとしたら。

骨折痛の緩和にと打たれた鎮痛剤は、とうの前に切れてしまっていた。このまま朝まで、言葉も通じない、誰も知らない部屋で苦しんでなきゃいけないのか。

左の腕などもぎ取ってしまいたい衝動に駆られ、点滴の刺さった右側を動かそうとする。

そのとき初めて一樹は、自分の手を握りしめるぬくもりに気づいた。目だけでそちらを見やる。視界に入ったのは不自然に染められた金髪のベリーショート。

たしか、梨香…と。ああ名字は何だったっけ。研修医って言った。

処置室でおれを怒鳴りつけた女。
泣いたって誰にも言いやしないわよ、と。

研修医だったって医者なんだろう？患者のベッド脇でこんな無防備に寝顔なんか見せていいのかよ。

梨香という名の若い女医は、一樹の右手をしっかりと握ったまま、かすかな寝息を立てていた。目鼻立ちのはっきりとした意志の強そうな顔立ち。濃く引かれたアイラインと際だった眉。女性一人で留学するというのはどれだけの意志を持たないとやっていけないものなんだろうか。

家族を残して……。

わずかなあいだ痛みも忘れ、一樹は彼女を見つめ続けていた。触れ合っている手が熱を帯びている。それは疾患から来る病的な熱とは別の、もっとふわりとした温かさ。

もしかしたらおれは本当に泣いていたのかも知れない。放っては置けないと彼女が付き添ってくれたというのだろうか。やっと浮かべられた一樹の笑み。いやどちらかというと苦笑い。

おれを自分の息子とでも思ってるんだろう。図体ばかりでかい子どもとしてしか扱おうとしなかった、あの人のように。

握りしめられた手を、握り返す。母にこんな風に看病してもらえたことなんかあったかどうか。

はっとしたように彼女が顔を上げ、目の合った一樹を見て複雑そうな表情を浮かべた。

「あの医者が言ってた、サーヴィスの良さって本当だったんだ」

痛みをこらえるからどうしても声が掠れる。それでもいつもの一樹に戻ってふざけたようなものの言い方。案の定、彼女は上目遣いにギロツと睨んで見せた。

「あんたねえ！人がせつかく夜勤もあけて帰ろうってときに通りかかっちゃったもんだから！」

「……ありがとう」

真っ直ぐな一樹の声に、とまどうような彼女の顔。強気を通してきただ中にかいま見える優しさ。

「おれさ、泣いてた？」

一樹の問いに首を振る。泣いてないけど、まあこれだけ英語の通じない留学生を見たのも久しぶりだなあって心配になったのよ。どっちかって言うのと呆れたって感じ？

持ち上げられた眉が一樹を見下す。むかつとして何か言い返そうとした彼に、痛みがズキンと走る。

「追加の鎮痛剤を用意するから」

「いいよ！このくらい慣れてる！！」

強情にも言い張った。バカね、痛みは我慢するものじゃないのよ…この国の治療はね。少しだけ醒めたような言い方。ネームプレートにはR・SHINDOの文字。ああそうだった、新堂梨香だ。この女ってたしか。

「痛みに慣れたなんて、悲しいこと言わないでよ」

ほんの小さな呟きは、どんな音でも拾う今の一樹の耳にはしっかりと届いた。そのあとの罵声ももちろんだけれど。

「あのねえ！！あんたがさっさと寝てくれないと、あたしは不眠不休記録を更新しちゃうでしょう！？それでなくたってここでさんざんこき使われてるんだから！！」

「はん、下っ端は辛いねえ」

鎮痛剤を筋注（筋肉注射）にしてやる！！それも特大の針にしてやるから覚悟しときな！！彼女の声に肩をすくめようとして、一樹は激痛でうめいた。自分でもバカじゃないだろうかと。

あの手の温もりがあったからこそ、少しでも休めたんだろう。治療の合間にいつも感じるのは、酷い苦痛と他人が差し伸べるさりげない優しさ。

彼女の足音が聞こえなくなるほど遠ざかって、また自分のところへと戻ってくるだろう。この辛さを少しでも癒してくれる為に。仕事とはいえ、赤の他人が想いを掛けてくれることへの安堵感に包まれ、一樹はそっと目を閉じた。

今のところ良性だろうと言われている、多発性の小さな腫瘍。それ

らは骨の内部にできるから、表面に穴を開けて掻き出すという作業を何度も行う。どんなに小さな傷口だろうが骨に傷をつけるわけだから、実際には骨折と同じだと説明を受けた。もともと骨組織ができているはずの場所が他のものに置き換わってしまつて、ちよつとした負担で骨が折れる。異物であるはずの腫瘍を取り除き、人工骨や自家骨を注入する。

気が遠くなるほどの痛みを、一樹は黙って耐え続けた。簡易手術が終わらなければ患部の固定もできない。逆に：固定してもらえさえすれば。

発熱の続くふらふらの状態で、それでも彼は治療が終わるとすぐに帰ると言い出した。もとよりアメリカの病院では長居はできない。それは患者の為と言うよりも…。

「これが一応ここまでの請求書。正式なものは後日郵送されてくるからそのときに手続きして。保険会社との交渉は自分でやってよ？ お大事に」

本来、研修医とは言え医者である彼女の役目でもないだろうに、梨香は数枚に渡る書類を一樹の前でひらつかせた。

「暇なんだな、あんた。医者のかせに」

むつとしてその書類をひったくろうとした一樹は、思い切り顔をしかめた。痛いだのなんだの、この女の前では二度と言うもんか。

その様子を含み笑いで見ていた梨香は、クリアファイルごと彼の手にそれを持たせる。

「痛みなんか、その金額見たら引っ込むから安心して」

いちいち言動がむかつくったら！薄い唇を噛み、梨香を睨みつけてから書類に目を落とす。さあつと血の気が引く、とはこういうときに言うのかも知れない。一樹は息を飲んだ。

「なん…だよこの金額！？どっかに小数点があるのか？どの桁から読めばいいんだよ！？」

もらった書類を斜めにしても透かしても、書き込みである費用は八千五百ドル。どこからどう読んでもそうにしか見えない。今なら日本円にして七十万円以上はするだろう。

「待てよ！病室にいさせてもらったのもたったの二日だろ！？」

「あー、それ手術費用入ってないから。後できっちり追加の請求行くとと思うけど？」

払えるわけが…。言いかけて一樹は口をつぐんだ。文句を言うのはあたしにじゃないでしょう？とばかりに梨香が冷ややかに睨み返したからだ。

「だから、保険会社との交渉は自分でって」

保険なんか入れるわけがない。再発の可能性を常に持つ、これだけのハイリスクな患者が入るとすれば、その保険料だってバカにはできない。日本ならまず断られる。収入も安定しない自由業、クレジットカードだって作るのに苦労したくらいなのに。

「まさか、入ってないなんて言うんじゃないでしょうねえ!？」

「病人相手に怒鳴るなよ!! こっちの生活が落ち着いてからちゃんと入ろうと思ったんだ!!」

声を出すだけで傷に障る。ウォーリーズの仕事を切られないように、シンシアたちのバンドにはトラを雇った。もちろんギャラは一樹持ちだ。その支払いと生活費と、学費の残りを計算してあと払えるとしたら……。頭を抱えたくてもこの腕じゃ無理。はあああ、とため息しか出てこない。

日本に残してきた少しばかりの蓄えを、事務所経由で送ってもらうか。そこだって経営は厳しいから、三年近くは継続した仕事を入れないつもりの一樹に、余分な金は出してはくれないだろう。彼名義のグループがあるわけでもないから、印税なんてないし。

文字通り青くなって考え込む一樹に、梨香はさらりとうこう口にした。

「お姉さんをお願いすればいいじゃない。自費で治療費払うくらい何てことないでしょう?」

一樹の表情が凍る。なぜここでいきなり、姉の名が出てくるんだろう? 梨香が視線を外に向ける。

「マリコタカハシのポストン公演。ここの病棟にもポスターが貼ってあるわよ。来るんでしょう? もうすぐ」

高橋なんて名字、ありふれてるだろう!? なぜ……。彼の声は震えていたかも知れない。まさか、もう連絡が行っていたりでもしたら。

「そうねえ、緊急連絡先が彼女になっていたから。支払いが滞れば

ポストンで一番愛されている日本人の一人、マリコに病院から直接……」

「必ず自分で払う！！だから絶対に言わないでくれよ！！」

みんな知ってるとでも言うのか？マリコの弟だとわかって治療していたとでも。泣き出しそうな顔をしていたのかも知れない。ふらつく一樹を、思いのほか優しくに梨香は支えた。

「姉弟なんでしょう？素直に頼ればいいのに。それが……家族じゃないの？」

家族なんかじゃない、そう言ってしまいそうで唇を噛む。家族だから……だから何だ。過ごせなかった時間と寄り添えなかった心は、もう元には戻らない。いくら姉が今さら家族ごっこをしないと必死になろうとも。

「これ以上、借りを作りたくないんだ」

呟く一樹に、梨香は微かに笑った。ちっちゃいプライド、と。頬がかつと熱くなる。

「何も知らないくせに！！」

「知るわけがないわ。有名ご一家のお家事情なんて。ただ、病院は慈善事業とは違うから、払うものはどこからでもいいから払ってもらう、それだけよ」

「……だったら、放って置いてくれれば良かったんだ！治療なんかしないで、転がってるおれをそのまま見下してれば良かっただろう！

「？」

冷ややかな梨香の視線。怒りをこらえたかのように静かに諭す。

「こちらに来てすぐに専門医にかかること。そう言われてきたんでしよう、違う？ここまで酷くなるほど放って置いたのはあなた自身。自己管理もできないくせに威張るんじゃないわよ。自分の身は自分で守る、それができない人がアメリカで暮らせると思ってるの？日本じゃないのよここは」

うつむいた一樹がそっと何かを呟く。自由の利く右手でそっとまぶたを押さえるフリをした。それは、にじむ涙を隠す為に。

「聞こえないわよ。はっきり言ったら？男でしょう!？」

苛立つように梨香は言葉を叩きつけた。それは家族を置いて一人異国で働く彼女の不安を、一樹へと代わりにぶつけるかのように。

「……怖かったんだ」

「えっ!？」

「今度こそ本当に、おれからラッパが取り上げられるんじゃないかって。もう二度と吹けないんじゃないかって、怖くなったんだ!！」

顔を上げた一樹の頬に光るもの。泣くまいとこらえていたのに。不意に彼は、腕を伸ばした梨香から頭を引き寄せられ、ぐいと抱きしめられていた。

(つづく)

北川 圭 Copy right? 2009-2010
i t a g a w a A l l R i g h t s R e s e r v e d k e i k

とり残されて 〈Left Alone〉

#16

「…何…同情…？」

呟く声は小柄な彼女の肩に顔を伏せ、齒を食いしぼる一樹からのさやかな抵抗。しばらく無言で長身の彼を抱え込むようにしていた梨香は、傷に障らないように頬をつけた。

「大の男が…泣いたって…誰にも…言いやしない…から」

処置室とは違う、小さなささやき。それは切なげに、何かをこらえるかのように。

いくらでも見てきた、辛い症状を抱える患者なんて。誰にでも同情心を掛けていたら仕事なんてできない。ある程度、いいえ、ほとんどの気持ちを割り切って冷酷と思われようが必要な処置をしなきゃならないときばかりよ。

一樹にしか聞こえないほどのウイスパーパーボイス。梨香の言葉は続く。

「誰にだって深い事情はあるわ。医者がそれをいちいち気にはしてられない。信仰のある国だから、同情じゃなく隣人を思いやる気持ち強い。でもそれは、子を思う親の気持ちとは違うから。家族とは…違うから」

家族に思いを寄せてもらったことなんかない。姉はたぶん、クラスメイトが苦しんでも同じ態度で接するだろう。関わり合ったオケの団員が泣いていれば、心から親身になるだろう。そういうヤツ

なんだ。おれが弟だから、じゃない。

「…おれだって、あんたのことなんか何も知らない。会ってたった三日？それとも今日で四日？おれを、息子か何かと間違えてるんじゃないね？」

医者患者のプライバシーになんか興味ねえんだろ？あっても困るけど。こんなときにでさえ一樹の強がりと悪態は止まらない。

「これほどバカでかい図体の息子がいてたまるかってのよ。うちの可愛いチビタンはまだ四歳なんだから」

はん、四歳児並に扱われてるわけ？おれ。苦い笑いと止まらない涙。口調とは裏腹に、自由の利く右腕を梨香の肩に回し、一樹はそれでも嗚咽をこらえていた。

「逃げてきたのよ、あたしも。現実から。四歳の息子から」

意味を図りかねて、一樹は赤い目のまま梨香を見やった。ふっと自嘲気味に笑う彼女は、もうそれ以上何も言わずに栗色の髪を優しくさするばかり。

「どんな理由があろうとも、今はちゃんと家族に頼りなさいな。きちんとした保険に入るにしても、あなたの英語力じゃ心許ないし。ある程度まとまったお金は必要なんだから、その程度の請求書で青

くなってるんじゃないとでも無理。でなければ…」

でなければ？ただ、彼女の言葉を繰り返す。

「日本に帰りなさいよ」

冷たい宣告。ある意味、至極まっとうなアドバイスなんだろう。それでも一樹は首を振った。

「日本には帰らない。家族にも頼らない」

「あなたねえ！！現実を見なさいよ！？」

やっと自由になれたんだ。自分の足で立てたんだ。それがどれだけままごとのように見えようとも、実際には親の庇護の元で自立ごっこを繰り返しているだけにしか思えなくても、おれには大切なことなんだ。

自分で生きる。

たったそれだけのことが、どうしてこんなに難しいんだろう。

「とにかく、通院をさぼったら許さないわよ。検査の結果次第では即再入院もあり得るんだから」

再発の可能性。一番見たくはなかった現実。一樹の心の一部が確実に凍り付いている。

「必要があればあなたがどれだけ嫌がろうとも、ご実家に連絡させてもらうから。いいわね？」

事務のお姉さんみたいだ、それが下っ端医者 of やる仕事な訳？口元を歪めた一樹に、梨香はいつもの強い意志を感じさせる目で睨みつけた。

「そういう偉そうな口はね！もうちょっとマシな英語が話せるようになってからにきなさいよ！？」

言っているそばから梨香の携帯が震え出す。今まで何度も無視を決め込んでいた呼び出しコール。

さすがに電話に出た彼女は早口の英語で応酬と言うよりも怒鳴り合いをしたあげく、一樹に「約束破るんじゃないわよ！！」と言い残し、走って病棟へと戻っていった。その後ろ姿を目で追う。無意識に。

おせっかいな女。

彼女の目はおれなんか見てない。向こう側にいる、たぶん自分の息子を見ているのだろう。梨香がどんな理由で「逃げてきた」と口にしたのか。知りたいとも思わなかった。

贖罪って言うんだっけ。おれは彼女の罪の意識を一瞬でも軽くする為に使われた。そう思いこもうとした。通りすがりの、使いつ走りの担当医。

実務的に連絡を取らなくてはならない相手は多い。まず、さんざん心配を掛けたであろうロマーノに。そして大学に。ウォーリーズには次のステージから復帰すると言っておかないと。どんな痛みがあっても、仕事は続けてみせる。やっと勝ち得た自分の立ち位置なのだから。

そして、もっと現実的な治療費の工面。

これ以上、姉に言えるはずもなかった。病気は決して完治したのではないということ。両親に知られば、強引に連れ戻されるだろう。こんな時ばかりいっぱしの親の顔をして。

熱で朦朧とした意識を何とか保とうと、一樹は努力した。この国で一人で生きて行くにはそうそう倒れてなんかいられない。

彼は携帯のアドレスを開け、片っ端から連絡を取り始めた。

「cash advance?今の時代にさすがにそれはないね」

ギプスで固められた一樹の左腕を痛々しげに見つつ、オーナーのフェイスは苦笑した。

『上海バンスキング』という有名な舞台があるほど、バンドマンと現金前貸しとは縁が深い。アドバンス、つまりギャラを先にもらうことだ。バンスキングとは借金王とも言えいいのか。

バンスなど今のミュージシャンの中では知らない若者もいるくらい

だが、きちんとした長期契約という形を取ればまとまった金額がもらえるのではないか。一樹なりに必死に考えた策はあっさりと却下された。

「それよりも、当面はステージどころじゃないだろう。その腕で演奏は無理だ」

「今夜から戻ります。トラのエディとは話が済んでいます。ですから今回の治療費を一括で支払う分だけでも」

食い下がる一樹に、無茶を言うなどオーナーが戒める。

「もう大丈夫です！演奏の質は落したりしない。今までもずっと、片腕でやってきたようなものなんだから！」

ふう。大きなため息をつく、フィリスは孫にでも諭すかのように優しい目を向けた。

「で、いくら必要なのだね？」

一万ドルもあれば…。ためらいがちに口にする一樹に、首を横にふる。悪いが君はまだ無名の新人だ。日本にいた方が稼げるんじゃないのかい？と。

「金の心配よりも、君の身体をもっと大切にしろ。今の状態で無理をすれば…」

「今ここで吹けなければ、もうおれは吹けなくなる！お願いします。この場所に、ステージにいらしてください！！」

必死に叫ぶ一樹の背中を、シンシアたちがそつとなだめるように触れる。その辺りにしておけ…と。

「治ったらまた、ここに来ればいいじゃない。待ってるから、大丈夫よ」

シンシアが優しげに口にする言葉、そこに何の裏付けもないことは一樹自身が一番よくわかっていた。バンドマンなど掃いて捨てるほどのいる。この間のセツシヨンナイトには、後がまを狙う若者がいくらでも出演していた。空きができれば、次は誰か。一樹が再びここへ戻れる確率など、ただでさえ低いのに。

「治ったら、か。もし治らないとしたら？」

わざと日本語で一樹は呟いた。メンバーたちの戸惑いに彼は、今日のステージで復帰するからと今度は英語ではっきりと告げた。無理して付け足した笑顔を添えて。

リハだリハ！わざと陽気に声を張り上げる。片腕で準備をするなんて慣れている。治療と検査と、何度こんな状態で演奏したことか。さすがに骨折してまで吹いたことはないけれど。

一樹は器用にトランペットの本体へマウスピースを取り付けると、それ自体を左腕に乗せた。傷に当たらないような場所を何とか探す。そうっと息を吹き込むと、当然のように痛みが走る。

「カズ！！止めなさいよ！！」

その声を無視して一度楽器をスタンドに掛けると、彼は銀縁のメガネをサングラスへと代えた。苦痛をこらえる表情など見せられない。おれには時間がないんだ！！わざと速いパッセージ、そしてハイノ

ート。ほら、何ともないとも言いたげに一樹は皆をせき立てる。フィリスと彼の顔を交互に見やっていたメンバーたちは、しぶしぶステージへと上がる。

ここに立てることの重要性を、彼らもまたよく知っているから。一樹の行動を責められないどころか、おそらく自分たちでも同じことをしただろうという思いから。

脚の骨を折ってもティンバレスを叩き続けた奏者もいる。椅子に座りながらシャウトしたボーカルもいる。どれだけ声が出にくいか、歌ったことのある人間ならよくわかる。

それでもなお、ステージに穴を開けるわけには行かないのだ。自分の場所を確立するまでは。

一樹は覚え書きのような譜面を見ることさえせず、次々と曲をこなした。堅く目をつぶり吹くことに集中しなければ、意識さえ危うい。今はただ、一つ一つの仕事をこなすしかない。治療費が工面できなければ家族に知れる。知られたら最後、もうここへは…現役の演奏活動の仕事へは戻れない。父は許さないだろう。

……音楽なぞ今すぐ辞めてしまえ、生活の面倒なら一生見てやると言っておるだろうが……

不器用な父がかいま見せた、孝一郎なりの親としての想い。どこかではわかつてはいた。でもわかりたくはなかった。親としておれを心配する前に、フィールドも格も違うけれど同じ音楽家として理解して欲しかった。できうる限りいつまでも演奏していきたい、という一樹の願いを。

大学は取り敢えず休学届けを出した。出席が足りずに単位が取れなければ、ここに来た意味がない。ロマーノの哀しげな表情が脳裏に浮かぶ。できるだけ君の身体に負担のないように、そうコウイチロウからは言われていたのだが。守りきれずに済まないと思っているよ、と。レヴェル1からのスタートは、そんな意味も込められていたのか。

生き急ぐなという大人たちの隠されたメッセージ。でも今の一樹にとって、それはただの足枷にしか過ぎなかった。

急げ、急げ。できるだけ急いで駆け抜けろ！おれがおれとしていられるうちに！

治療に専念するから家族にだけは知らせないでくれ、とロマーノに頼み込んだ。それ以上彼に甘えるわけには行かない。総額およそ一万ドル。継続して治療を受ければさらに金は掛かる。フィリスの言う通り、一度日本で仕事を取って稼ぐ方がいいのか。今ならまだ受け入れてくれる仕事先は見つかるだろう。でも、自分の実力だけでやっとここまで来たというのに。思いは乱れる。

強い酒と痛み止めで、逆に一樹のテンションは高まっていた。身体へのダメージを考えたら一番最悪な組み合わせなのは重々承知。それでも、盛り上がる演奏に客席は沸いた。

固められた片腕に預けた楽器。がんがんに攻めるハイノート。

これじゃまるで、見せ物。

物珍しさで人々は一樹の演奏に驚嘆するだろう。音なんか聴いちゃいない。それでもいい。

終演後、気力もなくしてテーブルに突っ伏した一樹は、壁に貼られた一枚のフライヤーに目を向けた。トランペットを片手に微笑む黒人。誰だっけこいつ、見覚えがある。

「カズ、今後のことだが…」

そばに近づき口を開きかけたオーナーに、今夜くらいの演奏ができれば満足してもらえるでしょう？と先手を打つ。フィリスが一樹に向ける痛ましげな視線を感じる。同情でも曲芸扱いでも何でもいい、ここにいさせてくれさえすれば。そんな一樹の気持ちをも伝わってはいえるのだろう。オーナーは次の言葉を言い出すことはなかった。

「ねえ、フィリス。あのトランペッターって…」

一樹が見つめる先を追いかけたオーナーは「ああ、エリファレット・ウィリアム・バークレーかい？今じゃ悠々自適な暮らして、時たまここに出演するんだ」とこともなげに応えた。

エリック・W・バークレー！！何で忘れていたんだろう。トラッドなスタイルを崩さない渋い演奏をするミュージシャンで、まだおれが中学生だった頃にジャムズに何度か来たあのジジイだ！悠々自適な生活を送る成功したミュージシャン。彼は十年近くも前に会った日本人のガキを覚えていたのだろうか。

「フィリス様!! オーナー様!! 頼むからエリックの連絡先を教えてください!!」

一樹はあわてて起き上がると、何ごとかと戸惑うフィリスへと詰め寄った。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

縁は異なるもの (What A Difference Day Made

#17

「げほっ、こほ。ボ、ボストンからニューヨークですかあ！？そりゃ飛行機なら一時間だけど…」

心配して様子を見に来てくれた洋輔をとっつかまえ、一樹は理由を伝える間もなく矢継ぎ早に質問攻めをした。なるべく手っ取り早くNYに行きたいんだ！！どうすりゃいいか教えろ！？

「休学してるって聞いたから来てやったのに、何だか元気そうだねえあんた。骨折ったってホント？ステージでこけたとか言ったら笑ってやるから」

髪をてっぺんから散らした例のアジアンスタイルの尚子は、呆れ顔で一樹を睨んだ。

「持病がちよっとだけ悪化したんだよ！」

「骨折が持病って、どんな病気よ？」

うっせえ！！一樹はいつもの調子で怒鳴り返し、あわてて左腕を押さえた。大声を出すことすら傷に響くのだ、現実には…。

「何でまた、急にNYなんですか？友達でもいるとか」

友達だなんてあれだけの有名ミュージシャンつかまえて。こっちは顔を覚えているけれど、向こうは果たして記憶の隅にさえあるかどうか。

黙ってしまった一樹に、尚子はパンフをちらつかせた。

「ほれ！貧乏学生にはこれが一番」

日本語で書かれた案内書には、15ドルの文字。一樹は飛びついた。

「これ何だよ？どこに行けば乗れるんだ！？」

あのさあ、日本語なんだから自分で読め！尚子の冷ややかな声は変わらない。チャイナ・バスも最近は性能が良くなったって話だから。

「チャイナ・バス？」

ボストンとニューヨーク間を、元々は方々のチャイナタウンを結ぶバス路線。ありがとうと珍しく素直に口にした一樹へ、二人は複雑そうな表情を浮かべた。

「ねえ、プライヴェートなことに口を挟むつもりなんかないけど…そんな身体で誰に会いに行くのよ？」

言外に、そんなことをしている暇があるかと言いたいのだろう。尚子の眉が責めるのでもなくひそめられる。

「誰…って、エリック・W・バークレーに」

洋輔と二人は目を見合わせる。今ではもう決して第一線とは言い難

いが、多くの現役から尊敬される有名なトランペッターのエリック。知り合いだというのか。訊きたいことをこらえているような視線に、一樹は一枚の写真を取り出した。肩を組んで撮ってもらった懐かしいフォト。あれから楽器ケースに入れっぱなしにしていた。

「日本で何度か会ったことがある。おれが居候してたライブハウスのマスターとは懇意らしいし、そのあの……仕事でも紹介してもらえないかなってさ」

口ごもるようになってしまったのは、結局やっぱり周りの力がなければ何もできないと言っているような気がしたから。

親の七光りではなく、今度は居候先のマスターであり本当の父親のように慕っている勇次の顔を頼る。それでも門前払いは覚悟の上だ。

おれに本物のジャズを目の前で聴かせてくれた黒人の管楽器奏者。そして……吹き続けよと背中を押してくれた恩人。憶えてなどいないだろう。世界中を旅した彼にとって通りすがりに過ぎないガキなんて。

黙ってしまった一樹に、気休めの言葉を尚子は投げかけた。

「まあ、彼の再婚相手って日本人らしいから。少しは脈があるんじゃない？」

日本人？

「ジュリアードで講師をしているピアニストだとか。まあ、別に名演奏家イコール名指導者じゃないから、教え方が上手い人なのかもね。名前知らないし」

クラシック畑の正規の音楽大学を卒業している尚子ですら知らない、日本人のジュリアード講師。本当におれはエリックのことなどろくに知りもしないで、これから仕事どころか金を貸せとせびりに行くのだ。ほとんど初対面の無名のガキが。

「ほら、今から行けばうまくすれば今日中に着くかもよ！」

苦笑いを交えた尚子の声。今日中？だってまだ日も高いのに、NYなんて地図の上じゃすぐ近くだってのに。

「まあ、頑張れば四時間で行くかも。あ、チャイナ・バスの運転は荒っぽいって評判だから、お気をつけ遊ばせ〜」

手を振る彼女に、一樹は顔を引きつらせた。これから四時間もバスに揺られると？エアラインなら一時間の距離なのに。

ちゃんと金が稼げるミュージシャンになりたい。一樹は心の底からそう思った。

「Please don't talk to me！」

いくらプリーズとつけたところで、文法的に合ってるかなんて知らない。吐き捨てるような、一歩間違えればケンカになりかねない口調。ひっきりなしに同胞かと訊かれぶち切れかけていた一樹は、バスの中の喧噪に耐えきれず持ってきたジャケットを頭から被ると何度も叫んだ。

頼むから放って置いてくれ。構わないでくれ。一人は寂しいけれど行きずりの関わり合いはゴメンだ。おれに話しかけるな！！

車輛こそ思ってたよりマシだが、確かに運転はかなり派手だった。ががが飛ばし、並みいる外車を抜かし、ひたすらニューヨークへと向かう。ボストンへ来る際、乗り継ぎに寄っただけの都市。土地勘がある訳じゃない。本当は認めたくないけれど一樹にとっては不安で仕方がなかったのだ。

一人では何もできない。

その現実をどうしても受け入れたくはなかった。高橋の名など意地でも出すものか。無名で日本でも駆け出しのミュージシャン、カズ。自分の実力だけでどこまで通用するか。おれはそれに賭けたかったのに。

荒いにもほどがあるバスの揺れは、痛みを呼び起こす。眠ることすらできない。座席に丸まって殻に閉じこもりひたすら耐える。このどこが自由な国だというのだろう。力がなければ明日の生活もおぼつかない。

幼い頃から常に世界を飛び回っている姉のそばには、いつだって母がいた。ステージママと揶揄されながらも、甘やかすでなく冷静に冷酷に……時には冷酷に。その高い要求にすべてに応えてしまえた姉の実力。今でこそ、母はマネージャー役を他の社員に任せ、自ら設立した高橋音楽事務所を切り盛りしている。社長として姉と父をマネージメントするサポーター役。

そこに、一樹の居場所はない。彼とて作る気もない。おれはただ一人、言葉もろくにわからぬまま走り回るだけ。動かない腕を抱えて。

無理をしすぎた、それはイヤと言うほどわかっている。また熱が出てきたのかも知れない。朦朧としてきた意識で解熱剤を取り出そうとした一樹は、ふと視線を感じた。近くにいた幼い少年は、一樹の背負うトランペットケースと彼の顔を交互に見やっている。

これが何かわからず、怖いのかも知れない。ひよつとしたらラッパだと知っていて、羨んでいるのかも知れない。

ボクも欲しいんだ、あのおもちゃが。

何度目かに目が合ったとき、一樹は思わず頬をゆるめた。幼い子はさっと母親らしいおばさんの陰に身を隠した。

そう……これは僕の大切なおもちゃなんだよ。ずっとずっと僕のそばにいてくれた。手放すことなんてできないんだ。

たくさんの想いを抱え込んだまま、一樹はそっと目を閉じた。

一応、電話でアポを取り付けてあったとはいえ、案の定エリックはすぐに一樹を思い出すことはなかった。しかし、こざっぱりとした彼のアパートメントのドアを開けた途端、その優しげなミュージシヤンは相手を崩した。

「君は、えーと確かトウコの弟だったな！」

トウ…コ…。不意に出された名に酷く動揺する。上手く言いくるめれば或いは。しかし一樹にそんな芸当ができるはずもなかった。素直すぎるほど素直に、ただの赤の他人だと。

「あの家に、置いてもらっていただけです。桃子^{とうこ}さんとは何のつながりも」

そう、何一つない。どれだけ親身に、まるで本当の姉のように母のように世話を焼かれようとも。たとえば彼女がおれにとって初めて…。

飲み込んだ想いはしかし、他の響きにふっと断ち切られた。

「お客様といつまで玄関で。中に入っていたいただいたら？ エリック」

穏やかで静かな声の主は、初老の女性。切れ長の涼やかな目に微笑みをたたえて。横に流した髪は白というより銀に近い輝きを持ち、上品にスカーフが巻かれていた。その年代の日本人女性としたら背の高い方だろう。おそらく彼女が、エリックの妻。

「そうか、義理の弟という訳ではないのか。ユウジにガールフレンドができたのかと喜んでいたというのに」

大げさに嘆いて見せたのは本心かジョークのつもりなのか。エリックは朗らかに笑うと一樹を部屋に招き入れた。

しかし一樹は、先ほどの女性から目が離せなくなっていた。ジュリアードの講師というのはこの人のことだろう。いや、そんなことよりも。

あの瞳も髪も仕草も背格好も、おれは知っている。この人を。この人と同じ匂いをまとう女性を。

「トウコに弟はいなかったはずよ。驚かせてしまつてごめんなさいね、お名前は？」

完全に彼女の雰囲気になつてしまつて一樹は、声も出せずにいた。何とか、カズと呼ばれていますとだけ。

そんなに緊張しなくともいいのよ、と再びふわりと微笑まれる。カズというのはステージネームね？居心地の良いリビングに通される。腰を下ろすと目の前に差し出される紅茶。この香りもおれは、どこかで確かに。記憶をたゆたわせる。

高橋：と言いかけて口をつぐんだ。出来の悪い弟の名は知られていないだろうが、目の前の人は音大の指導者なのだ。特に姉が学んだジュリアード音楽院と言えば、卒業生に名だたる音楽家が並ぶクラシックの名門だ。実際にはジャズ部門も演劇や舞踊のクラスもあるというのに。

「あ、あの、タナカ一樹です。今はバークリーでトランペットを」

「怪我されてるの？留学中でさぞ心細いことでしょうね」

むしろひんやりとした響きを含むくらいなのに、人を落ち着かせてしまう声。その瞳がじっと一樹を見つめていることに気づく。身バレより何より、彼はこの説明しがたい感覚に戸惑い続けていた。

エリックは、一樹が差し出した写真に懐かしげに見入っている。そうあれは、ジャムズで撮ってもらった大切な一枚。彼の演奏を気に

入った訳じゃない。実は良くは憶えてはいない。今どきの音というよりは昔ながらのスタイルを固持する、安定した演奏をする奏者。記憶の中のエリックの音は、ぼやけている。それでもその写真は一樹にとって特別なものだった。

「思い出したよ。確かあのときも君は、今みたいに怪我をしていたね」

中学のとき、そしてコンクールを終えて一樹が一度楽器を手放したとき。何度かエリックは日本へと来た。来るたびにあの小さな下北沢のライブハウスを訪れた。おそらく気まぐれで言っただろう彼の言葉が、一樹をここまで連れてきたことにエリックは気づいているだろうか。

「いいえ、怪我じゃないんです。病気がいつも、何度も何度も僕からトランペットを取り上げようとする」

エリックから一瞬笑みが消える。反対に一樹は精いっぱい微笑んで見せた。

「あなたの言葉が、僕を音楽に結びつけていてくれた。トランペットを持つとうとしない僕にあなたが言ってくれたんです」

：君の左手が動かないことと、君が音楽を続けることに何の関係もないよ。私は君の音が聴きたい：と。

治療費のことも、仕事の口添えのことも：進行するかも知れない病気のことさえ彼から離れていこうとしていた。エリックの言葉を、

今ここで本人に会って思い出せた。それでいい。十分に礼を言って帰ろう、早くポストンへ。おれはただ、あのときと同じ気持ちのまま吹いていればいいのだから。

静かに見つめていたエリックは、ふっと表情を緩めると一樹へと話しかけた。

「君は神原の家にいた、ただの同居人だと言ったが」

そう、その通りだ。偶然にもあの場所であなたに会い、声を掛けてもらえた。

「おもしろいねえ。君はとてもトウコに似ているよ」

「僕が？桃子さんに？」

ねえ、君もそう思うだろう？キミエ。エリックは妻へと振り返る。私も思ってたわと優しいいらえ。

「あなたも桃子さんをご存じなんですか！？」

一樹の言葉に二人は顔を見合わせて、少しばかりほろ苦い表情を浮かべ、またゆったりと笑顔を取り戻した。ごめんなさいね、自分のことを話していなかったわ、とキミエと呼ばれた彼女は視線を一樹に移した。

「キミエ・バークレー。つい最近になってから正式に届けを出したのよ。私はどちらでもいいと言い張ったんだけど」

「形にこだわるわけではないのだけどね。歳を取ったのだなあお互

いに。元々、彼女の名は<キミエ・カンバラ>。音楽院ではまだこちらのワークネームを使っているのだよね」

カ：ンバラ？一樹が目を見開く。

「そうか、トウコは君に伝えてなかったんだね。キミエがトウコのママだよ」

静かな、あまりに静かなエリックの言葉。ああだから、あんな小さなライブハウスに何度もこの巨匠は足を運んで。……そうじゃなくて、今はそんなことより。

「桃子さんの、母親？」

あの二人を見限って出て行ったという、ベーゼンドルファーを弾く母親。それが、この人だと？

近寄るな！おれのテリトリーに入り込むな！もう桃子さんとは関係なんかない！！おれは……。

酷い目眩に、押し寄せる感情の濁流に、抗いきれずに一樹は椅子に沈み込んだ。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

君に泣く　I Cried For You

#18

「……桃子さんには、もう会ったんですか？今はアメリカにいます。旦那さんの海外赴任で」

できるだけ冷静に。一樹は自分を律しようと必死に声を鎮めた。どうして放って置いたんだろう、どうして放って置けたんだろう。あの二人を。ぶつきたい言葉は溢れ続ける。それを何とか飲み込む。キミエは視線を横に向けると、日本語で呟いた。誰に聞かせるともなく。

……シアトルは、遠いわ……

知っているんだ。この人は、母親という人は桃子さんがどこに住んでるかまで。若い一樹にこれ以上の自制心なんか求めようとしても無駄だった。

耐えきれずに立ち上がると、声を荒げた。

「遠いって、同じ国内じゃないですか！！何で会ってあげないんですか！？そりゃ桃子さんは英語も上手いし、海外なんて慣れてる。でも短期に仕事で来ることと生活することは違うでしょう！？連絡取り合ってるなら会うことくらい簡単だろうに！！何でそれくらいしてやりたいと思わないんですか！？」

異国の言葉でまくし立てるかつての少年に、エリックは目を見開いた。キミエは…穏やかな視線をただ向けた。

応える気なんかないんだ、この人は。そりゃそうだ、おれは桃子さんとも母親という人とも何一つ関係なんかない。ただの部外者、何を一人で熱くなってる。バカじゃないだろうか。左腕を押さえながら、一樹はうなだれた。

こんなことを言い、バスに揺られて訪れた訳じゃない。そもそもここで、桃子の名を耳にするとも思いもしてはいなかった。まして、母親なんて。

「あなたは彼女の」

キミエはそこで言葉をいったん切った。そういう言い方をするのがこちらの流儀なのはわかる。けれど、自分の娘に対して：彼女：という単語を使うことにすら嫌悪感を持つ。それは一樹の自分勝手な怒り。言葉と心は同じじゃない。素直に表すことなんかできない。それだって自分が一番よくわかっているクセにと言ひ聞かせながらも。

キミエはすうっと息を小さく吐くと、一樹に向かって「彼女の Sweetie（恋人）？」と訊く。凍り付かせた心の奥がズキリと痛む。腕の痛みよりもっと、深く深く。

「桃子さんは、桃子さんとマスターは赤の他人の僕を家に住まわせ、ずっと面倒見てくれた。『彼女』は実の姉よりよっぽど姉のように、母親のように。そういう人なんです。見た目のクールさと全然違う。本当は、本当は…」

本当はどうだと続けたかったのか。冷静に振る舞ってはいるが、自分の母親を求めていると言いたかったのか。それに気づいてやれよと、この女性を責めたかったのか。

そんなこと、桃子じゃなきゃわからないことなのに。会いたいと思

っているかどうかさえ、一樹にはわからないことなのに。

「詳しいことは何一つ知らないのだけれど、どうやらあなたはご自分の問題と彼女とのことを混同しているようね。そのことに気づいてらっしゃるのかしら」

冷たい響きはなかった。あくまでも落ち着いて冷静な声。よく似てる。似すぎるほど似ている。あの人に。今は同じ国に住む、姉代わりのあの人に。

済みません、と素直に頭を下げる。おれが口出することじゃない。いたたまれなさにこの場を早く去りたかった。懐かしく温かな想い出は、キミエの出現で痛みに変わった。ここはおれの来るべき場所じゃない。場違いにもほどがありすぎる。

「なぜここへ、エリックの元を訪ねたの？」

日本語で問う彼女へ、自嘲気味に一樹は吐き捨てた。

「病気が悪化してろくに授業に出られないくせに、治療費も払えない貧乏学生なんです。おれはただの。だから、たった一枚の写真を頼りに成功した金持ちのミュージシャンへと金をたかりに来た。それだけです。貸してもらえなくてもなければ、ミスターが貸す理由なんか何もない。すぐに叩き出されようが警察に突き出されようが文句も言えない。失礼な態度を取ったこと、謝ります。申し訳ありませんでした。もう帰ります」

訳のわからない寂寥感に包まれて、一樹は唇を噛んだ。おれは何をしているんだろう、と。たまたま出会ったことのある有名ミュージ

シャンに頼めば、この状況を何とかしてくれるかも知れないと一瞬でも思ったこと。その甘さがほとほとイヤになった。挙げ句の果てが、全くの他人へ絡んで暴言を吐くだなんて。

金がないのなら大学を辞めてさっさと日本に帰ろう。自己の健康管理もプロフェッショナルなら当たり前の仕事。その実力がないのだから、ステージの片隅にでも立ちたいだなどという甘ったれた考えも今すぐ捨ててしまおう。

素直に父親へわびを入れ、治療に専念しよう。それが棘だらけの鳥籠に入れられ、歌うことも一切禁じられる生活が続くことになるうとも。

それが自分に用意された運命なのだとしたら、大人しく受け入れよう。ああそうか、それをわからせる為の長旅だったのだ。これほどの遠回りをしなければわからなかった単純な事実。

黙ってしまった一樹に、エリックは口を開いた。「カズ」とだけ。うつろに見上げる彼の目に映るのは、優しげな温かい瞳。数えるほどしか会いもしなかった手の届かない偉大な演奏家。

「ようやく思い出したよ、君の音を。クラシックをやっていたんだと言っていたな。とても素直で良く通る音だった」

音を、エリックは音で人を憶えていたのか。あまたのミュージシャンと共演し、一線で活躍したプロが、子どもだったおれの音のことを。それとも、惨めすぎるおれをなぐさめる為だけに、当たり障りのないことを言ってくれているだけか。

「確か最初の電話で君は、ウォーリーズで吹いていると言っていた

な。少々怪我はしているが今も演奏することはできる、と」

aye。そうです、とだけ答える。一樹自身、感情の荒れについて行けない。どこにぶつければいいのか、この苦しさは。

「フライヤーを見たのなら知っているだろうが、私もじきにポストンに行く。君に私のステージをサポートして欲しいんだが」

とつさに口を開きかけた一樹を遮るように、エリックは力強く意志を込めた瞳で、彼を見つめた。

「それでも日本語のヒアリングはその辺の若いヤツらには負けないんでね。さっき治療費がどうのと言っていたな、ギャラは前払いさせてもらう。病院からの請求書をこちらへ回してくれ」

「ミスター！」

条件がある。一樹の声より大きくきっぱりと彼は言い切った。

「もし、ギャラに見合うだけの演奏ができなかった場合は全額返済してもらうだけじゃなく、損害賠償を請求するからそのつもりでな」

「そん…がい、賠償…!？」

意外な単語に、歳若いプレーヤーはうろたえた。

「もちろん当然だ。エリック・W・バークレーの名を掲げて演奏をするからには、質を落とすわけには行かない。覚悟しておけよ、私のライバルくん」

ふん、と鼻を鳴らして顔をしかめてみせてから……エリックは軽くウィンクを返す。茶目っ気たっぷり。

キミエはわずかに口元を緩めた。それが笑顔である、とかるうじてわかるくらいの控えめな表情で。

一樹と言えば、こういったときにどんな顔をすればいいのか困り果て、言葉をなくしていた。

その場で簡単な契約書を作り、エリックはすぐさまフィリスの元へと連絡を取った。おそらく電話の向こうでウォーリーズのオーナーは啞然としていることだろう。

泊まってゆけと強く誘われたのを固辞し、一樹は部屋を出た。夜中にチャイナバスの停留所にいることがどれだけ危険かと何度言われても。

「君の音を聴くのが楽しみだ。社交辞令なんかじゃないぞ。ああ見えてもフィリスは頑固でね、そんじょそらの実力じゃレギュラーなど入れさせやしない。本気だから、私は」

エリックの声が遠くなる。自分に向けて言われているのだと理解するまで、一樹はしばらく何度かその英語を頭の中で反芻しなければならなかったくらいに。

キミエが一樹の右手に手渡したメモ。それは特別なものでも何でもなく、ポストンへのアムトラック深夜便を予約したというチェックナンバーだった。

「これに乗れば、明日の朝にはボストンに着くわ。電車の方がバスよりはゆっくりと眠れるはずよ」

チケット代もギャラに含まれているから安心して。それらの言葉には、ただ一人の見知らぬ若者を心配するニュアンスしか感じ取れなかった。

「ありがとうございます、あの」

ようやくそれだけを口にする一樹に、キミエは問うた。

「あなたはトウコに会ったの？こちらに来てから」

力なく首を横に振る。会おうなんて思いもしなかった。もとより頭から抜けていた。ああそうか、シアトルもボストンも米国には違いないと。あまりに遠いだけで。

「彼女のあとを追って来たなら、どうかあの子の…力になってあげて」

初めてかいま見せた母親の顔。ハッとしてキミエを見つめてから、すぐに一樹は言葉をつないだ。

「桃子さんには篠原さんがいるんだから大丈夫です。僕はもう、きつと、会うこともない。ここでも日本でも」

桃子のいない下北沢のジャムズは、マスターの勇次と古株の結香が何とか切り盛りしている。もちろんシェフの前島とバイトの広大もまた、彼女の抜けた穴を埋めようとめいっばい働いている。時たま

手伝いに行っていた一樹は、その桃子がいないからこそジャムズへ足を向けることができた。

桃子の母親であるキミエと出会った今、たとえ帰国してもあの場所には戻れない。なぜかそんな気がしてならなかった。

酸素が薄い。息苦しい。

温かい場所と穏やかな空間。それは十分に感じられた。けれど、なぜ桃子は自分の母を奪っていった男がステージに立つのを、冷静に見ていられたんだろう。勇次もまた、長年の友人としてエリックと付き合い続けられたのだろう。

焦がれるような胸をかきむしられる想いを抱きはしなかったのか、母親への思慕という名の感情を。

逃げるように建物を離れた一樹は、背負ってきたトランプットケースを右手で握りしめた。やっと見つけたタクシーで駅へと向かう。

…電車の方が眠れるから…

眠れるだろうか、こんな想いを抱えたままで。誰の感情を取り込んでしまったのかもわからず、渦巻く心の嵐を上手く抑えることは一樹には到底できそうもなかった。

(つづく)

北川 圭 Copy right? 2009-2010
i t a g a w a A l l R i g h t s R e s e r v e d k e i k

あなたのそばに 〈 N e a r n e s s O f Y o u , T h e

#19

もともと長距離用の列車は、バスの乗り心地とは全く違った。静かな車内にふかふかのシート。眠れるからと言ったキミエの言葉は嘘じゃない。

それでも、一樹がまどろめるはずもなかった。

何も考えまいと、頭は必死に音源を探し求める。どんなものでもいいから音を鳴らしていたい。別に再生用機器が現実になくたって、ミュージシャンなら当然のように自前の音を鳴らすことができる。何時間でも、オリジナルでも。

その隙を突くかのように、言葉が差し込まれる。

これからの生活のこと。

治療のこと。

サポートしろと言ったエリックの…重い言葉。

そして。

桃子の冷ややかな横顔がサブリミナルのように脳裏に浮かぶ。消してしまいたい。思い出したくはない。意識すればするほど、当然のようにくつきりと像を結び始める。

逢いたくなんかない。もう二度と逢わない。道は分かれ、生活は変わり、姉代わりのおせっかいな桃子は過去の思い出となったのだから。

たとえ会ったとしても、あのときはありがとう、と言葉を交わす関係へと変化したんだから。

…それはおれが望み、桃子さんが選んだ道…

どこを走っているのかもわからないアムトラックは、白々とした朝を窓いっぱいに映し出していた。ようやく目をつぶった一樹は、エリックの生音を記憶の奥から引き出そうと、自身の持つチャンネルをトラディショナル・ジャズへと変えた。

「エライエライ！ちゃんと再診に来たじゃない」

BGH（ボストン総合病院）の整形外科へと向かった一樹に、担当医の梨香はそう声を掛けた。たかが研修生のクセに偉そうな態度で。これじゃまるでガキ扱い。まあ、ガキには違いないのだろう。

「調子はどう？って、とても良さそうには見えないけれど」

てきぱきと処置を行い、再検査の手続きを取る彼女は、苦笑混じりに一樹を見やった。当たり前だ、と彼は心の中で毒づいた。あれから一睡だっしてしていない。

食欲なんかひとかけらもないのに、取り敢えず駅前でコーヒーを流し込んだ。胃がきりりと痛む。服用する薬とは相性のいいはずもないカフェインとニコチン。それでも何も口にしないよりマシだろう。

感覚と感情を麻痺させたい。眠くなどないのに気だるさだけが抜けない。

黙ったままの一樹の額に、梨香はそつと手を当てた。

「ここでなら日本語でどうぞ。相当ストレスたまってるんじゃないの？」

ふざけた声でわざと明るく言う梨香の細い手首を、右手で握る。ほんの少しばかり彼女は身体を硬くした。

「仕事…何時に終わるの？」

げげんそんな顔つきで梨香が彼を見つめ返す。一樹の表情に笑みはない。

「昼には終わる予定だけど、なにせあたしは使いつ走りだからずれ込む可能性の方が高いわね。何？ランチのお誘いでもしてくれるっての？」

日本語での穏やかな会話。周りのスタッフはそう見ているだろう。けれど梨香にだけはわかるのだろう…一樹の今にも泣き出しそうな思い詰めた顔が。

「眠れなかった」

ぽつりと呟く彼に、じゃあ軽い睡眠導入剤でも出しておくわとさら

りと告げる。その場をかわすかのように。

「眠れない…一人じゃ…」

耳をそばだてなければ聞こえないほどの、囁き声。手首を握る力が抜け、一樹は顔を覆った。

おれは何を、何をしているんだろう。どこへ行っても見知らぬ顔ばかり。そして、他人へ依存しなければ立ってられないほど弱い自分。泣くまいとこらえた。この女の前で二度と泣かない。歯を食いしばる。

梨香の視線を感じた。たぶんそれは、哀れみの目。たった一人異国で働く彼女には、おれなんかあまりに情けない男としか思えないだろう。でももう、頼れるものなんかない。この痛みを知る者は。

「病院のベッドは高いわよ。個室でも空けましょうか？あたしがサボりたくなったら子守歌でも歌ってあげるから」

あくまでも冷静に言葉を続ける。けれどその声が震えている。なぜ君が？同情か憐憫か。

「裏門で待ってる。新堂センセの出てくるのを」

やめてよ、センセだなんて。梨香でいいから。待っててもらってもいつ帰れるかなんて…。

彼女の声を遮るように一樹は顔を上げた。

「待ってる！一人じゃ居たくない」

梨香は肩をすくめて何も言わなかった。承諾の言葉も、拒否の言葉

さえも。

「検査の結果は来週出るから。それから、治療費のめどは立ったの？」

事務的に告げようと努力するのが伝わってくる。それに「ああ」とだけ。梨香が目を見開く。

「家族に頼ったんじゃない。仕事を取ってきた。それだって、昔のつてで無理やりねじ込んでもらっただけ」

おれ自身に力なんてない。全く無名のミュージシャンには誰も振り向かない。おれから高橋の名を取ってしまえばこんなもの。これが、現実。

「その腕で仕事だなんて。無茶もいいところだ…わ」

その呟きを背中で聞く。一樹は力なく立ち上がると診察室を出て行った。

病院の裏手はまるでちょっとした公園のように、木々の緑が眩しかった。日本では見ることもない名も知らぬ葉が生い茂る。セキユリティ・ガードマンが立っているのは、そこが関係者専用の通用門だからだろう。

ベンチに座り込む。痛みすら感じなかった。何もかも忘れて眠りたい。夢一つ見ることなく。

頭の中に流れ続けるスタンダードジャズにすべての感覚を預け、一樹はさらさらの髪に手を差し込んだまま頭を抱え、ずっと動けずにいた。

「ちょっと！！まさかこの時間まで本当に待ってたなんて言わないでよ！？」

時計はもう三時を回ろうかというところか。外来業務と押しつけられた雑用を終えて足早に通用門へ向かって来た梨香は、驚きの声を上げた。

うつろな目でそれを見上げる一樹に、痛ましげな瞳を向ける。彼女は一樹の肩をそっと抱えると自分の小さな車へと押し込め、係員に事情を説明しに行った。暑いのか寒いのかそれさえもわからない。空腹も感じない、時間の感覚も。

何が心に引っかかっているんだ？それすら言葉にはならなかった。病院の近くの小さな部屋は、エリックの立派なアパートメントとは違いすぎた。

ろくに家具もない、ただ本当に眠る為だけの部屋。ラックへと乱雑に押し込められた医学書はすべて英語。そりゃそうだよな。場違いな思いだけしか浮かばない。

壁に飾られた数枚の写真は、なぜかみな裏返しに貼られていた。それが最近ではない証拠に、裏側の白い部分が陽に少しばかり焼けている。

「あー、えっと靴だけは脱いで。せめてこの部屋の中くらい楽でいたいから土足厳禁なの」

そう言いながら靴を適当に脱ぎ散らし、梨香は背負っていたカバンを床にどさりと置いた。勉強道具でも入っているのか。これがまっとうな暮らしをしている留学生の実態。おれとは違う。

立ちすくむ一樹に、梨香はもう一度「靴!」と厳しい声を浴びせる。あわてて履いていたバンスのハーフキャブを脱ぐと、そのままベッドに引っ張って行かれる。

「つべこべ言わずに、寝なさい!!」

「……えっ?」

ベッドに腰掛けた一樹の頭を無理やり枕に押しつけると、梨香は甘い香りのするブランケットを掛けてやった。

「今のあんたはただの過労と極度の寝不足状態!いくら若いからって、体力を過信しない!食べて眠れば大抵は良くなるもんなの!!ひよっこだろうがなんだろうが、医者言うことをたまには素直に聞きなさい!!」

おれは…。言いかけた一樹の頭を両の腕で抱え込む。

「約束した憶えはないけど、取り敢えずそばにいてあげるから。起

きたらご飯も作ってやるから。言つとくけど今回だけの大サービスよ！！いちいち担当患者に懷かれたらたまったもんじゃないわ」

梨香の声が耳元で聞こえる。人の温もり。それだけが人を癒す。ようやく一樹は目を閉じて訪れた睡魔に身を委ねた。

ふと目を覚ます。どれくらい眠ったのだろう。意識だけが戻り、身体は動かないまま。すぐそばに人の寝息。いつでもどこでも寝るんだ、この女医は。無防備に。年の割にはあどけない顔で。

頭を撫でてもらった感触があった。やっぱり息子扱いされてるのか、四歳と言ったよな……。おれはまるっきり幼児のように、何もできない。こうしてほとんど見も知らぬ女の部屋に上がり込み、他人のベッドを占領して眠っていたんだ。

一樹の右腕は、なぜか梨香の頭の下。いつの間にか腕枕にその髪を預け、彼女は寝入っている。警戒心もなく。

ガキ扱いってわけだ、おれはどこに行っても。

そうかも知れない。心の中は寂しいと。寂しくて寂しくて一人ではいられなくて。気づくと一樹は思わず彼女を片腕で抱きかかえるようにしていた。

もっと温かさを感じさせてよ。忘れさせてよ。この凍り付くような

寂しさを、いつときでいいから。

頬を寄せてみた。化粧っ気もないはずの梨香からほんのり香るのは、たしかフェラガモのインカントチャーム。仕事柄、強いものは使えないんだろうな。もしかしたらこの部屋の香りなのかも知れない。

一樹の力を感じてうつすらと目を開ける彼女を、じっと見つめる。泣きたい、泣いてしまいたい。泣くもんか。もう子どもじゃない。リップも塗らないのにつややかなその唇に、一樹は柔らかく口づけた。優しく噛むように。拒まれない。ホッとして彼は、さらに右手に力を入れた。

ねえ、抱いていてよ。一人はいやだ、よ。どうかすべてを忘れさせてよ。

…おれは何を忘れたいんだろう…

頭の隅が痺れるような甘いうずきに、一樹は身を委ねた。何の感情もなくただ流されるまま。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

#20

傷に障らないように寄り添ってくれる肌の温かさ。痛みも寂しさも惨めさも、この瞬間だけは忘れられる。

一樹は右腕をまわして梨香を抱き寄せる。肩に顔を埋めたまま荒げた息を整えようとする。

それで何も考えずにすむ時間など、文字通り一瞬だというのに。男はすぐに現実に戻る。夢は醒める。現に一樹を覆い尽くそうとしているのは、もう既に虚しさのみ。

…ここでおれは、何をしているんだろう…

幾度となく自分に問いかけた。イヤになるほど。今が全く無意味に思えて、それでいて今を逃したらもう二度と味わえないような気がして。

ああ違う。一樹にとってはそれこそが現実なのだ。

いつまで続くのか、誰にもわかりはしない。明日終わるのか…それともこの先、何十年と不安と共に生き存えるのか。

物憂そうに目を上げた彼に、梨香はうつすらと笑みを浮かべた。

母にいだかれた記憶などないのに、それはおそらく遠い昔のことではないはずなのに…まるで幼い子どものように、彼はまた眠りに落ちた。

早番だからと朝っぱらから叩き起こされた一樹は、むすっとした顔のままテーブルについた。シリアルにヨーグルト、フルーツ。どれも片手で食べやすいようにしておいてくれたのは、梨香の心遣い。でも夕飯も食いそびれた。目の前のものはとうてい腹にたまると思えない。さすがに彼の歳で和食が恋しいとは思わないが、どうしてもスプーンを持つ手が止まる。

「何？朝は食べない主義？」

バタバタと着替え薄化粧をする梨香は、どんなに若く見えたところで一樹よりは年上だ。朝の陽射しの中ではそれが残酷なほどはつきりとわかってしまう。

ましてや家庭を持つ女性^{ひと}。一樹は自分への嫌悪感で、よけい食が進まなかった。

梨香はその空気を素早く察知すると、ブラシを置いた。

「ああ、えっと勘違いしないですよ？それ食べたらとっとと出てって冷たい色合いさえ帯びる声に、一樹は思わず顔を上げる。

「あれくらいのことで、勝手に彼氏気取りとか止めてよね。わかってると思うけど。当然ここには二度と連れてくる気もないし、うろついたりしたら通報するから。あとは患者として診察室へどうぞ、だから」

「……わかって…るよ」

口に運ぼうとしたコーヒーカップを元に戻すと、彼はのろのろと立

ち上がった。ちょっとお！用意したもののくらい食べてつてよ。抗議めいた梨香の声が遠ざかる。

「何で泊めてくれたの？」

「えー？だって寝ちゃったものを外に放り出す訳にも行かないし、あたしはあんたの部屋も知らないし」

あっけらかんとした声が返ってくる。昨夜のことなど何もなかったかのように。あんなに近くに鼓動を感じたのに。

「何で……拒まなかった…の？」

すがるような一樹の瞳に、わざとなのか、梨香は普段着の顔で応えた。

「まあ、同情かな。切なそうな年下の男の子にあんな目で見られたらねえ。一回くらいはいいかなって」

「もういい!!」

そのまま部屋を飛び出す。どこかでわかっていた。梨香がわざと突き放したことなど。あの言葉は精いっぱいの彼女からの心遣いだということも。それでもなお。

どこまで甘ったれてるんだ、おまえは。自分を責める声しか、もう聞こえてはこない。階段を乱暴に駆け下りると目が回った。もとよりここがどこかさえもわかっていないのに。

その場にうずくまり、自由の利く右手で顔を覆う。吐き気をこらえる。何も食ってなどいない空の胃がズキリと痛む。

甘いセリフが欲しかったのか。朝になっても解けぬ魔法のように、まだ抱きしめてもらえんと思っていたのか。誰かに…そう誰もいいから温かい腕に。

アパートメントの入り口で動けずにいた。後ろから軽い足音が近づく。いつでも走り回っている研修生の勤務医は、ヒールではなくラバーソールの靴なんだろう。これじゃまるで、追いついて欲しくて焦らしている未練がましい男みたいだ。

正直に言えよ。本当にそう思っておまえは動かずにいるんだろう？動けずに、ではなく。

何度も何度も襲う自責感。どうせおれは一人では何もできない。

肩に手を置かれた。ふわりとした感触。

「車で送ってってあげるから。ほら、立って」

「一人で帰る。放って置いて…」

こっちが困るの！邪魔なのよ！！苛ついた声までもが演技なのか。それともそれが…梨香の本心か。もうどうでもいい。わかっているのは、朝が来たから当たり前のようにただの担当医と患者に戻ったということだけ。

誰でも良かったくせに。いっそ平手で殴ってくれればいいのに。

「ほら、忘れ物」

手渡されたのは度さえ入っていないメガネ。ここでは武装する必要などない。それでもなお、いつの間にかサングラスかメガネで顔を覆うようになった。少しでも：高橋の名から離れたくて。

何とか立ち上がると、一樹は中指でメガネを押し上げた。髪をかき上げ、もう一度だけ梨香を見つめる。

「今夜もウォーリーズのステージに出演するよ。忙しいと思うけど、もし時間があつたら……聴きにきて」

「ちょっと!! まさか本気でその腕で楽器を吹く気なの!? それを担当医のあたしが許すと思う訳?」

医療関係者として見過ごす訳にはいかない、と息巻く彼女に、ただの知り合いとしてでいいから来てよと呟く。飲み代くらいおごるから……と。

「治療費を払う為には、エリックのステージをサポートしなきゃならないんだ。そういう契約だから。おれは、ここで生きてく為にはどんな状況でも吹いてかなきゃ。まとまったギャラが入ったらすぐに保険に入る。それは約束する。治療はちゃんと続けられるようにさ」

「何で家族を頼らないの!? あれだけ立派な父親だってお姉さんだっているじゃない!! あんたの生命に関わることなのよ!!」

彼の真っ直ぐな瞳が、梨香の言葉をさえぎる。

「あなたがそれを言うの? 梨香こそ何で家族を頼らないのさ」

部屋に飾られた裏返しの写真。おそらくそれは…日本に残した息子と夫。一樹は思いを馳せる。

「逃げてきたって言ったよね。それともあなた自身が…頼ってくる家族を手放そうとしてるの？」

自分の手に入らないのなら、自分の手で壊してしまえ。子どもじみた情けない感情。ついて出た言葉に梨香は手を振り上げた。

左の頬をはたかれ、フレームがわずかに傾いた。一樹は唇をぎゅっと噛みしめる。

「何も…何も知らないくせに…わかったようなこと言わないで」

怒りを必死にこらえた梨香の呟き。一樹の方だって、大声を出したいのを懸命に我慢する。視線を合わすことなく、彼も同じ言葉を発した。

「何も、知らないくせに」

右手で頬を押さえると、わずかに熱を帯びている。そこだけが生きているような気がして、一樹はなぜかホッとするほどの安心感を覚えた。

歩き出す。あてもなく。大通りまで出ればタクシーくらいつかまるだろう。バスだってもう動いているはずだ、ここが病院の近くならば家まではそう掛からない。

さすがの梨香も、追いかけてくる様子はなかった。一樹はひとり、歩き続けた。

ウォーリーズのリハに顔を出すと、オーナーであるフィリスが飛んできた。無理もない、あれだけの無茶を通させたんだ。

「カズ、おまえはエリックとどんな関係なんだ？」

別に、ただステージを何度か見ただけで。顔見知りではあったけど、まさか相手も覚えててくれてるとは思わなくて。

適当に言葉をつなげる一樹に、フィリスは信じられないというニュアンスで首を振る。

「言いたくはないが、これはタカハシのコネクションか？」

他の者には聞こえないほどの小声でそう囁く。そんなんじゃないと苦笑してみせた。

「古い、そう…古い知人のつてでさ。結局はみすばらしい東洋人が惨めに見えたんじゃないかねえの？」

自虐的な苦笑い。おれの力なんかじゃないことは自分が一番よく知っている。あれはただ、桃子とのつながり。知りたくもない現実を突き付けられて、関係もないのに一人で混乱に陥って、挙げ句の果てはまた逃げたんだ。おれはどこからも。

黙ってしまった一樹を複雑な表情で見やっていたフィリスは、それで勝算はあるのかと訊いた。

「勝算？ あんな大ベテランを満足させられる演奏なんて」

できなかったら賠償金を払えだなんて、おれを納得させる為だけの
附帯条件。わかるだけに無性に腹が立った。どんな演奏をしようが、
よくできたなボウズとばかりに甘やかされる訳だ。冗談じゃない。

「おれの勝手な都合で悪いけど、今日から一ステージ分はトラディ
ショナル系で行くから。昔ながらの泥臭いジャズをやらせてもら
うよ。たまにはいいだろ？ ジジイの客どもへのファンサービスだ」

にやっと笑って一樹は楽器ケースを肩から外した。負けることは許
されない。どんなことをしてもヤツの、エリックの度肝を抜いてや
る。

オイルを吹き付けるのも片手、マウスピースをセットするのも。そ
してプロテクターさえない状態でギプスの上に本体を載せる。

骨がスカスカの状態の疲労骨折：痛みがすぐに引く訳がない。わず
かな振動ですら傷に響く。

それでもおれは吹いてやる。どれだけ身体がボロボロでも負けはし
ない。この音だけは手放さない。

軽くロングトーンでアップをすると、一樹は平然とした顔でステ
ジへと上がっていった。

仲間の待つ場所へ。彼の唯一の居場所へ。

心配げなバンドの連中へ目で合図を送り、リハは始められた。
不安定な姿勢も気の遠くなるような痛みも、彼の音を邪魔すること
はできない。スウィングジャズの名曲たちをゆっくりと奏でながら、
一樹の心はどんどん研ぎ澄まされていった。

信じられるものは音だけ。ああそうだ、おれにとって必ずそばにいてくれるのはこの……音だけだ。

皆に見守られつつ、一樹は堅く目をつぶりながら演奏へと没頭していった。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

ロマンティックじゃない (Isn't It Romantic?)

#21

トラディショナル・ジャズと言ってもとらえ方は人様々だ。デイクシースタイルこそ伝統的な正統派のジャズだと主張したいむきもいるだろうし、広く大きくとらえ、ビバップ以前もしくはそれ以降をも含めてしまう人々と。一番わかりやすいのはおそらく：スウィングジャズだろう。

エリックの音楽は、耳に心地よいハーモニーの上に落ち着いた旋律を乗せるというもの。それはスタンダードでもオリジナルでも構わない。その代わり、管に若いメンツを入れて過激な音を出させたり、異種格闘技のように激しいドラムを入れてみたり。そのギャップをも包み込んでしまう度量の広さが、彼の魅力の一つでもある。

古くからのジャズファンには安心した演奏を。また、最近聴き始めた若い層には逆に新鮮に受け入れられるように。

一樹は、あの日以来、ポータブルの再生機を耳から離さない。イヤホンから聴こえてくるのは、もちろんエリック・W・バークレーグループの音のみ。

…完全に、このノリをマスターしてやる…

スウィングのリズムは、コンボばかりを演奏してきた一樹には実のところあまりなじみがあるとは言えなかった。

どちらかと言えば、それこそビッグバンド経験者の方がずっと詳しいだろう。

アーティ・ショウ、ベニー・グッドマン、グレン・ミラー、デューク・エリントン、カウント・ベイシー、ライオネル・ハンプトン、そしてルイ・アームストロング。

軽快とも言われるが、その実、このリズム感とグルーブ感を出すのは容易じゃない。ましてや完全な物真似で吹いたところで、エリックを本心から満足させられるとは思ってもいなかった。

「ペンシルバニア、シックスファイブサウンズ…」

ふと一樹の口をついて出たメロディに、ピアノのシンシアがくすりと笑う。

「あれ？カズは路線変更すんの？また随分とまあ古めかしい懐メロを。大音量の目覚まし時計でも持ってきてやろうか」

はん。それに苦笑いを返す。

どう攻めるか。技巧ではなく音楽的な楽しさを美しさを、このリズムの躍動感を。

聴く側にとっては感性で受け止める者やアナリーゼしつつ聴く者といろいろあるのだろう。しかし奏者にとっては、この感覚的なものを現実の演奏として操作する必要がある。

記譜された音符もしくは共通に理解しているはずの主旋律を、どのタイミングで吹き始めるか。そこにどうニュアンスをつけるか。音

の最後の処理はどうするか。すっぱりと切るのかそれとも余韻を残すのか。

それを聴き分け、忠実に再現できてこそ、他のメンバーと同じノリが出せるのだから。そしてそこから自分の個性を出すには…。

一樹は間近に迫ったエリックとのステージを睨み、作業に集中しようとしていた。

「様子はいかがですか、高橋さん」

わざと堅苦しい日本語で梨香は問診を行う。隣には書類を手にした指導医が、二人のやり取りを見守っている。だからという訳ではないのだろうけれど。

一樹は何と答えていいかわからず、むっとした表情を浮かべた。形ばかりの笑顔の梨香が腹立たしくもあった。もっと人間らしく怒ってみせればいいのに、と。

「今夜、部屋に行っていない？」

「絶対ダメ」

顔色一つ変えず、梨香は切り返した。とりつく島もない。

「じゃあ、おれの部屋に来てよ」

「ここは診察室、あなたは患者。さっさと問診に答えなさい」

声の調子だけを聞いていたら、穏やかな担当医の問いでしかないだろう。まったく女って。

「演奏、聴きに來てって言ったじゃない」

「いい加減にしないよ。馴れ馴れしくしないでって釘を刺しておいたつもりだけど？」

わずかに陰のある瞳で睨む。赤の他人。ああそうだね、何を勘違いしていたんだろうおれは。それでも悪あがきをした。ただのガキだから。

「じゃあ、このギプス外してよ。吹くのに邪魔。治療に関して患者の希望は最優先されるんだろ？」

「外せるもんならね。痛みでのたうち回って楽器吹くどころじゃなくなるわ」

「痛み止めなら、ドラッグストアにいくらでも売ってる」

「あんたの生命がかかってるってのに！何を呑気なこと言ってるのよ！？」

さすがの梨香も、理性という薄い仮面が吹っ飛んだ。もともと気が短いことなどミエミエだ。指導医が目を上げて彼女を見る。黙ったまま。

「悪性だったとでもいう訳？再手術？それとも…この腕はもう使用物にならないって？」

ギリツと音が聞こえそうなくらい、梨香は奥歯を噛みしめ、素早く英語に切り替える。

「検査の結果は良性でした。良かったわね、ミスタータカハシ。あとは経過観察と折れた部分の修復に時間を掛けて、機能回復に励んでください。それでは次回にお待ちしております」

質問に答えてない！！一樹は少しばかり苛立ちの声を上げた。梨香はもう既にカルテとファイルを片付けている。

「次の患者が待ってるの。さっさと出て行って」

「一度でいいから…ステージ見に来てよ。梨香に聴いて欲しいんだ」目を逸らしたまま何も答えない。一樹は自問自答する。なぜ、なぜ彼女に執着するんだ？通りすがりに優しくしてもらっただけの、それも担当医なのに。

誰でもいい。温かい腕を差し伸べてくれるのなら誰でも。自分の惨めさにため息をつく。

突然、だいぶ治まったはずの腕の痛みがぶり返す。鈍く重いそれではなく、まるで刃物を突き立てられたかのように。

反射的に右手で左肘をかばうように押さえ、うつむく。息が乱れてくる。こんなところでぶっ倒れてたまるか!! 気を引きたいが為の演技と思われるのがオチだ。

無理やり立ち上がろうとすると、身体が傾いだ。梨香が手を伸ばすより早く、初老の指導医が一樹の身体をしっかりと支える。

「血管迷走神経反射ですか？」

梨香の声が焦りを帯びる。

「痛みから来るそれだろうね。すぐにベッドの用意を」

おれは何ともない!! 離せ!! 年上の女に邪険にされて貧血起こしただなんてシャレにもならない。

ぐっ、自由になるのは右手のみ。あわてて口元をふさぐ。酷い吐き気と寒気。

看護助手と指導医に抱えられるように、無理やり寝かされる。梨香がかいがいしく世話をしようとするのを手で払う。

「……病気の…フリ…すれば……構ってもら…えるん…だ。放って置いてくれよ!」

「ちゃんと現実を認めなさい!! あんたのはフリでも何でもないでしょうが! 具合が悪いのなら期間を設定して治療を最優先する、それも自己管理能力なんじゃないの!? はっきり言って今起きてる症状は、あんたの不摂生が原因なんだから!!」

違う。違うことは誰よりも自分が一番知っている。おれはただの甘

ったれで、寂しいだけなんだ。

「落ち着くまでここで休んで。ステージは今夜もあるんでしょ？出るなどと言わない。ちゃんと外来プラス雑用から解放されて時間間に合いそうなら、あたしもついて行ってあげるから」

これ以上、おれを甘やかさないでくれ。最後まで依存させてくれる
気がないのなら、すっぱりと切ってくれ！期待を持たせるなよ。頼
む…から……。

二律背反する命題が一樹をおそう。本心はどっちなんだ。本気で放
っておいて欲しいのか、今だけでいいから手をつないでいて欲しい
のか。

医師だから、患者を心配しているだけなのに。わかってるそんなこ
と。彼女には家庭があって、おれには聡子がいて…。頼るべきは目
の前の梨香ではないことなど、はっきりしているのに。

今この瞬間、助けて欲しい。寂しいのはもうたくさんだ。横たえら
れたベッドの上で、一樹の意識は遠ざかっていった。

「アルコール厳禁ね」

口うるせえババア。

「タバコは血流悪くするから論外！」

冗談じゃない、誰が従うか。ここは診察室でも何でもないし。

「痛みが酷かったら、途中でも止める勇気を持ちなさいな」

ステージに上がったら最後、何があってもラストまで持たせるのがプロだろ？

「ねえ、あたしのことはなんて紹介してくれるの？」

不意に言葉の調子が変わったことに面食らい、一樹は思わず梨香の方に向き直した。

ウォーリーズへゆく道すがら、約束だからと本当に梨香と一緒に来てくれた。飲むんだったら誰か同僚でも連れてくればいいのに、一樹の精いっぱい強がりを見せた。

「ねえったら！姉ですだなんて言っちゃって、どうせお店の人たちにはマリコのことばれてるんでしょ？その手は使えないし…」

どうでもいいことをけっこう真面目に悩む梨香が、可愛いとさえ思った。年上の女。

「あー、こう言っとくよ。親戚のおばさん、ってさ」

一樹の軽口に、頭をこづく。ってええ。あわてて殴られた場所を押さえる。

「ちょっとお、そんなに力入れてないでしょう!？」

「いや、今のはけっこう恨み込めてた」

こんな下らないやり取りでさえ、餓えていた自分に驚く。パークリの友人たちは皆心配して声を掛けてくれるが、一樹が欲しいのは……きつともっと近い距離の情愛。

「何で、来る気になったの？」

「じゃあ帰る！」

拗ねた顔はますますあどけない。病院で見せる顔とは全く別の。しかし梨香の口からこぼれた言葉が、一樹を現実へと引き戻す。

「放って置けないじゃない、危なっかしくて。まるで子どもみたいに無鉄砲だし」

「な……にそれ……。本気でおれって、あんたの息子の代用品？」

四歳相手に、何張り合ってるんだか。こんなときばかりは余裕めいた梨香の含み笑い。いや母親としての顔。思わず頭に血が上る。

「どうせおれはガキだよ……！」

そうじゃないったら。両手を伸ばし、梨香は彼の頬を包んで自分へと向けた。

「好きとか恋愛とか、そういう感情の前にね……とにかく放っておけないの。目を離れたらどこかへ飛んでいきそうで」

瞳だけが真剣に見つめる。一樹も言葉をなくす。お互い事情など何一つ知らないのに、きつと感情の一部を補完しあっているような気がした。

ああそうさ。いつだっておれの周りの女たちは、異性の愛なんかじゃ語れない情で絡み取ろうとする。もがいても抜け出せないほどの強い依存をもたらず、危なっかしい愛情。

「ウィークポイント突かれちゃ弱いんだって、いくら強力な新堂梨香様でもね。あたしってほら、母性本能強いから!」

張り詰めた空気をわざと壊すかのような、ふざけた物言い。いつまでも言ってる! 一樹の言葉もどんどんラフになってゆく。

背の高い一樹が彼女の肩を引き寄せる。耳元に唇を押しつけるように囁く。

来てくれてありがとう、と。

「ボランティアの、ほ…訪問診療だから、ただの!! 無茶してたらステージ行って引きずり下ろすから覚悟しておきなさいよ!？」

梨香ならやりかねない、そう言って笑う。これからの不安も緊張も、緩やかにほぐれてゆく気がする。

エリックとの本番は来週。今日はいつものメンバーを巻き添えにしてのスウィングナイト。

…本当に聴かせるべきなのは誰なんだろうか…

聴かせるべき。自分が無意識に遣った言葉に一樹は怯えた。聴かせたいの間違いじゃないのか。

彼の脳裏をかすめたのは……思わず頭を振り、その幻想を追い払おうとした。

聡子なのか、ツアーには同行しないとは言っていたはずのキミエにか。いや…本当はきっと。

「ねえ、来週は一番いい席を空けておくから」

ゆっくりと微笑んで、一樹は梨香へとそう告げた。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

夢であなたに (I'll See You In My Dreams

#22

機材と言っても、持ち込みのそれが多い訳ではない。ツアートラックを何台も連ねるようなグループではないし、ジャンルでもないからだ。

ラフな服装でそれぞれ自前の楽器を持ち込むメンバーの後ろから、エリックはひよいと顔を出した。

「フィリス！久しぶりだな、おい！」

こうして世界中のライブハウスを回る生活を、このベテランは何十年と続けてきたのだろう。多くの知り合いと旧交を温めつつ。

そして…生涯の伴侶を、日本で見つけた。

硬い表情で何も言えずにいる隅の一樹を認めると、この柔らかなリスマア―ティストは気さくに笑いかけた。

「ハイ、カズ…でよかったんだよね？どうだい、自信のほどは」

「ご挨拶が遅れて申し訳ありません。今回のステージはどうぞよろしくお願いいたします」

ああ、堅苦しい挨拶など要らんから。軽くその声に手を振る。いつものお守り代わりの楽器ケース。その革を握りしめて、一樹はエリックを真っ直ぐ見据えた。

「治療費の件では本当に感謝しています。それに見合うだけの演奏は…」

「おいおい、まだ払うと決まった訳じゃない。言っただろう？明日の演奏次第だと」

フィリスはその言葉に戸惑い顔を隠せずにいるし、当のエリックはさもおかしそうに笑い続けている。

「ああ、別にからかっているんじゃない。聞いたよ、バークリーに来る前は日本で活躍していたプロのミュージシャンというじゃないか。それもツアー経験もあればレコーディングにも参加していると何より、シモキタザワの店では看板息子扱いだったとね」

いたずら気味に片目をつぶってみせる。一樹はその言葉に息を飲んだ。どこからそんなことを…ジャムズのマスターにでも連絡を取ったのか。現妻の元のダンナへと。

「相変わらず、連絡一つ寄越さないんだから。全くなんなの、その格好は」

不意に、エリックの背後から飛び込んでくる日本語。冷静で何ごとにも動じなくせに、突き放した冷たさではないその声…。

一樹は思わず反射的に目を閉じた。見てはいけないんだ、おれはもう二度と。唇をぎゅっと結ぶ。

「子どもじゃないんだから、何を拗ねてるんだか」

「拗ねてなんかない!!」

日本語で言い返す。怯えた瞳でそちらを見る。否応なしに。

前髪を斜めに流したショートカットに切れ長の目、ニットのすつきりとしたワンピースをまとっていたのは……三年前と変わらぬ涼やかな表情の桃子だった。

言いたいことも訊きたいことも心の中に溢れている。けれど一度口にしてしまえば、きりもなく寄りかかってしまいうで。

いつもと変わらぬ静かな微笑みをたたえて、同じ空間に桃子がいる。同じ国を選んだということさえ気づきもしていなかった。

まして、ライブハウスのこの空気の中で逢えるだなんて思いもしなかったこと。

「今度は何したの？ 女の子に殴られでもした？」

ほんの少しだけ下を向き、苦笑いをする仕草も変わらない。本当は心配で仕方ないくせに、それを面にも出そうとはしないんだ。この人は。

「再発」

何でもないことのように口に出す。桃子の瞳が一瞬凍り付く、ように見えた。ガキめいた嫌がらせは止めよう、一樹は素直に謝った。

「良性だったよ、大丈夫。治療も済んでるからあとは骨がくつつくのを待つだけ。病院にも真面目に行ってるし」

「ああ、それで」

桃子は首を軽く振ると、治療費の肩代わりがギャラってことなのね、と納得していた。

「ねえ、それって」

訊きかけて一樹は言葉を飲んだ。訊いていいものかどうか戸惑う。昔、マスターと桃子の元から逃げ出すように家を出た母親に、今も逢っていたのかとは。

顔に出るタイプだと良く言われる。一樹の思惑など彼女には透けて見える思いだったのだろう。気になるの？とまた笑う。

「お母さんと連絡とってただなんて、全然桃子さん言わないからさ」

どうしても不機嫌そうな声になってしまう。彼女を責めるのもお門違いだし、そもそも一樹とは縁のない話だ。それでも…。

「別に。こっちへ越してきたときに一応連絡先を伝えておいただけよ。あんたがエリックのところに来たっていうから」

「おれのせいなの！？関係ないじゃん！！」

ああ、いつかもそんなセリフを言った気がする。桃子さんはいつだって、自分よりおれのことばかり世話を焼いて。

「バークリーにいるとは聞いてたけど、エリックを頼るなんてよほ

どだと思って」

「おせっかいなんだよ！桃子さんは！！」

二人のやり取りを最初こそ目を丸くして見ていたエリックは、腹を抱えて笑い出した。

「全くもってよく似ているよ。やっぱり君らは本当の姉弟じゃないのかい？」

思わず振り向き言葉を投げ返す。

「冗談じゃない！おれはこんな冷血漢じゃない！！」

「嘘でしょう？あたしはこんな単細胞じゃないわ！！」

同時に叫んだ一樹と桃子は、睨み合ったあと…ついふきだした。

「変わってない、桃子さん。落ち着いて見えるのは表面だけ。中身はおせっかい焼きの熱血おぼちゃんのくせに」

身体の前で腕組みをして、下から睨め付けるのは桃子が本気で怒りを爆発させるサイン。やべっと一樹はエリックの後ろに回り込んだ。

「あんたねえ！？」

ほらほら姉弟げんかはそれくらいにして。エリックは笑いながら一樹の肩を押す。ステージは既に準備を終え、彼らを待っていたのだ。

から。

姉弟なんかじゃない、その言葉は口の中でもたついて消えた。ほんの少しだけ口に広がる苦い味。一樹はほうっと一息つくとも意識を切り替えた。

バンドマンとしての彼へと。

「軽く音を出してみよう。雰囲気だけでも掴めればいいから。今回のセットリストに挙げた曲は…」

「もちろん、全部頭に入れています」

いつものように片手で器用にセッティングをしながら、一樹はこともなげに言った。お情けで金をせびりたい訳じゃない。ステージで三曲をサポートするだけにしては破格とはいえ、ギヤラはギヤラ、契約は契約だ。それに見合うだけの演奏はしてやる。絶対に。

ギプスの境目辺りに楽器の本体を載せると安定することがわかってから、彼は身体をひねってその体勢を取った。右半身がきしんだ音を立てる。無茶は承知の上だ。あとでツケは回ってくるだろう。それでも、それでもなお…今吹かなければダメなんだ、おれは。

そのスタイルに、エリックとメンバーたちは表情を曇らせた。一つには彼の身体を心配する思い。そしてもう一つは、当然のことながら未知数の彼の実力を図りかねていることへの不安。

桃子だけが、痛ましげに一樹を見つめていた。

「取り敢えず、テーマだけをざっと流そう。定番曲からやるかい？」

「いえ、それならまずオリジナルの＜earthly paradise＞を」

地上の楽園と題された曲が何を意味するのか、おそらくそれは「桃源郷」だろう。彼らは桃子を想い、この曲を大事にしたのだと信じなかった。静かで柔らかく甘い旋律。音慣らしにはちょうどいい。さまざまな気持ちを込めて一樹はその題名を口にした。

「OK、じゃあ進行を説明しよう」

「流れにはついて行きます、一度通してもらえますか」

「君抜きでかい？」

まさか。一樹の目が細められる。

ステージに上がってさえいれば、おれには怖いものなんかない。ほらみんながおれを疑い、見下そうとしている。そいつらを驚かせるのも気分いいさ。

見てろよ。

ピアノがタイミング良くAの音を鳴らす。まずはエリックが豊かなその音を響かせる。隣で聴くと、その音色の暖かさが直に伝わってくる。

そこへ一樹は同じ音を重ねた。ぴったりと同期させる。まるで一本の楽器が奏でているかのように。

いっさいのブレもなく、一つの音は厚さだけを増して部屋中を満たしていった。それだけで伝わるものがあるのだろう、メンバーの顔色が変わる。

：まだまだわからない。絶対音感の持ち主なら、これくらいなんてことないだろう。

この曲はコンボで適当に合わせるといふより、構成がわりと決められている。最初のAメロはランペットが朗々と歌い上げる。ライブ盤のCDでは同じメロのリフにテナーが被さってくる。そこはユニゾンで音色の違いを楽しめるように重ねている。

イントロのピアノが優しい和音を押さえると、エリックは伸びやかに主旋律を吹いてみせた。ドラムがブラシでそつとそれを支える。

そう長くもないAメロの終わりで、一樹へと視線が向けられる。一緒に吹けとの合図だ。

彼は、敢えてユニゾンではなく、勝手にオブリガートを付け加えた。誰も何も言わないが、空気がわずかにざわめく。そこはそうじゃないだろう、と。リズム隊は最初苛立ちを隠さずにいた。しかし、一樹の音はオブリでありながら主旋律ととけあっている。

全くエリックと違う動きをしているのに、ヴァイオリンの二本の弦を一緒に弾いているかのような交わり方。素直に言えば：なんて気持ちのいい音なんだろう。吹いている一樹でさえそう思った。この人の音と自分の音色は合う。波長が似ている。これはいける。

一樹の音に触発されて、ピアノはわざと自分の押さえる鍵盤を一つ

離した。音は何も足せばいいというものじゃない。間引いていくことで美しさを際立たせることもある。

そのおかげで広がりを持てた和音の空間へ、一樹の副旋律はさらに変化していった。彼が前もって曲に合わせたリフを作ってきたのではないことがわかる。ベースラインがわずかにもたる。この開放感を生かす為に。

楽園は、聴く者の中でさらにその面積を増やしていくだろう。小さな島だったものは木々を茂らせ、波を誘い、海面をすべるように飛ぶ鳥たちまでもが浮かんでくるように。

各々のインプロビゼーション部分をのぞいて一通り通し終わると、ようやく一樹は左腕に不安定な状態のまま載せていたトランペットを下ろした。この曲は、彼らが得意とするいつものスウィングジャズとは系統が違う。エリックのレパートリーの中でも異色であり、だからなのか人気も認知度も高かった。

スタンドに無造作に楽器を突っ込み、右手で痛む肘部分を押さえる。無意識にやっていたその動作を、桃子には悟られまいと一樹はわざと横を向いた。

「まあ、悪くないね」

年季の入ったピアニストが、苦い顔つきのまま呟く。辛辣な評論家でもある彼がそんな言葉を発するときには、よほど上機嫌なはずだ。そう思ったかったのに。

ベーシストもドラマーも無言、エリックでさえ何も言わずに次の曲の準備をしている。

「あの…僕の演奏は…」

たまりかねて一樹はそう問う。リーダーはちらりと彼の顔を見ると、「ああ、そんな感じでやってくれればいいから」とだけ言った。一樹の勝手なリアレンジには何も触れない。

…受け入れられなかったのか…

冷や汗が流れる。頼れるものを思わず目で探す。桃子と視線がぶつかる。

桃子は…いつものように、あのジャムズで見たような静かな笑顔を一樹に向けた。

それだけで、彼はほっとして下を向いた。目をつぶり今の曲のイメージを反芻する。

ここで聴いているのは客じゃない。おれは素人でもない。

素人扱いなら「上手いなボウズ」と頭をなでてくれただろう。今感じる空気はそれとは真逆。やっかいなヤツを呼んじまったなあという、演奏者としての微かな後悔と微妙な期待感。本番でこいつは何をやらかす気か。

そう思ってもらえたのなら上出来だ。

おれがサポートで入れるのは三曲のみ。それはそうだろう、無名の新人がいわば飛び入りで参加するのだから。

残りにはぎやかなサニーサイドとアンコールで盛り上げる為のペンシルバニア。誰でも知っている懐メロのような曲。クラリネットと

トロンボーンが欲しいところだね。それを管二本でどこまで雰囲気を変えて吹けるか。

さつと通し終えると、エリックは何でもないかのように軽く一樹へと声を掛けた。

「おい、いい気になるなよ。新入り」

口調とセリフのギャップに、自分のヒヤリング能力に疑いを持つ。おれはけなされてるのか？エリックの意図が掴みきれない。

ピアニストが当然のようにファイルを持ち出し、それを一樹に手渡した。

「まあ、要らないとは思うがね。全部頭に入っているそうだから。それが明日のセット分だ」

え、え？状況が飲み込めずに目が泳ぐ。もともと英語なんかわからないところを無理に遣ってるんだ。こいつらはいったいおれに何をしろと？

「ああカズ、君は音のセンスより会話力を高めた方がいい」

一樹にわかりやすいようにか、エリックはゆっくりと簡単な言葉を選んで彼に伝えた。

「あ、すみません。もっと勉強しておきます」

真剣に頭を下げかける彼に、リーダーは笑顔もなくこう続けた。

「明日のステージだが……」

何を言われるのか、身体が硬直する。とても本番には上げられないとでも言い渡されるんだろうか。一樹は息を飲んでエリックを見つめて続きを待つ。

こほんと咳払いをすると、老練なトランペット奏者はこう付け加えた。

「全曲サポートに入ってくれ。但し、こちらも手加減はしないからな。そのつもりで」

ぴきりと一樹の顔が固まる。

…やり過ぎなのよ、ホントにあんたはバカなんだから…

桃子の心の声とため息が聞こえてきそうで、怖くて振り向くことさえできずに、彼は右手で頭を抱えた。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

粹な女 (Sophisticated Lady)

#23

バーではなく、ホテルのラウンジで一樹は桃子と向き合った。酒も飲ませてもらえないのかと文句を言ってみても、あの涼やかな瞳で見返されるだけ。

「いつから病院に通っているの？」

その話は終わり、もう治ったって言ったじゃん。拗ねた口ぶりは当分止みそうにもない。そんなことより、訊きたいことはたくさんある。母親のこと、エリックのこと…そして、二人の関係を知らないながらもごく当たり前にジャムズへと迎え入れた勇次と桃子の思い。

けれど、いざ彼女を目の前にすると…何一つ言える言葉が見つからない。コーヒーを前に黙り込んでしまった一樹に、桃子はふっと息を吐いた。

「治療費がないなんて。どうしてあたしたちに言わなかったの？」

言えるはずもない。それどころか頭にさえよぎらなかった。同じアメリカにいたことすらも。

シアトルは遠い。キミエの言葉が思い出される。

「まあ、その前に頼るところはあったでしょうに。お姉さんとか実家とか」

「…やっと出られたんだ、あの場所から。姉ちゃんがいなければ息もできない収容所みたいな箱から」

「一樹…」

「今さらどんな顔して何をしゃべればいいんだ？ あんな緊張する家が家族って言うの？ 冗談じゃない！ あんなところ、戻りたくない！」

「それで…」

桃子が一息つく。甘ったれと罵倒されるか、鼻で笑われるか。桃子にはわかりっこない。おれにだってあんたたちの家族が不思議に見える。

作り物の笑顔。

変だよね、赤の他人のおれがいた頃…確かにジャムズには神原の家には一家団欒があったのに。

「それで日本から逃げてきたの？」

このセリフからは責めるような感情は伝わってこなかった。その柔らかに怯えて一樹は顔を上げる。

もっと毅然と冷静に冷たくあしらって欲しいのに。

「冗談でも例えでもなくて、本当に世界中どこへ逃げようと高橋の名はついてくる。息子なんかいたのか、弟？ 知らなかったとね。エリックのポスターを見かけて、ようやくあの人たちのいないところへ逃げられたと思ったら、いきなり桃子さんまで現れた。カンベン

してくれよ」

ラウンジの気取ったピアノがカデンツァを奏でる。会話は途切れた。重厚な沈黙。

「……ねえ」

聞こえるかどうかほどのかすかな呟き。訊きあぐねていた問い。桃子の視線がピアノへと逃げる。

「知ってたの？ エリックがお母さんとその、えつと…」

「ああ、再婚したこと？ 最初からね。なあに？ そのことでまさか気を遣ってたの？」

視線は動かぬまま。一樹の方を向こうともしない。

「エリックはマスターと仲良さげだったし、てっきり親しい友人だと思ってたんだ。だからジャムズの名前を出せば、あれだけのプレイヤーなら金でも借りられないかって」

さしあたっての一万ドル。これからどれだけ掛かるかわからない治療費。彼に借りたところで返せるだけ自分が稼げるとも思えなかったのが本音だ。結局は姉に泣きつくことになったのだろう。それが口惜しいと思っていた。

でもそれだけのはずだったんだ。まさかそこに、キミエという女性

がいたなんて。

「何で平気だったの？おれがジャムズにいた頃、何度かエリックも出演したよね。お母さんはもうその頃……」

「そうね、とうにエリックとは暮らしてたわよ、事実婚ってヤツ？まあさすがに店に顔を出すことはなかったけれど」

「何で平気だったって訊いたんだ！？ちゃんと答えてよ！」

静かな空間に日本語が響く。幾人かの客が振り向くのを感じた。声をひそめて一樹は桃子の整った横顔を睨みつける。彼女はゆっくりと、こちらを向いた。

「薄情なのは親譲りだから」

複雑そうな苦笑い。もともとエリックと父さんはただの知人と言うより本当に友人同士で、演奏抜きで日本に何度も来ていたのだから、と。

「あの店というかビルはもともと母方の家のものだし、共有名義とはいえほとんどは母の持ち物だったの。でも生活はかつかで、母が日本の大学でピアノを教えていた収入でやっと食べていけたのかな、あの頃は」

長いことあの家にいて、桃子自身の話なんかほとんど聞かなかった。聞こうとしなかった。いやそうじゃない、彼女は何も話す気なんかなかったんだ。

遠く離れた距離で均衡を保っていた奇妙な家族。それは高橋の家だ

けじゃなかったのか。

「母はジャズに興味なんか持ってなかったし、父は…家族よりも音楽を優先した。自分では演奏できない分、ミュージシャンたちとのつながりを大切にした。生活の苦労なんか何でもなかったと言ってたわ、母は。それでも…心が離れたら耐えられないことってあるのよね、きっと」

遠い遠い物語。桃子自身の家族の話だというのに。

「音楽じゃないところで惹かれ合ったの？ マスターと、その、キミエさんって」

言いあぐねて桃子の言葉が淀む。逡巡が見て取れる。言いたくないのなら言わなくていい、と言えるほど一樹は大人にはなれずにいる。そっと視線を元に戻すと桃子は淡々と話した。

「あの曲が…きっかけだったのかも知れない」

「あの曲？」

幼なじみで会えばケンカばかりのクラシックのピアニストとジャズマニアは、あの日、同じコンサート会場に足を運んだ。

「『東京組曲』の初演はね、当時の音楽ファンにとっては大事件だったって後から聞かされたわ。父さんから何度もね」

ジャズの要素を取り入れたクラシック曲は多い。いや逆だ。クラシ

ツクは先を征く。ジャズはそれを常に追い求め、過去へと戻り、また先を争うように走り出す。

それでもなお、あの曲はジャンルの壁を軽々と越え、数多くの見知らぬ人々を引き合わせたのか。

立ちは大なる大きな敵。おれは高橋孝一郎のあの曲さえも越えて、この世界で生きていかなければならないのか。

家族よりも音楽を優先し、妻が離れていくのを見ているしかなかったマスター。至るところでそれぞれの家族の物語が綴られてゆく。じゃあ、神原の家族にとっておれって…何だったんだろうな。

どっちつかずの、根っこを失ったかつての少年は、今もまだ音楽の中をものがきただよっている。

「寂しくは…なかったっての？桃子さん強いから」

自分の弱さを突き付けられたような気がした。いつだってしがみつくものを探して彷徨うのはいつだっておれだけなんだから。

か細い声に、桃子はそっと腕を伸ばした。一樹の額に軽く手を当てる。

「熱は…なさそうね。早く休んだ方がいいわ。本当ならステージになんか上げたくないくらい顔色悪いってのに」

「話を逸らすなよ！」

その手を乱暴に払いのける。ガキ扱いするな。弟扱い、するな。手の感触のせいで熱を帯びたかのように顔がほてる。バカバカしい。一樹の声が大きくなる。

「キミエさんに行かないでって言えば良かったんだよ！！言えたかどうか？その頃の桃子さんなら！！」

珍しく桃子が寂しげな表情を浮かべた。叩きつけた言葉を後悔する。おれは神原の家族じゃない。逢ったこともなかった桃子の母親とは何一つ関係ないはずなのに。

「もともと、バラバラだったから」

「えっ？」

「母はピアノを教えることに没頭して生活を支えた。父は好きな音楽にのめり込んだ。多くの有名ミュージシャンに慕われたのも、別に自慢しなかった訳でも何でもない。敷居が高いと思われていたジャズを、それも第一線で活躍している一流の音をあの店で気軽に聴かせることだけに専念してた。あたしは…」

それを悲しいともおかしいとも思ってなかったんだわ。他の家庭を知らなかったから。

桃子の弦きが胸を刺す。ああそうだ、初めて逢ったときって桃子でさえ二十歳を越えたかどうかでしかなかったはずなんだ。

店を支え、おれなんかを抱え込み、それでもいつだって冷静に微笑んでいた。

「そう考えると不思議ね。父さんと二人になってからの方がずっと

家族らしい生活だったし、あんたがいてくれたおかげであの家初めて温かな空気が流れたんだって。何だかそう思うわ」

じゃあ、今は？そう訊くだけの勇氣は一樹にもなかった。異国で篠原と二人で暮らす。それを選択したはずの桃子。幸せであって欲しい。幸せになって欲しいとだけ願う。それは一樹の本心には違いないのに。

彼の沈黙をどう捉えたのか、桃子は少しばかり笑った。

「店が心配？大丈夫よ、誰かがいなくてもみんな何とかやれるものだって。あたし一人がすべてをやっていた気になっていたけれど、そんなことないんだなってやっとわかったから。父さんもようやく、昼間から働いてるって」

訊きたいことはそれじゃない。話したいことはそんなことじゃない。いつもそうだ、この人は全部わかっていながら話を逸らす。おれを家族と、弟と決めつけて。

「さあ、そろそろ」

言いかけた言葉を遮るように一樹は立ち上がった。嫌われる前にとっとと帰るよと憎まれ口を叩いた。怖かったから、訊くことも何もかもが。

篠原との生活を話す彼女を見たくない。広い家で一人待つ暮らしの寂しさを聞かされるのもゴメンだ。もう、これ以上：口も利きたくない。

頼ってしまいそうだから。

背中越しに何か言うのが聞こえた気がした。それを無視して一樹はホテルの正面玄関から足早に出て行った。

まだそんな時期でもないだろうに、外気は冷たく、彼の身体を刺すみたいにぶつかってくる。まるで一樹の心を内側から凍らせていくかのように。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

昔の想いのまま　　That old feeling

#24

その夜のウォーリーズは盛況だった。もちろんほとんどは年季の入ったエリックの演奏を聴きたいボストンのジジイども。多少事情を知る者は、無名の新人である店生え抜きの日本人が絡むということ聞きつけてきたのだろう。

それがマリコの弟であるというのは、皆が何となく暗黙の了解で伏せられていた。あのブライアンでさえ口をつぐんで面白くもなさそうな顔でシェリルと並んで座っている。

洋輔たち、大学の連中もこちらを心配そうに伺う。そして……。

ど真ん中の前から二つ目のテーブルには、同僚らを従えた梨香がグラスを手に談笑していた。彼女なりの配慮か、こちらを向くそぶりさえ見せない。ただ、律儀に見には来てくれたのだろう。それは素直に嬉しかった。

楽屋といっても別の部屋がある訳じゃない。袖から客席がこれだけ見えるということは、おれの姿も丸見えなんだろう。あがつてる？まさか。自分がどんどん冷静になっていくのに苦笑しながら、一樹は片手で器用に楽器の調整をした。

ぱらぱらとリズム隊が立ち位置へとつく。途端にわき上がる大歓声と拍手。懐メロと揶揄されようが、やはりエリックグループの名は浸透しているのだ。

スタッフにぽんと背中を押されて、一樹はステージの中央へと向かった。センターを取るのはおれじゃない。場をわきまえていくぶんずれた場所へと立ち、手を挙げる。

若い声が少しばかり上がり、それ以外はいかにもおざなりな拍手が起こるだけ。それが今の自分の評価なのだと、一樹はそのまま受け止めた。

はん。この一ステージでどこまで評価を上げられるか。やってやろうじゃねえか。

彼は彼なりの方法で、この公演を成功させる。誰にも言わずに秘めている思い。

メンバーたちにアイコンタクトを取ろうとするが、彼らは最初に出会ったときのような柔和な表情などかなくなり捨てていた。

育ててやろうという甘い考えなどないらしい。やれるものならやってみろ、か。よく言われたな、どこでも誰からも。

さあ、ここからは真剣勝負だ。音楽は楽しむ為にある？まさか。客を楽しませる為にあるんだ。魅せる格闘技とどこが違うのか。

一樹がギプスの上に楽器を置くと、言葉にならないざわめきが広がる。同情点なんか要らない。おれは音だけで闘ってやる。

桃子の姿を目で探す。客席にはいない：らしい。何しろテーブル席はすべて埋まっているし、後ろには立ち見がぎっしりの状態だ。ここから彼女を探すのは無理、か。

なかなか出てこないエリックの方を見やる。

彼は桃子の頬にエアキスを送り、彼女は苦笑いでそれを受け止める。彼女は袖でずっと見ているつもりなのか。複雑な感情もなく…。

おれには理解できないのと同じように、桃子にもおれの家族のあり方は不思議に映るのだろう。平凡な生活と思いこんでいるのは案外当の本人たちだけなのかも知れない。

家族の数だけ家族の形がそれぞれある。受け入れられるかは、また別の問題なのだろうけれど。

歓声が大きくなる。エリックが登場したのだ。既にリズム隊は音を鳴らし始め、近寄ってきたエリックは一樹にまで頬を寄せた。声援に冷やかしの声が混じる。

オープニングは当初の予定通り「サニー・サイド・オブ・ザ・ストリート」。

…今まで話す人もいなくて一人ぼっちだったけれど、君と出会ってからは悩みなんて吹っ飛んじまった。先のことばっか考えて暗い顔してたってしゃあないさ。人生なんて笑い飛ばして暮らしていこうよ…

有名なヴァースの部分が頭に浮かぶ。そうだね、先のことなど分らない。今を楽しめれば最高だ。先に待ち受けるものがどれだけ恐怖でも、感じなければいい。

そんな意味を持つこの曲を、奇妙な縁で結ばれたエリックと吹く。えにし

複雑な想いはすべて飲み込み、一樹は演奏者モードに自分を切り替えた。

のどかなイントロと陽気な主旋律を、ユニゾンで力強く、ときにはわかりやすいハモリで重ねつつ無難に吹く。これはあくまでもエリックのステージ。客が求めるのは彼の音であって、鋭く決るようなプレイじゃない。

重々承知はしていた。だからこそ最初は抑えた。おれのラッパなんか、口ほどにもない凡庸と思われるだろう、客にもメンバーにも。それでいい。

メロが終わってエリックがソロを取る。グラスを重ねる音がフラッシュのように音へと捧げられる。皆、このご機嫌な音楽を愛しているのだ。

リズム隊もリラックスしてリーダーを支える。そこにおれの居場所はない。一樹は全身をセンサーのようにしてエリックのアドリブに聴き入っていた。

彼のソロが終われば、お情けのように一樹にもソロ部分が与えられる。わずかツーコーラス。冗談じゃない、誰が二つで終わらせるかってんだ。

エリックが終盤へと近づく。その気配を感じて一樹は口元へとマウスピースを近づけた。視線が集まりつつあるのを痛いほど感じる。さあ、エリックほどの奏者が選んだサポーターとはどんなヤツなのか、と。

ドラムスの引っかけを掴んで、一樹はアドリブソロを吹き出した。最初の一小節で既に気づいたのはエリックだけ。隣で固まっているのが伝わってくる。

ワンフレーズ終わる頃にはリズム隊も異変を感じていた。当の一樹は平気な顔で吹き続ける。

そろそろ、勘のいい一部の客も気づき始めたか。心の中でにやっと笑う。

まともに吹いたってどうせ聴いてはもらえまい。一樹はついさっき聴いたばかりのエリックのソロを、そのまま忠実に再現してみせているのだ。

基本通りのスウィングで、使われる音はオーソドックスで、安定感のあるニュアンスまでも完全にコピーして。

ざわめきがどんどん広まってゆく。潮時か、と思った一樹は完コピーのままオクターブ上げて演奏し出した。

皆が息を飲む。柔らかかのどかなエリックのインプロビゼーションに、鋭さと華やかさが加わる。

げげんそうな当惑は、歓声へと変わってゆく。リズム隊も覚悟を決めたようだ、とてもツーコーラスで終わりそうもない。

全くのコピーをある程度吹き続けてから、一樹は自分のメロディーを吹き始めた。フォービートというよりツーと言っているほどの底抜けに明るいスタンダードジャズは、彼の手によって自在にビート

を変えていった。一樹のそれはエリックの持つグルーブ感とは全く違うのに、頑ななまでに崩そうとはしないリズム隊とぶつかることなく、彼のトランペットはそれらの波をすり抜けてゆく。

十六分音符が拍と拍とを埋め尽くす。なのに窮屈感はない。スピード感とは無縁なはずの曲がスリリングな現代曲のように生まれ変わる。

ふっと、一樹が音を緩めた。もちろんバックは聴き逃すことなくその音を受け止める。

緊張が解けて柔らかな空間が戻ってくる。息を詰めるように聴いていた観客が、思わず大きく息を吐く。

そして、一樹がピアノへとソロを明け渡したときには、皆が一斉に立ち上がって惜しめない拍手が送られた。

ピアニストのホームーは、自分のスタイルを壊すことなく堅実なプレイに徹しようとしていた。しかし、日頃からこのグルーブを聴き慣れている者にとっては、彼としては異例なほどの過激な音を挟み込んでいることに気づくだろう。

穏やかなコードの構成音ではないテンション・ノート。それらが時折、怒りをぶつけるかのように鳴らされる。

一番欲しいと思われる、そのタイミングで。

耳の肥えた客らがそのたびにわあっと賞賛の声を上げる。

音が巡りに巡ってテーマに戻ったとき、一樹は涼しい顔でエリックのいつも通りのスタイルで吹いてみせた。

内心をおくびにも出さず、ベテランはそれを鷹揚に受け止める。

最後の吹き伸ばしに軽く装飾を加えるリーダーに、一樹は敢えてロングトーンで支えた。

このバンドはあくまでもエリックのもの。今さらこれだけ焚きつけておいて、とも自分でさえ思ったが。

一曲終わって大きく息を吐く。客は若手の意外なプレイに大盛り上がりを見せている。さあて、これだけ暖めておけば十分だ。ここからようやく対等におれの音を聴いてもらえる。

冷えたステージでまともに自分のスタイルを出せば、耳も貸してはもらえまい。かといってエリックの音をなぞるだけじゃ自分が納得いかない。

おれはサポートとして入ったとはいえ、彼の陰に身を潜めているつもりは全くない。それじゃギャラに見合うだけの演奏などできやしないんだから。

エリックがMC用にマイクを引き寄せる。ボストンへの客に対してのリップサービスと感謝の言葉を。

そして…。

「今夜のステージは、小生意気な若造に世界を知らせてやろうと思
ってね」

そう言い放つと客席に向かって器用に片目をつぶった。どっと笑い
が起きる。ひとりひとりの名を紹介したあと、一樹はぐいと腕を引
っ張られた。

「オン・トランペット、我々にとって非常に目障りな奏者に盛大な
拍手を！ k a z u ! !」

目障り！？その言葉に一樹は苦笑いした。そして、いくぶんホツと
した。

最初は同情だろう。そして桃子の存在がステージに立てる大きな理
由だったろう。だがそれは、一樹の演奏によって意味を塗り替えら
れた。手加減はしないとされたそのときから、少なくとも曲が流
れている間はおれたちは対等だ。

次の曲は、昨日さらった「地上の楽園」。

ここではあくまでもオブリガートに徹して、美しい和音を響かせて。
音色だけで聴かせてやる。エリックの音がもつとも美しさを発揮で
きるよう。

そして、息つく暇もないくらいのスタンダードナンバーに、一樹は
正攻法でソロをとり続けた。ジャムズで聴いたあの音たちと、まだ
わずかではあるけれど大学で学んだ理論に基づいた音を使いながら。

一樹の真摯な音に触発されて、グループの面々も緊張感を保ったま

まの演奏を続けた。誰かが挑発する、それに対抗する。一音でも聴き逃すまいと。客にとっては心地よい異種格闘技のように見えたのだろう。歓声は大きくなるばかり。

取り敢えずのラスト曲で、一樹はメガネをかなぐり捨てた。汗が目に入る。一瞬だって気が抜けないのはこっちなんだ。彼らのグループは長年培われてきたもの、おれはたった一人で無謀な闘いをしかけている。

ふいに襲う目眩。酸素が足りない。もっと！もっとおれに酸素をくれよ！！

彼もステージ経験は多い。息を吸いすぎれば、一時的な過呼吸となつてぶつ倒れるのもわかつている。

まるまる十六小節を犠牲にして自分のブレスを整える。構え直した楽器が汗ですべる。

「……！？」

事情を知る者は息を飲んだだろう。ギプスでかろうじて支えられていた楽器が傾いだ。彼の身体もわずかにぶれる。

しかし一樹は右手でしっかりとランペットを掴み直すと、左腕をだらりと下げた状態のまま、右手だけで高らかにハイトーンを吹ききった。

アンコールの声と拍手が鳴りやまない。

限界…か。一樹は楽器スタンドにラップを突き刺すとMC用マイクを奪い取り、わざとたどたどしく片言の英語で客をあおり立てる。彼の意図を理解したドラムがカウントを出す。曲は始まり、それはいつもののかなエリックの音とバックキングの温かさに包まれて、ようやくステージは緊張から解き放たれた。

「H i t i t ! s a y ! P e n n s y l v a n i a ! !」

大声で一樹は叫んだ。合っていようと合っていまいと、たとえばスラングだろうと気持ちが伝わればいい。

ノリのいい客らは、大声で応えを返す。お約束のように行儀良く、というよりはまるでロックバンドのライブのように。

「s i x , f i v e t h o u s a n d ! !」

実在したホテルの電話番号でグレン・ミラー自身がプロポーズしたという、粋な逸話を持つこの佳曲は当然ミラー楽団のもの。

それをさんざんあおり続け、盛り上げる。吹けないのなら別の手がある。ステージに上げれば怖いものはない。身体が自然と動く。どうすれば楽しんでもらえるか、どうすればのせられるか。どうすれば盛り上がるか、どう……。

客席のど真ん中でもみくちゃにされていた一樹は、とうとうセンターのエリックからマイクで怒鳴られた。

「こら若造！調子に乗るな！早く帰ってこい！ハグができないじゃないか！！」

笑い声とともにステージへと上がった一樹は、エリックから思い切りハグ：というよりがっしりと掴まれた。

周りのメンバーも集まってくる。今度は彼らから髪をぐしゃぐしゃにされる。

「こいつは野放しにしておくとか悪いからな。さっさと潰しておこう！」

ベースのギルバートが長身の一樹のさらに上から頭をこづいた。皆の笑い声ははじける。

最後にもう一度、エリックは彼をぎゅっと抱きしめて呟いた。

「君がトウコの弟なら、カズは私の息子だ」と。

一樹は目を見開き、エリックを見つめた。ああ、音はこうして人をつなぐ。例えそれがひとときの幻想であったとしても。

(つづく)

i
t
a
g
a
w
a

A
l
l

R
i
g
h
t
s

R
e
s
e
r
v
e
d

#25

姉の選んだベッドはとても一樹の趣味に合うはずないパステルピンク。替えるだけの資金もなくいつまでも同じ。その上にぶっ倒れるように眠りについた。服のまま。朝が来ても未だに動くことさえできずにいる。

ライブ後のごたごたにまぎれ、桃子は搬出の間に一足先にシアトルに帰ったと聞かされた。

大事なことなど、何も話せなかった気がする。大事なこと：そんなもの何もないのに。

ライブがはねたらビジネスライクに契約を確認して、エリックらは宿泊先に帰っていった。明日は移動日で、別の都市へと行く旅の繰り返し。さすがにこの歳だとメンバー全員が体調を整える時間を取らないとね、と苦笑いを残していく。

一樹の方こそ体力の限界だった。帰りがけにようやく梨香をつかまえて「来てくれてありがとう」と手を握った瞬間、彼女の顔色が変わる。

明日、予約をねじ込んでおくから。押し殺したように梨香が囁く。それに無理やり笑顔を向けて、一晚寝れば大丈夫だよと強がりと言った。

大丈夫なもんか。吐き気と寒気と、何より身体中がきしむ。無茶をした左腕は既に感覚すら失ってしまっていた。

おれの担当医は病院の予約を入れると言っていたが、とてもたどり着くことさえできないだろう。指一本動かすだけの気力もない。

昨夜は確かに何かが変わったように思えたのに、目覚めてみればごく普通の日常が待っていた。いや、もっと酷い。たった一晩のステージでボロボロになるなんて。

右半身は捻るようにして吹いたせいであちこち筋肉痛になっているし、いくらギプスをしているからと言っても、左腕はがんがんに動かしだ。治りかけのリハビリだと言い張るにはいくら何でも激しすぎるだろう。

痛い…いたい。

声さえ出せずに唸るばかり。これが現状なんだ、認めろよ。連チャンでステージが入っていたらどうする？これが本当にツアーサポートだったら？仕事を受けて途中でキャンセルすれば次はない。エリックが吹けなければライブは中止になるが、サブの代わりはいくらでもいるんだ。

頭の中をいろいろな思いが交差する。今の一樹にできることは痛む腕を押さえなくてうずくまるだけ。

やれるはずだ、おれはまだ吹けるはずだ。信じたい気持ちと…限界だろうと囁く声。枕元に置いたスポーツドリンクで鎮痛剤を流し込む。怪我から復帰したアスリートなどいくらでもいる。プロのスポーツ選手を見ろよ。どこが違うんだ？

つかの間の微睡みを切り裂くようにドアフォンが鳴り響く。

「つう」

押さえられるものなら頭を抱えたいほどの頭痛までついてきた。それでも習性で受話器に手が伸びる。

「……Hi」

「ここを開けなさいよ！何で病院に来なかったの！？」

梨香の、声？こんな姿を見せたら入院させられかねない。早く帰ってくれと小声で頼み込む。

「いいから早く。やせ我慢してる場合じゃない！！」

怒鳴るなよ、病人相手に。それも担当医がさ……。これ以上騒がれてもたまらない。重い身体を引きずるように持ち上げ、鍵を開ける。飛び込むように転がりこまれた。

下から見上げる梨香の表情は、医師としての心配と言うよりもあまりにも哀しげだった。

肩を玄関の柱に持たれかけ、苦笑いを返す。

「何？そんなに酷い顔してる？…おれ」

「……どう、して？」

梨香の言葉の意味を図りかね、けげんな目で聞き返す。総合病院の担当医が往診なんて随分と親切だねと減らず口を叩こうとした一樹に、彼女は顔を曇らせた。

「そこまでしなくちゃ、ダメなの？」

呟くような声。何かをこらえているみたいに噎れている。なんで梨香の方がそんなに辛そうなのさ。

「音楽なんて何も知らない。でもライトを浴びるカズは、別の世界の人だと思えるほど素敵だった。だけど、痛くない訳がない。あんな無茶をしてまで、ステージに立たなきゃいけないの？これだけの病気を抱えてるのに……」

「抱えてるから何？吹いちゃいけないとでも？まだやれる、まだ吹ける。下手なヤツは来るなど言われるまでは、おれは演りつづける。みんなそうだろ！？みんな何か抱えて、それでもしんどくってても、歯を食いしばってあの場所をキープするんだろ！？違うのかよ！！」

大声のせいか、血の気が引くように視界が暗くなった。ふらつく身体を何とか立たせたまま、それでも耐えきれずに一樹は目をつぶった。

肘を膝を腰を、長年の酷使で痛める野球選手なんかざらだろ？大けがで手術をしたってすぐにリンクに戻るスケート選手。ハードな筋トレをベッドの上で再開するアスリートたち。

彼らと何が違うんだ。長く選手として活躍したいから手術を選択する。故障箇所を上手くフォローしつつプレーする。変わらない。それで延びる期間がたとえ一年であっても、彼らはそれを受け入れるだろう。

ただ、続けたいから。

ぶり返す痛みを悟られまいと、一樹はなるべく平静に言葉をつなげた。同情なら要らない。昨夜の盛り上がりは腕のギプスとは関係ない。みんな音だけを聴いてくれた。そう思っていたっていいだろう？

医師としての梨香を見るのが辛かった。忘れていたかった。自身の持つ病氣のことなど一切考えず、一樹の音楽を受け入れてくれる場所の余韻に浸っていたかった。

なのに年上の研修医は、おれを患者として悲しげに見るんだ。頼むから放って置いてくれ！！

だから……病院になど行かなきゃ良かったんだ。

日本にいれば、主治医の大河原の顔を見なきゃならない。定期検診とか何とか言って、すぐにあいつもおれを病院に縛り付けたがる。挙げ句の果ては、いつだってラッパを取り上げられる。治療だ入院だ安静にしろ、だ。もうそんな世界から、逃げ出したかった。

そう、いつだっているんなものから逃げ回るだけの生活。おれはただステージの片隅で、吹いていられればそれでいいのに。

膝から崩れ落ちるように、一樹は床へへたり込んだ。それ以上立っているのは無理で、自分の体調を取り繕おうにもさすがにきつすぎて。

梨香は手慣れた様子で介助しながら、彼をベッドへと運んだ。身体を横たえても息が苦しい。そんな一樹の頭を、彼女は本当に幼い子どもへするかのようになで続ける。

「ゴメン。あたし一人の権限じゃ本当の往診をする訳にも行かないし、強い鎮痛剤を打ってあげることもできない。だからせめて…」

「それって、あなたの…子どもの…代わり？」

切れ切れに、それでも一樹は言葉をぶつけた。梨香はおれを見てるんじゃない。残してきた息子を思いながら、重ね合わせながら、彼女なりの贖罪をしているだけに過ぎない。

事情は分からないけれど、そんなニュアンスが伝わってくる。だからこそ苛立ちをぶつけたかった。

ちゃんとおれを見ろよ！じゃなきゃ、おれに構うなよ！！

この間の勢いなら怒り出すと思ったのに、梨香はもっと悲しげに一樹を見やるだけだった。

「車で来てるから、予約枠をもう一つ何とか空けてみる。このまま一緒に」

「行かない。病院なんか行かない」

「カズ！」

寝たら治る、いつものことなんだから。自分の身体は自分が一番知ってる。見習いの研修医なんかに偉そうに言われたくない！

梨香は今度は背中をそっとさすり始めた。不思議と痛みが少し和らぐ。それが介護の技術なのか…人の手の温かさのせいなのか。一樹にはわからなかった。

「ねえ、もっと自覚して。あなたの疾患は多発性で、いつどこに良性腫瘍ができてもおかしくないし、それが悪性化することだって珍しくない。説明は聞いているでしょう？お願いだから無茶な生活は止めて。少しでもリスクを減らして、いい状態をキープできるように」

それで少しばっか長く生きたところで、どんないいことがあるの？聞き取れないほどの掠れ声。音楽がやれなかったら、生きてる意味なんてない。

「…本気で怒るわよ。あんたがもうちょっと気を遣って生活するだけで、確実に生存率は上がるってわかってるのに」

ねえ、じゃあおれは…明日生きているか、来年の今は生きているのか、それすらも確率にしばらくられてるって訳？

誰もが無条件に無意識に信じている確実な未来を描くことも……確率の問題なんだね。多分に分の悪い、さ。

一樹の言葉に、梨香は手を上げようとはしなかった。ただ切なげに背中へと手を当て続けた。

梨香。

おれはあなたの息子じゃないし、息子の代わりにはなれないよ。どんな子かも知らないけど。

母親から得られなかった温かな手は、こうしていつだって赤の他人からしかもらえない。

おれはバカだから間違えるんだ。この感情はあくまでも母親の愛情を求める甘ったれたガキの想いなのか、それとも：異性を求める愛なのかを。

わかんないよ、人を愛することってどういうものかなんて。そばにいて欲しいと思うのは、ただ寂しいからなのか。

一樹は無理やり右手を伸ばした。彼女の顔を引き寄せ唇を重ねる。わからないんだ、本当に。こうすることでしか愛情を確かめたことがないから。

一樹の身体のどこかが泣いている。それが胸の奥なのか、どこにあるのか、それすらも知らぬまま。

寂しげな瞳をようやく閉じた梨香が応える。やっと安心したのか、一樹の手から力が抜け、気を失うかのように眠りについた。

(555)

北川圭 Copyright 2009-2010
itagawa All Rights Reserved keik

主よ、人の望みの喜びよ J e s u s , J o y o f M a n ' s D e s

☆作中の音楽大学は実在のバークリー大をモデルにしていますが、カリキュラム等についてはすべてフィクションです。あらかじめご了承ください。

主よ、人の望みの喜びよ (Jesus, Joy of Man's Desiring)

#26

当分実技は受けられないだろうということで、一樹は転科届けを提出してみた。カリキュラムが重複するものは単位に加算されるということだったので、ディグリー（大卒資格）が取れるようにとのロマーノからの勧めがあったからだ。

作曲科。

今までも簡単なホーンアレンジをすることもあれば、スタジオワークでその場で頼まれることも多々あった。CDクレジットには書かれていない仕事などいくらでも実際にはある。

けれど、彼にとって本来は近づきたくもない分野。あの曲が耳から離れない。

『スイート・オブ・トキオ』：孝一郎の代表作は今でもクラシックとジャズの世界では高い評価を得続けている。

現実を考えろ。ここでのんびりと回復を待つだけの時間があるかどうかともわからないのに。少しでも単位を稼げば、自分にとってそっちの方が得策だろう。

一樹はそう自分に言い聞かせると、手続きの為に再びロマーノの元を訪れた。

「どうだい？調子は」

にこやかに迎え入れてくれた担当教官は、一樹へと穏やかな声を掛けた。

「ありがとうございます。来週にはギプスも外れ、リハビリを本格的に始めると言われています」

ぎこちなく、それでも笑顔で彼は応えた。内心の複雑な想いを閉じこめるかのように。

腕の怪我はすぐに治る。いつでも吹ける。今だって仕事は続いている。なのに作曲科への転科はどうかと告げた目の前の恩師に、一樹は何も言い返せなかった。

「曲のアナリ―ゼだけではなく、実際に書いてみるのは非常に勉強になるよ。君の才能への大きなプレゼントだと思ってもらえたら」

いつだって微笑みをたたえたロマーノは、安心させたいのか安心していいのか、そんな言葉を付け加えた。

一瞬息を止め、一樹は目をつぶった。言うつもりもなかったセリフがこぼれ出す。

「奏者としての才能がないから、見限られた……ということでしょうか」

ロマーノの顔を見る勇氣もない。もしその瞳が気の毒そうに歪められていたら、と。

教官はそっと彼に近づくと肩を叩いた。こわごわとまぶたを開ける

一樹に、座りなさいと手を指し示す。

落ち着かぬまま、年代物のソファに腰を下ろした。

「君は……何の為に楽器を演奏しているのかな。どれが正解という訳じゃなくて、君自身の答えが聞きたい」

以前にも問いかけられた。何の為。ただ、吹きたいからではいけないだろうか。何かしらそこに理由が必要なんだろうか。理由のない者は、表現者にはふさわしくないと断罪されるんだろうか。

一樹には答えることができなかった。否定されるのが、はっきりとあきらめろと言われてしまうのが怖い。思わず目を逸らす。

「非常に高い演奏技術を持ち、音に対して瞬時に反応できるだけのセンスを持ち合わせている。君は十分に演奏家としてやっていけるだけの力がある」

ロマーノの言葉が上っ面をすべっていく。彼は世辞なんか言わない。それもわかってはいるけれど、その先にはきつと「しかし」という接続詞がつくはずだ。唇を噛みしめる。

おれに足りないものを突き付けられる。もう辞めろと告げられる。どこへ行っても何をして。耐えられるか、耐えきれるか。一樹は心を堅くしてそのときを待つ。

「しかし」

もうそれ以上聞きたくない。ここを飛び出してしまいたい。何も聞かない聞こえない聞きたくない！！

ロマーノはいったん言葉を切ると、カップにコーヒーをついだ。そつと一樹の前にも一つ差し出す。黙ったまま、彼は教官を見据えた。「君の音は、いつだって何かと闘っているように聞こえる。力でねじ伏せ、相手を完膚無きまでに叩きつぶし、一方的に勝利宣言をするまでは許さない。それは何故だい？」

思っても見なかったセリフに、一樹は目を見開いた。そんなつもりで吹いたことなんてない。いつだって楽器は＜おもちゃ＞、音楽は＜遊び＞、自分の居場所を作ってくれる為の＜ツール＞だと信じていたのに。

「姉や：父とは違う。そう仰りたいのですか？」

声が震えていたかも知れない。隠し通すだけの気力もなかった。

ゆっくりとロマーノは首を横に振る。そうではない、と。一樹には理解できなかった。この大先輩は何を自分に伝えたいのかが。

「コウイチロウは、我々にとっても憧れだね。『トキオ』を初めて聴いたときは衝撃的だったよ」

誰からも言われるさ。その先は聞かなくてもわかってる。それに比べて息子は、と。

「彼とは幸いにも共通の知人を通して交友があってね。私にとってそれは誇りでもあるんだ。その偉大な作曲家も：息子のことになる」と、ただの一人の父親なのだと思わされたよ」

少しばかりの苦笑い。何を言い出すんだろう、と一樹に浮かぶのは当惑の表情だった。

「大学で音楽を学びたがっているんだが、これ以上息子に…楽器を吹かせたくはないんだと頭を下げられた」

「その結果が、レベル1、です…か」

結局は父親の意のままにすべて事が運んでいたという訳か。最初から逃げられなかったんだ、どこへ行こうと。

だがロマーノは笑みを浮かべたままだった。

「私は私の判断で君を1のクラスに入れた。一つには君の実力を君自身でわかって欲しかったこともある。どこへ行っても断られたと言ったね、それが客観的な評価だ。なぜか君は自分の演奏に対し、自信があるように見えて信じ切れていないところがある。そう感じたんでね」

ゆつたりとカップを口に運ぶ。反対に一樹の前に置かれたコーヒーは、手もつけられぬまま冷めてゆく。

「もう一つの理由は、ここに集う演奏家の卵たちがどんな思いで音楽に取り組んでいるのか、それを知ってもらいたかった」

どんな思いで。彼らは技術なんかほったらかしで適当でいい加減で、それでも心から音楽を愛し。下手だから知らないから技術がないから学びに来ているのだと開き直る。
眩しいくらいの誇らしげな顔で。

ここだけの話だがね、いたずらめいた口調でロマーノは言う。

「コウイチロウは、演奏家ではなく別の道で食えるようにしてはもらえないだろうかと、それはそれは心配げに君のことを頼んできた。まあ私は断ったけれどね。彼ほどの人物の頼みを断るだなんて爽快な経験は、こんなことでなければできやしない」

穏やかな瞳が一樹を見つめる。見守ると言っているのかも知れない。

「君を前にしては、コウイチロウも子を心配する一人の親だ。音楽家である前に君は息子なのだなと」

「そんな訳ない!!」

つい大声で言い返す。相手が誰だかさえも忘れて。そんな薄い薄い遠回しで不格好な愛情を、いつだって他人の口から告げられて、どうやって信じるというんだ!!

「あの人は姉さえいればいい。本物の才能を持った姉がいればいいんです。僕は最初から期待はずれで…だから必要ないんです!」

「知ったような口を利いて失礼だとは思ってるよ。でもね、だとすれば君のトランペットは…コウイチロウを見返す為の道具かい?」

ちが……う、ちがう、違う!! 取り上げないでくれ!! おれからラッパを奪わないでくれ!! ただそれだけなのに、おれの望むことはほんのささいなその願いだけなのに!!

「君の身体を心配しているのは何もコウイチロウだけじゃない。私

は部外者だから無責任かも知れないけれど、君には息の長い演奏家になって欲しいと思っている。急ぐことなどないから、今は楽器をいったん置いてみたらどうだろうか」

「…あし…た、生きて…いるかどうか…も、わからない…のに？二度とラッパを…持てないかもしれない…のに？」

明日のことは誰にもわからないよ。静かなロマーノの声。

「僕にとってはそれが現実だ！！今この瞬間にも病院という檻に閉じこめられ、二度と音に触れることもできないで、ただ息をしているだけになるくらいなら！！」

その先の言葉は、一樹でさえとても怖くて口にはできなかった。いつでも付きまとう恐怖。だからこそ急ぐのに、一分でも一秒でも走り続けたいのに。

「どんな形でも音楽は続けられる。君がトランペットという楽器を、怒りをぶつける為の道具にしない限りは」

怒りをぶつける為、そう聴こえていたのか。見返したい気持ちが持てるほど、自分に実力があるはずのないことくらい、おれ自身が一番知っているのに。

なぜおれは、楽器を吹くんだろう。

…答えを見つけないければ、二度と返してやらないぞ。おまえの宝物は、バックのトランペットは…

空を漂う音に乗って、音楽を司る女神たちミューズの一人、笛を持つエウテルペの神託が響き渡る。
手放すものか。一樹はいつものように革のケースをぎゅっと握りしめた。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

恋の味をご存知ないのね You Don't Know What Love

直接表現は力技で避けましたが、よい子は閲覧注意（・ω・）
メッ

恋の味をご存知ないのね 〈 You Don't Know What Love 〉

#27

定期的に届く聡子からのメールに、義務的な嘘を送り返すようになってからどれくらい経つだろう。今でも彼女は、おれが至極まっとうに大学へ通っていると信じている。バイトなども知らず、エリックとの共演やキミエの存在も当然伏せ、そして。

桃子との偶然の再会も…梨香とのことも。

良心の呵責なんてあるんだろうか。聡子がくれる、日本での何気ない生活や姉の活躍ぶりをさりげなく織り込んだ穏やかな文面。それに短いレスを打ち込む。コピー&ペーストだっていつこうに構わない。そんな自分にうんざりしていた。

はつきりさせればいい。わかってる。

それでも、日本には自分を待つ人がいるという事実が、一樹の一部を支えていたことは確かなのだ。

病院の入り口で送信ボタンを押すと、彼は吸い込まれるように建物の中に入ってしまった。

多くの専門科を擁する総合病院には、世界中からの研修生や研修医

が集まってくる。もつと深い研究をしたいからと、ベテランの臨床家が留学していることも珍しくない。

骨腫瘍科としては、ここ以上のハイレヴェルな治療は受けられないだろうとまで言われた。

けれど、一樹にとっては収容所と言っているほどの高い壁を持つ檻しか思えなかった。完治するのなら寛解するのなら、どんな治療でも受けるさ。でもそれでもなお、その日がいつ来るか怯えながら暮らすのはイヤだ。

黙って梨香の前に座る。小型のモーター音が響いて自分を少しばかり守っていた覆いが外される。

「しばらくは動かすのも痛いかも知れないけれど、骨はしっかりついているからリハビリでしごかれてちょうだい。後は経過を見たいので定期的に予約を入れて…」

事務的に淡々と告げる担当医に、一樹はそつと呟いた。

「帰りは何時？下のカフェで待ってる」

下を向いて書類に書き込んでいた梨香の肩がぴくりと動く。それでも彼女は無言だった。

「いつまでも待ってる。迷惑…でも構わない」

「帰れるかどうかなんて、わからないわよ。いつかみたいに格好いい日本人の男の子が、突然急患で運び込まれるかも知れないし」

感情を押し殺したような声。もう一度触れてしまったら引き返せない。それは一樹もわかっていた。

それでも、今じゃなきゃダメなんだ。今この瞬間、一人で眠ることなんてできない。

……相手は誰でもいいのか？

遠くから囁く声は彼の目に見えない良心なのか。一樹はわざとその声を踏みにじった。

梨香の返事を待たずに診察室を後にする。来るのか来ないのか。来ないで欲しい。必ず来て欲しい。

違う。今あなたが欲しいから。

この怖さを一人で乗り切るほどの勇気がない。いい加減認めろよ、自分の情けなさを。

無意識に肩へ伸ばした手は空を切った。おれの……トランペット。すべてをつなげ人をつなげ何をももらしてくれる幸福のアイテムは、失うことを何よりも恐れ一樹を縛り付けるものへと変わった。

仕事で吹くには片手でも何とでもなる。けれど大学の講義でそれはいくら何でも無しだ。吹けると言い張った一樹の声は、正論の前にかき消された。

ガキの頃のコンクールでは、彼を守ってくれた革のプロテクターは今は無力。篠原が知ったら顔を曇らせるだろうか。それとも何かできないかと走り回るのだろうか。

無類のお人好しでお節介な憎めない先輩。人がいいにもほどがある。その彼をパートナーとして選んだ桃子は正しい。

おれは：他人の愛情のかけらをかき集めて、つぎはぎだらけの温かさにくるまれて眠る。

禁煙表示の真下で、病院名物のカフェオレを目の前に置き、一樹は癖になったように自分の唇をその長い指でなぞっていた。

いつまでも待つ。待つことなんか慣れている。

待っても待っても家族は誰一人帰ることのなかった幼い頃。いくら待っても振り向いてくれることのなかった桃子。

そして今、一樹が待つのはつかの間で行きずりの愛。それでいい。長く待ち続け期待し続け、いつか去っていくのを見送るくらいなら、最初から期間限定のその場限りの関係の方がずっといい。

一樹は無意識に「自分を待つ人」の存在を消した。いくらでもいるはずの、温かさを持って見守っていてくれる多くの人たちを。

この状況の彼にそれを求めるのは酷だろう。自分の言いようのない寂しさにとらわれている彼に……。

口ではああ言いながらも、梨香はそう待たせずにカフェへと姿を見せた。当直が空ける時間だということは前に聞いていたから。もしかしたら、顔を見てきっちり断ろうという思惑なのかも知れない。

それでも、いい。たとえ断りのきついセリフであってもひととき言葉交わせるのなら。

どこまでも餓えている彼の心の中には、石ころであっても詰め込みたかったのだ。それが鋭いナイフであっても、びりびりに破かれたわずかな思い出の光景であっても。

自分でカップを手に一樹の真ん前に座った梨香は、ほうっと長いため息をついた。激務なことには違いないだろう。わずかな時間があれば睡眠を、勉強を、自分の心を癒す時間を。彼女が欲しいものはそれらであって、正面の一樹ではないはずだ。

わかっていても彼は梨香を見つめた。すぐるように。見捨てないでと、見放さないでくれ、と。

ふっと彼女は困ったような表情で苦笑した。頬杖をつき、一樹の顔を下からのぞき込むようにして。

「そんな仔犬みたいな瞳で見ないでよ。あたしが悪いことしてるみたいじゃない」

一樹には何も答えられなかった。

「いるんでしょ？彼女」

わずかに頷く。

「あたしは家庭が大事だし、うんと年下の彼氏が欲しいとも思わないし。ましてや、都合のいい女になるつもりなんかない。執着心ないってよく言われるのよね。だからって寝たいときに寝られる手軽なおともだちになる気なんかさらさらないわよ」

「そんなんじゃない！」

じゃあ何よ。一患者にストーカーされてるって警察に突き出されたいの？容赦のない言葉が続く。

「なら何で、あのとき応えたのさ」

失敗だったかなあ、あんた遊び慣れてるとばかり思ってたのに。梨香はわざとらしくぞんざいに頭をかく。

「同情ってか魔が差したのかな。愛情なんかなくたって寝ることはできる。あんたもそうでしょう？」

止めてよ、そんな言い方。あなたらしくない。一樹は唇を噛む。

「あら、あたしのことなんかろくに知らないくせに。日本語を話す年上の女だったら誰でも良かったんだわ、あんたは」

何も言い返せない。こうやって自虐的になりたかったんだきつと。もっともっとズタズタになってしまえ自分。

「はつきり言ってあげましょうか。あんたは誰かを抱きたいんじゃない。添い寝をしてもらいたいだけのマザコンくん。でしょ？」

「……もう、いい。わかったよ」

力なく立ち上がった一樹は、不意に右手を掴まれてびくつとした。握りしめた拳をそっと開かされ、そこに置かれたのは車のキー。

「先に駐車場に行ってて。荷物を持ってくるから」

状況が飲み込めず目を見開く一樹に、梨香はぽつりと呟いた。

「寂しいのは…あたしも同じ。でも面倒はゴメンよ。今日だけは」

中途半端に言葉を切って歩き出す彼女の背中を、一樹はただ見つめるばかりだった。

滑らかな彼女の額から頬をなでる。意志の強そうな瞳は一樹を見据えたまま。手のひらから伝わる温もりが、彼の心をその瞬間だけ溶かしてゆく。

こわごとと指でルージュをなぞる。ヌードベージュ。色味も見せないけれど手に残る感触。

梨香の唇がわずかに開く。

そっと噛むように口をつけると少しだけ息がもれる。

優しく舌で彼女のこわばりをほどいていく。次第に深く強く唇を押しつけて。

からまっていく舌に、梨香の方が怯えた。身体中が意志の力とは反

して震え始めてゆくから。

耐えきれないかのように彼女は目をつぶり、顎を上げた。

白い首筋が視界に入る。呼吸の仕方にも忘れたみたいに息が荒い。一樹が強く吸い上げたせいで。

「い…や」

思わず手で押しのけられる。

その細い手首を彼は握りしめ、今度は自分の口元へと持って行った。

小指、薬指…感覚の鋭敏な指先を甘く噛む。とうとう梨香からこぼれるのは甘い艶めいた声。

「やめて、おねが…い」

やめて欲しい？耳元で囁くベルベット・トーン。イメージはフリユールゲルの柔らかな音色。

あてた手のひらに伝わる体温は、確かに生きている証。

どうかもっと感じろよ、どうかもっと感じさせてよ。おれがちゃんとここに存在してるってことを。生命が脈動していることを。温かな血が流れていることを！

快感を得たいんじゃない。きつとただ素直に泣きたかったんだ。一樹をおおうのはそんな感傷。心の奥で泣き続ける幼い子どもが、誰かの温もりを求める。

今さら、どうやってもらえばいいのかわからない。だから：だから、もっと乱れる。もっと喘げ。それしかおれは知らない。そんなやり方しか、知らないんだ。

喉元から鎖骨辺りへとゆっくり唇を這わせる。彼は強く抱きしめる代わりに胸へと耳をあてた。

鼓動を聞く。人を落ち着かせる拍動。それはたぶんいつもよりずっと速く時を刻んでいる。

高ぶっているから、高ぶらせたから。このままこうしていたくとも、きつとどちらにも耐えられない。

薄く色づく肌に手を添える。顔をよせ、少しだけ歯を立てる。うめくような吐息は痛いからじゃない。

わかってるからもっと強く舌をあてる。

こうしている間だけでも泣かせてよ。涙じゃなくて身体中で悲しいと言わせてよ。

片腕じゃ支えきれない一樹を察したのか、梨香がそっと半身を起す。

両手でかき抱くように愛おしげに肩に手を回し、彼女は身を寄せた。

切ない視線を絡ませたまま…梨香は身を沈めていった。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

外科的な治療は済んでいると言われた。これ以上どうすることもできないと。ならどうして、こんなにも腕が痛むんだろう。なぜ指一本でさえ動かすことができないんだろう。

不自然な姿勢で服を身につけると、一樹はタバコを取り出した。右手だけで器用に火をつける。ふと気づいて、梨香が弄んでいた自分のメガネをひったくるようにして掛けた。

「どうせ度なんて入ってないんでしょう？ 掛けない方が素敵なのに」

素肌にブランケットをまとい、梨香は気だるそうにそう言った。声に混じる微かな甘さは、知らず知らずのうちに近づいてしまったこの距離のせいなのか。

「…童顔に見られるの、好きじゃないんだ」

視線を外したままで一樹は拗ねた。本気で顔を隠すほどの有名人とも思っていないし、その代わりに身に付けるようになったファッショングラス。少しは、年齢以上に見てもらえるかも知れないと勝手に期待しながら。

「若い方がいいじゃない」

わざとなのか明るく言い放つ梨香に、むっとした表情が隠せない。

「早く歳を取りたい。歳を取って……自分が何者なのかをはっきりさせたい」

あと十年、せめて五年経っていたら自分はどこにどんな立場で立っているのか。それよりも、自分はその頃まだ……ちゃんとトランペットを手にしていられるのか。

敢えてその先の言葉を、一樹は思い浮かべることをしなかった。今の瞬間だけは未来があると信じていたい。

「ホントに若いんだ。あんたって」

彼女も目を合わせようとしてもしない。苦い思いを押し込める作業は思いのほか心を傷つける。

メークを直すからと部屋を出て行く彼女を見送ると、一樹はため息をついてからカーテンをあけた。窓を開け放し、空気を入れ換える。女の痕跡など消してしまえ。後ろめたさからじゃないと信じたかった。

逃げている。

おれは何もかもから逃げている、そのことを認めたくない。

古いけれど手入れの行き届いた窓枠は、アンティークな装いをまとうっている。この街では年月を経るのも価値がある。新しさだけを追い求める人工の都市とは違う。

一方で科学技術の最先端を競うように開発し続け、もう一方では年輪を重ねたものを敬う。

矛盾を内包した国から、さらなる矛盾を当然のように受け入れる国へと流れ着き、彼は戸惑いが隠せなかった。

おれの音楽って何だろう。どう吹けば、皆が納得してくれるんだろう。

いやきつと違う…。どう応えれば皆が褒めてくれるんだろう。

その音さえ取り上げられてしまったら、おれはただのすねかじりで女に頼るしかないどうしようもない男。この手に残るものは何もない。

熱さも、想いも、どこかに失せてしまいそうで。

「…いて…」

癖になってしまったかのように左腕をかばう。リハビリが始まったからそんなんじゃないわよ。戻ってきた梨香の脅かしに顔をしかめる。

「本当に？自分の腕じゃないみたいだ。こんなにも、指のひとかけだって動きやしないもんなの？」

あたしはリハビリ専門医じゃないからなあと言いながら、彼女がそっと一樹の手を取る。細く長く、今では全く動かないその白い指。傷跡だけが光って見える。

「あっ！つうっ！！」

触れるか触れないかというくらいなのに、一樹は声を上げた。大げさな、と叱られると思いきや、梨香は真剣な表情を浮かべた。

「どれくらい痛む？どこが？それは鈍いのかそれとも刺すようなのか…」

問診のような口調を一樹は乱暴にさえぎった。

「やめてよ！ここは診察室じゃない！」

「カズ！？」

「…忘れたいんだ、君が医者だってことも。おれが…」

病気であるということも。痛々しげな視線もう慣れた。だが医師である梨香は、それを放って置くほど甘くはないようだった。

「痛みは残るけれど、もしリハビリで動かしてもそれほど酷い状態ならすぐ連絡して。処置が遅れたらやっかいかも知れないから」

「再発はないって言い切ったじゃないか！」

叫ぶ彼に、負けじと言い返す。

「誰も再発だなんて言っていないわ！！変に臆病にならないで！他の疾患が隠れている可能性だってある。心配の種はできるだけ早く排除した方がいいでしょう？」

「そんなに誰もが、梨香みたいに割り切れないよ！！」

一瞬言葉を失った彼女は、それでも静かにこう付け加えた。

「誰もが…じゃないわ。カズ、あんたがでしょう？」

いつどんな形で理不尽に音楽を取り上げられてしまうか、その恐怖

を知っているとでも言うのか。君にはわからないよ、強い梨香には。言えずに飲み込む思いは膨れてゆく。腕を押さえたままうつむく彼に、梨香はメモをそっと手渡した。

いぶかしげに顔を上げると、その瞳をのぞき込むように見つめる。

「携帯とアドレス。勤務中は無理だけど、いちおう渡しておく。何かあったら連絡をちょうだい？ 相談くらいになら乗ってあげられると思うから」

「…相談…だ…け？」

掠れた一樹の声に、切なげに笑う。アメリカの病院は分担がはつきりと決まっている。急性の治療が終われば、梨香はもう担当医じゃない。

彼女から連絡をすることはないだろう。おれが…おれが決めろと言うことなんだろう。決められないよ。梨香と逢わないでいて、この寂しさが埋まるかどうかだなんて。

病院まで一緒に、という一樹の申し出を当然断って、梨香はドアを開けた。見送るのは嫌いだから送り届けたかったのに。自分から彼女を置いて去っていきたかったのに。

このメアドにメールを送るのはしゃくだ。でもきつと、いつかは自分から送りつけてしまうのだろう。それがわかるだけに余計イヤだった。自分の情けなさが、頼りなさが。

孤独への恐怖心がいつまでもこびりついていることが。

玄関の狭いホールで彼女を引き寄せ、キスを交わす。抗うことをせ

ずに唇を重ねてから、あっけなく梨香は去ってゆく。言葉もなく、心も残さず。

彼女が階段を下りていってもずっと目で追っていた。残り香の代わりの気配を感じながら。

…何をしているんだろう、おれは…

これで自分の寂しさが埋まるはずもないと知っていながら、いつときだけの空白の時間をつぶしてゆく。こんなことをする為にここに来たのか。いつまで経っても何一つ得ることなく、この空虚感だけを抱えて生きていくのか。

深く息を吐き出しのろのろと振り向いた一樹は、ふと人の気配に顔を上げた。

「えっ？」

驚く間もなく右手が振り下ろされる。

「いってえー！！何すんだよ！！？」

ぱしんと小気味よい音を立てて一樹の頬をはたいた手のひらは、今度は拳の形に握りしめられた。

「何が、じゃないでしょうが！一樹！？あなたって人は！！！」

「……ねえちゃ……ん」

思わず手の甲で赤く痺れる頬を押さえてから、彼は怯えて姉の顔を見つめた。

そこに立っていたのは、薄いベージュのふわりとしたショートワンピースに身を包んだ、品の良いお嬢様然とした姉：真理子だった。そのお嬢様は不肖の弟を睨みつけ、顔を紅潮させて怒りをあらわにしている。

「来るなんて……一言も……」

「メールなら何度もしたわ！！返事も寄越さないのは誰！？それに、ちっとも日本へ帰るところかろくに電話も掛けてこないと思ったら！！こんなことの為にあなたに部屋を貸したのではないでしょう！？」

「……でかい声……出すなよ」

弱々しく反論する一樹の声は、だんだんとさらに小さくなっていく。せめて部屋に、といってみても真理子の怒りは収まるどころかもっと酷くなっていくばかりだった。

「今この部屋に入りたいとも思わないわ！！リバティに部屋を取っ
てあるからそこへいらっしゃい！！」

「何でおれが！？なんか誤解してんじゃね？」

一度ほうっと優雅なため息をついた真理子は、本人なりに精いっぱい低い声で一樹に向かって言う。

「じゃあ、この状況を聡子にきちんと説明できるって言うんでしよ
うねえ」

「あ、あの…えっ…」

なぜこの場に聡子の名が？思う間もなく姉を見返した一樹の視界に
映り込むのは…表情を硬くした聡子が立ちすくんでいる姿だった。

「ツアーの日程は伝えてあったし、ここへ寄るともメールしてあつ
たわよねえ！？空港からいくら電話しても出る気配はないし、じゃ
あ一度部屋に寄ってから音楽院へ行こうって思ったのよ！！悪かつ
たかしら！？」

電話：携帯はいつものようにバイブにしたまま。家の電話など、ベ
ルの音さえ聴こうとしなかった。

メールの中身を読むだけの…心の余裕なんか無い。

言い訳は一樹の頭の中だけをずっと素通りしていくだけ。責めるこ
とさえせず、黙って彼を見続ける聡子への複雑な感情を扱いかねて、
一樹はただ口をつぐんでいた。

ずきん。

脈打つように左腕が痛み出す。悟られてはいけない。この腕が痛い
だなんて、動かないだなんて。大きなことを言ってバークリーへ来
たものの、とうてい実技を受けられるだけの状態になど無いことを。
我慢しようと思えば思うほど、痛みは酷くなってゆく。言い訳にな
どしたくない。そもそもそれだけの治療を受ける状況だと伝えよう
ともしなかったのは自分自身。

言いたくはなかった。姉なのに？…付き合っている恋人にさえも？

自分の気持ちをもてあましながら動くこともできずにいる一樹を、真理子はその手で促した。

「ほら！とにかく下に降りて！車の中で戸田さんが待っていてくださってるのよ。あなたにここで会えるかどうかもわからなかったから。荷物なんて要らないから早く！」

彼女が何気なく触れた左腕に激痛が走る。一樹は耐えきれずに手で押さえると呻いた。壁に寄りかかり堅く目をつぶる。我慢しようにも荒くなる息。彼は歯を食いしばった。

戸惑い顔の真理子が驚いたような表情を浮かべる。

「まさか、あなた。その腕…」

「……なんと…も…ないよ…。ちよつと…ひねった…だ…」

言葉が続かない。骨折は治っているのだし、痛みが走るはずもないんだ。しばらく固められていたから違和感があるだけ。そう信じたかった。でもあまりの辛さに意識が遠のく。

「一樹くん…」

心から不安げな聡子の声が、遠い。

おれを見るな。頼むから今は。反射的にそちらを向いた一樹は、思わず罪悪感から目を逸らせた。

「聡子！一樹をお願い。戸田さんと呼んでくるから！」

新しく真理子をサポートしているマネージャーの戸田を呼ぼうとした姉に、一樹は掠れ声で叫んだ。

「呼ぶなよ！！一人で行くから！ひとりで…あるけ…る…から…」

その言葉とは裏腹に、彼は壁にもたれたままずるずるとしゃがみ込んだ。動けない。もう一步も。

誰も近寄るな。おれのそばに来るな。姉にも聡子にも戸田にも、日本を思い出させる誰とも会いたくなんかない。

逃れだしてきた現実を突き付けられた気がして、一樹はその場にならずくまり続けた。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

さよならを言う時は **Everytime we say goodbye**

#29

冷静で誠実な姉のマネージャーは、十も若い一樹を支えると自室へと運び込んだ。上背に比べて軽すぎるその身体が、戸田らへ彼の状況を伝えていた。

「食事はきちんと摂られているのですか、一樹さん」

彼の声が聞こえているのかどうか、一樹は無言でうつむいたまま唇を噛みしめていた。

「その腕、酷く痛むのね？病院には行っているの？大学は？授業は…」

「全部姉ちゃんに報告しなきゃならない訳？放って置いてくれよ！」

「放っておける訳ないじゃない！！どうして一言も言ってくれなかったの？聡子にさえ！家族や恋人にくらい、今のあなたが何をしていてどんなふうに苦しんでいるのか伝えてくれたって！！」

「……今さら？」

押し出すように呟く一樹の暗い声に、真理子までもが言葉を失う。

「何で今さらそれを姉ちゃんが言うんだよ！？一番伝えたかったと

きには家族の誰一人、おれに興味すら持っていなかったくせに！！
伝えたら何をしてくれるんだ？生あったかいメールでも来るのか？
電話で心配だわと声を掛けるだけか？それが何になる！？」

：一樹。怒るべきなのか悲しむべきなのか、自分の感情さえ扱いかねたような複雑な想いで真理子は弟を見つめている。

「十五で病氣にかかったとき、病室ですっと付き添ってくれたのは赤の他人の桃子さんだ。飯と風呂と安心して眠る場所と、家族みたいな会話と温かな居場所を用意してくれたのはマスターたちだ。あんたたちじゃない！！」

だから：それを今、必死で取り戻そうとしているんじゃない…。真理子の声が小さくなる。涙だけは流すまいと必死に耐えながら。

「だから！ちゃんと家族をやり直したいって私たちは！！」

「姉ちゃんだけだろ！？暴走してんのは！！お父様もお母様もそんなことは何一つ望んじやいない！もう：遅いんだよ」

「みんなあなたを心から心配して！！」

「口先だけなら何とでも言える！！その：言葉すら無かったけどなぎりっと歯を食いしぼるのは痛みをこらえているからなんだろうか。どこが痛いんだろう。腕か：心か。それは一樹本人でさえわからなかった。」

「あの頃、お父様は」

「忙しかったんだろ？自分の指揮者としてのキャリアと姉ちゃんのコンクールと。大事なのは音楽で、生活のすべてもみな音楽で！！おれの入る隙間なんか最初から無い！！」

いい歳したくせにガキが拗ねてるだけだ。嗤いたきや嗤えよ。バカにしたいんだったらいくらでもバカにしろよ！！

一樹にもわかっていた。問題をすり替えているだけだ。自分だけで生きようとしたところで何一つできない。その無力さとふがいなさをぶつけているだけだ。それでもなお、口にし始めた言葉は止まらない。

「…そうやって、逃げ続けるの？」

目を背け続けるの？真理子の声は柔らかく優しいのに、責められているという感覚が抜けない。一樹の脆い心が抉られてゆく。

「逃げらんないよ、どこへ行っちゃって。大げさでも何でもなく、世界のどこへ行っても逃げらんない。思い知ったよ」

一樹のセリフに、いぶかしげに首をかしげる様も優雅なお嬢様。これが実の姉。

「この街にはマリコが溢れている。どこで演奏しようがどの店に行こうが、学校じゃあもちろん、何だ：マリコの弟か、とね。その割には大したことがないと続くか、逆にどれだけ評価されようが、タカハシならそれくらい当然だろうと言われて」

「あなたはあなただわ。一樹はあなた自身の実力で評価されているのよ？」

「姉ちゃんには一生わかんねえよ！！目の前で何度も現実に言われてみるよ！！何の関係もないはずの病院でだって、マリコの弟なのに治療費も払えないのかって叱られて！」

病院には行っているのね…。ぽつりと姉が呟く。これ以上、一樹の荒れた言葉を聞きたくはなかったのだろう。

「行ってるよ。もう治療費のめども立ったから心配しないでいいよ。それに、さっきの女の人は…おれの担当医だ」

姉が小さく息を飲む。

「日本から留学している研修医で、言葉もよくわからないおれに声を掛けてくれて、ここまで送ってくれただけ。なのに誤解されてぶん殴られて、やってらんないよ」

ごめんなさい、とささやく真理子の言葉はピアノシモ。あんな露出度の高い私服で、わざわざ一患者の自宅まで送ってくれる医者がどこにいる？そんな嘘を信じられるのは、世間知らずでお人好しの姉ちゃんくらいなものだ。

自分の吐き出した言葉に一樹は心から嫌気が差した。ごまかしたかった訳でもなく、この場を…そう、この場をとにかく逃れたかっただけ。

逃げている。目を逸らしている。それ以外、おれのできるこことって何だろう。

治療費はギャラから出した、とこれも嘘とは言えない嘘。実力で勝ち得た金額じゃない。たまたまエリックの妻がキミエという女性で、その人が桃子の母親だったというだけ。確かにステージは沸いたけれど、あんな反則技は二度はやれない。ド素人同然のおれがやったから目立ったけれど、それでさえマリコタカハシの名が出されれば……そこでデッドエンド。

作曲科に転科したことは伏せた。言える訳がない。ラッパの実技は逃れられても、今度はコウイチロウの名がついて回る。

何も感じないようにすべてのセンサーを切り、平然とした顔で単位だけをかき集める日々。

そうまでして取った学位に、何の意味があるんだろう。おれはただ、あの横浜の家から逃げ出したかっただけなのに。

目を逸らす母からも、射るように見られるだけで責められているようにしか思えない父からも。

そして、嘘偽りの家族ごっこを強いる善意の姉からも。

帰りたい。無性に一樹は帰りたいと思った。どこへ？それはきっとあの頃のジャムズへ。けれどそこに今は桃子もない。二人が帰国したところで、おれの居場所はまだ無い。マスターは変わらずに受け入れてくれるだろう。けれど、あの家にも店にもおれは行くことはできない。

おれの居場所なんかどこにもない。はん、二十歳越えた男の言うセリフか、これが。自分の思い浮かべた言葉に苦く嘲笑う。

気づくと、部屋の中央に置かれたテーブルには人数分のティーカップ。戸田が気を利かせて淹れてくれたのだろう。ステージママと揶揄された母の支配下を抜けて、あの姉でさえ一人で舞台に立っている。常にあの人の立つ場所はセンター。ソリスト以外の何者でもない。

それを陰で支えているのが、この控えめでも有能な、事務所の戸田だ。

「一息入れませんか」

優しげでさりげない気遣い。一樹以外の三人はカップを手にした。敢えて誰も彼には声を掛けず、思い思いの椅子に座る。

ツアースケジュールの確認から夕食の相談やら何やら。三人の雑談を聞くとはなしに聞いていた一樹は、今まで殆ど口を開かなかった聡子に視線を向けた。

痛ましさを感ずるほどの瞳に、聡子は気づいたらしく顔を一樹へと。それまで何とか微笑んでいた表情が凍り付く。

「呆れてんだろ？おれのこと。姉ちゃんや伸子おばちゃんに気を遣うことなんてないから、切ってくれよ。悪いと思ってる、勝手に」

そんなに広い部屋じゃない。彼の小さな声は聡子にも届いたのだろう。彼女はそっと言った。

「メール、迷惑だった？」

落ち着いた穏やかな声。おれじゃあ到底かなわない。この人みたい
に大人になれない。

「そうじゃなくて…。見限るなら早くしてよ。変に期待したりさせ
たり、そういうの煩わしいんだ」

一樹！思わず声を上げる真理子を、聡子は目で止める。

「お店で演奏しているって、電話くれたわよね」

目を合わせられない。本当だったら日本に帰って真っ直ぐに聡子へ
と伝えようとしたのに。一度だけ酔った勢いで電話を掛けた。会話
の内容は殆ど記憶にないけれど、偉そうなことをぐだぐだ並べたん
だろ、おれのことだから。

寂しいから声を聞きたい。それは実のところ誰の声でもいい。そん
な本音を甘ったるい砂糖菓子でコーティングして、虚勢を張った。
そのときの自分を思うと一樹はいたたまれなかった。状況は良くな
るどころか、酷くなるばかり。何が留学だ、まだ何も手にしてい
ない。

それなのに、都合のいいときにだけ聡子の大人の心に甘えた。

「…してるよ。今夜もステージが入ってる」

これは事実だった。痛み止めを口に放り込んで、片手で器用に楽器
を操ってみせる。ステージの高揚感はどの麻薬よりも痛みを消して
くれるから。

「じゃあ、今日みんなで見に行ってもいい？」

そっと付け加える聡子の言葉に、一樹だけではなく真理子ですら目を丸くした。

聡明な彼女には、さっきの一樹の嘘なんかすぐにばれているだろう。罵倒の言葉か別れの言葉か、口にするのはそれしかないはずなのに。

それとも、このステージを見納めにして…曖昧で一方的な関係を終わりにしたいんだろうか。

そこまで思い至った一樹は、じゃあいい席を予約しておくよ、と言った。演奏面だけじゃなくてあの店は美味しい酒も出す。それくらいフィリスに用意させよう。

「ただし、頼みがあるんだけど」

空気を変えた聡子の発言に、ようやく少しばかり本来の明るさを取り戻した一樹は頭をかいた。

「なあに？あなたのお願いって何かしら」

そもそも深刻な表情などめったには見せないはずの真理子は、いつも通りの屈託のない声を出した。

いたずらめいて下から彼女をのぞき込む一樹の視線に、どうやら聡子も戸田も彼の真意がうすうす伝わったらしい。微妙な含み笑い。

「ちょっと何？どうしてみんなまで笑ってらっしゃるの！？」

しょうがねえなあ、全然この人気づいてないよ戸田さん。一樹の苦笑いに戸田も応える。

「私が用意しておきます。聡子さんと一緒に。彼女を連れ歩くと目立って仕方がないので」

すました顔で紅茶を口にする彼に、教えて！！何なの？と姉。すっかりこのマネージャーを信頼しているらしい。

「あ・の・さ。姉ちゃんがマリコタカハシだってばれたら、おれのステージはぶち壊しなの！わかる？頼むから今日だけはオーダーメイドのワンピースなんか着てくんよ！？その辺のファンキーな格好で来てくれね」

え？状況の飲み込めない真理子以外は、ようやく表情を和らげた。

一樹も右手でカップに手を伸ばす。冷めてしまったダージリンは苦みが舌に刺さる気がして、彼はその痛みをわざと感ずるかのように一気に飲み干した。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

想い出はいつも真夜中に　　Round midnight

#30

夜の暗さは優しい。

どんなに孤独を感じていても、夜どおし騒ぐ店に行けば人と繋がれる。それがたとえ…うたかたの夢であっても。

この時間がずっと続けばいい。ライブが始まるまでの喧噪の中、いつも一樹の胸に宿る想い。

今日はこの音から攻めてやろうか、どんな色で飾り立ててやろうか。想いは言葉ではなく音色となって彼の頭に鳴り響く。もっとも演奏が始まれば何も関係なく、その場の激しい音楽のやり取りが繰り広げられるばかりなんだけど。

彼は最近、左腕の肩近くにラバーを巻くようになった。ある程度なら腕は持ち上がる、だったらそこにすべらないように楽器を固定すればいい。

セッティングを免除してもらい、手持ち無沙汰の一樹はバズイングをしながら客席を見やる。

後方のやや高めの席が、実は内緒のVIP席。内緒とは言いながら常連は誰でも知っていることだ。今夜はそこへ置かれたメニューに、一樹のネームカードが差してある。

ちらりと視線を向けると、キャップとサングラスで顔を隠し、着慣れぬTシャツにダメージデニム姿の姉が心地悪そうに座っていた。

…あの姉ちゃんが、またムリしちゃって…

自分から頼んでおきながら、一樹は忍び笑いをもらす。姉の真理子が聴きに来ていることはフィリスにしか伝えてない。他の客にばれたら「ボストンでもっとも愛されている日本人の一人」の彼女のことで、放っては置かれまいだろう。

そして：おれの演奏も差っ引かれるんだ。何度となく繰り返されてきたこと。

わずかな笑顔は苦痛に耐える表情へと変わった。楽器をスタンドに乱暴に差し込むと、黙ったまま左腕を押さえる。

痛むはずがない、傷も骨折も完治している。医師から告げられ、治療の場はペインセンターへと変わった。痛みの原因はわからなくても、実際に感じているのなら治療は必要だ、と。アメリカらしい合理的な考えなんだろうね。

明日にはその、新しい科へ行かなきゃならない。気が重い。逃げ出せるなら逃げ出したい。

けれどその前に、おれは一つの感情を手放すんだ。

聡子への依存という感情を。

そこまで思って、真逆だそれ、と一樹は唇を噛んだ。おれが手放すんじゃない、こっちが見放されるのだという事実を受け止めようと

する。

責める言葉一つある訳でもなく、聡子は「演奏が聴きたい」と言った。意図なんかわからない。仕事が決まったときに知らせたいと思った自分の感情は本物だった。そう信じたかった。けれど、結局彼女にはきちんと伝えられぬまま。穏やかに微笑む聡子にはかなわない、そんな気がしてならないから。

姉と戸田の間に挟まれるように、静かに座っているはずの聡子に、一樹はとうとう目を向けることができなかった。

彼女：恋人。それはどういうものなんだろう。付き合う意味って何だろう。誰かと付き合わずにいたときなどほとんど無いくせに、実のところ一樹にはわからなかった。

一番大切なことさえ、口にしない方がいいと思える相手。

見捨てられることには慣れている。また：携帯のアドレス帳から一つ登録情報が消えるだけ。

「呑気そうにしてるけど、スタンバイできてるんでしょうね!？」

不意に声を掛けられ、びくっと彼は振り向いた。
ピアノのシンシアが険しい顔で一樹を睨んでいる。なぜだか彼はひどくあわてた。

「なんで？何で急に？準備ならもうとつくにできてるよ。今すぐにカウント出してもらったって…」

「…なら、いいわよ！」

靴音も高くステージへと向かってゆく彼女に、なんだあれ、と呟く。
ベースもドラムも一樹の顔を一瞥すると、複雑な表情を浮かべた。

「何？みんなして…何かあったの？」

真理子のことかばれたのでは、と内心ひやりとしながら問いかける。
いつも明るいドラムのザックが、珍しく真剣な顔で一樹の頭に手をやる。日本では長身の彼も、ここでは見下げられることさえある。
ザックはそのまま、彼のさらさらな髪をぐしゃりと掴んだ。

「大丈夫なのか、おまえ」

「だから…何が？」

「いつんなったら、その…」

後半の言葉を言い終わらないうちに、ステージマネージャーから声が掛かる。早く出ろとの合図だ。ザックはため息をつき、軽く一樹の頭をこづいてからドラムセットへと向かっていった。

一樹たちの、正確にはシンシアグループが登場すると客席は一斉に沸いた。みな、このバンドの若さゆえの勢いと新しい響きを知っているからだ。

複雑なメロディをさらりと聴かせてしまうオリジナルは、そのほとんどをシンシアが手がける。そしてスタンダードに斬新な解釈を試みようとするのは：トランペッターのカズだ。

リズム隊がテンションコードを多くひつつけた循環のパターンを鳴らす。カズはゆっくりとセンターに備えられたマイクへと向かう。振りがある訳でもない、正統派のジャズをやる老舗の店には、スタンド付きのマイクがお似合いだ。クリップオンマイクではなく。

一樹は息を整えると自分の愛器を構えた。ずっと使い続けている特注のバック。銀色のベルが照明を反射して目に眩しい。

身体を右にかたむけ、左腕をねじった状態で楽器を固定する。常連客には見慣れた光景だが、あのテーブルの客らは：驚くだろう。

それでもおれは吹く。何があろうとも楽器を手放さない。他に望みなんかない。カズの準備が整ったのを見てとると、ザックは引っかけのフィルインを入れた。

live for the moment　　今を生きる：シンシアのオリジナルが激しく鳴り出す。まるで本当にこの瞬間を生ききるかのよう。

キーボーティストの書くメロディは、B♭管のラッパの指遣いなん

ぞに配慮してくれやしない。一樹のフィンガリングは、右の親指と小指だけで楽器を構えているとは思えないほどの速さで、軽々と正確に音を捉えてゆく。

曲芸のようだと桃子に揶揄された、あの日の出逢いを思い出す。ああそうだろう、客の中に音楽など聴いたこともない観光客がいたとすれば、一樹の指から目を離せないだろう。

頼むから音を聴いてくれ！おれを気の毒そうな顔で見ないでくれ！

そして：形ばかり落とした客席の照明は、リザーブシートを隠しきることはできずにいた。いやでも見てしまう……聡子の表情に一樹の思いは揺れた。

祈るように手を組み、息を止めているのか動くこともしない。

これが見たかったのか。おれの音ではなく、しがみつくように音楽から離れられない無様な姿を。

被害妄想的な自分の言葉に傷つく。それはたぶん勝手に自虐にすぎないのに。

彼の腕がわずかにぶれた。ヒヤリとしたのはおそらく、一樹本人とメンバーと、おれを責める三人だけ。

責めるなら姉のようにその場で殴ってくればよかったのに。泣き喚いておれを罵ってくればよかったんだ。最低なヤツと、その場で切り捨ててくれよ。こんなふうに晒し者にされたおれを、哀れむように見るのが一番効果的な罰の与え方なのか！？

一樹は意地になって体勢を立て直すと、一気に技巧的なアドリブを吹き始めた。主題よりもっと難解で、ピストンが戻る前に次の音を鳴らそうとするほどの速さで。そのまま高音域に駆け上がる。歓声は大きくなり、立ち上がる客さえ出始めた。

ハイトーンは全身の力を要する。痛みを通り越して痺れた腕は、もう感覚も消えた。

おれはどこへ行こうとしているんだろう。

何とか自分のパートを吹き終わると、もぎ取るように楽器をスタンドに放り込む。客にできるだけ見えないようにと、ドラムの横で後ろを向きながら腕を抱える。顔をしかめて必死に耐える一樹に、上から注がれるザツクの視線。

……いつんなったら、いつになったら。彼はその先になんて言葉をつなげなかったんだろう。さつとよぎる思考をぶった切って、一樹は楽器を構え直した。

メロに戻るんだ。おれも吹くんだから。息を吸った彼はしかし、その主題に入り損ねた。ブレスの場所さえ探せない複雑きわまりない旋律のどこにも、途中から入り込める隙はない。

主旋律を奏するのはピアノのみ。とっさにシンシアはテンポをぐっと落とした。他のリズム隊もすぐさま応じる。まるで最初から計算されていたかのようにルバートに持って行くと、アイコンタクトを取ろうとする。

冷や汗で楽器を押さえるのがやつの一樹は、ようやく目の端でそれを感じると大きくラッパを振った。いつもはすぱと断ち切られる形で迎えるはずのエンディングに、トランペットのカデンツァが付け加えられ、ドラムの細かなシンバルが静かに曲を閉じた。

聴き慣れた客には逆に新鮮に、初めて聴いた者にはこういう形なのだろうと思わせる自然なラスト。

しかし、一樹の異変にメンバーとスタッフらは瞬時に気づいた。

懸命に息を整えると、だが彼はにこやかに楽器を振り、客に向かってシンシアの曲であることを話し始め、いかにそれが管楽器にとつて過酷かをこぼし、片言の英語で笑いを誘うように場を盛り上げた。

おれは変わらない。いつもと同じように吹ける。必死にアピールするかのうに。

彼が話している途中で、ピアノがイントロを弾き出す。セットリストでは確か、ドナ・リーをアップテンポでやるはずだった。しかし、聴こえてきたのはスローバラード。一樹は仕方なく、その甘ったるいメロディを出しやすい中間音域でゆったりと吹き出した。

『マイ・ワン・アンド・オンリー・ラブ』誰を想って吹けばいいのか。

テーマを吹き終わると彼は、そっと楽器を下ろした。この曲にはピアノが似合う。あとをシンシアに任せて、メンバーらも皆その音に酔う。

今夜のステージも悪くない出来だった。客観的に見てもそう思える。一樹はただの演奏者として冷静に評価しようとした。だが、アンコールに応えてからステージ袖に引込む頃には、もう…一人で立っていることさえできなかった。壁にもたれ息を荒げる。

真理子も戸田も、聡子もラスト曲の前には席を立っていた。おそらくは終演後にマリコと気づかれて混乱を招かないようにとの戸田の配慮。

よかった、と彼らに感謝する。これで楽屋にでも寄られたら知られてしまう、この状態を。

抑えても抑えても、痛みをこらえることができない。とうとう狭い通路に座り込み、歯を食いしばる。

見かねたザックが声を掛けるより早く、シンシアが冷たく言い放つ。

「最低よ、カズ！体調管理も…プロの仕事のうちだわ！！」

おい待てよ！シンシア！！ザックは焦って彼女の背中に呼びかけるが反応はない。

一度も振り返らず、彼女は足音を立てて楽屋へと向かう。その言葉が一樹の胸を抉る。陽気なザックの顔が曇り、どう言葉を掛けようかと言いあぐねていた。

「シンシアの言うことは正しい。今日のステージはおれのせいだ」

「そうじゃないんだよ、カズ。あいつは、シンシアは悔しくて仕方がないんだ。わかってやってくれ」

意味を取りかねて、一樹は顔を上げる。ザックは何が言いたいのか、おれのヒヤリングが悪いのか、何度も何度も受け取り損ねる彼の言葉。

「彼女もおれたちも、あんたと同じステージがやりたい。続けたい。それだけは本当の気持ちだ、わかってくれるよな？」

身振り手振りで、ザックも何とか一樹に伝えようとしている思いが上っ面をすべってゆく。痛みが、言葉を捉えようとする意識を遠のかせる。

「骨はくっついたんだろ？その腕はすぐに動くんだよな？だから大丈夫だと、おれたちは信じていいんだよな」

なおも言いかけるザックの肩に、大きな手が置かれた。オーナーのフィリスだった。

「フィリス、今日は…」

か細い声でようやく絞り出した一樹の言葉は、フィリスにさえぎられた。

「君の招待客は無事に帰ったよ。よろしく伝えてくれとのことだ。メッセージカードと花を預かっている。あとで渡す…話が終わった

らな」

は…なし…？一樹のげげんそうな顔を見てとったのだろう、フィリスは静かに言い添えた。

「別の部屋で話そう。これからのことを」

一樹は身を硬くして、痛む腕をさらに抱え込むように押さえ続けた。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2010 keik
itagawa All Rights Reserved

#31

一樹は借りている姉の部屋で時計だけを見つめていた。

病院の予約は十時、そして聡子の帰国を見送るタイムリミットも…
…十時。

どちらを選べばいいのか、どちらを選んだら自分はこれから先、生きてゆけるのか。何度自分に問いかけても答えの出ないこと。

フィリスは淡々と、契約解除を告げた。身体を治してからまたオーディションしてやると、そっと付け加えられる。みっともなくあがき、次のステージは完璧に仕上げると叫ぶ一樹に、向けられるのは寂しげな視線。

293

「ビジネスの話をしよう。客はカネを払って演奏を聴きに来る。非日常という空間を味わいに来る。ここには他国からの観光客も多い。彼らに…次はない。質を落とした演奏を聴かせる訳にはいかんよ」

次がないのは、自分も同じ。いつまで吹けるのか。そもそもこの痛みからいつ解放されるのか。だからこそしがみつきたかった場所だった。

「…質は落としてない!」

ミスの回数をここで数えさせるつもりか? あくまでもシビアな経営者という役どころを、フィリスは演じることに決めたようだった。

一樹があきらめて荷物をまとめて逃げ帰るまで。

大学でも吹く場所はない。おれはただ五線紙かパソコンのディスプレイに向かい、過去の名曲をなぞった習作ばかりを書き殴る。コウイチロウの息子は、作曲の才能を受け継いではいないようだ。周りが認識するまでにその時間は掛からなかった。

おれはただ、トランペットというおもちゃで遊んでいたただけなのに。

聡子は一度も責めなかった。花束に挟まれたカードには「真理子が感激していました」と他人事のようなメッセージが残されていただけ。

君はどう感じたんだろう。それを訊かないまま何も触れ合わないまま、おれたちは終わるのか。

もう動かないと、どちらにも間に合わない。それだっていい。誰かにも必要とされないおれは、ここでこうしてうずくまっていればいい。

アナログウォッチの針の音が、神経を刺す。責め立てるんだ、おれを。動け動けと言い続けるんだ。どこからも燃料補給のないまま、全てのエネルギーが枯渇するまで走っていればいいのだと。そのうち、行き倒れるだろう。そうしろとみな、望んでいるんだ。

一樹は決めかねたままゆっくりと立ち上がると、左腕に触らないようにジャケットを羽織った。

ジェネラル・エドワード・ローレンス・ローガン国際空港から日本への直行便はない。姉と戸田は演奏会の準備の為に残り、聡子だけが帰ると聞かされていた。海外の経験も多い彼女なら困ることもないだろう。姉がコンサートへ向けて練習に没頭し始めれば、どのみち周りは放って置かれるのだから。

この空港に初めて降り立った日は、まだそう遠くない過去。もしここで彼女と一緒に帰国すれば、日本で穏やかな生活が送れる。それはわかってはいた。ただ、透明な檻が自分を閉じこめるだけ。何もせず何もできず、もう二度と細々としたスタジオやサポートの仕事さえさせてもらえず、時間だけを消費するだけの生活だとしても。

姉は言う。あなたもお父様も不器用なだけよ、と。愛情が見えないだけ、見ようとしただけ。それはお母様も同じ。

家族なんだから、本音で話してみればいいのよ。

屈託のない素直で眩しすぎる真理子の言葉は、どれだけ一樹の心を抉れば気が済むものだろう。家族からの愛が本物なら、それを受け取れない自分こそが悪いってことなのに……彼女には永遠にわからないだろうね。

空港への道路が思いのほか渋滞していて、見送り客が入れる最終エリアへと一樹がたどり着けたときには息が切れていた。ジャケットの下腕が重い。

「聡子さん！」

大声ではなかったと思う。けれども彼女は静かに振り向いた。あわてたり動揺したり、そういう姿を見せることなんてあるのだろうか。いつでも穏やかに微笑むだけの彼女に。

少しだけ目を見開いて驚きを表したのは、聡子にとっても一樹がここへ来ることは想定外だったんだろうか。ゲートへ向かう時刻にはまだ間があるはずだ。立って会話する程度の余裕だけは。

それでも一樹は口を開くことができなかった。謝ればいいのか、自分から別れを告げればいいのか、考えあぐねてどうしたらいいかわからなくなっていたから。

そんな彼を、柔らかい瞳で見つめる聡子は「来てくれてありがとう」と微笑んだ。

「いやあの、ほら逆にこっちこそ…聴きに来てくれてお礼も言えなくて…」

もうあの場所で演奏することもないのに、小さなプライドがそれを言えずにいた。

この人の前では自分は無力な子ども。わざと視線を外す。

「…どうして怒鳴らないのさ。姉ちゃんみたいに殴ればいいのに」

一樹が言うにはあまりにも筋違いの、ふてくされた文句にさえ、笑顔を向けるふわりとした気配を感じた。

「真理子って案外、力があるから、痛かったでしょ。バイオリニストは鍛えてるものよ」

何でここで普通の会話が成立するのかわからない。今までの元カノたちは逆ギレして一樹を責め立てたのに。それで…ある意味ホッとして痛みを再確認していたのに。その儀式さえさせてもらえない。宙に浮いた自責感を、どうしてくれるんだ。

思い切って彼女の顔を見つめる。きっと泣きそうな顔をしてたんだろう、おれは。一樹は自分の幼さに辟易した。彼女には聡子にはかなわない。いつでもいつまでも。

「謝る気なんかない。日本にも帰らない。見捨てるんだったら、この場ではつきりさせてよ」

確かに捉えたはずの視線は、今度は聡子の方でかわされた。わずかに横へと意識をただよわせてから、慈しむように一樹を見つめ返す。

「信じているから、私は。それが重いのなら言ってね。ただ、私ができるのは日本であなを待っているだけ。それが恋人としても大切な友人としてもいい。心からあなたを心配している私がいることを、憶えていてもらえたら嬉しい」

ゆっくりとしたいらえ。さりげなくよどみなく紡がれる温かな言葉。

…信じているから…

それを聞いた途端、一樹は後ろを向いて右手で顔を覆った。こみ上げてくる吐き気を必死に抑える。

違う！おれが欲しいのはそんな言葉じゃない！！そんな、そんなキレイな言葉なんか要らない！！

何か声を掛けられた気がした。名前を呼ばれたんだろうか。でも、いたたまれなくなった一樹は振り返ることなくその場を離れた。

勝てない！眩しさに！！温かな感情になんか、どうやったって勝てやしない！！

そのままロビーを駆け抜け、エスカレーターを横目に階段を一段とばしで必死に走り降り、多くの搭乗客らにぶつかりながらタクシー乗り場に向かう。

どうして！？どうして、どう…し…て。何で聡子はおれを責めない？罵倒されることを半ば期待しながらこちらを選んだのに、思いがけない言葉を返されておれはどうしたらいいんだ！？

吐き気は止まらない。全身の震えも。なじみになった痛みは、今はそれを感じる暇さえなく。

今からペインセンターへかけ込めば、治療してくれるんだろうか。

予約時間にだけはシビアなアメリカの病院が、それをしてくれるとも思えない。キャンセルはキャンセル。それも最低なドタキャン。もう診てもらえないかも知れない。それでいい。どうにでもなってしまうえ。

車内で一言もしゃべらず、顔を覆い続けた。息が吸えない。もっともっとたっぷり吸わないと、ワンフリーズ持たないよ。

姉の部屋に戻り、ドアを乱暴に閉める。ベッドに倒れこんで携帯を開ける。ためらうことなく一つの番号を選び出す。

出てはくれないだろう。それでももし、タイミングが合えば。かけらほどの期待はつながってしまったときの動揺を呼び込んだ。

「カズ！？カズでしょう？あんた、診察すっぱかしたってこっちに問い合わせが！！ちよっと、もしもし！？」

日本語……。乱暴できつい口調で叱られて、戸惑いは安堵へと変わる。

「…ねえ、今すぐ来てよ。今じゃなきゃダメなんだ。お願いだから部屋に来て。いつまでも……待ってる」

信じて待っている人は別にいる。なのはそれが辛い。待っていてもらったことなんかないから。いつでもおれは、文字通り捨てられた子犬のように、気まぐれな誰かが拾ってくれるのを待っただけだった

から。

電話の向こうで大きなため息が聞こえる。忙しいのはわかってる。その前におれの願いを聞き入れる義理も理由も、あちらには何一つないのに。

それでも…彼女は…あと二時間待てと言った。

「何とかケリをつけてそっち行くから！センターの方、あたしが勝手に予約入れておくわよ！？それでいい！？」

強引に怒鳴られ、一樹は素直に「お願い」と呟く。来てくれるのなら何でもする。一人でいるには辛すぎる。

切れた携帯電話をぎゅっと握りしめ、一樹は梨香を待ち続けた。

（つづく）

北川 圭 Copyrigh t? 2009-2011 keik
ita gawa All Rights Reserved

たった二人で Alone Together

#32

合い鍵は渡してある。ベッドサイドで立ち上がることもせずに座り込んだままの一樹は、かなり乱暴に開けられたドアの音で目を覚ました。

いつの間にかうとうととしていたらしい。身体が重い。何もかもがずしりと重い。

「カズ!!」

飛び込んできた梨香の顔を、小動物のような目で見上げる。捨てられた子犬：何も言えない。

「ちょっと!どこが痛むの!? ショック症状起こしてないでしょうね、顔色が」

梨香がてきぱきと触診をしようとするのを、右手で抑える。大丈夫だからと。

「何が大丈夫よ!! あんな心細そうな声で電話してきて!!」

何度も口を開きかけた。言葉を紡ごうとした。けれどどれも上手くいかなくて、一樹はただ梨香の肩に顔を押しつけた。痛みをかばい続けていた右手をそっと離し、彼女の首筋へとまわす。

「…カズ」

黙ったまま、頬をつけて体温を感じる。顔へも唇へも近づこうとせず、ただただ泣くまいとこらえていた。

身体の疼きをあえて無視した。欲しいものはそれじゃない。息が荒いのは嗚咽を必死に抑えていたから。一樹が梨香をいだく手に力がこもる。

彼女は、そうっと一樹の頭を抱え込むと自分の喉元へと抱き寄せた。彼のつむられていたまぶたがわずかに開く。

「ねえ」

彼女らしくもない慈しむような声。

「一樹は誰から愛されたいの？」

壊れ物に触れるかのような、柔らかなその言葉に…一樹は視線をそらせて問い返した。

「梨香は…誰を愛したいの？」

その答えはきつと、お互い目の前にいる相手じゃない。知っていてもなお、二人はそのままだった。

ベッドマットの端に身体をくっつけ、何も言わずにじっと時間が過ぎるのを待つ。痛みが治まるまで。それは身体の痛みじゃない。心の奥の癒えない傷が、いつとき痛みを忘れるまで。

一樹は梨香の胸元に顔を寄せる。ただ、それだけ。さっきよりもっと直に温かさを感じたかったから。梨香もまた、抱えていた頭から

背中へと手をまわし、包み込むように一樹を抱きしめた。

辺りが暗くなり、夜が来てもまだ、二人は動けずに身を寄せ合っていた。

床で眠り込んでしまった長身の男をベッドに持ち上げて寝かせるだけの優しさは、梨香が持ち合わせているはずもなかった。硬いフロアのせいで背中までもが痛む。

「つう」

飲んでもいないのに頭がずきずきする。メガネだけは外してくれただようだ。顔を押さえる一樹の手のひらに、わずかに感じるザラリとした涙の跡。

泣くのは避けたかったのに。ざまあないな。

とうに朝になっていて、部屋には独り残されていた。ただ本当にいだかれて眠っただけ、か。彼女は誰を想って、おれを抱きしめ続けたんだろう。

髪をかき上げながらテーブルに目をやると、何かが置いてある。優しさの含まれたメッセージでも残っているのか、冷静で合理的な彼女にしたら珍しい。

「……」

実際に置かれたテーブルの上のものを見て、一樹は押し黙った。次回のペインセンターの予約票と、しまい込んでおいた痛み止め。直筆のメモ一つありはしない。

苦笑いで下を向く。ああそうだね、ホントにこの方が梨香らしいね。

昨夜よりずっと、痛みは和らいでいた。それでも薬を口に投げ入れ、ミネラルウォーターで流し込む。人の親切は素直に受け取るべきだ。特に元担当医の指示ともあれば。

そう広くもないテーブルの端には、ビジネスライクな封筒までもが置かれていた。これも梨香？そっと手に取った一樹は、そうだった、と思わずため息をついた。

不自由な片手でわざわざ中を開けなくてもわかる。すっかり思い出した。これは「どうせステージの準備で行けないから」と断るはずだった、姉のコンサートチケット。

ステージなんか、もうない。おれにはこれに行かないで済む理由なんか一つもなくなった。

ボストンシティフィルとの共演。指揮者は新進気鋭のパク・ヒョンウが務める。演目は…。聞いてもどうせすぐ忘れる。一瞬でも顔を出せば義理は果たせるだろう。

姉ちゃんも、あれだけムリな格好をしてまでウォーリーズへと来てくれたのだから。

……おれのラストステージに。

口の中が苦いのは、今飲んだ薬のせい。胸がざわつくのは他に何も口にしていなかったせい。

花を買っていかなきゃならないんだろうか。カード？そんなもの要らない。封筒を乱暴にテーブルへと投げ出すと、一樹はもう一度髪をかき上げた。

ボストンシティフィロは自前のホールを持っている。歴史を感じさせるそのホームグラウンドには、すでに多くの客らがロビーに溢れていた。

あの波がおさまったらにしよう。知った顔がないとも限らない。

少し離れたスタンドで、一樹はぼうつと人の流れを見るとはなしに眺める。花は買わなかった。観に来たことを知られるのもシヤクだ。そもそも、姉の演奏をコンサートホールで聴くなんて、いったい何年ぶりになるだろうか。

ヴァイオリンの天才少女、という名を欲しいままにしてきた彼女は、それに驕ることも鼻に掛けることもなく、淡々と演奏活動が続いていた。高まる評価をも気にすることなく。

…てかあれは、ただのド天然で自分の凄さもわかってないだけだ…

周りに気づかれなくらいの小さなため息。競争したい訳じゃない。見下したりもしない。ただ好きな楽器をずっと弾き続けていたら、それはいつしか名指揮者たちがこぞって指名するほどの世界で通用する奏者になっていたというだけ。

欲すらもない。ホントに頭に来る。肩に軽く掛けただけのジャケットを引っ張り直し、一樹はゆっくりとホールのロビーへと向かった。

受付で客席の変更を申し出る。招待券に書かれた席は当然ながらファースト・シート。それを出入り口付近の末席へと変えろというのだから、受付の女性は困惑顔を隠そうとはしなかった。

「Do you speak English?」

丁寧だが、あきらかにこのチケットの価値もわからないのかという顔で訊かれる。おれみたいならくすつぽ英語も読めなそうな東洋人が実はソリストの弟だと伝えたら、事務的に仕事をこなしているだけの係員はどんな顔をするんだろう。

ほんの少しだけ口元を歪めて、一樹は「体調がすぐれないので、すぐ退席できる場所へ」とだけ告げた。ようやく納得したのか、彼女が端末を操作してさっと席を変えてくれる。このプレミアチケットは、運の良いキャンセル待ち客へと渡るんだろう。一目でもマリコタカハシの演奏を見たいというクラシックファンへと。

ホール内はほぼ客は席に着いていて、オケの連中までもがスタンバイを始めていた。天井はそう高くはないが、なんて広い会場だろう。狭くてタバコの煙だらけのライブハウスとは違う。ましてや、東京の片隅にある小さなバーとは比べものにならない。

ここの客席を埋めるのは、マリコタカハシの実力。彼女のアパシヨナート（熱情的）な演奏を好むクラシック愛好家は多い。いや、好むなんて言葉じゃ足りない。惹きつけられ、とりつかれる。目が離せなくなる。

少女のような愛らしい童顔と小柄な体躯からは想像できないくらいの、激しさ。

ずるい、とまで一樹は思う。姉ちゃんは何も計算なんかしてないし、できない。けれどそのギャップは、一種の相乗作用まで生み出す。まあ、元の凄さが凄さなんだけどさ。

パンフレットもいわゆるフライヤーも受け取らなかった。周りの客のざわめきが既に音楽を奏でている。それに身を委ねて。

クラシック・コンサート。それさえ久しぶりに聴く。ジャズライブとは全く違う空間がそこにはある。

華やかなパステルカラーのドレスをまとったマリコが、韓国の若き指揮者・パクに手を引かれて登場すると、拍手が一斉にわき起こった。気の早い客は席を立つ者さえいる。スタンディングのライブでも始める気か？ふっと笑うと、一樹はクセになったかのように左腕を押さえた。

素晴らしき才能に敬意を表して。そして、このボストンへお帰りという歓迎の意を込めて。

胸の前へ楽器を掲げた姉は、一度客席を見渡すにつこりと微笑んでみせた。

ズキツとした痛みが走る。一樹は思わず顔をしかめた。子どもが拗

ねている訳じゃない。一曲くらい付き合っただけ聞いてやってもいい。彼の強がりだけれど、増す痛みには打ち消されそうになってゆく。

いいから何でも早く生まれ！見当違いの八つ当たりでステージを睨む。

広い。そして：なんて遠い。姉が、あまりにも遠い。同じ高橋の家に生まれた姉弟。音楽の道を選び、楽器を演奏し、でもその違いはあまりにも大きくて。

：そうして、一生おまえは高橋真理子と比べ続けられるのか。それでも耐えられるというのか：

不意に思い出される父親の言葉。演奏の質はステージの大きさと決まるもんじゃない！！

そんな一樹の悲痛な心の叫びは、オーケストラのトゥッティと直後の荒々しいほどのヴァイオリンの音色にかき消された。

サラサーテの『カルメン幻想曲』。最初の太く低い弦の音がこの場を支配する。豊かな響きは高音部へと駆け上がり、そのままマリコは自在に音を操り舞い続ける。複数の弦が紡ぎ出す重なりは、時に絶望を時に祈りを思わせるように人々へと伝えられる。

細い身体はどこからこんな音が出せるのか。違う。そんなささいなことじゃない。ステージの姉は：おれの知るとの姉とも違う。

アパシヨナートな音を奏で続けるヴァルネリ。一樹の意識がかすみ出す。

もういい…。もう十分だ。あんたには一生勝てっこないよ。それで……いいよ。

腕の痛みが増してゆく。目を開けているのも辛い。逃げ帰るのか、ここから。おれは一生、姉からも父からも音楽からも逃げ回るのか。客席は暗く、誰もが演奏に夢中になっていることが幸いして、一樹の異変に気づく者はいなかった。彼は耐えきれずにそっと席を立つと、扉へと向かう。姉に背を向けて。

咎めるような係員の視線は、苦痛にゆがむ一樹の顔を見るなり驚きと焦りに変わった。音を立てぬようにドアを開けると、彼を支えるようにしてロビーへと付き添ってくれた。

「… t h a n k …… y o u , s o m u c h …」

それだけを絞り出して言うと、一樹は唇を噛んで全てをこらえる。かの受付嬢が車を回すからと彼を促す。

立つだけの気力も彼にはなかった。ロビーにいたってイヤでも聴こえてくる、姉の激しい音と澄み渡る繊細な旋律。その表現力に息を飲む客の様子までありありと浮かぶように思える。

勝てない、勝てない！勝てる訳ない！！

やっこの思いでタクシーへと乗り込んだ一樹は、姉の部屋ではなくチャイナ・バスの停留所へ行くよう運転手へと告げた。

（つづく）

北川圭 Copyright? 2009-2011
itagawa All Rights Reserved
keik

#33

早朝のチャイナ・タウンには意外にも人があふれ、甲高い声までもがセツトでついてきた。ほとんど眠ってなんかいない。身体も重いけれど…心はもう全てが鉛に置き換わってしまったかのようで。

姉のコンサート会場からそのまま来てしまった一樹は、身を守る何一つ持つてはいなかった。薄いジャケットに、コットンのボトムズ。楽器さえあればそれでも少しは…。
そう思いながら曇ったままのニューヨークの空を見上げる。

音楽なんかやめてしまおう。

初めて、本当に初めて彼はそう思った。いつまでも見えない壁に阻まれて、勝てるはずもない闘いを強いられて、しんどい思いばかり味わうのならばやめればいい。
誰も止めない。逆だ。さっさとやめろとみんなは言っていたじゃないか。

じゃあ、おれに何ができるんだろうな。こみ上げるのは苦い思いだけ。何一つできやしないのに。

言葉もろくに話せない。頭悪いスキルもないし、第一この腕じゃバイトもできないってのに。

音楽しかやってこなかった。それも吹くことしか知らなかった。おれからトランペットを取り上げられたら、何も残らないのだと…自

分が情けなくなった。

いつかは吹けなくなると覚悟しておけよ。心のどこかで必死に呼びかける自分自身の声を、敢えて聴こうとはしなかったんだ、おれは。

英語ではない言葉に囲まれ、喧噪はどんどん酷くなる。ようやく周りを見回す余裕ができた一樹は、屋台に群がる人々の生命力に圧倒されそうになった。

異国で暮らす東洋人。彼らはどこにいても我流を押し通す。自国の文化を持ち込み、コミュニティを作り上げる。

日本人だってやってるじゃないか。やったっていいじゃないか。でもおれがそれをすれば逃げだと非難されるんだ。

こうやって、堂々と開き直れば生きていける。英語なんて話せなくても何の問題もない。ここに紛れ込んで一生を過ごしてしまおうか。そんな思いさえ浮かんでくる。

どうやって？何の職にありつけるって言うんだろうか。彼の心がバラバラになり、考えなんてまとまらない。

もう、高橋の音楽からは逃げ出したかった。カズでいることも許されないのなら、おれはただの放浪者でいい。その日をやり過ごし、いつかその辺で動けなくなる方が似合ってる。

死にたいのか。自分に問いかける。怖いくせに。生きたくてあがいてしがみついているくせに。

死ぬ勇氣だって有りもしないくせに。

血も通っていないような冷たい腕を押さえる。ただ一人立ちすくむ一樹を誰も気にさえ留めない。

時が止まる。

ざわめきは意味をなさないノイズになって、一樹の聴覚を遮断する。世界は色を失って無彩色に変わってゆく。生きている人間は自分とは全く無関係で、おれは本当にたった一人で、存在していることさえ忘れられている。

ここに立つのが姉だったら、父だったら：人は振り向くのだろうか。クラシック音楽に一生縁のない人々は大勢いるというのに。この街では、いやどこにいたって、誰もが自分から求めなければあつという間に孤独へと墜とされていくんだ。

笑い合う人々と自分は違う。無関係の他人に人は関心を持たない。壁の一つと変わらない。生きているのに、おれは：ここでちゃんと息をしているのに。

空を見続けていた目が痛む。そっとまぶたを閉じ、泣くまいと歯を食いしぼる。

ガキじゃないんだから、いい加減自分の居場所くらい作れよ。また心のどこからか声がする。弱々しい反論を試みる。作ってるんだ。けどそれは、すぐに壊されてしまうんだ。何度も何度も何度も。みんな、取り上げられてしまうんだ。

姉がもし、ここでサラサーテを弾き出したらどうなんだろう。道行く人は足を止め、歓声を上げるだろうか。うるせえと罵声を浴びせるんだろうか。

おれのラップは、確実に騒音だね。自虐めいた苦笑い。音の大きさじゃない。自分の音楽が輝くのは、ステージという枠があってこそということを一樹は自覚していた。聴く耳を持ち、聴こうとする者だけが興味を持ってくれる音。

高橋真理子の音は違う。たぶん：違う。今までクラシックなど何一つ知らない階層の人でさえ、彼女の音には引き込まれるだろう。そう想像するのは難しいことじゃなかった。

それが何という題名でどんなジャンルかなんてきつと関係なく、姉の音は人々を魅了する。その魅力を持つ者だけが表現者と呼ばれるんだろう。ミューズの神に愛された永遠の少女。

音楽などやらせるのではなかった。そうだね、お父様の言葉は正しいよ。おれは楽器を手にするべきじゃなかったんだ。

どうせ、こうやって取り上げられてしまうのなら。それも才能という化け物の前にどうしようもなく屈するしかないのなら。

ぼうつと突っ立っていた一樹に、不意に何かが当たった。急に方向を変えようとした中年の女性がもろにぶつかってきたようだ。

「いてっ！ー！」

日本語で思わず叫ぶ。夢から覚めるだなんて生やさしいもんじゃない。せっかく痛みの治まっていた左腕に酷いしびれが走り抜ける。

一樹は思わずしゃがみ込んでしまった。

頭の上からはギャンギャン吠え立てるような女性の声。意味もわからないけれど、大げさなと怒っているのだろう。

「ケガして…るん…だ。ホント…に…」

言葉が続かない。その様子を見ていた女性はわざとじゃない、と片言の英語でまくし立てる。

わかってるよ、ぼけっと立ってたおれが悪いことくらい。けど、立ち上がることでだってできやしない。

騒ぎを聞きつけた辺りの住人どもが集まってくる。見せ物じゃない！野次馬は来るな！怒鳴りたかったのにその元気さえ出ない。

ぶつかってしまった不運な当の彼女は、おろおろとし始めた。周囲が今度は彼女を責め立てていると言うのだろうか。一樹には訛りのきつい英語も中国語もわからない。

何を思ったのか、彼女は一つの屋台へ向かっていくと、並んでいた他の連中をかき分けて大声を出し始めた。一樹ですら、痛みでしかめた目で思わずそちらを向く。

交渉は成立したらしい。急いで戻ってきた彼女の手には湯気の立つポーク・バン。それを座り込んだ一樹の目の前に差し出す。

押さえた手なんて離せない。美味そうなニオイに腹は正直に鳴るけれど、痛いものは痛いんだ！

どうやら状況を見てとった彼女は、やおらそのバンズを一樹の口へと押しつけた。

はあ！？これを食えってか？この状態で！？

よくよく考えたら、コンサート前から何も口にしていない。ヤケになっただけだ。

「なんだこれ……うめえ」

隣に座り込んでくれただんの女性は、ほらこぼすなどとか慌てるなどか、熱いから気をつけろだとか、ゆっくりとした発音で話しかけながら手を添え続けた。

：これじゃまるつきり、餌付けされてる野良犬だ：

自分のふがいなさに笑えてくる。開き直って丸ごと平らげた。何が入っていたようが、ここでぶっ倒れて身ぐるみはがされようが構うもんか。

だが、運良くその女性も飲み物をくれたオヤジも善意で接してくれ、がつつく一樹を微笑ましそうに見守っていた。周りの見物人らにも笑顔が広がる。

「シェラー」

片言でありがとうと言ってみる。満面の笑みを浮かべ、彼女も近くの人らもまた大声で何やら騒ぎ始める。

だから、中国語なんて知らねえよ。仕方なくこちらにも笑うしかない。

ほんの少し壁に触れさえすれば、こうやってあっけなく崩壊するの。例えそれがひとときの通りすがりの優しさだとしてももらえるのに。一番近いはずの家族とは、どうしてそれができないんだろうね。

照れ笑いを浮かべながら一樹は立ち上がった。温かさは身も心も満たしてくれる。ほんの少しでいいのに：ね。

ちゃんとした発音を丁寧に教わりながら、何度も「ありがとう」を繰り返した。わずかながら街の色を取り戻す。

ぶつかったお詫びだと、彼女は一ドルもしないポーク・バンをおごってくれた。温かなお茶はおまけらしい。

それよりも、もっと温かさをもらえた気がした。

「グー！」

ちょっとお兄さん！のような呼びかけなんだろうか。歩き出した一樹が振り向くと、彼女は持っていたタオルで一樹の口元をぬぐった。

「OK、オニサンイイオトコ」

そこだけは日本語かよ。苦笑いしつつシェラーともう一度伝える。

彼女も微笑みながら、その発音でいいとばかりに深く頷く。

ポストンから逃げるように来てしまったニューヨークの街並みを、一樹はあてもなく歩き出した。

せっかくならお上りさんよろしく観光をしてやろう。適当にバスを乗り継ぎ、セントラルパークを目指す。その程度の知識しかない。そもそもポストンへ留学したとはいえ、他の都市を観光する暇さえなかったんだから。

他の家族は皆、ずっと以前から世界を駆け回る生活をしているっていうのに。苦い思いを無理やり抑え込む。

ただっ広い公園というよりは、ちよつとした森の緑を見るとはなしに見る。その眩しさが自分には似合わない気がして、目を細める。腰を下ろせるようなベンチがあるのだろうか。そもそもここへ来て、何をすればいいのだろうか。

ちよつとした壁により掛かり、手に入れたばかりの市内案内図に目をやる。マンハッタンは広いとは言えないかも知れないが、目的も無しに歩き回る街でもない。こんな健康的に明るい時間からライブハウスは開いてなんかいない。

どこへ行っても、居場所なんかないのだろうか。朝のささやかな幸福の効き目が切れていきそうで、一樹は小さくため息をついた。

誰も知らないところに行きたい。けれどそれは同時に、本当に孤独なのだという事実を受け入れること。新しい人間関係を作って行くには、自分には何一つ力なんかない。それを思い知らされること。

街には人が溢れているのに、たった一人。音さえあればおれはいつだって居場所を作ってこられた。その大切な武器さえ今はない。

トランペット。

手放したらもう二度と自分には戻っては来ないのだろうか。しんど

さを振り切るように地図を見やる。

ふと、ある英文に目を留めた。The Juilliard School:ここからは近いのか。

車を拾うかバス路線を探すか、歩くか。眩しすぎるセントラルパークに背を向けて、一樹は再び歩き始めた。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2011 keik
itagawa All Rights Reserved

神よめぐみを God Bless, The Child

#34

数年前に新装されたという音楽院、正式には芸術総合教育機関なんだろうけれど誰もがジュリアード音楽院と口にする建物は、来るものを拒むかのような雰囲気醸し出していた。ボストンののどかさとはまた違った、身の引き締まる思い。

姉が学んだ：そして桃子の母が今も教えるという音楽院を見てみたい。できるなら音を聴きたい。それだけの単なる好奇心でここまで来てしまった。

部外者の一樹にとって、ここはただの観光名所の一つに過ぎないのに。

中庭辺りで何か音でもないだろうか。日本でもどこへ出掛けようが、立ち寄るところは楽器屋か音の鳴る場所。それが演奏家の習性なんだろう、きっと。

心細い顔つきで正面入り口から見学者コースを探そうとした一樹は、体格のいい黒人の警備員にいきなり押し返された。

「ここからは立ち入り禁止だ」

むすつと言われ、観光したいだけだと言い返す。どこの案内パンフにも売店くらいは入れると書いてあったから。

「残念だな、ボウズ。今日は入れない」

「何だよ！？別に学院の中まで入れろとは言ってない！」

ニューヨークならある程度警備も厳しいのはわかる。けれどアジア人だからと足元を見られたんだとしたら…。

「入れるはずだ！ここを通してくれ！案内にだってツアー客受け入れって書いてある！！」

丸っこい目をぎょろりとむいた職務熱心な警備員は、低い声でさらに言い返してきた。

「だから残念だなと言ったんだ。先週末までは入れた。今週はダメだ！」

こう言われて完全に舐められたと感じた一樹は、ムキになってふざけるなど怒鳴る。

「人を見てアンタが入れる入れないを決めてるんだろ！？冗談じゃねえ！！こうなったら意地でも音を聴くまでは帰らねえからな！！」

ふう、とわざとらしくため息をつく、黒人は吐き捨てた。

「オレにそんな権限があるもんか。ここどころニューヨークだけじゃなくて国内で大学なんかの無差別襲撃事件が多発してるあたりを食らったんだ。今週から入れないってのはウソじゃない。急に厳しくなったんだからあきらめろ」

ダメだと言われれば何が何でも潜り込んでやる。どこかにこの鬱積した気持ちをぶつけたかったのかも知れない。一樹は食い下がった。

「僕は高橋孝一郎の息子だ!!」

こんなときばかり…自分でもおかしいとは思うが、はったりかますには使わせてもらおう。しかし相手は、それは誰だ、とにべもない。

「はあ!? ジュリアードで働くヤツが高橋を知らないのか?」

「ニホンの有名な政治家か? それとも俳優か?」

たとえおまえが大統領の甥だとしても、ここは通さない…と。どうやら彼も意地っぱりでは負けてないようだ。規則を曲げないと突っぱねてきた。

…同じセリフを言われて、凹んだのはいつだったっけ…

言った相手は桃子、何のフォローにもならないなぐさめをくれたのは篠原。一樹にとっては遠い遠い過去の思い出。

「タカハシマリコくらい、アンタだって知ってるだろう!?!」

一族の名の売れたヤツを総動員するつもりか? 自分は通用しないくせに。笑いと苦さが心に押し寄せる。

だが、警備員は本気でこの名を知らないらしい。言い返すこともせず睨むばかり。

クラシック音楽には縁がなくなつてジュリアードの警備員は勤まり、日々の生活を送る上で音楽が要らない人たちはいくらでもいる。そうだな、おれはいつだってそれを忘れそうになる。自分が属する狭い狭い特殊な世界のことを。

はん、そんな狭いカゴの中で何をやっているんだろう。重くて仕方

がない高橋の名が通用しないことの悔しさを、自分でもどう扱っていいか持て余す。

「その子はバークリーの留学生よ。私がレッスンをすることになっていたの。職員用カードでもいいかしら」

不意に背後から声を掛けられ、警備員はハッと振り向いた。あくまでも職務に忠実な彼は、ここの職員の顔名前は頭に入れてあるのだろう。

「プロフェッサー、ならきちんと事前に許可を取ってください」

「ごめんなさい、こちらのミスね。ねえカズ、バークリーのIDカードは持っているのでしょうか？」

階段の上で微笑むのは、ピアノ科講師のキミエだった。口論の声を聞きつけたのか、通りかかってくれて良かったのかどうか。一樹は複雑な感情をとりあえず押し込め、カードの入っているはずの財布を取り出そうとした。

なくすなど言われてからしっかりとしまい込んであるそれは、片腕ではうまく取り出せそうになかった。

いい？とささやかれ、一樹は言われるがままに財布ごとキミエに渡す。たいして入っていない現金とクレジットカード、そしてIDカードと。

「あっ…」

そこには、一枚の写真を入れておいたことさえ一樹は忘れていた。ジャムズでふざけて撮った、常連どもと店のスタッフみんなが写っている集合写真。もちろんそこには、笑顔の桃子も。

ちらりとそれに目をやるキミエに笑みが浮かぶ。違う、浮かんで欲しいと一樹は願った。それほど顔色一つ変えない、桃子そっくりの母親のキミエ。

「これは預かっておく。最初からそう言えばいいものを」

ふんぞり返りながら偉そうに警備員が吐き捨てる。ああ悪かったな、言わなくて。おれだって今の今まで知らなかったんだ、キミエにレッスンを受けることになってたなんて！

もちろんこれは、胸の内にしまい込んだ心の声。殊勝に頭を下げて、一樹はキミエの後を付いていきながら学院内に入っていた。

「来るなら来ると言ってくれれば、いつだって歓迎するのに」

穏やかにキミエが声を掛ける。ありがとうございますとだけどうにか答え、一樹は口をつぐんだ。

外側は閉じていても、中にはやはり音があふれている。防音はしっかりしているだろうが、いくつかの開け放たれた部屋からはピアノのきらびやかな音がこぼれ出す。

「…歴史の古い学校だから、もっと年代がかかっているかと思ってた」

ついそんな言葉が出てしまう。それほど壁も庭も全てが真新しい近代的な光を放っている。

「最近建て替えられたのよ。お姉さんが通ってらした頃は、まだ古い校舎だったと思うわ」

姉はここで、みっちりとクラシックの基礎を学んだ。プロとしての演奏活動と併行しながら。

小さいときは、自分もそうなるものだと思っていた。たとえばその頃は落ちこぼれだとかっかりされようとも、管楽器ならすぐに追いつくと。何の根拠もない虚勢を張った精いっぱい自信は、病気があつけなく奪っていつてしまった。

どれだけの距離があるんだろう、姉と自分との間には。病気になるなかつたとしても埋まるはずのない溝。それでも努力をするスターラインにさえ立たせてもらえなかつたんだ、おれは。

「歓迎するって言ったのは嘘じゃないのよ。でも、なぜいきなり来たりしたの？」

自宅の電話は知らせておいたわよね。非難めいた色は何も無しに、キミエは薄く笑って問うた。

「…観光でも、しょうかと」

ニューヨークへは今朝着いたばかりだと、訊かれるままに正直に答

えた。それで最初に観光しようとしたのがジュリアード？キミエの笑顔は苦笑に変わる。

「行くところなんて思いつかなかったから」

声が沈んでいたんだろうか。彼女はもうそれ以上何も訊かず、小さなホールへと一樹を案内した。

「入り口の彼が言っていたことは本当なのよ。先週末まではこのホールでのミニコンサートに自由に入れたのに。今はセキュリティの問題だと言って、事前の届け出と身分証の提出と。なかなか難しい問題ね」

平和にしか見えない穏やかな異国の街が、実は生命の安全を保障しかねる場でもあることをかいま見せる。乱射事件はあとを絶たない。不運にも巻き込まれて、あるはずだった未来を奪われた若者は、何を思ったんだろう。

あるはずだった未来。それはどんな形で断ち切られるかなんてわからない。

でも、誰もがそんな不安さえ持たずに暮らす。あるかも知れないけれど自分には関係ないと信じ切って。

おれは…あるかどうかさえわからない未来を抱えたまま日々を怯える。再発の可能性なんて誰もはっきりしたことなんて言えないのに。確率はあくまでも確率で、起こってしまえば意味なんかない。起こらなくてもそれは同じ。

なのに、いつまで見えない敵に向かって一喜一憂しなきゃならない

んだろう。

才能の壁と、生きることへの壁。この音楽院を守る外壁のようにそれは高くそびえ立っている。

乗り越えることなんてできるのか。今日のキミエのように、手を引いて確実な未来へと招き入れてくれる人がいるとでも言うのか。

難しいことを考えるのは性に合わない。感じるのはただ、切ない想い。

小さなステージには、ヴァイオリンを丁寧演奏する若い女性がいる。客席はまばらで、おそらく校内の生徒同士でこうやって聴き合うのだろう。

現実のステージに立てるのは、実際にはほんの一握りの演奏家のみ。楽器を巧みに操れる人は多くいるのに。さらにその中で、ソリストとして聴く者の心に何かを残せるとしたらそれは本当にわずかな……選ばれし者。

その娘はとても上手だった。何が違うんだろう。少なくとも彼女はジュリアードに入り、こうして人前で演奏するだけの技量を持つ。

姉と、タカハシマリコとの違いは何だろう。

ツキンとした痛みがまた走る。腕に、心に。

演奏が終わってまばらな拍手が消えると、一人また一人と客は消え

ていった。学内の施設だからか、そのまま座り込んだ一樹らを追い払う係員は誰も登場しなかった。

照明が消えた代わりに、窓のカーテンと扉が開け放たれる。自然光の中、静かにキミエと一樹は並んで座っていた。

「ミスター・バークレーは？」

破格のギャラという名目で治療費を負担してくれた恩人の名を問う。エリックと呼べばいいのに、とキミエが笑う。

「今頃はヨーロッパ・ツアーの最中よ。当分ニューヨークは静かね」

素晴らしいミュージシャンだと、悔しそうに言ってたわよ、あなたのことを。キミエの言葉をどう取っているのか図りかねる。世辞を言いそうには見えない。でも、信じ切ることもできない。それに、今はあのとときの演奏すら自分にはできはしない。

「離れていて不安じゃないんですか」

エリックと？笑みを含んだ声で彼女は静かに言う。最初から一緒にいる時間など少ないわ、お互いの仕事が忙しくて。付け足されたセリフに一樹は唇を噛む。

「それでも、マスターのそばじゃなくて彼を選んだんだ」

言うつもりもなかった言葉。言ってから激しく後悔したけれど、もう遅い。おれは何にそんなに苛立っているんだろう。皮肉でも何でもなく、不思議だったんだ。マスターだって穏やかで優しく、そりゃカネもないし頼りがいもないけどさ。

それだけで、家族と住み慣れた土地を捨てられるものなんだろうかと。

「桃子さんを置いてくること、心配じゃなかったんですか」

いったん言い出した言葉は止まらない。本当は誰に言いたかったんだろう。いつだってそうだ、おれもおれの周りも。伝えるはずの相手には何も言えなくて、ぐるっと回って別の人間に思いをぶつけようとする。

「あの子は、強いから」

さらりと返されて、一樹は思わずキミエに向き直った。

「強くなんかない！！！桃子さんは！！：とうこさん、は：」

寂しさを見せないように、と言いかけた一樹をキミエは止めた。あくまでも穏やかに。

「寂しくはなかったと思うの。これは私の身勝手な願望じゃなくて、あの子の本心だと思う。親だからこそわかるのかも知れないけれど」

「それが身勝手だっていう以外、何て言えばいいんだ：」

聞こえないほどの掠れた声。届かなければいい。こんな、他人の家族間へ土足でズカズカ踏み込むみたいな言葉は。

違う。それも違う。他人の家族じゃない、桃子とマスターは。ジャムズでの生活は、一樹を入れたあの三人は、あのととき確かに家族だったはずだ。

「私もあの子も神原も、寂しいという感情なんて持ち合わせてないのだから。もともとそうかも知れないわ」

何を言われてもキミエは感情を乱さない。似ている。イヤと言うほど。

「でも、それが物足りないから：エリックの元に行っただんではない？」

ほとんど見知らぬ人と言っている、目の前の女性。ぶしつけにも程がある。でも言わずにいられなかった。それこそ一樹の身勝手さからなんだろう。

ふう、と小さく息を吐くとキミエは真っ直ぐに一樹を見据えた。目が似ている。その奥の瞳も。目を逸らさずにいるのがやっとなかった。胸の方がずっと痛い。

「私はピアノが弾きたかった。クラシックを勉強したかった。誰に聴かせるでもなく、その音を追及したかった。神原は：店を続けたかった。道がたがえば一緒には居られない。神原のそばを選んだのは、桃子自身だわ」

中学生の女の子。桃子のそれを想像することなんてできないけれど、子どもにそんな重い決断をさせるなんて。努めて穏やかにゆっくり言葉を選び、一樹は問い続けた。

「私は、というよりも私も神原も、あの子を子どもだと思ったことはないわ」

一樹は目を見開いた。自由の利く右手をぎゅっと握りしめながら。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2011 keik
itagawa All Rights Reserved

捧ぐるは愛のみ I Can't Give You Anything B

#35

吹き込む風は少しばかり寂しさを増し、季節が移りつつあることを示していた。いや現実は一樹の心を凍りつかせようとしていたのかも知れない。

「子ども、とは思わない？」

多分に青ざめていたのだろう。怒りからか哀しさからか定かではないけれど。

「誤解されやすいとはよく言われるわ。特に日本へ住んでいた頃はね」

当のキミエ自身は、彼の反応すら想定内であったかのように、まっすぐ前のステージを見続けていた。今は誰もいない舞台を。

「生まれたときから、彼女は別の自我を持つ一人の人間。そう思うことが私たちにとっては自然だったし、親子・家族という名に縛られない、共同生活者として対等な立場としての同志……」

「大人の勝手を押しつけんなよ!!」

たまりかねて一樹はキミエの言葉をさえぎった。しかし彼女は表情一つ変えやしない。

「じゃあ桃子さんは、いつ、誰に甘えれば良かったんだ!? 何の計

算もなく無邪気にさ!!」

あなたもそうしたかったとでも言うの？冷たい響きさえ含むセリフに、一樹は唇を噛む。

「おれは：桃子さんの話をしている：んだ」

「あなたは桃子ではないし、彼女の気持ちは知るよしもないでしょう？」

出逢ったときの桃子の歳を、自分はもう越えてしまった。なのにあの頃の彼女は、一樹にとって既に姉であり保護者だった。守る者であって守られる者じゃない。ごく普通の子どもとして扱われずに、幼い者として愛されたストックのない桃子から、自分は親代わりの愛情をむさぼり奪う存在だったのか。

おれはまだ、欲しいとしか叫ぶことしかできない。できないのに。

ほうっ、とキミエは長いため息をついた。感情を波立てることもなく。

「愛情の形は一つではないのよ」

まるで自分に言い聞かせるかのように、彼女の声が静かに響く。

「子どもは大人の縮小コピーじゃない。大人の言い分なんかかわからない。どんなに桃子さんが大人っぽく見えてたって、傷ついてるのを隠してたかも知れないとは思わなかったんですか」

「思いは言葉にしなければわからない。だからこそ私たちは、この先の生き方を相談するときにはいつも三人で話し合ってきたわ」

意見の相違も、家庭の外にいる恋人の存在も、正式に別れると決めたときも…。

それをすべて冷静に聞いている桃子を想った。子ども時代を子どもとして生きさせてもらえず、大人と扱われた彼女を想った。

最初から大人として生きるか、自分のように未だになかったものにしがみつこうとするか。

頭でつかちな目の前のキミエにはわからないだろう。マスターは、勇次はどう思っていたんだろうか。

ジャムズの音があふれる中で、勇次に会いたいと不意に思いがこみ上げる。淡々と温かな目を向けてくれた彼は、おれが他人だからこそ優しくしてくれたのか。

親子という距離の近さと遠さが、一樹の心を惑わせる。

子どもと思わずに一人の人間として尊重するという扱いを「対等な関係」と信じていた神原の家は、やっぱり見えない歪みがあったとしか思えない。

そう…思い込みただけなのかも知れないけれど。

「…ピアノ」

ふとついて出た言葉に、一樹自身が驚いた。案の定、キミエは聞き返すか聞き咎めるかのような表情を浮かべる。

「あなたのピアノを聴かせてもらえませんか」

言い出した思いは止めることはできない。家族を桃子を日本に置いてまで追及したかったという彼女の音楽は、どんな音を奏でるのだろう、と。

「本来なら、ここだとして使用許可が要るのだけれど」

うつすらと苦く笑いながら、それでもキミエは席を立った。ゆつくりとステージに上がりピアノの蓋を開ける。指を組み、そっと目を閉じる。

しばらく静寂の時間が過ぎ、流れ出したのは：「スイート・オブ・トキオ」のピアノ編曲版だった。

激しい冒頭の主題ではなく、緩やかな第二主題。それを基にした変奏曲。あれから何度も聴き返した孝一郎の代表曲は、一樹の耳の中で常に鳴っているかのように住み続けている。落ち着いたと言うよりも冷静な、冷酷すぎるまで研ぎ澄まされたソリッドな音。その刃のような音色が小さなホールを切り裂いてゆく。

音はだんだんと激しさを増すのに、使われる音は複雑で不協和なものへと変わってゆくのに、すべてがクリアで透明なガラス。

そのガラスに覆われて息ができない。曲の途中にもかかわらず、一樹はドアまで走りよった。人一人が出られるほどの隙間を作って：逃げ出す。

あの曲は誰をも拒絶はしまい。けれど、誰をも近づけまいとする。

真っ向から勝負を挑むのなら受けて立とうというほどの厳しさで、己の心を見つめなおせと迫り来る透明な鏡。光をみな透過させてしまえば、何も映らないはずなのに。どうして醜い自分の心までもが全部見えてしまうんだろう。

おそらくキミエは、誰に聴かせる為でもなくピアノを弾き続けるんだろう。演奏者としての名声も地位も、それによってメシを食うということさえも関係なんかなく。

孝一郎も真理子も、俗な計算なんかしたくでもできやしない。純粹に音楽を追い求めている。世界的に有名な：なんて言葉はあとからついてくるだけ。

おれは。

もう日もだいぶ高くなった。眩しい空に顔を上げて、一樹は固く目をつぶった。

あの厳しいまでの美しさを手に入れる為に、桃子は手放されたのか。もつとも彼女にしてみれば、選んだのは桃子自身だ。それがどれだけ酷な選択かを知りもせずに。

一番酷な選択を突き付けたのが実の母親であるという事実を、キミエは理解できないだろう。桃子は否定するだろう。勝手な憶測で勝手に傷ついているのは、おれだけだ。

深く深くため息をつく。息を吐ききってしまったえば、空気は勝手に肺に入る。どんな種類の呼吸法でもいいけれど、かじったことのあるヤツなら誰でも知っている。

おれは何を吸い込みたいんだろう、これほどまで深くすべてを吐ききって。

ホールの内側からかすかに聴こえるラストのテーマ。キミエの美しいピアノは止まることなく続いている。観客が誰もいなくなってもなお。

たとえ吹くことができなくてもトランペットに触りたい。一樹はあのいかついガードマンのいる入り口に向かって歩き出した。

帰ろう。どこへ。どこかにあるはずの自分の居場所へ。

美術館も観光名所もライブハウスもブランドショップも、どこにも寄らないなんてね。せつかくここまで来たってのに。

苦笑いを浮かべて、何度もため息をつく。空気を吸い込みたいから。きちんとブレスをすればロングトーンができる。いつまでもどこまでも高らかに、音を響かせることができる。

何の為に吹くのかなんて、おれにはまだわかりもしないけれど。それでもなお。

「合い鍵、いちおう渡しはしたけどすぐ返してよ！？今日中にだから！！どうせペインセンターに行くんでしょ！？？」

朝っぱらから金切り声で起こされ、一樹は頭を振った。記憶が定かじゃない。ここはどこだろう。姉ちゃんの部屋の香水が匂わない。レースのぴらぴらのカーテンも揺れてない。頭だけが割れるように痛む。

うつすらと目を開けた彼に、のぞき込んで睨みを利かせたのは…梨香だった。

ああそうか、昨夜は確かこの部屋に転がり込んで。

「これから本格治療を受けようって人が、あれだけ飲んだくれてて良いわけじゃないでしょうが！？挙げ句の果てにあたしの部屋を安いホテルか何かと勘違いしてるんじゃない！？？」

でかい声突き刺さる。顔をしかめて抗議しようとしたが、童顔のくせに精いっぱい怒りの表情を浮かべる梨香を見て、一樹は思わず笑い出した。

「あんたねえ！！」

「ね、おれ昨夜なんかした？それで怒ってんの？それとも…なんもしなかったから怒ってるの？」

一樹はにやつとしながら、自由の利く右手で頬杖をつき下から見上げる。怒りなのか恥ずかしさからか頬を赤らめた梨香がクッションを振り下ろす。

「…ってえ」

直撃を食らって頭を抱える一樹に、この鍵はたった今返してもらうからねっ！！と声を投げつける梨香。

酒を買って飲みながら歩き、独りはイヤだとこの部屋の前で梨香の帰りを待ち、驚く彼女にもたれかかるようにキスをした。そこまでは覚えてる。

慌ただしく出勤の準備を整えている彼女を、ただぼうつと眺めている。思考は停止。何一つ考えたくない。

「じゃ！あたしは仕事行くから！！ホントに今日中に返してよ！？」

鍵を取り上げられて放り出されるのだけは避けられたみたいだ。一樹は甘えた声を出す。病院行くなら一緒に行こうよ、と。

「あんたの着替えを待ってたら、あたしが遅刻すんの！！」

え？言われて初めて、一樹の服すべてが床に散乱していることに気づいた。酔っぱらって記憶のないまま脱いだんかなあ。ついやっちゃうんだよな。片腕でこれを全部着て、顔を洗って歯を磨いて：確かに待っててもらえそうにはないね。

自分の身体に残る気だるさが、悔しげに口を尖らせる梨香を愛おしいと思う理由なんだろう。今この瞬間は、確かに彼女のそばにいたいと願う。どれだけ身勝手な言い分かを知りつつも。

ベッドにもう一度寝ころびながら、梨香を見つめる。彼女の顔はもっと陰しくなっていた。

「もう！！その顔すんの止めてよね！あたしはでっかい捨て犬を捨てた訳じゃない！！」

「はん。照れてんだ、梨香。意外にじゅんじょー」

甘さを含んだ一樹のセリフに、返事代わりのクッションが飛んでくる。

「ってえ、女ってこええ」

「舐めた口を利くんじゃない！！二十代のガキが！！」

言い返そうと口を開きかけた一樹に、ぎゃあホントに遅刻だ！と叫びながら梨香は部屋を出て行こうとした。

ドアの前で振り返って一言。

「いい？今度こそちゃんと治療受けに来なさいよ！？ドタキャンしたらあたしが首根っこつかまえて引きずってってやるから！！」

首をすくめながら、遅刻するよとぼそつと呟く。腕時計と一樹の顔を交互に見た梨香は「覚えてろ、このガキ！」と顔に似合わぬ捨てゼリフ。ドアが閉まるのをしっかりと確認してから、一樹はくすくすと笑い声を上げた。

おれはまだ…笑えるよ。怖れも切なさも心の痛みさえもなかったかのようにね。

まるでテナーのサブトーンみたいな息を吐いて、彼は大きな手のひ

らで顔を覆った。

(つづく)

北川 圭 Copyright 2009-2011
itagawa All Rights Reserved keik

まだ若すぎる Too young to go steady

#36

真新しい建物のペインセンターから、まぶしい太陽の下へと出るときに感じためまい。ずっと夜の暗がりに慣れてしまっていた一樹には、健全すぎるほど健全な真昼が苦手だった。

タバコの煙が充満するライブハウスと、いくら晴天でも窓一つないコンサートホールに詰め続けるツアーサポート。そして…かすかな音さえ出ていくことの許されない密閉した録音スタジオ。

…おれがいる場所は、ここじゃない…

どんなに思っても、今の彼にはトランプットがない。肩から外したことなんかない革ケースの重みの無さが、一樹を不安で包んでいた。

「悪性腫瘍の再発兆候は見られません。骨折部位も完治しています」

何度も伝えられる判で押したような医師の言葉。しかし、と前置きしてペインセンターの担当医は穏やかな視線を一樹に向けた。

「あなたが痛みを感じてるのは事実です。我々はそれを認めます。ですから症状の緩和を図っていきましょう」

難しい英単語は紙で示してくれた。持って行った電子辞書など全く役に立たないし、アジア系米国人の看護師が医学用語の辞典を開いてくれた。移民や留学生用に優しい言葉で説明してくれたものを。

それでも、長いこと待たせられたあげくにもらった薬はいったい何なのか、考えることも一樹には負担だった。

とにかく飲めばいいんだろう。痛み止めか何かなんだろう。それで腕が動くならしい。楽器が吹ければ…それでいい。

彼はあえて梨香へ連絡を取らなかった。合い鍵は返した。もう逢わずに済むだろうか。一樹の心に空洞ができてしまったら、今度はきちんと聡子へと寂しいと伝えられるんだろうか。言葉では思いでは満たされない。じかに伝わる体温だけが一樹を蝕む数え切れないほどの隙間を埋めてくれるとしか、今は思えないのに。

それでも今のままが良いはずない。一樹は目を細めて空を見上げる。健全すぎるほど健全な青い空を。

「ちょ、ちょっとお！！そんだけで足りんの！？大食いのカズが！！」

音大のオープンカフェにすっとんきょうな声が響く。もちろんボントロの尚子だった。

一樹の目の前には水と果物、それだけしか置かれていない。金欠カネコマなら貸してやつから！という尚子の言葉に、一樹は首を横に振った。

「食欲ねえから。これでも精いっぱい。新しい薬飲み始めてから気

持ち悪さ半端なくて」

言うそばから自由の利く右手で口元を押さえる。一日中このイヤな吐き気に悩まされているせいで、とても食い物を口に入れるだけの氣力がわかない。

もしこれが化学療法の薬だとしたら：この感覚は慣れている。本当のところはとづくに再発していて、おれに内緒でなのか自分の英語力の無さからなのか、勝手に抗ガン剤を飲まされてるんじゃないんだろうか。想像もしたくない。ぬぐいきれない不安と不信感が募るばかりで、次の診察なんかサボってやろうかと思っっているくらいなんだから。

「ゼリーとかそういうものではダメですか？少しでも栄養取らないと心配だし。だいたいあれだけ大食いのカズがそれだけなんて」

思わず横から洋輔も声を掛ける。大食いで悪かったな、と一樹が逆ギレる。

「でさ、ちよっとは効いてるの？」

さっさとチキン主体のランチを平らげた尚子は、ケーキにフォークを突き刺しつつ一樹へと訊く。

彼はもう一度、力なく首を振った。

「全然。痛みも治まらないし腕も動きゃしない。医者が言ってたのは二週間とにかく我慢して飲めって。それでも効かなきゃ薬を変えらるってさ。合う薬を見つけるまで二週間実験動物扱いだよ。てか、そんな行き当たりばったりの治療って有りか？」

そこだけは薬局でしつこく説明された。吐き気止めも出すからあき

らめず続けろと念を押された。もしこれが……。ただの痛み止めだと信じていた自分の弱さが、薬の名前さえ確かめられずにいるのに。

「何だ！！ウォーリーズを降板させられたプロのミュージシャン様は、こちらで怪しいクスリに手を染めていると！！！」

脳天を突き刺すような気に障る声の持ち主なんて、振り向かなくてもわかる。まるでワンセットのようについてくるシェリルの叱責も想定内だ。

「いい加減にしなさいよ！ブライアン！！言っていいことと悪いことがあるでしょ！？」

さすがに厳しい彼女の声色に、ブライアンは鼻白んだ。一樹がその前にむすつとした顔で睨みつけたせいでもあるだろう。

「悪いけどさ、あんたらの相手してる状態じゃねえの。機嫌悪いんだよね、おれ。視界から消えてくくんない？」

ちよつと！こいつと一緒にするの止めてよね！シェリルが慌ててまくし立てる。それから一樹のそばの椅子へと座り込み、大丈夫なの？と表情を曇らせる。

「当分吹けそうにないのは変わんないし、作曲科でも落ちこぼれの状態で単位をかき集めてるだけだし。何やってんだらうね、おれって。ホントにさ」

口の中が苦い。吐き気だけのせいじゃない。何のためにここへ来た

のだろう。ただ：何もかもから逃げ回っているだけなんだろうか。それでも無理に作り笑いを浮かべてみせる。ブライアンはともかく、せっかくできた友人らにこれ以上心配は掛けられない。

当のブライアンも決まり悪そうに空いた席に腰を下ろす。根っから悪い男じゃないことは見ればわかる。性根の悪いヤツがこんな、どピンクのブーツカットパンツにこれもショッキングピンクのシャツなんか合わせて着ないだろう。羽織ったジレには虹色のフリンジまでついている。八十年代のアイドルならこんな衣装を着ることもあるかも知れない。まあ、想像でしかないけれど。

作り笑いは苦笑へと変わる。こんなときでも、ああそうだ。おれは笑えるんだ。きつとね。

黙って目を泳がせているブライアンは、本気で一樹になんて声を掛ければいいのかわからないのだろう。一度視線を外してから、わざと一樹はブライアンを挑発する。

「せっかくのチャンスができたんだ。あんたがシンシア・グループに入ればいいのに。オーディションを受けたいんだったら伝えてやるよ。ラッパのレパも増やしたとこだし、バークリーの天才首席奏者が入りたがっているってね。たぶんきつと、シンシアもフィリスも喜ぶんじゃないね？」

にやにや自虐的に吐き捨てる一樹に、周りはどう反応しているのか戸惑っている。

しかしブライアンは、珍しく真剣な瞳を一樹へと向けた。

「ボクは確かに天才奏者だ。その点では君と意見が一致して嬉しいよ。けれどね、天才は自分の力量を十分知っているものだよ。ボクは自意識過剰の自惚れ屋ではないし」

このセリフに、シェリルが何かをこらえるように横を向く。肩が震えていたかも知れない。洋輔は一樹とブライアンの顔を交互に見やっておろおろするばかりだし、尚子に至っては遠慮など何もないように後ろを向いて笑い転げている。

気にもしない様子でしれっとブライアンは言葉を続けた。

「現在のボクにはセッショナイト辺りがベストな選択だ。自分で満足するほどの使える技術と音が伴わない今のままでレギュラー入りし、人氣が爆発して売れてしまったらどうなる？すぐ潰されるだろう？ボクはそんな愚かな真似はしたくないからね」

真面目な彼に一樹もまっすぐ見返す。睨み返すと言った方がいいかもしれない。どういう意味だ、と。

「もっと易しい英語で話してやりなさいよ、ブライアン。というよりもっと素直にね」

シェリルの柔らかい声。つまりね、カズ。耳元で鳴るベルベット・トーン。

「この自意識過剰の自惚れ屋も、あなたの才能は認めてるって言いたいよ。来たばかりなのに実力で老舗のライブハウスのレギュラーをもぎ取ったあなたを、ね」

一樹の目が見開かれる。おれの、実力？

「シンシアのグループは今は全然、管を募集してないの。あなたのトランペットが入ったいい曲だったたくさんあったのに、それらは一切やるつもりもないって言ってたわ。カズが戻ってくるまではってね」

あれ以来、店のライブにもバンドの連中にも顔を見せに行っていない。フィリスとは電話でやり取りした。

待ってくれている？おれを？いつ戻れるかもわからないのに。

「そういうことよね？ブライアン」

ふいっと言葉を返すシェリルに、彼は照れたようにそっぽを向いた。

「治療が進めばまた吹けるようになる、そう信じていていいんでしよう？」

にっこりと微笑む彼女にあいまいなぎこちない笑顔で応える。そんなこと、自分自身でさえわからないから苦しんでる。信じたいのは誰よりもおれなのに。

「どうせ治療費をケチって、ろくでもないクスリをもらってきたんじゃないのか？」

照れ隠しなのか、憎まれ口とともにブライアンはテーブルの上に無造作に置かれた一樹のクスリをさっと手に取った。

「プライバシーの侵害よ！！無神経ないことしないの！！」

シェリルの声に首をすくめ、それでも彼は処方の説明書に目をやった。

「どうせ英語もろくにわからないんだろう？ 天才ブライアン様が懇切丁寧に教えてやろうとだね」

いいよ！とも止めろ！とも言えず、一樹は固まったまま動けない。どうか聞き覚えのある薬品名ではありませんように。知らないまでも、はつきりと痛み止めだと明記してありますように。

調べればいいことをそのままにしていた。ブライアンが教えてくれるってなら、それを受け止め受け入れろってことなのかも知れない。

一樹の顔が思わず歪む。が、ブライアンはげげんそうな表情を浮かべた。

「これって、アメリカではポピュラーな抗うつ剤だけれど。本当にこれでいいのかい？」

意味がわからない。こいつは何を言ってるんだ？戸惑う一樹に気づいているのかどうか、ブライアンは何度も説明書をひっくり返しては細かい文字を追い続ける。

「ああ、ここに書いてある。痛みが固定化された状態では中枢神経系用薬を用いて治療を行うのが一般的、なんだねえ。いくら博学のボクでもそれは知らなかった。処方の間違いというわけじゃなく、その中に抗うつ剤も入っているらしいよ。まあ君の場合は鬱病ではないのだろうし。親子とは言え、パリフィ爾時代のコウイチロウのような苦悩の人というイメージは君にはないからなあ。いてっ！！」

最後の叫び声は、尚子がブライアンに蹴りを入れたからだろう。余分なこと言わなくていいの！小声の怒りはだが、一樹の耳に確実に伝わってしまった。

コウイチロウのような…？何だそれ。

「待てよ。パリフィル時代のコウイチロウのようになってどういう意味だよ」

低く静かな一樹の問いに、息子なのに知らないわけないだろう？と声を上げたブライアンは「アウチ！！」と足を抱え込んだ。今度は蹴りでは済まなかったらしい。

一樹の視線が答えを探して皆を見回す。唇を噛むように黙っていた尚子は、ブライアンが再び口を開きかけたのを手で強引に制して、ただの噂よ、と呟いた。

父のパリフィル時代。それは一樹にとってたった一人で闘いを強いられた日々。姉は国際コンクールへの出場を掛け、家族三人はパリへと移り住み…横浜へ残されたのは一樹だけ。

今でも彼を苦しめる腕の病気を発症し、手術を受けて文字通り生命の危機さえあったのに、誰一人日本に帰ろうとも温かい声を掛けようとしなかったあの頃。

不安に押し潰されそうな一樹のそばにいてくれたのは……赤の他人

の桃子だったのに。

「何があつたんだよ!! みんな知ってるの!? おれには大事な
ことなんだ!! 教えてくれよ!!」

思わず立ち上がる一樹に、他のテーブル客の視線も集まる。構って
いられない。何があつたんだ、あの頃に。何故みんな知っているん
だ。実の息子の自分が知らないってのに。

その真剣な様子に、尚子は言葉を選びつつ応える。

「本当にただの噂だから。クラシック畑のヤツらが耳にしたことが
あるって程度のね。あの頃の高橋孝一郎は、パリフィルとのトラブ
ルが続いて…精神的に疲れていたって」

いきなり駆け出す一樹の背中に、どこ行く気ですか!?!と洋輔が叫
ぶ。

息を整えてから、一樹は振り向いた。

「ロマーノ先生のところに。父の友人ならきつと、もっと詳しいこ
とを教えてもらえるかも知れないし」

「カズ……」

精神的に疲れていたってどういうことだよ。はっきり言ってくれよ。
死ぬか生きるかというほどの状態だった息子に思いを寄せることも
できない何かがあつたなら。それをおれにだけは伝えずにいたのだ

としたら。

すべてを振り切れるのならと、一樹は教官室へと黙って歩き続けた。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2011 keik
itaga wa All Rights Reserved

#37

教官室へ入ってもしばらくは動揺から息が切れて、一樹は何一つ言えずにいた。ロマーノのまなざしは柔らかい、常に。

「具合はどうだい。作曲科では真面目に授業を受けていると聞いたけれど」

「いろいろご配慮ありがとうございました。それより今日は…」

クセで日本式に頭を下げて礼を言うと、まっすぐにロマーノを見据える。父のことを教えてくれ、と。

「パリフィル時代…かい」

他の誰に訊いても「息子なら直接教えてもらえ」と言われるだろう。もしくはブライアンのように、知らないのか息子のクセにと嗤われる。

しかしロマーノは顎に手をやり、ゆっくりと一樹に向き合った。無言だけれどイヤじゃない。これは静寂ではなくただのブレイク。次のフレーズがそつと入ってくるまでの。

「そう昔の話じゃないね。けれどあの頃のパリフィルは客演したアジア系指揮者とたいそう揉めてね」

ああ、今やクラシック界で著しい活躍を見せるのは皆アジア人ばかり

りだ。小難しいコンクールに入賞するのも、指揮者として名を馳せるのも。もともとが西洋それも宗教を主体としたはずの芸術は、いつの間にか世界の共通語となり、軽々と言葉の壁を乗り越えて東からの風が吹き荒れている。

ジャズも同じ。

ここの学生だって例外じゃない。勤勉で器用とされる日本人らは技術なんかすぐに習得してしまう。

「そこへ送り込まれた、と言っては言い過ぎかな。あまり喜ばれないタイミングで日本人初の常任指揮者となったのがコウイチロウだよ」

言葉を選んでるんだろう。要は最初から歓迎なんかされなかった。外面がいくせに本当はプライドのかたまりのお父様は、どうせ高飛車な態度で臨んだんだろう。想像するのは難しいことじゃなかった。

「音楽性が、ということではなかったのは確かだ。オケの連中にも他意はないだろう。けれどパリのフィルをまとめ上げるのにはたいそう苦労していたようなんだ」

彼と直接会って話せばよかったのだけれど、こちらもバタバタしてしまっていてね。言い訳というよりも後悔の念をにじませるローノは、一樹が思っていたよりずっと父親とは親しかったのだろうか。

「アヤコが…君のお母様から相談は受けていた。とても目を離せられないとね」

どうということ…ですか。一樹の目が見開かれる。

「精神的に疲れているというのは噂で聞いた。彼ほどの人物がよく知りもしない外野からそう言われるほど弱っているとしたら、本当はかなり辛いのだろう。何度目かの電話で治療を受けていることを聞かされた」

治療が必要なほどの「苦悩」…それがブライアンのほめかしたことなんだろうか。

ロマーノはピアノの前に腰掛け、窓からの陽射しを受けつつ穏やかに話し続ける。一樹は、座るように促されながらも立ちすくんでいた。

誰も…誰もあの頃のことなんて話しちゃくれなかった。姉のコンクールのためにパリに居続けたのだばかり思っていた。おれは必要ないから、姉には最高の環境を用意したいから。高橋の家は姉中心で回っていたんじゃないのか。

吐き気は自分が飲んだ薬のせいなんだろうか。一嚙りのフルーツでさえ消化してはくれない。

「目を離したら、アパルトメントの窓から飛び降りてしまうんじゃないか。アヤコの声も沈んでいた。本来なら入院させて音楽活動から引き離れた方がいいと再三医師から言われていながらも、コウイチロウは頑として聞き入れなかった。その代わり…アヤコは片時も

彼の側を離れず、見守るといふか見張り続けている必要があったそうだよ。日本へは帰れない、子どもたちに心配は掛けられない。マリコのコンクールのためという大義名分があれば、パリに閉じこもっていてもそれほど不審には思われないだろう。何よりも体面を重んじるコウイチロウ本人の負担を少しでも減らしてやりたいとね」

それは彼個人のというよりは、日本人初という重荷を背負っていたからなのかも知れない。

いつ飛び降りるかわからない：それほど精神的に追い詰められていたのか。あの何があっても動じそうにないお父様が。

おれも姉も蚊帳の外で、親たちの思惑とは真逆に、疎外感と不信感だけを育てていくことになったってのに。

ああ違うや。姉ちゃんは音楽さえあればいい。ヴァイオリンだけを弾いていればいい。本人でさえ不満どころか周りの痛みも感じないだろう。あの人はそういう人だ、嫌味や妬みではなく。

おれは。

またこうやって他人から、肉親の本当の姿を間接的に知らされるんだ。おまえは愛されていたんだと。その言葉の裏には「だから感謝しろ」という、世間的には当たり前すぎるほどのメッセージが込められるんだろう。

いい加減にしてくれ！

当の本人に届かない想いなんて、何の役にも立たないのに！

とうとう一樹は、椅子ではなく床にしゃがみ込んでしまった。何もかもが気持ち悪い。この世界も音の鳴る空間も、空腹も薬も全部が！

右手で顔を覆う。やり切れなさをと同時に一樹を覆い尽くす。親と子はこうしてこうもすれ違うんだ！

ただ単純に、子どもが子どもでいられればいいのに。愛され、笑顔を向けられ、子どものすることだからと微笑ましく甘やかされ。

真実を全部隠されて冷たくされるのも、桃子のように大人と同等の階層に立たされるのを無理強いされるのも、全部違うよ！

一樹には到底うまく言い表せなかった。ましてや英語でそれをローマノに話せるはずもなかった。

でも違うんだ！大人の問題には関係ないと切り捨てなよ！だからって、大人扱いするなよ！

都合がよすぎるって？ありきたりのガキ扱いでよかったのに。ただ…それだけなのに。

「私は君に、余計なことを伝えてしまったかな」

同じように腰を落とし、一樹と同じ目線の高さでローマノは静かに言った。力なく首を振る。教えてくださって…ありがとうございませう。それだけを何とか呟く。

「僕は……無い物ねだりばかりしてるんでしょう…か」

一介の音楽教官であるロマーノに言うことじゃないだろう。それはわかる。でも今は、父の友人としての彼に問いたかった。事情もよく飲み込めてはいないだろう彼に。

「コウイチロウが辛さを君に悟られまいとしたのは、みな精いっぱい君を守ろうとしたからじゃないのかな。部外者の勝手な言いぐさだから、気にしないでくれよ」

大きな手が、そっと一樹の頭に置かれる。

この手だけでも、誰かがくれればよかったのにね。今ではなくあの頃にさ。

何も言わなくても伝わるだろうというのが家族の甘えと驕りならば、キミエのような「すべてを言葉にしてはつきり伝えるのが家族という名の同志への正しい姿」というのは頭でっかちの思いこみ。

どちらも不器用で、いびつだ。

哀しいね。お互い哀しい思いを抱えた者たちが、疑似家族で笑い合っていた。それもとつても…哀しいことだね。

「いつかは君も、コウイチロウの思いを理解できるようになるさ」

純粹な善意から発せられたロマーノの言葉に、そうですねと返す。建前くらいは言えるようになった。それくらいは大人になった。そう思ったかった。

あの頃の桃子はどんな思いで一樹を見ていたんだろうか。ガキそのものの感情をぶつけ、愛してくれとわめくだけのおれを。

息を整えると一樹は立ち上がった。ロマーノに笑顔を返すのを忘れなかった。感謝の言葉とともに。

心配げに外で待っていただろう友人らにも、ありがとうと笑いかける。ため息を一つ。それから「いろいろわかってよかった」と付け加えて。

「ブライアン様のおかげだな。余計なことをべらべら言ってくれたせいで、悩みごとが一つ消えたかもな」

いつもの口調に周りがほっとする。

けれど、一樹の周りから色彩は消えていた。すべてがモノトーンにしか見えない。ピアノソロもヴァイオリンソロも要らない。極彩色のフルバンドの音が欲しい。その不協和音のまったただ中に身を置きたい。

美しく調和の取れたオーケストラなんか消えろ！

心の中で叫んだ一樹に、突然なだれ込んできた音は…スイート・オブ・トキオ…。

皆から離れて一人になった彼は、口元を押さえて苦しさに耐え続けていた。

(55)

北川圭 Copyright 2009-2011
itagawa All Rights Reserved
keik

真珠の首飾り (A String of Pearls)

#38

大学が長期休みに入っても、もともと一樹は帰国するつもりさえなかった。個人レッスンを増やし、作曲科での単位を集め、教会が主催する格安の語学教室へと通う。そんなスケジュールを立てられるほどにはこちらの生活にも慣れた。

全く楽器が吹けずにいることも痛みを取るための薬を飲み続けていることも、これ以上家族に伝える気など無い。聡子にすら。

音を出さないのなら姉の部屋でこもることもできる。作曲はPCがあればとりあえず形になる。凡庸にも程がある習作という名の模倣。それをレポートのように提出し続ければ卒業できるだろう。

何のために、ここへ来たのかもわからないまま。

海外に来て改めて高橋親子の名声を聞き、実感した。その中にはもちろん自分は含まれていない。

自分の音が狭いコミュニティの中では受け入れられる。それはなかった。でも、これからというときにいつだって、音は一樹から奪い取られてしまう。

手に入れた老舗のライブハウスでのレギュラーも消えた。実力のなさなら納得も行く。再発こそ免れてはいるけれど、病気のせいで骨はすかすかだと…折れていると。これ以上楽器を吹くことは今はできない。今は…できないだけだ。

そして、あり得ない形で桃子と再会した。キミエという実の母親にまで。

彼女の家庭の事情なんて知らずにいたかった。桃子はいつだって凜として冷静で、それでも本人が思うほどには冷たくなかないほどのお節焼きで。

母親を取るか父親を取るか、残酷な選択を強いられてきたことなど知られたくもないだろう。桃子自身だって。

どちらも子どもである桃子を見ずに、遠くのどこかに漠然とある音楽だけを見ていた。

一番普通の家族らしかったのが、マスターとおれと桃子という、何の血縁関係もない擬似家族だったなんて。切ないね。

さらにここへ来てまた、父である孝一郎の苦悩を突きつけられ、赤の他人の口から「君は見離されていたわけではないのだよ」と諭された。

それに何の意味がある？

あの頃に持った感情は変わらない。過去に戻って変えることはできない。寂しいだなんて手垢のついた言葉じゃ説明できないほどの孤独感を、さかのぼって癒すことなんかできやしない。

こんな思いを味わうために、おれはボストンまで来たんだろうか。日本にいれば目の前に父はいたのに。何一つ会話もせず、事情も説明されず、謝罪の言葉もない。向こうからすれば必要感なんかないんだし。

ああそうさ、大人は子どもを見くびる。いつだって。「いつかはわかってくれる」と平気で親子の関係に安心しきって油断する。

わかるはずもない。そのときに手に入れなきゃもらえないものはいくらでもあるのに。一樹にとって、十五のあの頃にこそ欲しかった必要だった温かさは、どうあがいても一生手には入らない。

桃子が黙って母親であるキミエを見送ったように。それを「理解のある娘」としか思えない身勝手なキミエ。きっと今でも理想的な自立した新しい家族の形だと自画自賛していることだろう。心の奥底では。

あきらめてしまった桃子はいつだって微笑んでいる。感情を動かさない、めったには。親の愛をあきらめきれずにいる一樹にとって、あの頃を支えてくれた桃子は姉であって姉じゃない。

それ以上は考えるな。

一樹は姉の部屋に置かれた、フリルだらけのベッドに倒れ込んだ。天井を見上げる。それからゆっくりと、サイドに置かれた写真を見る。やる。

何もかも見透かすような聡子の瞳が苦手だった。姉の親友であり、自分と付き合ってくれる恋人。踏み込んで欲しくないと一樹がわがままを言えば、それをすんなりと受け入れる。何も疑わず、いや、見て見ぬふりをしてくれる。とうてい自分なんかじゃかなわない相手。

…姉ちゃんのはのんきだから…

複雑な気持ちを抱えて思わず笑う。おれには今しかないのにね。将来というものを考えてはいけないのに。十年後、五年後：一年後に生きているかどうかなんて、はっきりと確率で表されてしまうのに。今は痛みで動かせない左腕に、一樹はそつとかばうように触れた。再発の恐怖はついて回る、一生。その怖さに誰も巻き込もうとは思わない。でも、一人で向かうには荷が重すぎる。ひどいくらいの矛盾に一樹は苦しむ。

だから、刹那的な愛でいい。
この一瞬に誰かが自分を欲してくれるならそれでいい。

ぞくり。

たった一人という思いは、本当に身体を押しつぶそうとする。胸が重い。寒気で全身が震え出す。誰か！誰か！！

梨香は当直だと言っていた。電話もメールもつながらないだろう。大学の友達は？どうでもいい話をいくら重ねても、この空虚感が埋まることはない。ウォーリーズはライブがはねた頃か。かつての仲間が楽器に触れている姿を見て惨めな思いをまた味わいたいのか。じゃあ誰に？

一樹は手にした携帯のアドレス帳を開けた。つい勝手に押してしまったのは：エリックのライブ前に思わず交換してしまった桃子の登録番号だった。

出るわけがない。出ないでくれ。頼むからどうか。

呼び出し音が一つ鳴るたびに、別の意味で胸が痛くなる。声を聴いたらすべて崩れる。救いはポストンとシアトルとの物理的な距離だ。ニューヨークとは違う、行こうと思いついて行ける場所じゃない。

それでも、逢いたかった。

この世で一人ではないと確実に感じさせてくれるのは、実の家族でも他の誰でもなく：桃子だったから。

呼び出し音は続く。いつまでも途切れない。出る気がないのか、放置して気づかないのか。それとも、表示されているはずのkazuki・takahashiに無視を決め込んでいるのか。

でも一樹から電話を切るだけの勇氣はともなかった。

：Your call cannot be completed
because the number you have dialed is outside the service area
or the telephone maybe switched
off.：

無機質なオペレーターの音声ガイドが聞こえてはじめて、一樹はスイッチを切った。

黙って立ち上がり、ハガキを入れたファイルをあさる。頭のどこかで自分を必死にとどめようとするのに、止められない。あったはずだ、確かにどこかに。篠原と二人で撮った写真とともに新居の連絡先が書かれた、ありがちなエメールアドレスが。

大して荷物もない。見つからなければよかったのに、と八つ当たり。そこには篠原の自宅電話の番号が記されていた。どうする気だ、掛けるのか。篠原が出たら？

そこまで思い当たって、一樹は自分に呆れて口元をゆがめた。

：バカだ、おれ。篠原さんが出たら彼と話せばいいだけじゃん：

そもそも知り合ったのは篠原の方が先だ。わずかの差だけど。彼こそが桃子と引き合わせてくれた。大切な大切な恩人であって、先輩であって、友人である篠原。

彼とだって話せば落ち着くだろう。だったら最初から自宅に掛ければよかったんだ。

山ほどの言い訳を思い浮かべてから電話を掛ける。今度はさほど緊張もせず。

が、やっぱり同じだった。誰も出ない。国内時差があってもこの時間なら家にいるはずなのに。急に一樹を覆う不安はなかなか消えてはくれなかった。出かけているのか旅行か、いくらでも理由はあるだろうに。それでもなお。

別の時計に目をやる。軽く舌打ち。日本はちょうど昼時だ。

ジャムズのランチタイムは、戦場のように忙しいのは自分がよく知っている。ちょうど店では、珍しく昼間も働くようになったというマスターの勇次が必死に接客をしているところだろう。

けれど一樹は、ためらうことなくボタンを押した。誰でもいいから声を聴きたい。忙しいのがわかんないの！？という結香の怒鳴り声でもいい。

が、電話に出たのは勇次だった。

「はい、ジャムズでござ…。え？一樹くんかい！？」

電波が途切れ途切れでよく聞こえない。それでもものんびりとした声にほっとした。急いで篠原の家と連絡がつかないことだけを伝える。何か聞いていないかと。

言いながらも、別にジャムズが一樹の実家でも何でもないのにと苦笑いが浮かぶ。もともと全くの赤の他人なんだ、篠原も神原の家もおれはそれなのに、高橋には掛けずにこっちへは当然のように掛けるんだな、と。

けれど、そんな感傷はすぐに吹っ飛んだ。

「え？桃子ちゃんかい？日本にいるよ、今。大したことないけど入院…」

「入院！？どういうことだよ！！もしもし？もし」

電話は唐突に切れた。もう一度掛け直すだけの気力が一樹にはもう無かった。

入院、桃子さんが。

一番似合わない組み合わせじゃないか。どうして、どうしてそんな何があったっていうんだらう。あのライブからどれくらい経っていたっけ。

もう一回、ランチが落ち着いた頃に掛ければいい。ただそれだけの

ことなのに。誰か別の知り合いに聞けば用は済む。状況がわかればそれでいいはず。

でも、でも。

篠原も自宅にいないのなら、一緒に日本にいるんだろうか。大したことはないとマスターは言ったが、仕事を休んでまで帰国したのだとしたら。

一人で勝手に想像が進んでいく。聞けばいいんだよ、誰かに！わかってるそんなこと！！

はつきりさせるのが怖い。だったら直接知りたい。

シアトルが遠いのなんのと言っていたはずが、気づけば一樹はPCを立ち上げてすぐ手に入りそうな航空券を探し始めていた。

ポストンから直行便はないのに。帰る気か、日本へ。

ずっと帰国してないんだ、一度くらいいいだろう。みんなの顔を見たらすぐに引き返せばいい。

みんなの顔…ああ違う。

一樹は知らずに浮かんだ思いを、必死にしまい込もうとしていた。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2011 keik
itagawa All Rights Reserved

#39

アメリカ国内の飛行機を乗り継ぐ。その程度の行動でさえ一樹は今までもろくにすることがなかったのだと、何かをするたびに思い知らされる。それでも、日常を送るにはだいぶ不自由しないほど異国語でコミュニケーションできるようにはなってきた。

この国はよそ者には優しい。手を貸す。ましてや彼のように動く片腕で必死に荷物を支えている姿を見れば、誰彼なく救いを差し伸べる。

それが本当の意味で受け入れられているのかまではわからないけれど。

音感が悪いはずもない一樹だ。文法はブロークンでも発音の方が先に身につけている。彼の言いたいことを汲み取って、あちらへ行けこっちで手続きしろと、周りからいつかのよう早口でまくし立てられる。

腕に負担のかからないようコーチトンプソンのワンショルダーバックを肩に掛け、一樹は見知らぬ地方の空港で搭乗口を探していた。とにかく早く、まずは西に行きさえすれば日本への直行便をつかまえやすくなる。なぜ急ぐのかもわからないままに、次の日の昼にはもう、なじみのある機体に彼は乗っていた。

誰かに電話でメールで訊けばすむことなんだ。桃子に何が起こったかなんて。勇次の口調は深刻そうでもなかったし、事情なんてあつけないほど単純かも知れないじゃないか。わかっていた。そんなことは十分に。

けれど、何か理由をつけて帰リたかったのか。それまでは意地でも帰ろうとはしなかったのか。

一度帰ってしまったえば、ボストンにしがみつく理由がなくなってしまう。そんな怖さもあったのかも知れない。

一人をあんなに望んでいたのに。一人があんなに怖かったくせに。家族を熱望していたのに。家族が疎ましく離れたくてたまらなくなつたくせに。

自分が持つ矛盾に、とうてい一樹は耐えられなかった。

側にいて欲しいのは、誰でもじゃない。でも決して求めてはいけない。

おれが欲しいと願っているのは、あのときにもらいそびれた親の愛情であって、恋愛感情なんかじゃない。頭をなでて抱きしめて欲しいのは親からの無償の愛であって、いらつくほど衝動的な触れ合いじゃない。

代わりにはならない。代わりにはなれない。今からでは手に入れることなんかできない。

必死に自分に言い聞かすのに、それでも一樹は探し続ける。温かな手を。まなざしを。

右手を握りしめて口元に当て、気づくと歯でこぶしを噛んでいた。タバコを吸うわけにもいかないからか。無意識の行動があまりに子どもっぽくて、一樹は目をつぶった。笑えるほど心に余裕がない。

ふと、横の機内オーディオから音がもれ聞こえてきた。そんなに音量は大きくないはずだろうに。

聞き覚えがある。なんだっけ。ささくれみたいな引っかかりはなかなか彼を解放してはくれない。

題名が思い出せないくせに、コード進行だけが頭に浮かぶ。自分で勝手にリアレンジを始めてしまう。

…心を満たしてくれる人はどこにいるんだろう。みんな私を傷つけ、そして去っていく。また一人残されて…

歌詞までが浮かんできて、ようやく思い至る。

ビリー・ホリデイの名曲だ。レフト・アローン。彼女が書いた詞だっていうのに、別の誰かが途切れることなく歌い継いでゆく哀しい曲。

こんな空の上で聴くとは思わなかった。真っ昼間の明るい雲の上で流れていい曲じゃない。もの暗いライブハウスの端で、じゃなきゃ昔ながらのレコードを聴かせる店で、それこそタバコにまみれて聴きたい。

なんて勝手な言い草だろう。曲なんて演奏者のもので、最後には聴き手が自由に聴けばいい。隣に座る小太りのオヤジには、たまたま掛けた機内サービスで偶然聞こえてきただけのBGMにすぎないのに、ね。

ただ一人。自分もそうだというのか。そんなわけない。おれの周り

には氣遣ってくれる多くの友人と静かに見守る大人たちと音があふれている。一人なんかじゃない。

レフト・アローン…か。

あのもの悲しくてスローなジャズバラードの代表作を、考えられないほどずっとんだテンポで吹いてみたい。マクリーンの官能的とも言える甘いフレージングを、スタッカート主体で齒切れ良く吹けばどうなるだろう。

どこかラテンというよりはヨーロッパ系のスパニッシュテイストが加わって、それはソルイソンブラ（光と影）の憂うさまをより引き立たせる気がする。

そのパッセージが速ければ速いほど。生き急ぐ一樹にまわりつく重苦しい闇のように。

耳から聞こえる現実の音楽ではなく彼自身の音に囲まれて、エコノミーの最後部席で一樹はいつしか寝入っていた。

身体がきしむ。無理もない。あんな狭い座席で寝こけていたんだから。

不自然に腕を伸ばし、口を大きく開ける。けだるさは取れそうもない。それでもざわめきの声が日本語だというだけで、一樹はいくぶん、いやかなりホツとした。

成田から都心までは地下の直通電車に乗ればいい。歩きかけて彼は足を止めた。

どこへ行く気だ？ジャムズか。どうして…自分には帰る家があるのに。そこには本物の血のつながった家族がいるのに。

帰国すると決めてから誰にも伝えていなかった。ボストンからニューヨークへ行くと決めたあの日より、ずっと早く、自然に動いていた。

自分の身勝手さに足がすくむ。他の誰のためにだって帰ろうとはしなかったくせにね。

わざわざ別のカウンターへ寄ってから空港ビルの外へ出る。ほんの一步。それは久しぶりの日本。向かうのは都内には違いないはずなのに、なぜか一樹はバスを選んだ。あの日のチャイナバスを思い起こすかのように。

結局、都心のホテルに宿を取った。金もなく医者にもろくに行けないと姉ちゃんにバレてから、無理やり持たされたクレジットカード。どうせ請求は父親へと行く。意地でも使いたくはなかったけれど、予約も入れずにそれなりのホテルに飛び込むには確かに便利だ。チケット代だって全部ここから。手持ちの金なんかない。生活するのがやっとだったのに。

甘えているんだろう、とことん自分は。

自立したいと、していると思いこんでいた。寂しいと叫びながらもその庇護の元にいた。留学だって自分で決めて自分で手配して、でもそれは父と姉の名があればこそ実現する守られたママゴト。

学長へと、そして担当教官であるロマーノへと、父からはとうに話がついていた。見えない檻が一樹を覆う。ウォーリーズだけは違ったはずだ。なのにそれは、ほんのつかの間だった。

どこへ行っても逃れられないのなら、いつそあきらめてしまえばいい。楽器も吹けず音楽にも触れず、あの白い家に閉じこもってしまえばいい。それが家族というのなら。家庭というものならば。

自分さえ心を閉じて作り笑いをしていれば、いくら気難しいお父様とだって会話くらい交わすこともあるだろう。お母様に自分から話しかけることもあるだろう。そういう日常を積み重ねていけばいいんだ。

外の世界ではばたこうとしても、音のない場所には行けない。一樹には。

そして…音のあるところには高橋の名がついて回る。どんなにあがいても足を絡め取られる。比べられる。

お父様はおれの病気を心配して言うてくださるんだ。ああそうなんだろう、それが本心なんだろう。見捨てていたわけじゃない。自分が子どもの頃だって事情も伝えず守ろうとしたんだろう、彼らは彼らなりに家族というものを。

それは…それぞれの心に大きな後悔だけを残して。

広々としたベッドに身体を横たえる。長いフライトで疲れは抜けない。薬は効いているはずだけど、それでも鈍く痛む左の腕。

逢いたくて知りたくて考えもなしに来てしまったのに、おれはこんなところで何をしているんだろう。離れたことのなかったトランプペットさえ、異国の部屋に残したままで。

右手をぎゅっと握りしめてから、一樹は立ち上がった。

意を決して下北沢のジャムズへと向かった。ボストンから電話してきた一樹本人が顔を出すとは思わないだろう。驚く顔が見たかった。懐かしいみんなの。

けれど、ライブハウスには珍しく一階に設けられた店の入り口にはCLOSEDの案内板が掛けられていた。

…そんな。今はランチタイムでかき入れ時だろ？ どうして…

大きく明るい窓をそつとのぞく。人の気配がない。照明も落とされている。一樹は携帯で連絡を取るかどうか迷った。

何でだろう。デジタル信号に変えられたものに頼りたくない。アナログで、自分のこの目で見たものしか信じたくない。今どきCDすら認めず、レコードにこだわり続けるジャズマニアのように。

住居部分の入り口へと回り込む。やっぱり誰も…。そう思いかけた一樹に、のんびりとした声がかかる。

「おや一樹くん、どうしたんですか。いつ帰国したんです？」

「マ…スター…」

怯えた、いやきつと泣き出しそうな顔をしていたんだろう。マスターの勇次が穏やかに微笑む。

「店が、だって…閉まってて…それで」

まともに言葉にもならない。

これから病院に行くんですが、一緒に行きますか。あくまでもゆったりと勇次が一樹を誘う。

訊けない。どうして病院なんかに行くのかも。何でそんなに落ち着いているのかも。おれ一人がいつだって理由も知らされずにびくびくとしているんだ。

車に乗り込むところだったのだろう、すぐに助手席を開けてくれた。力なく乗り込む。

「いえね、思ったより桃子ちゃんの入院が長引きそうなんで、荷物を取りに来たんですよ。私じゃわからないこともあるからって店を閉めて結香ちゃんに買い物を頼んで。時間がかかったちゃってねえ」

そう言うてにこやかに笑う。一樹だけが顔を引きつらせたままだ。

「君を見たら喜ぶと思いますよ、桃子ちゃん。いや、びっくりするかな。ずっと会ってなかったでしょうからねえ」

勇次には伝えてなかった。伝えられるわけもなかった。キミエに会ったとは。そして桃子とも彼の地で会っていたなんてとても言えない。

そんな過去を聞いてもなお、目の前のマスターとは結びつかなかった。平凡で気のいいおじさんと思えなかった。多くのアーティストが信頼を置くライブハウスの経営者には見えなかった。そしてエリックとのことも。

「…どう…し…て」

ようやくそれだけを口にした。それでやっと勇次にも察しがついたようだった。

「ああ、電話は電波状態が良くなかったですね。こちらは知らせたつもりになっていました。心配させてしまったかな」

信号が車を強制的に停める。勇次がなだめるかのように一樹へと優しい表情を向ける。

「休暇が取れたからと二人で日本に帰ってきても、桃子ちゃんは何にも食べられなくて吐いてばかりで」

唇を噛みしめる。じらしてるつもりなんてないんだろう、マスターには。いつだってこんなふうにゆったりと話すんだ。かつての妻の、キミエの内面の激しさとは対照的に。

「あわてて病院に連れて行ったら『重度の悪阻おそです』って言われて、即入院だって。こっちはびっくりしちやってね。まあ水も飲めなかったから脱水症状も心配だったし」

何でそんなにのんびりと言うんだ？桃子さんはいったい…。

「ああ、そうでしたねえ。一樹くんには悪阻と言ったって何が何だかでしょうから。こっちは最初はそうでしたよ。要するにね、つわりだと」

えっ？

これで安心しただろうと言わんばかりの勇次は、車をゆっくりとスタートさせた。

一樹は…白く変わってゆく景色に何も考えられず、握りしめていたバックパックを取り落とした。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2011 keik
itagawa All Rights Reserved

どうしても忘れられない　　Unforgettable

#40

まぶしいくらいの青空のもと、ドレス姿の桃子を見つめ続けたのはいつだったか。止むことのないジャムズの演奏が、一樹の吹くクラシックで静寂に包まれたのはもう…何年前だろう。

だよな、子どもの一人くらいいたっておかしくない。今度こそ家族なんだ、彼女にとっての大切な大切な。

その確約された幸せを壊したくなくて、自分は必死にあがいていたんじゃないか。

気づけば何度も胸の内で言い聞かせていたのに、イヤでも篠原の顔が浮かんでくる。二人が付き合っていることだって最初から知っていた。だからこそ彼は一樹をあのお店へと連れて行ったんだから。けれどどこか醒めた桃子は、篠原と甘い言葉一つ交わすこともなく、そばによるそぶりさえ見せたことがなかった。特に一樹が一緒に住むようになってからは、店の切り盛りと生意気なガキの世話で手一杯で、いつだって桃子は視界の中にいた。一樹だけの…。

手を握ったところさえ見たことがない。気づかなかっただけか。おれにはいやなフィルターがかかっていたから。違う、今でも掛かり続けているから。

あの細い肩を引き寄せる。顔を近づける。息がかかるほど近くに。そして。

一樹はひどく拒絶されたあの日の、それから彼を拒もうとはしなかった彼女を思い出し…その残像を消し去ろうと頭を振った。

自分から離れた手だ。もう、二度とつながることのない糸だ。一樹の思いは、彼女が篠原桃子へと変わったときにすべて断ち切られたはずだ。

ぐっ。不意に襲う吐き気に口元を押さえる。目をつぶれば思い出してしまうから、それでも何とか景色を見ようとする。

「車に酔いましたか。運転はなかなか慣れなくてねえ。一樹くんの方がずっと青い顔をしていますよ」

うつったかな、と呑気そうなマスターの言葉にさえいらつく。

勇次のあとをついて歩くのがせいっぱいで、何も目になんか入らなかった。ただわかったのは、自分の知っている病院とは違う華やかさと穏やかさ。通りすぎる人々の笑顔。あわただしくない廊下の看護師たち。

ここは、悲しみだけじゃなくて幸福感を含む場所なのだと突きつけられる。ここにも自分の居場所はない。穏やかで静かに一樹を押し返し拒絶する場所。

一樹は何度もブレスを整えると、今度こそ戸惑いなんか何もない笑顔でおめでとうと言えるようにシミュレーションを繰り返していた。

…おめでとう…ありがとう…じゃあ…

それで終わるはずなんだから。ただの儀式なんて。そうしたらボストンへ帰ろう。誰にも会わずに何も観ずに、無事が確かめられればそれでいいんだから。

何とか作り笑いを浮かべることに成功した一樹の努力は、けれど長くは続かなかった。

がつつ。

桃子の病室だろうその前の廊下で、いきなり胸ぐらを掴まれた。そのまま壁に背中を叩きつけられる。

「いてっ！何すん…」

最後まで言わせまいと、今度はこぶしが飛んできた。そばにいた勇次があわててあいだへと入ろうとする。

振り上げた左手はそのまま、でも頸を押さえる手は緩まない。息苦しさで背中への痛みに思わず目をつぶってしまった一樹は、やつのことで相手の顔を見た。

今まで怒った顔なんかしたこともないおっとりとした篠原が、一樹をにらみつけている。意味もわからず怯えた。その反応に、もっと手に力が込められる。

「息…息できね…、ちょっと放せよ…しのは」

「何で君がここにいるんだ!!」

すごい勢いで怒鳴られ、一樹は息を飲み込んだ。抵抗する力が抜けたせいか、身体が引っ張られ、また壁へとぶつけられる。今度は左

側をしたたかに打ち付けられて、うめき声を上げなら腕を押さえてうずくまる。

ようやく篠原の手が離された。一樹の頭上から荒い息が聞こえてくる。痛みと混乱で歯を食いしばって耐えるけれど、何が何だか一樹にはちっともわからない。

「ニューヨークで会ってたんだってな！今度はいきなり帰国かよ。そんなに連絡を取り合ってるんだ！？」

「…何…言ってるんだか、全然…わかんねえし…」

初めて聞く篠原の怒鳴り声に、弱々しく反論する。何で怒ってるんだろう、おれには全くわからないってのに。

「おれはただ、桃子さんの見舞いに連れてこられただけで」

「じゃあ何で知ってるんだよ！！君には連絡をしなかった。する時間がなかった。留学していたことも君からは教えてもらえてなかったしな！言いたくなかったのはアメリカを選んだのは、最初から桃子さんと約束してたのか！？」

「だから何がだよ！！意味がわかんないつつってんじゃん！！篠原さん、おれがなんかした！？」

顔を上げて怒鳴り返したかった。けれど気の遠くなるような痛みが声さえも掠れさせた。篠原をなだめる勇次の言葉までもがぼやけて聞こえる。

無理やり引っ張り上げられ立たされる。こんなことをする彼じゃない。いつもの篠原じゃない。叱られる子どものおどおどと彼

を見返すことしかできない。理由もわからぬまま。

「じゃあはつきり言うよ。君は桃子さんとニューヨークで落ち合ってたんだろ？何度も、俺には内緒で。会うなんて言わないよ。君たちは本当に仲が良かったもんな。でも何で君が今ここにいるんだ？」

「どういう…こと？何が言いたい…の…？」

一樹が呟く。泣き出してしまいそうなのをこらえる。わかんないよ、何でこんなに責められてるのが。

桃子たちがシアトルにいることすら忘れてたのに。ああそう言えば広大な同じ国の両端にいるんだなと気づいたのさえ、ごく最近だつてのに。

篠原は痛々しそうに顔をゆがませた。きっと一樹よりずっと悲しげな表情なんだろう。その意味さえ図りかねた。小さくため息をついてから口を開く。これ以上なく辛そうに。

「俺にそれを言わせるのか？」

：君は桃子さんを忘れてなんかない。桃子さんだって、俺なんか見てない。邪魔者は俺の方なんだろう？…

彼らしくもない言葉に一樹はたじろいだ。それはやがて怒りに変わる。何もかもを手に入れたのは篠原の方だろう、と。

「ざけんなよ篠原さん!! あんたこれから父親になんだろ!? 桃子さんと生まれてくる子どもを守るんだろ!? 家族ができるんだろ! わけのわかんないこと言ってる場合じゃ!!」

「…本当に俺の子…なのか」

思いがけない言葉に、一樹は息を飲んだ。そして、やっと…篠原の激昂するわけを理解した。あまりにも理不尽でありにも哀しすぎるその理由に。

「篠原さん、まさか、まさかおれを疑ってる…の?」

いつだって笑顔で支えてくれた篠原を、心から慕っていた。その気持ちは今だって変わらなない。だから裏切れなかった。だからあきらめた。だから失いたくなかった。高橋の名のもとじゃなく、一樹自身を見て彼自身を信じてくれた初めての人だったから。

その篠原が、やり場のない憎しみを一樹に向けている。ぶつけている。腕の痛みよりも心が何よりえぐられるように痛い。奥歯を噛みしめる。

「向こうで一度も会ってない、だなんて言うなよ。どうして俺に隠してたんだ?」

ただただ首を横に振り続けた。ああ、会ったさ。でもそれは桃子に逢いたかったからじゃない。

「おれがニューヨークで会ったのは…エリックだ。エリック・W・バークレーにだ!」

エリックの名に、篠原も勇次も一瞬黙る。篠原がそれでもつぶやく。何で会わなきゃいけないんだよ、ニューヨークとボストンじゃ…。

「偶然なわけないだろ！？ジャムズでのちゃっちいコネを頼りに、金を借りに行ったんだよ！！おれには自由になる金なんてないから！！」

金？君んとこでどうして金が必要なんだ！！篠原も怒鳴り返す。

こんな明るい病院の廊下で、おれたちは何をしているんだろう。一樹を覆う虚無感。こうやって自分の居場所がどんどん崩れていく。最初からなかったものは、あっけなく手から離れていく。

「おれの左腕、動かないんだよ今。良性とは言っても腫瘍だらけで骨がボコボコで折れたんだって。アメリカの治療費なんか払えるかよ！！高橋の家に言えば連れ戻されると思った。みっともなくたって、みすばらしくたって何でもいいから、おれを音楽の世界に引き戻してくれたエリックがいるのならばがってみようと思った。それがいけないのかよ！！ラッパも持てない。音が吹けない。おれ一人で立ってみようとしたって、結局なんにもできやしないんだ！！」

やっと叫べた。切ない言葉ばかりを。

「桃子さんに会おうだなんて、これっぽっちも思わなかった。同じ国内にすることも忘れてたくらいだ。遠いしさ。ニューヨークに行くんだって、おれは安いバスで何時間も掛けたんだ。会おうと思って会えるわけがないだろ！？おれが他に会ったのは……」

キミエって人だ。

ゼネラルパウゼ（全休止）。音が消える。

一樹の出した名は、篠原と勇次を凍り付かせた。ああそうさ、言いたくなんてなかった。言えど誰かを傷つける。そんなつもりがなかったって、過去の記憶は誰かの心をひっかくようにできている。

「エリックのライブに無理やりねじ込ませてもらった。その日だけ、なんでか桃子さんがついてきた。逢ったのはそれ一度きり。信じてもらえなくなっちゃったいい」

キミエには何度も会った。知りたくもない物語と大人の事情を聞かされ、いたたまれなくなって逃げ出した。そんな繰り言は何とか飲み込んで、目の前の二人には伝えずに済んだ。

おれという余分な者がいなければ会いたくない実の母娘。よく似ているよ、桃子とキミエは。そして母親と名乗る女性には、桃子の寂しさを一生涯理解することはできないんだろう。桃子自身が気づかないのと同じように。

「君は…桃子さんを…忘れてなんかない。桃子さんも…」

痛々しいほど苦しい篠原の言葉。何度も言うか言うまいか逡巡し続けたんだろう。それでもこの縁を壊したくなくて、無理にでもしまい込んでいたんだろう。

薄暗いジャムズの廊下で何とか伝えたかつてのセリフを一樹は繰り返す。それが本心だから。

「ねえ、桃子さんは…篠原さんを選んだん…だ…よ？」

「彼女が俺を見ていなくても、か」

伝わらない。伝えきれない。そんなじゃない。おれも桃子さんも嘘をついているわけじゃない。おれたちは姉弟で家族で、恋愛相手なんかじゃない。そう思ったとしたらただの感情の誤動作だ。たとえそれが、必死にお互い自分へと言い聞かせ続けている言葉だとしても。

「あの日…おれがどんな想いであきらめたと思ってん……の？」

あの日、それがいつを指すのか、一樹にすらわからない。何度も何度もあきらめた。断ち切った。家族を選んだ。桃子の出した答えを一樹は受け入れた。

頼むからそのまま、そつとしまい込ませてくれよ。

「どうせ信じてなんかももらえないんだ。もう…いいよ」

痛む腕を押さえながら、一樹はふらふらと歩き出した。追う者もない。誰も引き留めない。ああそうさ、これが現実だ。

おれにはもう誰もいない。

実の姉も聡子も遠い。距離じゃなくて気持ちが遠い。ボストンできた仲間ともどうせすぐに離れていくんだろう。おれがではなく相手から皆。

音を奏でないカズに価値なんかない。それさえも、せいっぱい奏でてみせた音楽ですら、高橋の名の前に崩れていく。

誰か、誰か受け止めてよ。ジャッジメントなんか要らないから。おれがどれだけ情けない甘ったれでも、何も持っていなくても、それ

でいいからと受け入れてよ。

全部、全部：そっくりこのまま全部を。

さわやかな自然光が入り込む連絡通路の隅で、一樹は壁にもたれ続けたまま動けずにいた。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2011 keik
itagawa All Rights Reserved

ブラック・コーヒー (Black Coffee)

#41

楽器が吹きたかった。音を奏でたかった。今ほど切実にそう思ったことはない。

どうして持ってこなかったんだろうか。たとえ痛みで吹けはしないとしてもトランペットを置いてきたことが悔やまれる。

なじみ深いソフトケースの革の感触。マウスピースでバズイングだけでもすればよかったのに。

この薄っぺらな親名義の家族カードで、楽器店のウィンドーに飾られたラッパでも衝動買いするか。それで気が済むのなら。

そんなことまで想像を進め、篠原との出逢いもまた楽器屋だったことを思い出す。お人好しで世話焼き好きなお節介。万引きの現行犯だった中学生を警察に差し出すこともなく、勝手にライブハウスへと連れて行き、自分のへたくそなラッパを聴かせてにこにこしていた彼。

その篠原を怒らせた。憎しみの目を向けられた。意味もわからないまま。

おれはどうすればよかったんだ？ 桃子を奪えばよかったとでも？ 誰からも祝福されずに二人で逃げて、恋愛という名前をつけた欲に理性もなく流されろと？

あの桃子が受け入れるわけがない。

それは篠原が一番よく知っているはずなのに。あの雨の夜、もし仮に手を離さずにいたとしても彼女を抱いたにしても、桃子の出す結

論は変わらなかっただろう。おれがジャムズの誰一人と、二度と会えなくなる以外は。

何が欲しいんだろう自分は。わかっているような気がするのにわからない。確実に知っているはずなのに見えてこない。たしかなのは、手には入らないということだけ。

いつのまにか無意識に乗っていた電車がホームに滑り込む。多摩の駅を降りてから、自分はどれほど都合の良いヤツなんだろうかとさすがに一樹は呆れた。

ここには叔母の伸子が跡を継ぐ「高橋メソッド」の本部がある。祖父が開いた独自のヴァイオリンメソッドは、高橋真理子という逸材を生み出した。彼女の高い音楽性を支える要素の一つは、確実なその技術力にあることは間違いない。

祖父はとうに亡く、息子の孝一郎はヴァイオリニストではなく指揮者の道を選び、娘である伸子は教室を全国に広めるまでに育て上げた。

伸子に会いたいわけじゃない。ひどい言い方だけれど。どうせ叔母は日本中を飛び回っていて留守だろう。

一樹が勝手をよく知る事務室に顔を出すと、スタッフらは少なからず驚いた表情を見せた。

「あら珍しい。ちっちゃいときはよく来てたのにねえ。大学は？」

一樹の幼い頃からいるベテランの経理に声を掛けられ、休みとだけ返す。事情を知る若い連中たちが顔を見合わせてくすくす笑っている。

「何だよ、来ちゃいけなかったのかよ」

「聡子センセなら、十番教室でレッスン中ですよ」

「…ふうん」

気のない返事で部屋を出て行く一樹の後ろから、賑やかな笑い声のはじける。みな、二人が付き合っていることを知っている。姉が言いふらしたからだ。ったくあのド天然。

気づいたらここに来ていた。本当に聡子に逢いたかったんだろうか…おれは。

廊下には当然のようにヴァイオリンの音があふれて美しい旋律を響かせていた。この本部教室に来る子どもたちはコンクール常連レヴェルだ。演奏楽器は違っても、音を聴けば一樹にでもわかる。うまいんだなあと耳が反応する。

レッスン室の前には、熱心に何度も譜面をチェックしている親子らが順番を待つ。ただの街の音楽教室なんかじゃない。必ずプロの演奏家にしてみせるという大人の気迫まで伝わってきそうさ。

…ああそうだよな。おれだってその中の一人だったんだ…

姉のようなソリストになれるだなんて思ってもいなかった。どこか拾ってくれるオケがあれば。遙か昔の夢。遙か…でもないか、十数年前まではまだ残っていた夢。病気にさえならなければただの現実

だったはずの。

一階にある十番教室を、外に出て窓から眺める。一人の男の子はまだ小学生か、母親が真剣にメモを取りながら側に座っている。

声は聞こえないけれど、優しい表情で聡子が語りかけているのが見える。穏やかなレッスン風景。彼女に似つかわしい。

一樹はわざと窓に少しだけ近づくと、斜めにのぞき込んだ。親子の方には気づかれないように。

はっとした聡子の顔をじっと見つめる。自由の利く右手で合図を送ってみる。…こっちに来てくれ、と。

戸惑いがちな彼女の目が窓と男の子とを行ったり来たり。それでも一樹は手を止めなかった。

何度も、何度も…何度も呼んでみる。

早くこっちに来てよ。おれのところに来てよ。そんなレッスンなんか放り出してさ。

自分にだって、最初は試す気なんかなかったはずだ。声が聞きたかった。身勝手でわがままな要求だとしても。今すぐここで、この瞬間に、一樹が望んだそのときに。

とうとう聡子は、顔をしかめながら首を横に振った。無理だと。

レッスン終了まであと数分しかない。それさえも一樹はチェックしていた。だったらいいじゃないか、おれのために時間を割いてくれる。一樹は知らず、祈るような気持ちで聡子を見ていた。

選んでくれ、おれを。こんな些細なことでもいいから。

胸が痛い。お願いだから優先してくれ。誰か一人でもいいから。す

べてのことを放り投げてでもおれだけを選んでくれ！

それでも、聡子はレッスンを中断することはなかった。時間厳守がメソッドの売りの一つでもある。遅れて叱られることはないけれど、講師の都合で引き延ばしたりはしない。

本番の演奏に、待ったもやり直しもないから。ましてやコンクールなど、ちょっとした手続きのミスで出場できなくなることもあるくらいだ。

一樹は知っていてもなお、聡子呼び続けた。終了時刻きっかりに聡子が部屋を飛び出して中庭へと来た頃には…彼女に背を向けていた。

「待って！一樹くん！！」

拗ねた目で振り返る一樹は無言のまま。いつもの氷が、胸の中をすうっと落ちていくのがわかる。冷えた想いは心を凍らせてゆく。

「四時になったら今日のレッスンが終わるの、それまで待ってて！
！そうしたらまとまった時間が取れるから！」

聡子は、メール一つよこさずに突然現れた一樹を責めることもしないで叫んだ。何かがせり上がってくる。それは嬉しさじゃない。もっと切ないものが。

「今、これからどっか行こう」

だから四時に、と言いかけた聡子の言葉を強引にさえぎる。

「今じゃなきやダメなんだ！！レッスンなんかキャンセルしちゃまえよ！できるだろ！？超人気講師なんだからさ。音楽家のワガママなんてみんな慣れっこだよ！！」

無茶を言ってることなんて一樹にもわかってた。それでも応えてくれよ、頼むから。

「わかって。ここの生徒さんたちは遠距離で通っている子も多いの。新幹線で来る子もいるし、車で何時間も…」

ああそうだろうね。聡子だってパリのコンヴァト（CNSMパリ国立高等音楽院）出身者だ。姉ちゃんが凄すぎるだけで、彼女も十分プロのヴァイオリニストとしてやれるだけの実力は持っている。高橋メソッドは独特だけれど、その教え方もすぐに吸収して実績を残してる。どうしても彼女に教わりたいという生徒は少くない。自分との差を感じたのか、それとも責められなかったことに大人の余裕を見たせいかな、一樹は意地になった。

「だから何！？おれより生徒を取るの？そうだよ、当たり前だよ。ね。知らせもしないで急に来たって、超一流の聡子センセに会えるはずないもんな。まして、おれなんか貴重な時間は割けないだろうし」

もう少しだけ待ってて。お願い。

聡子はそれでも我慢強く一樹を説得しようとした。怒鳴り返されてもおかしくないってのに。

何を拗ねてごねてガキみたいなことしてんだ、おれ。わかってる、ただの八つ当たりだ。嫌がらせだ。こうやって自分の気を引こうと確かめて試してるんだ。

わざとらしく腕の時計に目をやる。ねえ、次のレッスンが始まるよ、と。

焦った表情を浮かべた聡子は、もう一度「四時まで待って」と繰り返し返した。

「早く行かないと次に間に合わないよ。もう行けよ、おれも帰るから」

「せっかく日本に帰ってきてくれたのよ？ やっと逢えたのに。もう少しだけお願いだから待って…」

「いいから行けよ！」

これじゃ立場が逆だ。身勝手なのはいつもおれで、正しいのはいつだって聡子だ。なのに文句の一つも言わない。そのことがさらに一樹をいらだたせた。

聡子自身も時計を気にしている。次の生徒はとくに部屋で準備を終えていることだろう。彼女の好き勝手にできる時間じゃない。わかってるそんなことは。聡子だって仕事中だ。一樹がライブ直前に呼び出されても、誰であろうと会はずがないうことと同じ。

「ごめんね。本当に待ってて」

小走りに教室へと向かう。その後ろ姿に一樹は思わず叫んだ。

「行くなよ！！おれを選べよ！！選んで…くれ…よ…」

誰からも選ばれない。もうそんな思いはたくさんだ。どんなことだ

ろうと全部放り投げて自分を選んで欲しい。転んで怪我をした子どもを、母親なら抱き上げるだろう？ 見すぎさないだろう？

今のおれは、心がずたずたなんだ。引っ張り上げて欲しい。頼むから、数分でいいから。大事なメソッドの時間を破ってでもおれを選んでくれたなら、それだけでおとなしく帰るから。

何に対して祈ればいいのかわからない。それでも一樹は祈った。こんな些細なことに賭けた。自分は選ばれるんだろうかという大きな不安を消してくれるかどうかを。

両手を顔の前で合わせ、辛そうな聡子の顔が切なげにゆがんだ。一樹なんて、捨てられた仔犬より酷く情けない表情だったに違いない。

「もういいよ。ごめん無茶…言って」

静かな一樹の言葉に、聡子がホッとしたように表情をゆるめる。けれど一樹はそんな変化にはお構いなしに携帯を取り出すと、彼女の目の前で電話を掛けた。聡子のげんそうな顔。

「あ、おれ」

：おれ、じゃないわよ！！今何時だと思ってんの！？こっちは当直明け勤務が終わってやっと寝れたってのに！！：

相手の罵声は都合よく聡子には聞こえない。それをいいことに一樹は会話を続けた。

「こないだの服、洗濯しておいてくれた？ そっちの部屋に置いといて

てよ。また行ったときに着るから」

言葉に含めた、少しばかりのドルチェ（甘めに）のニュアンス。聡子へとあてつけるように。何も言えずに息を飲むのが伝わってくる。

…あのねえ！あたしの部屋、ドミトリーかなんかと間違えてない！？勝手に置いてある服なんか捨てるからね！…

「ごめん、日本からだと電話が遠くて。え、今？元カノの目の前。どうせなら話す？」

…ふざけんじゃないわよ！あんたんとこのイザコザにあたしを巻き込むの止めてよね！？…

電話の向こうからは梨香のぼやき声が響いている。聞こえないふりで携帯を聡子へと差し出す。

「あっちで付き合ってる人。一回会ったよね？はっきりと話つけてくれるとこっちも助かるんだけど」

冷たく身勝手なセリフ。君がおれを見限る前に、こっちから見限つてやるよ。そんな子どもじみた嫌がらせだ、これじゃ。

自分の行動に一樹自身がうんざりしていた。それでも止められない。見捨てられるのはもうたくさんだ。

聡子は両手を握りしめて、決してその電話を取ろうとはしなかった。しばらくお互い黙り込む。耐えきれずに…一樹はボタンを押した。微かなノイズも消え、ヴァイオリンの音だけが二人を包み込む。

「じゃ。もう会わないと思うけど。姉ちゃんにはすぐにチクンないでくれるかな。あの天然、うるせえからさ」

わざとらしく軽い口調で言い捨てる。そんな一樹に、両手をぎゅっと握りしめたままの聡子は、穏やかにでもきっぱりと言った。

「ここに会いに来てくれてありがとう。本当に嬉しかった。だから待ってて。四時になったら手が空くから、ゆっくり話したいの。ね？」

その言葉に、逆に一樹は怯えた。なぜ、なぜそんなことを言い出すんだ？

「なんで怒らないんだよ！？姉ちゃんみたいに、ひっぱたけばいいだろ！！怒れよ！それともおれなんかにそんな手間かけるのも面倒だとか！？」

「…怒って…欲しかったの？」

ささやくような聡子の冷静な声に、一樹は目をつぶった。ガキの嫌がらせなんかこの人には通用しない。勝てない、何をして。おれには…釣り合わないよ。

「もう、時間」

現実も生活も、こんなセリフのやり取りの間にもちゃんと進んでいて、おれたちは生きてかなきゃならない。ドラマや映画みたいなシーンの間には、退屈な日常がたくさん挟まってるんだ。

一拍の間のあと、時計に目をやった聡子は何かを吹っ切るかのよう

に部屋へと戻っていった。

残された：独り。

待ってればいいだけなのに。心の中で誰かが嘲笑う。そんなんじゃない。

どれほど大事なことでも後回しにして自分を選んで欲しいという想いは、誰からも得られない。唯一くれた大切な人たちからは、篠原からは手を離された。桃子には逢えない。逢う資格もない。

泣き叫び続ける子どもを放置できる親は、そうそういない。あの頃、おれがいくら泣こうが遠くの家族に届くはずもなかった。いつだって、いつだって：いつだって。

大人になってしまえば、もう無条件の愛はもらえない。じゃあおれは、いつ誰からもらえばよかったんだろう。

吹きたい、今すぐ。音楽は優しい。何もしゃべらずに済むから。

一樹は中庭からそのまま外へと歩き出した。ただ独りで。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009-2011 keik
itagawa All Rights Reserved

#42

一樹はホテルのベッドに腰掛けて手のひらのものを見つめた。銀色に鈍く光る小さな金属の固まり。それは彼がずっと手放すことの無かったもの、そして今は手から離れて久しいもの。

トランペット用のマウスピース。

カードではなく自分の財布から幾枚かの札を出し、楽器屋のショウケースに無造作に並べられていた一番安いヤツを買った。手に伝わる慣れ親しんだ冷たさ。

部屋で楽器を吹くことだってできないことはない。けれど自分の手元には愛用のバックがないのだし、新しい物を買ったところでこれから吹く機会があるかどうかさえわからない。

楽器はあくまでも道具で、音を奏でないのなら一樹には意味がない。

…吹きたい。

篠原に突き飛ばされたときの痛みがぶり返す。腕なんかより心が胸が痛い。聡子は拒絶なんかしていかないだろう。わかっていてもなお、選ばれなかったという思いだけが残った。凍り付く塊が身体を中心をつきぬけてゆく。

片手で器用に包装を解くと、一樹はそっと真新しいマウスピースに唇を押し当てた。口元を少しばかり緊張させ、アンブッシュアを丁寧にする。

柔らかく、息を吹き込む。バズイングの音が静かに響くはず。けれど彼が呼吸を整えて吹き込んだ瞬間、一樹の手から銀色のそれは転がり落ちていった。

「…!？」

ものも言えず、思わず開いてしまった右手で左腕をかばう。音を出そうと全身にわずかな力を込めただけで、ずきりと腕は痛んだ。目をつぶり、歯を食いしばって痛みを逃す。一樹にとってはいつものことになってしまったその作業を、どれくらいしていただろうか。ようやくほうつと息を吐き出すと、あきらめきれずにもう一度マウスピースを拾い上げた。

左腕の骨にできた空洞は人工骨で埋めてある。骨折も完治した。痛みが残るわけがない。何度も何度も自分に言い聞かす。この痛みは気のせいだと。無理をして吹いていれば自然に治まるんだと。

半ば意地のように、彼はバズイングを試みる。大きなトランペット本体を鳴らすわけじゃない、ちよつとだけ力を加えればいい。ましてやホテルの部屋でいつもの音量で口慣らしをしたら、マッピだけでもけっこううるさいはずだ。

タバコもそうだけれど口元に何かを加えているのは寂しさの表れだと、誰かにかかわれたことがあった。そんな学説があるんだそう。じゃあ、管楽器奏者はみんな甘ったれの寂しがり屋だって言うのか？ふつとついて出る苦笑い。

案外、そうかも知れないと思いながら。

もう一度だけ、もう一度。何度試そうとも同じだった。痛みは鋭さを増すばかりだし、音はピアノシモでさえも出せやしない。

マウスピースをシートの上に放り投げ、度も入っていないメガネをむしり取り、一樹は自由の利く右手で顔を覆った。

…吹きたい。どうしても。

音は優しい。音楽は人を甘えさせてくれる。誰に何も言わなくていいから。言葉は人を切り裂くけれど音は何も語らないから。

それでいて、同じ空間を共有している者たち同士心が繋がっているかも知れないと…勝手に思いこむことができるから。

一樹の頭の中に音が鳴り響く。スイート・オブ・トキオではなく古めかしいジャズのスタンダードたちが。繰り返されるブルース進行が、一樹をそそのかす。

あのフレーズを吹いてくれ。鳴らしてくれ。今すぐこの場で、今でなきゃ消えてしまう。

おれの欲しいものは何だ。たった一つなのに。

おれだけを見つめる目と温かい手。隠されたものじゃなくてはっきりと触って確かめられる体温。おまえのことを気にかけて心を傾け愛しているという…言葉そのもの。

誰もくれない。誰にでもおれより大切なものがあっていつだって順番はとばされるんだ。

だからせめて大きな音を鳴らして、誰もかれをも振り向かせたい。

頭を抱え込む姿勢でベッド脇のテーブルに突っ伏していた彼の目が、無造作に置かれた紙袋をとらえる。日本に持ち込めるだけの処方薬だ。

この薬を飲めさえすれば痛みは消えると医者と言った。我慢して飲み続ければ大丈夫だと保証した。うっそばっかだ。おれはまだ痛み
のまったただ中で音をつかまえられずにいる。

手を伸ばして錠剤を一つ取り出した。口に入れ、かみ砕く。

きちんと水で飲まなきゃいけないのにね。立ち上がるのもおっくう
なんだ。

苦いのは薬のせいなのか渴ききった口のせいなのか。ほんのわずかな
金属の味が残ってる。振動一つしなかったマウスピースの残り香
み
たいな。

手にした薬がなんなのか確かめもせずに、一樹はもう一錠を口に放
り込んだ。

ねえ、まだ痛いんだ。

近くにあった缶を傾けて薬を流し込む。コーヒーだったつけ。それ
ともビール？覚えてない、味も…わからない。

ねえ、いつになったら効いてくるんだ？まだ痛むよ。

右手は勝手に錠剤のシートを開け続ける。飲み込む喉に何かがまと
わりつく。

早く効けよ。おれは楽器が吹きたいんだ。左腕が動けとは言わない
から、痛みだけでも取ってくれよ。

生まれてからずっと側にいてくれた音楽が、今は遠いんだ。音は傷
つけない。あの曲以外は。

目を開けていることすら辛くなってきていることに一樹は気づかずにいた。抗うつ剤に鎮痛剤、睡眠薬もあったはず。どれかが効けばおれは楽器が吹けるんだとばかりに、彼は機械的に錠剤を口にしていった。

一度、むせた。

それがきつかけだったのか、あのイヤな吐き気が彼を襲う。交互に手にしてたはずの缶が床に落ちる音が遠くに聞こえる。口元を押さえてもえづきは治まらない。

何を食ったんだっけ。食欲なんかありはしない。ああそうだ、酒しか飲んでない。胃が痛むのはそのせいか。

そこに押し込められた葉がのど元にせり上がってくる。それなりの格式高いホテルで吐いたらまずいだろ。一樹はもうろうとした意識の中、立ち上がろうと試みた。

身体が動かない。

ここで吐くわけにはいかないんだつつてんだろうが。必死にもがいても指一本動きはしない。押し返された葉が：彼の呼吸をさえぎった。

ブレスができない。ざけんな！声を出したくても音どころか空気の通り道がない。

誰か！誰か！！だれか。

苦しさに身体が勝手に空を掴もうとする。その腕がフロント直通の内線電話に触れた：気がした。ベッドから転がり落ちた一樹の意識は、そのまま途絶えた。

ざわめきなんてもんじゃない。怒鳴り声と逆に冷静すぎるほど落ちて着き払ったいらえと、機械音と。今どこにいるのか、一樹自身には全く分からなかった。

痛いと呼んだはずだ。声になったかどうか。触るなど言ったはずだ。誰も聞いてくれない。ああそうだった、きっとここは梨香と出会ったボストンの病院で、激しく暴れるおれは見も知らない治療者たちから押さえ付けられて、あるときから時計は止まったままなんだ。

どこかそれは違うと知っていながらも、一樹はそう信じ込もうとした。だから言葉が通じない。痛む腕を引っ張らないでくれと英語でなんか言えない。一瞬のうちに夢を見ていて、梨香とのこともウォーリーズでのこともただの幻覚で。エリックなんてキミエなんていない。まして桃子に逢うはずもない。

夢だから、この治療が終われば全部うまく行く。折れた骨はくっついてちゃんとおれはステージに復帰できて、そうだろう？

でも現実の痛みが一樹を否応なしに今へと引き戻す。痛いだけじゃない、苦しい。吐き気どころか喉が焼けるみたいに気持ち悪い。

梨香の声も聞こえない。ここはどこなんだろう。夢に引き込まれ、また覚醒させられ、しんどさからまたふっと身体中の力が抜ける。

コードにとびたい。エンディングに向かって。同じフレーズを何度繰り返させれば気が済むのだろうか。

そして、おれにとつてのエンディングとは何だろうか。どうしたい？ わからない。痛みと苦しみと、埋めようのない寂しさから解放されるなら何だってするから。

一樹の意識は、幾度めかの闇の中へと引きずり込まれていった。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009-2011 keik
itagawa All Rights Reserved

若く愚かで Young and foolish

#43

目が覚めればいつも冷たく白い天井。見慣れてしまった光景に一樹はうつろな視線を向けた。

ああそうさ、これは罰ゲームでいつだって振り出しに戻される。何をどうあがいてもゴールへ向かうルートにすら乗れない。サイコロの目がいくつだろうと、止まったコマには「スタートへ戻る」の文字。

身体が重く、頭全体もずきずきと脈打つように痛む。ここは消毒液のにおいが充満していて白ばつかりに囲まれて、おれは身動き一つできやしないんだ。

顔を動かすのもおつくうで、もう一度まぶたを閉じる。人の気配を感じて様子をうかがう彼に、ゆっくりと声がかけられた。

「気づかれましたか。調子はいかがです」

いいわけがない。吐き気は酷くなるばかりだし、どのくらい眠っていたのか背中が固まってしまっている。

けれど、柔らかい声の主のことを考えると、一樹はそつと言葉を返した。

「今は別に。…腕も痛くないし」

これは本当だった。ずっとつきまとっていた鈍い痛みは、皮肉なこ

とに影をひそめていた。他の苦痛に紛れているだけかも知れないが。

「戸田さん。今度はどこでぶっ倒れてたの？おれ」

何気なく訊いたつもりだった。温厚で知られた姉のマネージャーの戸田は、しかし、一樹の言葉に表情をこわばらせた。

一樹の目がとまどいに揺れる。本来の症状で、薬の副作用で、辺り構わず動けなくなるなど珍しくない。それでここに運び込まれたのだとばかり思っていた。

「…覚えてらっしゃらないのですか」

だから何が？と言いかけて、ここが日本だということをようやく思い出した。桃子に逢おうとして篠原に拒絶され、それから聡子に暴言を吐き。自分がやったことを思い出せば出すほど自己嫌悪だけが積み重なってゆく。

飲み過ぎたのか。それで救急搬送でもされたんなら、いくら穏やかな戸田だとしても呆れられて仕方ないだろう。

「高橋の方と一樹さんの所属事務所との間では話はまとまっています。退院後はいろいろマスコミから訊かれるでしょうが、事故という線でお願います。というかできれば何も話さずにいてくださるのが一番、その、あなたが傷つかずに済むのかと…」

慎重に言葉を選んで話す様が伝わってくる。その戸田の困惑がどこから来るのか、一樹には全く分からなかった。

「事故って？おれ何かしたの」

起き上がろうとして身体に力を入れたとたん、一樹は顔をしかめた。頭痛が半端ない。抱え込もうとしても腕は点滴で固定されっぱなしだ。

「出された処方薬を一袋分飲めば死ねるとでも思ったか、このアホ不意に開けられたドアから罵声が飛んでくる。と言っても綺麗なソプラノじゃ全く迫力がない。」

「誰？ 律子先生？」

「白石先生と呼べ、馴れ馴れしい！ 救急からさんざん叱られたのはこっちなんだからな！！ 患者の管理がなってないと！」

白衣に同系色のスカート姿の女医は、巻いた髪を結ぼうともせず、肩あたりに散らしていた。以前、骨腫瘍科入院中の際に担当医だった律子は、その整った顔立ちで一樹をにらみつけた。

「どういう…こと？」

意味が分からない。確かに日本語で話されたはずだ。なのに彼女の言っていることが理解できないでいる。一袋分？ 死ぬ？ 誰の話をしているんだ。

「あげくに、中途半端に吐いたせいで呼吸停止寸前だど！？ もう少し回復したらぶん殴って性根をたたき直してやる」

かなり怒ってるに違いない。ふだんから言葉遣いは酷いもんだけれ

ど、今日の彼女はいつもにもまして乱暴な口調で吐き捨てた。

「待ってよ、律子先生。それじゃまるでおれが自殺でもしかけたみたいじゃないか!？」

こっちも思わず怒鳴ってしまっただけから、がんがんする頭をしずめるために一樹は目をぎゅっとつぶった。

無音のブレイク。

また訪れたイヤな間が、誰もを落ち着かせなくする。

「：違うのですか」

おずおずと戸田が問う。あの状況下で他の判断ができると思っただけと律子が怒鳴る。

そんなこと、おれがするわけじゃないか。死にたくないからこれだけ悪あがきしてんのに。

掠れた声はそれでも他の二人には届いたらしい。痛ましの視線へと変わるのを感じる。

「じゃあどうして、あんなこと」

「吹きたかったんだ、マッピでもいいから。たくさん飲めば痛みは消えるんだろ？ 麻酔みたいに感覚が麻痺して吹けると思ったんだ！ 違うの？ おれはただ吹きたくて!!」

律子は黙ってつかつかと一樹のベッドへと近づくと、遠慮なく頭をはたいた。ばこっという音に、いってえと弱々しい声。

「このアホんだら！！いくら説明書が英文だからって言ったってちゃんと読め！！つうか、そもそも薬を酒で飲むな！！事件として処理されなかっただけでもありがたく思え！！」

どこかそれは、一樹が吐き出す悲痛な思いをごまかすかのような彼女の大声だった。もうそれ以上何も言うな、と。

「おれは」

「いいから寝てろ！処置は終わってるから、その点滴がなくなれば帰れるようにしてやる！」

「言わせてよ！じゃあおれは病気を苦に自殺を図ったとでも思われた訳！？ここにいてくれる戸田さんには感謝してるよ！でも、でも……誰も……」

ここにはいないじゃないか。

家族という名の他人が誰一人。死にかけていたんだろ。目を離せば自殺しかねないと思われたんだろ。同じじゃないか、お父様の時とでも今は……誰もいない。

「昨日まで病室にいらっしゃったんですよ。真理子さんも高橋先生も。残りたい気持ちは十分おありだったようですが、ロンドン公演にはどうしても、と朝早く出られて」

おまえは丸三日眠り続けてたんだよ。律子がそっと付け加える。

「…怒ってた？」

お父様は。声が震えた。家族に黙って帰国したあげくのこの騒ぎだ。マスコミがどうのとさつき言ってたってことは、表に情報が流れたんだろう。対応に迫われたとしたら、かなり怒っているに違いない。

怖かった。

父親の前ではどんな説明も言い訳にしか聞こえないだろう。聞いてはくれないだろう。そしてまた切り捨てられるんだ。おまえは要らない、と。

「心配されていました。あとで話が食い違ってもお困りでしょうか、会見の様子をご覧になっておられますか」

「会見？ あのお父様が…なんか話したの？ おれのことを…？」

退院手続き進めておくからな、と言い残して律子はドアの向こうへと消えた。大河原には話が行ったんだろうか。耳に入ったとき、やっぱりおれが死にたがっていたと思われたんだろうか。

どれほどみつともなくとも生きようと誰よりもがいているのは、この自分だのに。

ベッドの角度を起こしてもらって、病室備え付けの再生機器の画面を見つめる。立ち上がる前に、そっと置かれたスポーツ紙の見出しを眺める。

最初の赤い文字にはくエリート音楽一家に何が！？>と書かれていた。

天才ヴァイオリニスト高橋真理子の影でひた隠しに隠された不肖の弟は、

親の金で放蕩海外留学の末、酒タバコ乱交では飽きたらずドラッグ遊びまで？

どぎついあおり文句が並ぶ。はん、今さら。酒もタバコも海外どころか十六、七の頃には当たり前だったのに。苦く自虐的に笑う。バカバカしい。何も知らないくせに、何も。

こうやってデタラメな憶測が広まってしまえばいい。品行方正な高橋親子の名声など地に落ちてしまえばいい。

こんなに簡単なことだったんだ。おれがこうやって無茶をすればするほど、いくらでも復讐することなんかできたんだな。

守ろうとすることなんかなかった。すべてこの手で壊してしまえばいい。マスコミなんか好き勝手に書き散らしてくれる。あの穏やかで優しい仮面なんか、全部全部引きはがせるのに。

一樹は新聞の端を握りしめた。これが怖くておれをしばらくつけようとしたのか。監視したくてどこへも行くなと釘を刺し続けていたのか。

バカだよ、みんな。こんなことで。笑いたくなった、大声で。

でもそれは、ようやく再生され始めた映像にかき消された。聞き慣れた父の声が耳に入ってくる。

憔悴しきった、弱々しい声。やつれた表情。完璧だね、でももう手遅れじゃないの？

目を離せずに見やる一樹に、思いがけない言葉が伝わってきて、彼は息をすることさえ忘れそうになった。

画面の中の父は、頭を深々と下げて騒ぎをわびると、こう言っていたのだ。

「息子は、十年近くも闘病生活を送っております。親としてこれ以上身体に負担をかけたくはないと何度も止めたのですが、息子は：一樹は、音楽を止めることはできないと」

悪性腫瘍に冒された息子のたつての希望を叶えてあげたい。抑えてもこらえきれないといった風にさえ見えるにじんだ涙。

画面の中の高橋孝一郎という人物は、見事に「高名な音楽家ではなく、愚かなまでにただ子を想う一人の平凡な親」を演じきっていた。一樹にはそう思えた。

「嘘つくな!!」

思わず払いのけた手で、再生機器は揺れて…落ちた。

(55)

北川圭 Copyright 2009-2011
itagawa All Rights Reserved
keik

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5917n/>

君を忘れない ～ I Remember Clifford ～ vol.2

2011年12月3日19時49分発行